

Moon Light Another fate

深緑 風龍

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

無の神であり星の破壊者である『ラヴオス』を打ち破り、更にはサラを救出することが出来たガルツチ達。

次元を超えた存亡の戦いも終わりを迎え、ガルツチ達は、ルツチ達とお別れを言い、門矢未来と共に行くこととなった。

そんな中、GTA Vの世界についた時、また何かを察したガルツチは笑みを溢し、見ず知らずの者に挑発する。

あらゆる世界を巡り、その瞳は何を見る？

# 目次

登場人物	1
全王神が作ったGTA Vの世界　〈秩序無き戦い〉	
第1話　暗殺稼業	14
第2話　死は未来への希望なり	19
第3話　初めてのお料理	23
第4話　戦闘訓練	28
第5話　再戦と決着	31
第6話　盗まれたレシピ	37
第7話　処刑執行	39
第8話　名探偵と怪盗との出会い	42
第9話　夜中のデート	49
第10話　星空英竜	54
第11話　エデン	57
第12話　同盟と襲撃	66
第13話　ANOTHER INFINITY DIEND	
71	
第14話　暗殺稼業2	78
第15話　休養と夢	84
第16話　鈴美とクリムゾン	89
第17話　龍神の覚醒	98
第17・5話　スリラーの真価とその正体	102
第18話　未来の妹と名乗る少女	109
登場人物2	116

第19話	零と全	120
第20話	幻影と破壊者と能力者	129
第21話	今起ころうとしてる世界	135
第22話	深雪の過去	143
第23話	性病を治す薬	151
第24話	雷鳴を轟かす神罰の剣	155
未来の始まりの世界	く円卓の騎士く	
第25話	未来の始まりの地	161
第26話	仮拠点	166
第27話	聖弓のスタンド使い	170
第28話	叛逆の騎士VS裏切りの騎士	176
第29話	愛花の真意	180
第29・5話	麻婆を極めし者	185
第30話	杜王町奪還作戦	192
第31話	太陽の騎士	200
第32話	VS転生者 騎士王	212
第33話	熾天へと輝く復活の剣	223
第34話	月の花	234
第35話	奇妙な旅館	241
恐竜ドラゴンとコラボ	もう一つの幻想郷 く東方影悪夢く	
第36話	悪夢を使う男	263
第37話	エルム街の悪夢VS幻影の不死鳥	273
第37・5話	有翼人の羽化	280
登場人物3		284
第38話	魔境狂乱世界 幻想郷 『エルム街の悪夢男』	291

第39話	猫耳パニック	297
第40話	魔界のバーサーカー	303
第41話	仮面ライダーゲーム	308
第42話	フランとフレディ世界のレミリア	314
第43話	破滅の魔神フランVS運命を操る吸血鬼レミリア	318
第44話	襲撃	325
第45話	過ぎ去りし思い出 進撃の巨人	333
第46話	美しき残酷な運命	338
第47話	ガルツチの本心	345
コロ助なりくさんとコラボ 複合した世界 ｛Time Crisis		
第48話	混合した世界	359
第49話	放たれる戦い	364
第50話	レイジングストーム	372
第51話	恐怖の支配者と痛みの支配者	376
第52話	コブラ部隊	379
第53話	空を攫う理由	386
第54話	破壊者VS狂狼 不死鳥VS狂犬	392
第55話	サーヴァントソルジャー	397
第56話	メタルギアエクセルサスЯ	404
第57話	次元を超える絆	409
第58話	ロードの居場所	415
第59話	魔眼の試練	423
第60話	大宴会	432

やくびようがみXとコラボ 狭間の世界 く全の竜神く

第61話 部署プリズマ☆イリヤ 439

第62話 復讐と狂乱のガルツチ 444

第63話 ガルツチの祖父との出会い 451

特別編 修学旅行 460

第64話 未来達の修行 469

第65話 虚の龍神と全の竜神 476

第66話 ホムンクルスの襲撃 484

第67話 夢現に続く希望の光 493

第68話 次の世界へ 499

ガルツチの第2の故郷 く消えない思い出く

第69話 懐かしき世界 505

第70話 歓迎 514

第71話 懐かしきお守り 534

第72話 不穏なる王国 541

第73話 思い出したくない場所 551

第74話 歪んだ精神と清らかな魂 558

第75話 神話スタンド覚醒 567

第75・5話 動き始める運命 577

第76話 決戦の世界へ 582

『原典回歸終焉世界』 End of The World く最後の戦いく

第77話 かつての戦友の再会 588

第78話 英竜の忌まわしき過去 595

第79話 全王神&龍神王VS全王 602

第80話	歪んだ兄弟愛と守護する姉弟愛	606
第81話	ゼロノスの真意	612
第82話	超完全生命体アンチスパイラル	618
第83話	超全大王神『ガルツチ』VS零の龍神『ゼロノス』	627
第84話	超大宴会	637
第84・5話	英竜との異世界デート	645
最終話	抑止力の最後	661
第EX話	2万年後の君へ	666

## 登場人物

ラーク・バスター・ガルツチ ∞歳（外見的に14歳） 11月14日生まれ 性別 男

身長：150cm（女体化時 130cm） 体重：45kg（女体化時 40kg）

（女体化時のスリーサイズ：B87/W50/H70）

CV、内山？輝（女体化時、田中あいみ）

テーマ曲 u.n. オーエンは彼女なのか？アレンジ曲 『蒼月の

懺悔詩』Universal Nemesis』

種族：有翼人（元 魔神）

髪の色：アクアマリン

目の色：蒼（右眼は魔法の眼球の為色んな色になれる）

クラス：グランドアーチャー・グランドセイヴァー・グランドアヴェンジャー・

グランドビースト・アサシン・バーサーカー

属性：混沌・中庸

カテゴリー：月

ステータス 筋力：USDSEX／耐久：C／敏捷：UEX／魔力：∞／幸運：A（C）／宝具：∞

無の神であるラヴオスと戦い、ジャキの姉であるサラを救出した大英雄。（本人は否定）

その後、未来達と共に行くことを決意し、家族や友人達に後を託し、旅に出て行った。

前世は全王神の息子で、虚王魔神とも呼ばれているが、真の前世は、無の神を生み出した元凶であるケンジの弟、遠藤宇宙だった。

しかし、その前世と訣別したのか、全王神の息子として生きることにした。

不老不死の呪いは継続処か、永遠に解けない呪いとなってしまうも、それ程気にすることもなくなり、此からも生き続けることにした。



未来と正式な恋人になり、鳳凰とアラヤという子をもっている。  
以前より明るくなり、いつも以上に接しているも、少しヤンデレ気  
味でもある。

後、女性扱いには殺意を持つ。とは言え、髪形はサイドテールで水  
色の羽のヘアピンと水色の翼のヘアゴムを付けている。

戦闘面では、殆ど英霊達の宝具やその贋作の宝具、そして白い剣で  
ある生命の樹セフィロトソードの剣と黒い剣である邪悪の樹クリフォトソードの剣の二刀流、日光・暁丸  
と月光・闇夜丸の二刀流、そして聖剣スターダストソードと魔剣ダー  
クネスムーンの二刀流のどれかになる。どちらも属性相反した剣で  
戦う。

魔神化する場合は、常闇月の刀と絶望の力で対抗する。(最早魔剣  
士……………)  
世界を揺るがす神々の剣ゴッドに関しては、ギルガメツシュにあげたため、  
現在の武器はその6つしかない。

門矢未来 18歳 2月7日生まれ 性別 男

身長：160cm 体重：47kg

CV、佐倉綾音

テーマ曲 Journey through the deca  
de

種族：人間(怪獣娘?)

髪の色：黒

目の色：右眼 金色 左眼 黒色

クラス：ライダー・グランドセイヴァー・チェンジヤー

属性：中立・中庸

カテゴリー：星

ステータス 筋力：SS / 耐久：B+ / 敏捷：UEX+

+++ / 魔力：∞ / 幸運：B / 宝具：∞

両儀式の姿をした男の娘であり、転生者。前世は『ともだち』事、カ

ツマタミクという者だった。

今ではディルーラーの門矢士の弟なのではあるが、士のことは嫌っている。

イフの能力に加えて、様々な力を持っていて、救いたいときは救い、しかしたまにとんでもない行動にも移る。

実のところ、両儀式と関係がないが、『直死の魔眼』を所持していて、それには気付いていない。

鈴美、オーフィス、簪、本音、レテイシア、白夜叉と共に行動していて、養子であるリサも連れて旅をしている。

現在は新たに、正式な恋人となったガルツチに、その妻であるフラン、こいし、イリヤや、未来とガルツチの子である、門矢鳳凰と、門矢アラヤと共に旅に出ている。

ガルツチとは違って、服装は女装なものが普段着で、意外と気にしていない。

門矢アラヤ 200歳以上（外見的に6歳） 11月8日生まれ

性別 男

身長：129cm 体重：30kg

CV、宮野真守

種族：人間と有翼人のハーフ

髪の色：アクアマリン

目の色：群青色

クラス：アサシン・キャスター

属性：中立・悪

ステータス 筋力：A＋／耐久：D／敏捷：EX／魔力：EX／幸

運：B／宝具：EX

門矢未来とガルツチから出来た息子で、ラーク家の末っ子。見た目的に6歳なのではあるが、死を司る力を持っていて、スタンドは『DEAD or ALIVE』というジャッジメント式で、相手を生かすか殺すか、どちらかを選ぶことが出来る。

性格はガルツチと似ているが、そこまで暗くないが、守るためなら命を張って戦うところがある。

武器は大鎌の『混沌の大鎌』と呼ばれていて、斬られた相手は気を狂うか、身動きを取れなくなる。最も、即死効果もあるため、死なずに、狂うか動けなくなるかだけでも、奇跡である。

直死の魔眼もちやつかり受け継いでいて、使用すれば即死も狙える。

門矢鳳凰 205歳以上(外見的に7歳) 6月28日生まれ 性別 女

身長：130cm 体重：32kg

CV、悠木碧

種族：人間と有翼人のハーフ

髪の色：桜色

目の色：マゼンタ

クラス：キヤスター・ヒーラー

属性：中立・善

ステータス 筋力：B＋／耐久：D／敏捷：S／魔力：EX＋＋＋  
＋／幸運：B／宝具：EX

門矢未来とガルツチから出来た娘で、ラーク家では七女。見た目は7歳で、その子の笑顔や寝顔は女神級で、殆どの皆が鼻血を吹き出してしまいうぐらいの可愛らしさがある。スピリットレストランで料理を鍛えているのか、料理上手でもあり、トニオでさえ涙を流してしまふほどの美味しさがある。その為か、命を司る能力を持っていて、致命的な傷や、末期ガンですら治療する事が出来る。更にスタンドは、『16の翼がついた少女の姿で、名前は『Born to Love You』(元ネタは古明地こいしのハルトマンの妖怪少女アレンジ曲から。)と呼んでいる。

短剣の二刀流も出来て、しかも状態異常を作り出すのが得意らし

く、毒や麻痺、眠り、石化など操れている。  
優しいときは優しいのだが、怒るときはちゃんと怒る。

フランドール・スカレット 495歳以上(見た目的に8歳) 5

月8日生まれ 性別 女

身長：125cm 体重：30kg

CV、丹下桜

テーマ曲 u.n. オーエンは彼女なのか？

種族：吸血鬼

スリーサイズ：B60/W30/H40

髪の色：ゴールド

目の色：深紅色

クラス：グラントバーサーカー・キャスター

属性：混沌・中庸

ステータス 筋力：UEX/耐久：B/敏捷：EX+++++/

魔力：EX++++/幸運：A/宝具：EX

ガルツチの妻で、ドラキュラ・ブラド・ツエペシユの末裔。レミリア達に後を託して、未来達と共に旅立っている。

それに加え、未来ガルを作り出した本人でもあり、実際作った本人もご満悦。

破滅の魔神であるルイン・ブレイク・ヘラの能力を受け継いでおり、スタンドも『DESTRUCTION LIGHT』に進化するも、範囲がデカすぎるため、使用には控えている。

戦闘面ではレーヴァテインとアレガステインの大剣二刀流とスペルカードを使用して戦い、更には宝具である『災厄<sup>レイ</sup>へと導く<sup>ヴァ</sup>破壊の剣<sup>イン</sup>』で、なぎ払って戦うこともある。

情緒不安定なところも無くなり、無邪気で甘えたがりなのだが、やるときはやるという性格をしている。浮気は許さないのだが、実質、自分が気に入った相手なら寧ろ犯してしまう性癖があるため、許容範囲

は不明。

古明地こいし 500歳以上（見た目的に12歳） 5月14日生  
まれ 性別 女

身長：130cm 体重：33kg

CV、門脇舞以

テーマ曲 ハルトマンの妖怪少女

スリーサイズ：B87/W50/H70

種族：覚妖怪

髪の色：アクアマリン

目の色：碧色

クラス：グランドアサシン

属性：混沌・中庸

ステータス 筋力：C++/耐久：E++/敏捷：EX++/魔力：

A/幸運：EX/宝具：C

ガルツチの妻その2。暗い過去を持っているが、今ではガルツチ達  
が着いていて、訣別している。義理の姉であるさとりとペットである  
お空とお燐と別れを告げ、未来達と共に旅立っている。

無意識に行動しているが故、初めての女性と出会うとどういう訳か  
胸を触りまくるというエロ無意識が発動するようで、ガルツチが止め  
ようとすると女体化させて犯かしているのが目に見える為、諦めてい  
る。

第3の目を封印していたが、現在は使用してる。更には、心のもつ  
と深い部分を見ることが出来るため、さとりよりも強力な能力を得て  
いる。

戦うときは短剣の二刀流を使用しているが、殆どがアサシンらしい  
行動があるため、真正面に戦う方が稀。

無意識で行動してるため、何をしでかすかは分からないけど、凄く  
優しく、甘え上手でもある。淫乱なところもありまくりではあるが、

実際は愛されて欲しいが故にこうしている。

そして心の奥底では、未来とHしたいなど思っている。（既にしてるか不明）

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン 200歳以上（見た目的に10歳） 11月20日生まれ 性別 女

身長：133cm 体重：34kg 誕生日：11月20日

CV、門脇舞以

テーマ曲 ローレライ ラストリモート

スリーサイズ：B60/W40/H51

種族：人間

髪の色：銀色

目の色：深紅色

クラス：グランドキャスター・アーチャー

属性：秩序・中庸

ステータス 筋力：A／耐久：C／敏捷：A／魔力：EX／幸運：

B／宝具：EX

ガルツチの妻その3。UBWルートで、ギルガメッシュに殺され転生した少女。家族である士郎達に後を託し、未来達と共に旅立っている。

英霊達を一時的に召喚する事が出来て、グランドサーヴァントも呼び出すことが出来る大魔導師でもあり、自身で戦うときは、ルビーを呼び出して転身して戦うこともある。

無邪気さはフランと同じくらいで、可愛い物を見るとほぼ暴走してしまう。いわばステイナイトのイリヤとプリズマ☆イリヤのイリヤとの中間のような性格をしている。ガルツチが未来と付き合ってることに関しては、凄く喜んでいて、寧ろもっとやって欲しいと思っている。

更識簪 11歳 4月21日生まれ? 性別 女

身長:150cm 体重:35kg

CV, 三森すずこ

テーマ曲 『luminous rage』

スリーサイズ:不明

種族:人間

髪の色:水色

目の色:桃色

クラス:アーチャー・セイヴァー

属性:秩序・善

ステータス 筋力:C/耐久:C/敏捷:EX/魔力:B++++

／幸運:D/宝具:EX

未来のハーレム要員の一人で、『星の勇者』と『星の勇者を阻む者』の両方の刻印を持っていた少女。インフィニット・ストラトスの住人であったが、未来と共に生きたいと思い、ついて行くことになった。

自身のISは全員のウルトラマンだけでなく、ウルトラ怪獣の能力を備えていて、更にはスタンド使いでもある。

姉への強いコンプレックスを持っているが故に、内気で臆病、人を寄せ付けない性格になったのだが、未来と出会ったお陰で、少しずつではあるが、明るくなり、更には『フレディがいる幻想郷』にてリサと出会い、その後養子として育てている。趣味はアニメ、それも勧善懲悪のヒーロー物のアニメを見ていて、自分もヒーローになりたいと思っている。

最近では未来ガルのBL同人誌を作ってるらしく、密かに売っているらしい…………。(どうしてこうなった。)

布仏本音 11歳 5月3日生まれ? 性別 女

身長:145cm 体重:33kg

CV, 門脇舞以

テーマ曲 ハルトマンの妖怪少女 アレンジ曲『LOVERS』  
スリーサイズ：B91/W59/H83？

種族：人間

髪の色：長春色

目の色：琥珀色

クラス：ライダー・アーチャー

ステータス 筋力：D／耐久：A+++／敏捷：EX／魔力：A+  
+++／幸運：C／宝具：SSS

未来のハーレム要員の一人で、簪と同じインフィニット・ストラトスの住人でもある。現在は未来と共に旅をしていて強くなっていく。

更識簪とは幼なじみで、かんちゃんと呼んで、他にはオーフィスの事はオーちゃん、フランの事はフラン等、親しい人にはニツクネームで呼ぶ癖がある。

自身のISを持っていて、更にはスタンド使いでもある。

凄くのほほんとしているのだが、怒ると魔王並みに怖くなる。未来とガルツチが恋人になつてるに對しては、どうも喜んでいるようだ。

余談ではあるが、玉藻の前から一夫多妻去勢拳を伝授している。

更識リサ 本名リサ・トレヴァー 8歳 誕生日不明 性別 女  
身長：120cm 体重：不明

CV、花澤香奈

テーマ曲 BENNIE K 『サンライズ』

種族：元人間

髪の色：紫色

目の色：虹色

クラス：セイバー・バースーカー

ステータス 筋力：A+++／耐久：C／敏捷：EX／魔力：SSS  
／幸運：E+++／宝具：？



『フレデイがいる幻想郷』の元怪物だった少女。アンブレラの企業に人体実験にされた存在で、自殺を図ろうとするも、簪の優しさで救われるも、カオスヘッダーやウイルス憑依時の身体能力やパワーと不死性すらも備わっているだけでなく、更にはガルツチの相棒のスタンドである『アヌビス神』を持ったため、戦闘面では最強になった。

髪の色は金色だったのだが、旅をしている内に、紫色になり、目の色は虹色へと変化した。

今は簪と未来の養子ではあるが、それと同時にアラヤと鳳凰の義理の姉となっていて、実質ガルツチの養子でもある。

オーフィス ∞歳（見た目的に9歳） 誕生日不明 性別 女

身長：∞（変えようと思えば変えられる） 体重：∞（身長と同じ）

CV、三森すずこ

種族：龍神

髪の色：黒色

目の色：ポイズン

クラス：モンスター

ステータス 筋力：∞／耐久：∞／敏捷：∞／魔力：∞／幸運：S

S／宝具：∞

ハイスクールD×Dの世界の住人で、前から未来と一緒にいたハーレム要員の一人。『無限の龍神』ではあつたのだが、ガルツチの能力『逆無限』と『反無限』の能力を得て、『反無限の龍神』となった。

元々はグレードレッドを倒すために禍の団に入っていたが、未来の説得により、抜けて、未来と共に旅をしている。

グレードレッドを敵視していたが、今では友好関係を持っている。大食漢なのか、よく食べるようなのだが、不味いものは食べない。因みにガルツチ達の料理は美味しいようで、滅茶苦茶気に入っている。

しかも無限の力に加えて『夢幻と真実を司る能力』を持つてるため、

滅茶苦茶チート染みた能力を得てしまった。

レテイシア・ドラクレア    ???歳    誕生日不明    性別 女

身長：不明    体重：不明

CV， 異悠衣子

スリーサイズ：不明

種族：元吸血鬼    現 有翼人

髪の色：プラチナ

目の色：琥珀色

クラス：セイバー・アーチャー・ライダー・キャスター

ステータス    筋力：SS++／耐久：EX／敏捷：EX／魔力：E

X／幸運：B／宝具：EX++

『問題児たちが異世界から来るそうですよ?』の住人で、未来のハーレム要員の一人。寡黙で物静かだが、子供たちにも常に礼儀を重んじるよう諭すなど、時に厳しく、時に優しい性格の持ち主。しかし、同属に対する仲間意識は強く、仲間を傷つけたり、侮辱した者に対して激しく怒りを燃やすなど、仲間を大切に思う気持ちを持つ。

元は吸血鬼の純血と神格を持ち合わせた魔王だったが、ノーン「ム」にかけてつくれるべく神格を捨てたため、魔王と称していた時の力を失うも、未来の『幽世セライロト・グラールの聖杯』により、新たな肉体が生成され、白い翼を十二枚も生やし、白いドレスを身に纏う姿となったのだ。その為、種族も変更され、ガルツチと同じ有翼人となった。

白夜叉    ???歳（見た目的に5歳ぐらい）    誕生日不明    性別 女

身長：120cm    体重：35kg

CV， 新井里美

スリーサイズ：不明

種族：不明

髪の色：乳白色

目の色：琥珀色

クラス：キヤスター・ライダー・ランサー・アーチャー・セイバー・  
セイヴァー

ステータス 筋力：不明／耐久：不明／敏捷：不明／魔力：∞／幸  
運：A++++／宝具：EX+++++

『問題児たちが異世界から来るそうですよ?』の住人であり、時空の賢者の一人。ガルツチの祖父を知っている者であり、唯一ガルツチに全身全霊の力を使っても勝てなかった太陽神でもある。

普段はおちゃらけた言動や女の子へのセクハラなど不真面目な態度だが、実際は仕事を全て片付けた上で遊んでいるという有能な人物。

箱庭世界に来たばかりの逆廻十六夜らにその実力の一端を見せてつけ、戦わずして退散させるという底知れなさを見せているが、未来やオーフィス、簪、本音に敗北し、以降は旅のお供というよりはハーレム要員の一人?として旅に出てる。

実際ガルツチの世界にいる時空の賢者であるロヴァス・グランドよりも実力が高いようで、パチュリー、ヴォルデモートをも超えている。

杉本鈴美 16歳 誕生日不明 性別 女

身長：不明 体重：不明

CV、原紗友里

スリーサイズ：不明

種族：元幽霊 現 人間? (龍神?)

髪の色：茶色

目の色：茶色

クラス：不明

ステータス 筋力：不明／耐久：不明／敏捷：不明／魔力：不明／  
幸運：D++／宝具：不明

『ジヨジヨの奇妙な冒険』の第4部の人で、決して振り返ってはいけな  
い小道にいる元地縛霊の少女。それと同時に、未来の最初のハーレム  
要員の一人でもある。

吉良吉影に殺され、その後は吉良を打倒する者が現れるのを小道で  
15年間ずっと待ち続けていた。が、未来が殺したことにより、その  
未来に惚れてしばらくは滞在、そして成仏してこの世を去ったと思わ  
れた。

しかし、ガルツチ達が生き返らせたお陰で、未来と再会、以降は未  
来と共に旅をしている。

実は鈴美は『零の龍神』の血を引いていて、本人にはそれに気付い  
ていないらしい。

ただ、ガルツチのもう一つの人格、ジャック・マッドネス・クリム  
ゾンが言うには、何故だか妹と似ていると思っっているらしい。

# 全王神が作ったGTA Vの世界　　く秩序無き戦いく

## 第1話　暗殺稼業

―ロスサントス―

ガルツチ side

数十分掛けて移動……………って、うわー信号無視かよ。しかも警察過激すぎ……………。でもなあ、あれ一般人も巻き込んでるよね？

未来「さすがGTA Vの世界……………」。

ガルツチ「あの一、ランチャーは何処ですか？」

未来「え？」

簪「ちよつと!？」

千夏「ランチャーはありませんが、これを付けて下さい。」

ん？なんかフックショット的な何かだな。とりあえず窓を開けて……………、ってというか使い方が……………なるほど、大体分かった。

ガルツチ「そらよつと！ついでに橋に繋げてつと。」

そして橋に繋がれたパトカーは、これ以上動かなくなり、そのまま引つ張られ、宙ぶらりんの状態になった。

ガルツチ「……………これ、どつかのGAMEにもあったよね？って

いうか普通に銃でも撃つとけばよかつたかも。」

白夜叉「考え方おかしくない!？」

ガルツチ「いや、此処ってGTA Vの世界だろ？恐らく常識もぶつ

飛んでるしさ。」

レティシア「……………何も言えない。」

千夏「さあ着いたぞ。此処が、私達のアジトだ!」

僕等はリムジンを降りて、見たのは、巨大な畑に囲まれた一つの屋敷だ。ってというか此処紅魔館に見えるけど、なんか違う気がする……………。

千夏「我々『千夏』のアジト兼コミュニティによろこそ。そして改めて、此のギャングの店長兼ボスである『千夏』だ。宜しく頼むぞ。」

ガルツチ「此方こそ、宜しく——」

『バリーンッ!!!』

ガルツチ「……………何で警察が石を投げるかなあ？銃撃てよ銃。  
(ωゝ#)」

アラヤ「母さん、殺意でまくりだよ？」

千夏「ふつ。警察の過激派か。内部にも協力者は居るが、中にはこの様な事を平気でヤル奴も居る。だが、甘く見るなよ。」

警察が、パトカーに乗って逃げ出した瞬間。

『ドドドドオオオオオオ!!!!!!』

アジトから放たれた無数のミサイルが、警察を吹っ飛ばした。

一言言わせれば、あの時の『End of The World』も、此に近かったし……………。

リサ「ええっ!!?お巡りさんが!!!」

簪「幾ら石を投げられたからって……………。」

ガルツチ「うーん、デジャヴを感じる。」

3人「そっちの世界も荒れてるの!?!」

ガルツチ「いや、戦場に戦場を重ねてるせいかな、なんか見慣れちゃったし。」

フラン「お兄ちゃん、修行するためだけに、世界飛び回ってたしね……………。」

イリヤ「うんうん。(・|・)(・|・)」

未来「相当荒んでるね……………」。

千夏「フツフツフツ。我々に逆らった結果だよ。君達も所属すれば解るさ。」

そして、千夏がアジトに案内してくれた。

千夏「それから、私の事は、千夏、店長、ボスでも何でも良いぞ。呼び方は自由だ。まあ此処に居る部下達は、全員店長かボスって言うがな。」

未来「そうか。なら僕は、千夏って呼ばせてね。」

ガルツチ「んじやあ僕はマスターと呼ばせて貰うね。」

未来「そういえば、ガルツチってサーヴァントもやってたね……………」。

そして、案内されたアジトの中は、かなり広い物だ。企画書も沢山あり、風呂やトイレも充実し、美味しそうな匂いもする。凄いな……………」。

千夏「しかし、ギャングと言っても、此方から企画があるまでは暇なものさ。やることと言ったら、何処かで薬やタバコを売るか、コンビニやレストランの経営、喧嘩、目的地まで手配度MAXで逃げる。ダイナミック乗車位だな。それに、他のギャングと交戦したりもする。後は、新商品を考える位だな。」

なる程なる程……………。っていうか麻薬じゃないよね？

千夏「それでは、今日からギャング生活を楽しんでくれ。ギャングの基本は、仲間と共にある信頼関係か、後は金だ。」

未来「ありがとう!!!それじゃあ食堂で何か食べてくねー!!!」

鳳凰「未来お父さん!!」

リサ「未来お母さん待ってよー!!」

アラヤ「僕も行くー!!」

……………お母さんって、なんか違和感ないよね。

簪「あつ!こら!リサ!!走っちゃ駄目!!」

リサ「ごめんなさいママ。」

簪「もう。リサったら」

……………微笑ましいな。さてと……………。

ガルツチ「マスター、早速暗殺稼業の移りたいが、そう言うのは？」  
千夏「うーん、今のところないな。」

ガルツチ「分かった。」

千夏「あ、そうそうガルツチ。全王様から伝言を預かってる。」

ガルツチ「？」

千夏「この世界で、いっぱい楽しんでね。♪って。」

………了解。いっぱい楽しませて貰うよ。

翌日というよりなつたばかりの深夜、早速僕の仕事 came。

千夏「実はある部下が、取ってきた情報だが、何もやってない一般人を逮捕している警察が居るんだ。其奴を、如何なる方法でも良いから、始末して欲しい。」

ガルツチ「場所は？」

千夏「このストリップクラブに、よく出入りしているから、君の腕次第だな。好きな場所で構わない。死体処理は、まあどうせ何とかするでしょうね。魔法認知しないし。」

ガルツチ「んじゃあ、起源弾の使用は？」

千夏「構わない。ただ、一発必中で頼む。」

ガルツチ「分かってる、無闇に犠牲を払いたくないしな。んじゃあ、行ってくるね。」

千夏「ああ、気をつけて。」

さてと、久々に言うとするか。



ガルツチ「さあ、聖杯戦争を続けよう。(そもそも聖杯戦争すら起こらないがな。)」

t o b e c o n t i n u e d

## 第2話 死は未来への希望なり

―ロスサントス とあるビル― 月夜ノ刻―

ガルツチ side

よし、配置完了。今日は満月は綺麗のようだな。

ガルツチ「さてと、起源弾をセットして……………」

よし、そんじやあ其奴が居る方向に見るとしますか。念のために、幻影を張って、誰にも見えない仕組みにするか。いや、下手すりゃバレルか。慎重に狙わないと……………」

ガルツチ「まあ一応、眠らなくても大抵はなあ……………」

今は鼓動も殺意も何もかも消して、存在感を消す。奴が来るまで―

全王神『ガルツチちゃん？ 工作中？』

今仕事してるんだけど、っていうか暇なときに連絡って……………」

全王神『良いじゃん、私だって暇なんだし〜。』

暇って……………母さん、あんたねえ……………」

???『お前なあ、息子に連絡するのはいいがちゃんとしろよ。』

ぬお!? 今度は誰!?

???『ようガルツチ、久し振りだな。』

おいその声、ディルラーか!?

士『おう、俺の弟の恋人になったって聞いた以上、連絡しようかなって。』

だからって、念話はねえんじやねえの? 後今暗殺稼業やってんだから……………」

全王神『そういえば、あっちの世界は天皇陛下の補佐やってたんだっけね? あとは暗殺稼業とか。』

士『おまつ!?! マジで!?!』

マジだよ。実際僕は、こっちに性に合ってるし、何より――

全王神『あの一、ガルツチちゃん。つくくん気絶しちゃったよ?』

お前もかよ。なんなの? 何で僕が元天皇陛下の補佐やってるって言った途端、気絶するんかな?



全王神『思いつきし、死ぬとこ見られたね。』

………確かに。一応遺体も消したし、何が起きたか分からないから、結果オーライかな？

ガルツチ「さてと、終わったことだし、帰ると………おつと！」  
何かを察した僕は、すぐさま回避し、攻撃してきたところを見た。そこには黒いコートを着ている男が、2人ほど存在していた。

「なかなかすばしっこいガキだな。」

「兄貴、此奴が今回のターゲットですか？」

「ああ、こんなところにいるとは、ついてるぜ。」

此奴、『名探偵コナン』に出てくる黒ずくめの組織!?

ガルツチ「………ジンとウオツカか。しかも、酒の名前つてどういうこつちやな。」

ジン「ほう、俺のコードネームを知ってるとは、厄介な奴だな。」

ウオツカ「兄貴、気を付けてください。此奴は伝説と名高いスナイパー使いですぞ。」

ジン「フツ、俺がこのガキに遅れを取るなんて事は、絶対ないからな。」

ガルツチ「悪いが、あれが契約者だったら残念だったな。既に暗殺済みだ。」

ジン「構わねえ、お前を殺せば、チャラになるしな。」

ガルツチ「………どうかな？」

ウオツカ「兄貴!」

ガルツチ「『閃光の矢』!」

そして!

ガルツチ『Timealter ChangeTheWorld』  
!」

そのままジンとウオツカを気絶させ、指紋や虹彩更には顔写真もと  
り、更には唾液も取った後すぐさま立ち去った。

まあ思わぬ収穫も得たな。一応これも報告するか。あ、ついでに記  
憶修正って事で。

ガルツチ「『忘却の彼方に忘れよ』」。

よし、そんじや撤退とするか!!

その後アジトに戻ったら、何故か半殺し状態の千夏がいた。何が  
あった……………。

t o b e c o n t i n u e d  
→

### 第3話 初めてののお料理

—千夏アジト—

ガルツチ side

ガルツチ「んで、何で半殺し状態だったんですか？というか、僕が暗殺が終わった後ブラブラしてたのは悪かった。でもさ、ホントに何があったの？」

千夏「あ……アハハ、き、気にしまいでくれたまえ。」

いや気になるだろ、何があった。

こいし「千夏はね、コンビニ事爆発させた挙げ句、ガソリンスタンドに当たって大惨事を——」

ガルツチ「OK把握。そりや半殺しなるわな、マスター……。と  
いうかさ、普通ガソリンスタンドのコンビニところで爆弾仕掛けるか？」

千夏「……申し訳ございません。」

やれやれ……。今度からはちゃんと気を付けろよ？

それからというもの、現在僕等は、子供達のお料理会に来ています。暗殺の仕事は終わり報酬は多く貰い、更に未来達の強盗により、更に多くのお金を貰った。こっちの所持金は不可思議位のお金を持っているが、全部電子マネーに変えている。使うときは、どれくらい使うかを設定すれば、現金が出てくる仕組みがある。そして、子供達は今、僕等のために料理を作ってくれる。料理と言っても、コンビニで売ってるようなチキンと、マクドナルドで売ってるようなハンバーガー。ケンタッキーのチキンといった簡単なフードだ。

因みに、鳳凰は物凄く料理が上手なのは知っている。

未来「そういや、僕も料理は出来るよ。教えてくれれば、すぐに来る。ガルツチもだよな？」

ガルツチ「まあ本当なら、料理はしなかったんだが、エミヤよりの僕の幻影が滅茶苦茶上手で、いつの間にか僕も料理上手になったからね。」

未来「なる程。他の皆は？」

鈴美「うーん。小さい頃、ママと一緒に料理のお手伝いをしてたわ。それで、大抵お料理は出来るわよ。」

なる程、鈴美さんの料理には興味あるな。

簪「私は一応出来るけど、お姉ちゃん程じゃないよ………………。でも、料理でお姉ちゃんを超えてみせるから！」

フラン「目指せ！姉に勝る妹!!」

簪「おー!!」

ガルツチ「アハハ…………。フランは十分超えまくってるけどね。」

—スピリットレストラン—

レミリア「クシユン！」

バルツチ「レミリア姉ちゃん！風邪？薬持ってこようか？」

レミリア「いや、何でもない………………。なんか噂された気がしたから。」

—千夏アジト—

ガルツチ「それで、本音は？」

本音「私は、出来ないなあ。みつくんに教えてもらおうよ。」

こいし「意外、出来ると思ってたけど…………。」

僕もだわ。

レティシア「私はメイドの経験上、料理は得意だ。今度ギャングの皆に料理を振る舞ってやろう。」

ガルツチ「あ、それ良いね。夜叉は？」

白夜叉「うむ。出来んのう。」

どや顔でいうことか？(・|・;) )

オーフィス「我、出来ない。」

確かに、食べる側だったしな。

未来「フラン達は？」

ガルツチ「3人とも料理できるよ。凄く上手だし、僕が経営していた『弓兵の店』や『スピリットレストラン』で、色々と料理を提供してるよ。」

アラヤ「出来たー!」  
お、出来上がったか。

そして、人数分更にチキンとハンバーガーを置いてくれた。  
鳳凰「お母さん、フランお姉ちゃん、こいしお姉ちゃん、イリヤお姉ちゃん。食べて。」

僕等は、子供達の作ってくれたチキンを食べた。  
その瞬間。

~~~~~  
!!!!!!!  
~~~~~

ビックボスの言葉を借りるのならば……、『旨すぎる』!!!!!!  
も美味すぎて、涙流しちゃったよ。このチキンのレシピは!!!!!!子供達が  
書いた為、クレヨンで書かれていた。子供用の画用紙に書かれたレシ  
ピを守ると決意した僕等であった。

全王神『キャアアア!!私にも食べさせてええええ!!』  
うちの母さんも欲しがってたようです。

翌日『千夏マート』で販売された。

んで、僕とオフィス、未来の三人で、リサとアラヤと鳳凰の作つ  
たチキンとハンバーガー。通称、ちなチキと、ちなバーガーを販売す  
るために店に来た。



と、そのときだった。

『ズガガガアアアア  
!!!!!!!』

なんとお客様がバイクや車に乗って、店内に突っ込んで来たのだ。  
いやいや……………。

未来ガル 「バイクで店内に入店するなああー」  
「これぞ、究極入店!!!!」  
未来ガル 「巫山戯んなああー」  
!!!!!!!  
!!!!!!!

結論、千夏マートが店内爆発により、臨時休業しました。

更に上空から輸送機タイタンの落下、爆撃機による爆撃により、千夏マートは全壊。長期休業。後一ヶ月で直るといふ。  
って言うのは冗談で、実際はあと15日で直ることになった。

まあでも、さっきのお客様は、未来と僕のスタンドラッシュでお仕置きをし、最終的にはモリアーティの宝具『???』。どんなもんかという、担いでいる仕込み棺桶から重火器をブツ放す。たったそれだけである。勿論、再起不能程度の感じだがな。まあ男だと分かり、そして此奴の犯罪履歴を見れば、なんと幼女をさらってレイプしまくっていたようなんで、滅・一夫多妻去勢拳で、男としての人生を終わらせました。

此には未来も苦笑い。まあ未来にはやらない。絶対に！というかしたくもねえわ!! 未来が泣いちゃうじゃん!?

その間僕等は、夏休みになりました。

千夏曰く、対警察、対軍隊、対怪物用訓練を兼ね備えた遊びを用意したらしい。僕等はワクワクしてきた。どんな遊びという名の訓練があるのか、楽しみだ。

t o b e c o n t i n u e d ↪

## 第4話 戦闘訓練

―ロスサントス 千夏アジト―

ガルツチside

母さん、ちよつと良いかな？

全王神『はいはい、どうかしたの？』

一応聞くけど、仕事中に襲ってきた黒ずくめの組織がいるって事は、あの工藤新一こと江戸川コナンもいるって事か？

全王神『まあそう言うことだね。』

成る程ね、よもや名探偵コナンの世界にも繋がってたとは………。大丈夫なんかな？特にあの子供の方。絶対に余計な首を突っ込んで居る気がする。

全王神『まあまあ、子供なんだから仕方ないよ。』

そりゃあそうだけど、というか分かつてはいるんだが、洒落にならないからなあ……。よそはよそ、うちはうちっていいながら、よその子を見習いなさいって、モロ矛盾してるし………。

自分は自分なんだし、もうちよつとなあ……。個人を大事にした方がいいよ。褒めるときはちゃんと褒めて、叱るときはちゃんと叱る。場合にもよるけど、やっぱりね……。

全王神『すっかり親だね。教育委員会に出た方が良いかもしれない。』

教えるのは無理だぞ？下手くそなんだし………。

千夏「次はガルツチだよ、定位置に着いて。」

ガルツチ「了解、この辺りだな。」

千夏「そうそこ、そんじゃあ起動させるよ。」

千夏がスイツチを押すと同時に、チンピラ40万人、警察は重装備している奴と盾持ちを入れて60万人、軍人に関してはぎつと500万人、そして………。

シヨツカー達『イイイイ!!!!』

………何故かシヨツカーの軍勢が1000万人という。つていうか、何でシヨツカー？

千夏「時間内に、チンピラ、警察と軍人を無力化。そして、ショットカーの全滅をしてみてください。」

ガルツチ「600万人を無力化に、ショットカー全滅ねえ……………」  
未来「というか、大丈夫なの？」

ガルツチ「大丈夫大丈夫。これでも1億人以上も殺せたんだし。」

未来「一億……………」

鈴美「改めて凄いわ……………」

ガルツチ「んじゃ、無力化させるぐらいなら、出来なくもないな。殺害は、もう決めてる。」

千夏「んじゃ行くぞ。Ready?」

さてと、未来より超える神速で行くか!

千夏「GO!!」

ガルツチ「ハッ!!」

sideChange

千夏side

って、えええええ?!?!?1秒も経ってないのに、もうチンピラ、警察、軍人を無力化!?そして0秒25のところまでショットカー999万人倒した?!早くない?!?!?

ガルツチ「終わりだ。」

そして終わったアアアアアアアア!!!!!!

千夏「た、タイムは……………」、『0秒31』。」

ガルツチ「ふう、あの時よりは早く終わったな……………」

千夏「遊びで本気でやる人なんて、今までいただろうか……………」  
しかも素手で……………」

ガルツチ「んじゃ僕、VRガンシューティングゲームやってくる。  
最高スコアを出してやる。」

千夏「……………」マジですか。」

ガルツチ「Change, 未来。」

未来「お疲れさま、ガルツチ。」

ガルツチ「頑張れよ。」

これは……………、最強かつ最狂、最高のカップルかもだね……………あれ。未来も凄まじいタイム出しそうな気がする……………。

sideChange

ガルツチside

いやー、真面目にやっただけで、あれだけのタイムを引き出せるとは……………。まあ、僕をもっと手こずらせたかったら、その1000倍用意するがいい。

ガルツチ「さてと、どんなVRガンシューティングゲームにしようかなあ……………」

そういえば兄さん、学生時代に遊んだガンシューティングゲームがあつたな。それやってみるか。

ガルツチ「えーつと、難易度は……………『ルナティック』でいいか。」

兄さんでも出来たのならば、僕でも出来るはず！行くぞ、『パイレーツ―呪われた宝船―』。その鬼畜難易度で十分か？

to be continued



ガルツチ「バルボツサ!？」

キング『何ツ!? 私が消したはず!!』

ガルツチ「キングだったのか!? バルボツサを消したの!!」

キング『お前のためにと行って、消したのだが、まさかここまでとはな……………。』

士『ええええ……………、俺ですらビックリだぞ。なんだ彼奴の執念、一度惚れたらマジモンで着いてくる奴。』

束『私も思わなかったわ。私でも、あの執念には敬意を評するわ。』  
うん、束に同意するわ。んじゃ、剣を抜くとしますか。

『ズドーンッ!』

バルボツサ「ようガルツチ、久しぶりだなあ……………」

ガルツチ「こつちとしたら、全く会いたくなかったんだが。というか、消されたはずじゃ。」

バルボツサ「へっ、あんな消滅! お前を手に入れるためだったら、消えてたまるかってんだあああ!!!」

ガルツチ「お前なあ……………。逆! 逆に怖えわ。」

バルボツサ「さあて、再戦かつ最終決戦と行こうじゃあねえか!! 負けたら、分かかってんな?」

ガルツチ「……………ハア。」

もうこれは、覚悟を決めるほかないな……………。一方的とは言

え、約束した以上、やるしかねえ。

母さん、最大宝具を使用するから、ロスサントスの町や千夏のアジトを――

全王神『了解!!絶対!に勝って!!ファイター!!』

いっぱーっ!

全王神『あれ?なんだかノリがいいねえ……………?』  
んじゃ、逝ってくる。

全王神『待って!!文字がおかしいよ!?行くが逝くになってるよ!?』  
さあて、決着だ!!バルボツサ!!!!!!

バルボツサ「ほう、良い面構えになったじゃねえか。そう来なくっちゃやな。」

バルボツサの剣から、凄まじい程の魔力が籠もっている……………。恐らく、あの時よりも一撃宝具を使用するに違いない……………。

バルボツサ「俺の一撃、食らうがいい。秘奥鉄槌、極闇は反転し、無を超越する。」

こりゃ、やばい宝具を使う気だな。ケテル、バルケル、オーバーチャー<sup>ジ</sup>頼む。

ケテル『了解、マスター。』

バルケル『ケテル、彼奴だけは絶対に勝つぞ。』

ケテル『お前に指図されるのはムカつくけど、確かにそうだね。マスターの安らぎの為に、此奴だけは絶対に勝つ!』

バルケル『魔力オーバーチャー<sup>ジ</sup>完了!』

ケテル『僕もだ!マスター!』

ガルツチ「ああ……………」

『無限闇』、『無限光』……………。相反せし属性よ、我に力を。

ガルツチ「我は虚王魔神、全王神の負の心から生まれし者。存在することもない虚無の魔神なり。我が虚無に、怯えて永眠<sup>ねむ</sup>れ!!」

バルボツサ「さあ、闇を呑め!!『復讐<sup>エクスカリバー・ディストピア</sup>を誓いし暗黒の剣』!!!」

ガルツチ「『光と闇<sup>アイン・ツフ・オウル・チャセク・スパーク</sup>が交わりし虚無の閃光』!!!」





ガルツチ「奴隷って、それはそれでどうかと思うんだけど……。」  
バルボツサ「何なら、鞭打って、調教させても良いんだぜ？」  
ガルツチ「僕にそんなSMプレイを要求すんな!! まあ、僕が勝った以上、従ってもらうぞ。裏切りは厳禁だから、覚悟しておけ。」  
バルボツサ「了解、我が主。」  
全く、仕方ないなあ……。……。

——バルボツサが、ガルツチ達の仲間の奴隷になりました。

——千夏アジト——

ガルツチ「つうわけで、此奴が新しく仲間になるヴェルバー・バルボツサだ。」

未来「この人か、ガルツチを奪おうとしてたのは……。」

あのー、皆さんなんか『ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ』の文字が出るんですが。(・|・)

ガルツチ「待て、此奴は僕に負けを認めた。それだけでなく、自分から奴隷要求したんだ。」

簪「へえ？ 奴隷っていったの？」

本音「ガルガル君の奴隷って事は、私達の奴隷って事でもあるよね  
〜?」

ガルツチ「おい、今の本音の笑顔、どこぞのうっかり娘みたいな顔  
になってるから、別のにしろ。うっかり移るよ?」

本音「大丈夫、うっかりするときはどこかに引っかけてずっこける  
ところだから。」

オーフィス「ガルツチ、此奴、調教していい?」

ガルツチ「なんですか。一応いうが、仲間なんだからあんま下手なこ  
とは——」

バルボツサ「是非!俺を罵って調教してくれ!!」

4人「『自分から要求したああああああああああああ』」

?ーん。まさかのDM発言かよ〜……………!!!」

士『しかも何故だろ、今回の未来の笑顔。何処か恐怖を感じる  
……………』

全王神『アハハハ、お気を付けて〜。』

まあ、そう言うわけだから、キング。

キング『分かった、消さないでおいてやろう。喜ぶがいい、バルボツ  
サ。君の願いはようやく叶う。』

まるで言峰が言う台詞だな……………。

t o b e c o n t i n u e d →

## 第6話 盗まれたレシピ

—千夏アジト—

ガルツチside

ガルツチ「……………一体、一体誰が盗んだというのだ!？」

未来に敗北したのはいい、だが、レシピを盗まれるとは、どういう事だ!？」

千夏「あり得ない、ちゃんと嚴重に保護したはずなのに、何故盗まれた!？」

未来「犯人が分かり次第、それ相応の罰を受けて貰わなければ……………」

全員「激しく同意。」

うちの息子達のレシピを盗んだ罪は、きっちり払わねば……………。代償として、スペシャル拷問チケットを受け取って貰わねばなるまい。

悪夢じゃ生ぬるい。

おぞましいほどの絶望を与えなくてはならないなあ。

「此方です。」

ホントに金庫が破られてるな。何の目的で盗んだのだ？

全王神『うわー、派手にやられちゃってるねえ……………。』

4人「二「マジ、許早苗。」」

束『そして凄まじい殺意……………。』

ガルツチ「なあ、犯人にはどう言う罰を受けて貰えば良いかなあ?」

フラン「そうね……………、先ずは両手両足にある爪を剥いで、それからゆっくり削いで行って。」

こいし「お次に、皮を少しずつ剥いて行って、骨まで来たら削りまくって……………」

イリヤ「その後は、目玉を抉って、歯を無理矢理折ってから……………」

ガルツチ「後は僕が回復させてからもう一度やる。」

全王神『4人が、ヤンデレになってる……………。そして、怖い。』

士『やるのが女の子がいう発言じゃない…………。』

キング『……………犯人、ご愁傷様です。』

全王神『未来ちゃん達は……………、鈴美ちゃん以外滅茶苦茶怖い…………。』

士『……………うわ、怖つ。』

キング『おいビルス、あの殺意如何すれば良い?』

ビルス『知らん、というかこの破壊神でも、め、めめめ滅茶苦茶怖いんだから…………。』

全王神『破壊神ですら恐れる殺意なの!?!』

というか、ビルスもいたんだね…………。まあ、関係ないが、それより犯人を模索しなくては。

ガルツチ「ミスト、早急に犯人を模索を頼む。」

ミスト『りよ、了解…………。兄や…………、怖いよ…………。』

ガルツチ「……………いかん、怒りの余りミストに八つ当たりして怖がらせてしまった。気を付けないと……………」

あーもー、どれも此も全部犯人のせいだ!!!殺すなんて生温い、二度と盗みを働かせないように、ゆっくり痛めつけておかなくては……………。

全王神『みんな、犯人に祈っておこうか。』

士『そうだな、その方が良い。というかそうしよう。』

ビルス『うん、彼らの怒り買わせたのは自業自得だが…………。』

——『パンパンツ!』

全員『『南無阿弥陀仏…………。』』

t o b e c o n t i n u e d →

## 第7話 処刑執行

—遊園地—

ガルツチ side

ぽん吉ねえ、しかもガンダムで行くとは……………、何と愚かな奴め。

ガルツチ「行くぞ皆、3人が作ったレシピを取り返すぞ!!」アサシン『暗殺者』

アルトリア・ペンドラゴン『ヒロインX』! 『狂戦士』! 『ヒロインXオルタ』! 『融合夢幻召喚』

!!

『融合開眼!! WヒロインX!! 正体不明、セイバーキラー!!』

まあ女装はご愛敬だな。

未来「ガルツチ! 僕にもカードを!」

ガルツチ「OK!!」セイバー『剣士』! 『ダース・ベイダー』! 此を使え!

未来「行くぞ! 変身!!」

『INFINITE RIDE <Darth Vader>!!』

未来の方はフードを被ってるが、仮面は付けてないな。

『フハハハハハ!! 僕のガンダムに勝てると思うなよ!!』

ガルツチ「はっ! 自分がニュータイプだと思ってるんなら、その効果を消してやるぜ! オルトリアクター、コスモリアクター!! 起動!!」

『そんな物、僕に利くとも?』

未来「思うんだよね、此が!」

『グアツ!? う……………動かない……………!!』

ガルツチ「サンキュ、未来。そんじや、この人の宝具を使うか!

『擬似宝具起動』! 苦悶を示せ! 『妄想心音』!!』

よし! リサ達のレシピを取り返した!

『しまった!! 僕のレシピがあああ!!』

ガルツチ「なあ未来、気に入らない相手は?」

未来「そうだねえ……………」

未来ガル「取り敢えず、機体ごとぶった切る!!!」

そしてそのまま初代ガンダムを、ライトセイバーと二刀の約束された勝利の剣でぶった切られ、ガンダムは大破、ぽん吉が吹っ飛ばされる。が、それを逃すまいかと言わんばかりに、未来がもう一



ガルツチ「全く、機械如きに相手になろうなんざ10京年早い!!」  
未来「つていうか、拷問は？」

ガルツチ「あ……………。忘れてた。」

怒りの余り、つい殺っちゃったよ。

ガルツチ「まあ…………、いつか。すつきりしたとこだし。」

未来「そうだね。」

そして、リバティイシテイーの店長は復活するも、窃盗容疑だけでなく、ストーカー、誘拐、猥褻、等々の罪により、現行逮捕、従業員はその店長の悪事を知ったことにより、辞職していき、最終的に倒産していった。

そして裁判は有罪、仮釈放なしの終身刑となった。ナムアマダブツ  
!

関係ないが、また千夏コンビニが爆発した……………。いやなんでき。

言いたいことは……………。

6人「コ「コ」爆発オチなんて最低エエエエ  
「「「「」  
「「「「」

t o b e c o n t i n u e d

!!!!!!!



## 第8話 名探偵と怪盗との出会い

―ロスサントス― 月夜ノ刻―

ガルツチ side

今日は仕事の休み、つてな訳で今未来と買い物に出掛けている。

未来「それにしても、ガルツチ。車の運転上手いんだね。」

ガルツチ「騎乗スキルがあるからな。まあ、船も運転出来なくもないが、やっぱり機動性とスピードが欲しいからね。」

未来「耐久の考えはなしか。」

ガルツチ「そう言うことだな。つと、この辺りだな。」

先ずはスーパーマーケットのところに到着し、そこで必要な物を買っていった。

ガルツチ「エミヤが言うには、新鮮が1番だとか。後長持ちがいい奴、農薬が使ってない奴等々。」

未来「エミヤさん、お母さんなのかな？」

ガルツチ「違いない。つて、そんな噂してたら、くしやみしてるだろうな。今頃。」

―スピリットレストラン―

エミヤ「オカンではない！<sup>バトライ</sup>執事と呼べ！」

クロエ「貴方は何を言ってるの？」

プリヤ「うー、またお兄ちゃんが変なこと言い出したあ……………」

クロウ「気にするな。何時ものことだ。」

エミヤ「なんだと？」

士郎「はあ、何やってんだか。」

凜「……………ねえ衛宮君。」

エミヤーズ「何？」

凜「……………ホントに、あんた達同じ名前ってどういう事？」

―ロスサントス―

ガルツチ「よし、此ぐらい買えば、何とかなるな。」

未来「結構買っちゃったね。」

ガルツチ「タイムセールとかのせいでな。余計なものまで買っちゃった……………」

さてと、次は……………なんだあの人たがり？

未来「ねえ、あの人たがりは何？」

ガルツチ「以前黒の組織がいただろ？つて事はさ、彼奴らもいるつて事になるんじゃないかな？」

そう、彼奴らと言うことは……………この人たがりは、恐らく……………」

『レディース、アーンド、ジェントルマン！よくぞ来て下さりました。』

「キッド!!今日こそは貴様を逮捕してやる!!」

ワオ、予想通りあの人がいたか。

未来「あれって？」

ガルツチ「怪盗キッド。本名は黒羽快斗。工藤新一と同じ高校二年生で、マジックが得意。元々は、ただのマジック好きだが、ある組織の仇を見つけるために、怪盗キッドとして生きている。因みに、スケベでもある。」

未来「如何するの？」

ガルツチ「何、次に行くところが分かれば、後は簡単。先回りするよ。」  
そう言い、僕らは人たがりから離れ、怪盗キッドが隠れるところに向かった。その場所が、公園の辺りだった。

僕と未来は直ぐさま隠れ、怪盗キッドが来るのを待った。

「さて、お宝は手に入れて、あの子供を出し抜いたことだし、取り敢えず調べるとしよ……………?そこにいるんだろ?お二人さん。」

あらま、予想通りって感じか。

ガルツチ「先回りさせて貰ったよ、怪盗キッド。いや、黒羽快斗。」

快斗「此は此は、見ず知らずの者にもかかわらず、僕の名前を知ってるとは……………」

ガルツチ「目的は知ってる。その盗んだ奴は、偽物なんだろ？」

快斗「知ってたのか。」

未来「つて事は、もし本物だったら、壊すつもりだったの？」

快斗「ええ、勿論です。しかし、驚きました。まさかお二方、女装してるとhブギャ!？」

ガルツチ「女装いうな!!」

未来「一応言うけど、此が普段着だよ。」

快斗「イテテテ、女装が普段着って、不思議な人もいた者ですね………。ほっぺが痛え……。」

全く、女装とか言わないで欲しかったなあ……。フランの服装はまだできてないって、マルフォイが言うから、代わりに送ってきてくれたこいしの衣装を着てるってのに。でもなんか、こうしてみると、本音と同じ袖がダボダボな気がするのは僕だけかな？

快斗「まあいいや、んじやこのお宝はお返ししておく。偽物だって事は分かったことだ——」

???「見つけたぞ!!怪盗キッド!!」

おろ、良いタイミングで来やがったな。

快斗「おや、小さな名探偵さん。残念ながら、お宝は既に彼方にお返ししたよ。」

???「関係ない、お前を捕らえることが出来ればそれで充分さ。」

快斗「まつ、それが出来るのならばな。」

ガルツチ「………聞きたいことがある。キッド、もしお前の仇相手を見つけたら如何する?」

???「?」

快斗「………さあな。それは、自分自身で決めるさ。じゃあな、小さな名探偵さん。そして、女装ベラツ!」

ホントに懲りねえな。

未来「気をつけて、ガルツチは女装とか女性扱いすると、反射的に殴ってくるから。」

快斗「何それ!?どっからどう見ても女性ゴハア!!」

ガルツチ「いい加減黙らねえと、その口を縫い合わすぞ?」

快斗「ヒエエエ!!怖え……。んじやさいなら!」

そしてそのまま、何処かへ雲隠れしていった。

ガルツチ「全く、僕は男だつての。別に、たまには女装して出掛けようかななんて、思ってもないし、気分で着たんだから……。」

???「それはそうと、お宝を持つてるのは誰？」

ガルツチ「僕だよ、後で返してやって。どうせ偽物だが。」

???「偽物？ところで、あなた方は？」

ガルツチ「僕はラーク・バスター・ガルツチ。あのキッドとは無関係だ。」

未来「僕は門矢未来。通りすがりのスタンド使いだ。覚えておけ。」

???「そうか、僕は江戸川コナン。探偵さ。」

ガルツチ「おいおい、偽名は勘弁してくれ。」

???「!？」

ガルツチ「何故知ってるって思ってるけど、僕等は別に、黒ずくめの組織の仲間じゃない。信じがたいけど、僕と未来は、君が何者で何故その姿になったのかは知ってる。」

滅茶苦茶驚愕してる顔をしてるな。そりゃそうか、つていうか普通そう言う反応するよな。

ガルツチ「念のために、本名言ってくれないか？今この公園には誰も聞かれないように、そして誰も来ないように結界を張って置いた。」

???「結界？」

未来「真実を伝えるとね、僕とガルツチは転生者なんだ。色々な世界を旅回つてるところなんだ。」

???「そんなファンタジー、俺が信じるとでも？」

ガルツチ「だろうな。普通皆はそういう反応するさ。」

???「え？証明しないの？」

ガルツチ「寧ろ、僕等が存在している時点で、証明してるようなもんだしな。あそこに車1台あるだけで、後は僕と未来、そして君だけさ。」

まあぶっちゃけ、今まで自分を隠し通していたしな。

???「分かったよ、そこまで言うのなら……」。俺は工藤新一、黒ずくめの組織の一人に気絶させられ、APT X 4869を飲まされて、

仕方なく『江戸川コナン』として生きる探偵さ。」

ガルツチ「……………APT X 4869か。つまり、それを飲まされて、幼児化しちゃったって訳ね。」

コナン「ああ、お陰で隠し通すのが面倒くせえよ……………」

未来「確かに、あの薬は現代の力じゃどうにもならないけど、ガルツチだったらそれを治すことが出来るかも。」

コナン「なっ、ホントかそれ!!」

ガルツチ「幼児化は一応見たことあるからね。何らかしらの呪いなら、解呪も出来るが、それ以上となると、兄さんか友人に頼むしかないなあ。」

コナン「でも俺は、薬で縮められたんだ。」

ガルツチ「分かっている、その為の魔法薬さ。薬草学の知識も加わって、今じゃあらゆる万能薬も作れるようになったからな。幼児化させる薬もあれば、元に戻す薬も作れる。」

ようやくと、短縮レシピも作れたしな。

ガルツチ「ほい、緑色の飴玉ではあるけど、此は君の歳、つまり高校二年生に戻す薬だ。永続性もある。因みに、ミント味だ。」

コナン「何でミント味?」

ガルツチ「何、味を変えられる魔法をかけて、緑色のミント味にしようかなって思っただけ。んで、こっちの赤い飴玉は、幼児化の薬。緑色と同様、永続性もある。」

コナン「何でこんな物を?」

ガルツチ「隠れたいときあるだろ?その為の薬。とにかく、それを飲めば、風邪を引いた状態じゃなくても、どっちにも変身できる。」

コナン「……………なんて言うか、虫のよすぎる効果だな。」

ガルツチ「まあね。」

コナン「それに、あんたらギャングなんだろ?」

あー、やっぱりそこは名探偵なんだねえ……………。まあ否定しません。設定上、そういう感じだし。

コナン「凶星のようだな。」

未来「今はギャングの仕事は無く、ただ買い物してただけだよ。」

ガルツチ「それに、殺害はしても、強盗はしてもだ。時折、其奴のボロがあるんだ。それを見つけ、処分するのが我らの役目さ。」

コナン「どうだか、殺人は許されない罪だ。強盗も同様だ。」

ガルツチ「……………否定はしない。重々承知の上さ。だからって、そう言うわけにはいかない。警察だって、間違った正義を持つてる奴もいる。その為なら、僕は誰かを守れる存在になりたいんだ。自分の身は、自分で守り、そして本当に救うべき人がいるなら、救う。」

コナン「……………」

ガルツチ「取引しよう、その飴とあの黒の組織のデータをやる。」

コナン「なっ!?!どうやって!?!」

ガルツチ「何もやってない一般人を平然と逮捕する警察を暗殺した後に、ジンとウオツカにあった。其奴らを気絶させて、指紋や虹彩、更には顔写真、そして唾液を取ったんだ。代わりに、僕らの行動は目を瞑って欲しい。」

コナン「は、破格すぎる！それじゃあお前達のメリットが——」  
ガルツチ「気にするな。僕だって、君を救いたい。頼む、目を瞑ってくれ。」

未来「僕からも、お願いできるかな？新一。」

兎に角僕と未来は、深くお辞儀をした。救って、黒ずくめの組織を止めたい気持ちも、分かってくれ！

コナン「……………分かったよ、なんて言うか……………お前らの目は澄んだ目をしてるしな。」

未来「ありがとう！」

ガルツチ「済まない。助かる。」

コナン「でもよ、舐めるのはいいが、どうやって戻るんだ？」

ガルツチ「そうだな……………、その時計貸して。」

コナン「？」

ガルツチ「……………此奴をこうして……………よし。これで煙りが出る。」

コナン「何をしたんだ？」

ガルツチ「戻るときは、今改造したその時計の煙りに隠れば、元

に戻る。ただ、人目の着かないところで頼むね。」

コナン「分かった。」

ガルツチ「服装は大人バージョンに戻るから、安心しろ。」

未来「何そのご都合主義。」

ガルツチ「気にするな。じゃあな、新一。」

そうして僕は、未来と一緒に、車に乗り、コナン姿の新一がいる公園を後にした。

ガルツチ「……………未来、やきもちするなよ。」

未来「バレてた?」

ガルツチ「心眼を使えばな。少しだけ、嫉妬が見えた。」

未来「だつてさ、元々は買い物に兼ねてデートだったんでしょ?」

ガルツチ「まあね……………。取り敢えず、帰ってからまた出掛けよつか。」

未来「……………そうだね。」

sideChange

—千夏アジト—

こいしside

ウフフフ、お兄ちゃん。私の盗聴器には気付かれてないようだね。

未来お兄ちゃんとデートかあ……………。

フラン「勿論こいしちゃん、私達もよね?」

オーフィス「我、あの2人のデート、気になる。」

バルボツサ「……………。」プルプル

イリヤ「ちよつと、動かないの!」

バルボツサ「済みません。」

楽しみだなあ、お兄ちゃん達のデート……………。

to be continued →

## 第9話 夜中のデート

―チリアドマウンテン―

ガルツチ side

未来「それにしても、早速山に登るなんて、ビックリしたな……………」  
ガルツチ「仕方ないよ、NOPLANなんだしさ。」

そう、計画なんて全くない。というよりは、元より気になってたことがあった。常々に思う、宙に浮いてるアレが気になっていたので。

ガルツチ「この辺りだな。」

未来「何かあるの？」

ガルツチ「あの辺りなんだけど……………」

未来「え？つてああ、あれつてUFOか。」

ガルツチ「あ、そういえばGTA Vやったことあるんだつたね。」

未来「うん、でも生で見れるなんて夢にも思ったよ。」

まあね、こういうのつてあんまりなかったし。でも、こつからの……………」

ガルツチ「こつからのロスサントスを眺めるのも良いかもしれないね。」

未来「確かに、綺麗だな。」

リアルゲームだからこそ、この景色を見れる世界なのかもな。母さんに感謝しないとね……………」

ガルツチ「……………」今思えば、ホントに幸せ者だな。自分の宿命が終わった瞬間、なんだか楽になった気分だよ。」

未来「ずっと、無の神での戦いで張り詰めていたんだよね。」

ガルツチ「うん、無の神を倒せば、そして星の勇者を阻む者、無の神の信者達を滅ぼせば、それでいいと思つてた自分が、馬鹿らしくなつてきたよ。その幸せを犠牲してでも、自分自身を犠牲にして手に入れたかった、みんなの幸せが見れたら、それでよかつたと思つてた。でも……………」君はそれを止めてくれた。僕自身を止めてくれた。」

言つてみれば、返しきれない恩をくれたしな。未来と出会えて、本当によかつた。本当に……………」



未来「ガルツチはさ、もしあの時……倒していたら、消えていたの？」

ガルツチ「恐らくな。でも、その前に消えていった世界を蘇らせた後に、この世を去り、そして地獄のところまで永遠の供養をしていたのかも知れない。そして、僕がいた事さえ、忘れさせていたのかもしれないね。」

未来「そっか、だったら止めて良かった。だって、僕は君のこと大好きだからね。」

ガルツチ「うん、僕もだよ。未来。たださ、あの時のツツコミしていい？」

未来「？」

ガルツチ「未来の声、どうなってるの？ラヴオスさえ吹っ飛ばせる声って、正直ビックリなんだけど。」

未来「え？吹っ飛んでた？」

ガルツチ「滅茶苦茶吹っ飛んでた。気付いていないだろうけど……。」

ホントにビックリしたよ!?!みんな一瞬だけど、ラヴオスが吹っ飛ばされるとこ目の当たりしたんだもん!

未来「……………マジで？」

ガルツチ「マジで。どうなってるのアレ？」

未来「……………あの時の精液といい、あの声音といい、ホントにビックリだらけなんだけど……………。どうなってるの僕の身体？」

ガルツチ「僕が訊きたいよ……………」

全王神『それは勿論——』

未来ガル「いや、全王神（母さん）には訊いてないから。」

全王神『お母さんションボリ。(´・ω・｀)』  
やめろ。

ガルツチ「……………んまあ、それでも僕は、未来のことが好きだよ。お陰で、心の奥底にも響いたし。」

未来「そっか……………」

ガルツチ「ホントに、有難う。未来。愛してる。」

未来「僕もだよ、ガルツチ……………」  
そしてそのまま、ロスサントスの夜景を背景に、僕は未来の唇を重  
ね――

『着メロ♪ Luv For U』

……………タイミングウウ!! 一体誰!?

ミスト『兄や、レイスちゃんからモニター電話が来てるよ。』

レイスウウウウ!!! 空気読めええええええええええ!!! というか良い  
ところで邪魔しやがってええええ!!!

ガルツチ「……………繋げて。」

レイス『はいはい! 久しぶり、ガルツチ! 元気だった?』

ガルツチ「ああ、お蔭様で頗る機嫌が悪いわ。どっかの誰かさんが、  
キスシーンを邪魔したんだからなあ?」

レイス『ウエ!? 誰と!? 男? 男の人!? 男性なの!?!』

ガルツチ「……………この顔見ても分からないのか? ( ^ ω ^ # )」

レイス『え? ホントに……………、ホントに男性との?』

当たり前だろ、レイス。よくもまあ邪魔をしてくれたもんだなあ?

未来「あの、誰ですか?」

レイス『あ、ガルツチの恋人ですか!? そうでしょ? そうですよね!?!』

未来「え、ええ……………」

レイス『リアルB Lキターー!!! \ ( ^ o ^ ) /』

ガルツチ「……………んで、なんか用? 手短に頼むよ、変なことなら  
叩くから。」

レイス『ご、ごめんごめん! 実はというとね、ロヴァスから連絡が  
あって伝えたいことがあるって言ったの。』

ガルツチ「伝えたいこと?」

レイス『何でも、未来と一緒にいるのならば、その者を幸せにしな  
さいって。』

ガルツチ「校長つたら……………、言われなくてもそのつもりだよ。両  
思いだし、お互い全力で守るって決めたからね。」

レイス『そつか、良かった。それで貴方が未来さん!?!』  
未来「え、ええ。」

レイス『初めまして!! 私はガルツチのセフレのシルフ・エメラルド・レイスって言います!!』

未来「え? セフレ?」

ガルツチ「お前、まだそんなん思ってたのか?」

未来「…………ガルツチ。」

ガルツチ「ん?」

未来「君の友人、個性的過ぎない? 特にこの人、滅茶苦茶暴走してるんだけど…………。」

レイス『そそそそそ、それで、みみみ、未来さん!! ががが、ガルツチとは、どう言う関係なんですか!?!』

未来「どうって、恋人関係だよね?」

ガルツチ「うんうん。」

レイス『まさかの恋人関係!?! ■■■■■■!?!?!?!?!』  
アレも、やつちやつてるんですか!?!』

ガルツチ「ナニを訊いてんだナニを…………。」

未来「まあ、何回もやつてるよね? 実際。」

レイス『ええええええええ!?! 攻めは!?! 攻めはどっち!?!』

ガルツチ「未来だよ。受けは僕担当。」

レイス『やつぱりガルツチは、受けなのね!!! あー、私のBL妄想が満たされていくウウウウ……………!』

……………やばいな、この腐女子。もう腐ノ女神だな……………。

ガルツチ「あのさ、伝えた事を伝えたのなら良いけど、これ以上BL話になるなら切るね?」

レイス『いいよ! 私今からBL同人誌を作るから!! 未来ガルのBL同人誌を、私が先駆けを……………』

ガルツチ「いや、もう既に出来てるよ?」

レイス『え?』

ガルツチ「簪って人が作ったBL同人誌なだけで……………。」  
レイス『……………あらま。んじゃあ私が広めなくては……………。』

!!!

ガルツチ「ちよ、おま——」

レイス『じゃあねえええ!!!』

『プツツ……………。』

……………もう、ブレーキすらないんじゃないの？

未来「君って、色々大変だね……………。」

ガルツチ「ホントに、どうしてあんなった……………。」

ホントに、レイスはなんであんなったのかなあ……………。」

ガルツチ「もうさ、帰ったら好きなだけ犯して。というか、甘えさせ……………。」

未来「うん、君が満足するまで、いっぱい出してあげるから。」

それから、未来と僕が帰った後、部屋に入って滅茶苦茶セックスしまくった。

t o b e c o n t i n u e d ⇨

## 第10話 星空英竜

—???

風龍「なあデイルーラー、別に僕が居なくてもいいんじゃないの?」  
士「そう言うな、お前だつて楽しんで貰わねばならねえしな。」  
だからって、別に僕を呼ばなくても良いんじゃないやねえの!? 一応戦闘は出来るけど!

イリア「私まで来ちゃったけど…………。つていうか、作者がこの世界に居て大丈夫なの?」

士「安心しろ、作者補正があるんだからな。メアリーは気にするな。」

風龍「僕としては気になるわ! つていうか、メタイ話しはやめろ!!!」  
全く、此奴はフリーダムなんだから…………。

葵連「大変だな、風龍。」

風龍「お前もそう思つてんなら、何とかしろ! ファイフティーン!!」  
ちとら、『異次元の人間』なんだよ!」

葵連「そうは言われてもねえ…………。」

風龍「…………何でこうなるんかな。はあ…………。」

イリア「まあまあ、私も手伝うわ。喪失と忘却の能力でね。」

風龍「すまん、恩に着るよ。」

—ロスサントス—

ガルツチ side

全王神『つて言うわけで、『エデン』つていう言わば君達の同盟になるから、宜しくね。』

宜しくねつて言われても、具体的には、名前を言ってくれないか?

全王神『えーつと、リーダーが『星空英竜』、幹部は『五河士織』。『衛宮藍』。『夜神小夜』。この4人よ。』

おい待った、衛宮藍? 衛宮士郎と関係あるのか?

全王神『うーん、それは君次第かな。でも偶に衝突するかもね。』

ガルツチ「……………気難しいな、それ。」

全王神『まあ、伝えるだけ伝えたからね。それじゃ。』

はあ、しかし転生者か……………。それも怪獣娘……………。いずれ出会うと予想はしていたけど、このタイミングでかあ……………。ん？

「よう嬢ちゃん、俺と一緒に良いことしないかい？」

???「悪いけど、私は急いでの……………」

「おいおい、つれないねえ。良いじゃねえか。」

???「触らないで下さい！」

「ッ!?このガキ!!」

やばっ、やらせるか!

ガルツチ「オラア!!」

「ブヘエ!」

その女の子にナンパした男は、僕の飛び膝蹴りにより、途方の彼方まで吹っ飛ばされた。

ガルツチ「……………あちゃー、焦ったとは言え、やり過ぎたな。」

???「……………あの、貴方は？」

ガルツチ「通りすがりの英霊使いさ。君は？」

???「星空英竜、『エデン』のリーダーだ。」

……………え？

ガルツチ「英竜って、もしかして……………母さんが言ってた、あの？」

英竜「母さん？」

ガルツチ「あー、ごめん。母さんってのは全王神。つまり僕、その人の息子なんだ。」

英竜「え”？息子？」

ガルツチ「うん。」

アレ？滅茶苦茶固まってるんだけど、ちよつと？

英竜「……………あの。」

ガルツチ「うん？」

英竜「ちよつとお話しませんか？私のアジトで。」

ガルツチ「ウェイ!?」

英竜「そうと決まれば!!」

おいおい、引つ張るなってちよつとおおおおおおお!!?!?

t o b e c o n t i n u e d  
⇒

## 第1話 エデン

—エデンのアジト—

ガルツチ side

英竜「着いたよ、ここが私の……って大丈夫かい？」

ガルツチ「誰のせいだと思ってるの？」

あー、酷い目にあつたよ。何が一体どうしたら、こうなるんだよ。頭痛え……………。

そんなこんなで、僕は英竜という少女に（無理矢理）連れてこられた場所が、誰も使っていない工場だった。その中に入り、暫くすると、3人の少女がいた。

ああ、なんで僕が出会うのは女性ばかりなのだろうか……………？

???「あ、英竜。お帰り。って、その人は？」

英竜「みんな訊いて！この人、全王神の息子だって!!」

3人「ええええええええええ!!」

ガルツチ「あの……………、普通に接してくれませんか？というか母さん、どうしてこうなった。」

全王神『えへへへ、私は別に何もしてないよ。』

ガルツチ「なんでさ……………」

???「あの、今誰と話してたのですか？」

ガルツチ「正しくは念話。んで話してたのは、全王神。つまり僕の母。」

???「嘘オオオ!!」

???「息子がいるなんて、知らなかった……………」

ガルツチ「そりゃ、こっちの事情つてのがあつたからな……………と。りあえず、改めて自己紹介させて貰う。その前に……………」

『トランス・オン  
投影、開始』

???「投影魔術!」

さすが転生者って事か……………。とりあえず、僕は投影した椅子に座り込んだ。

ガルツチ「先ずは初めまして、僕はラーク・バスター・ガルツチ。こ



の世界に来る前は、無の神ことラヴオスと戦い、全次元を救った大英雄になった者だ。」

??? 「無の神？」

ガルツチ「うん、知らないのも無理は無いからね。今はもういなくなってるし、僕が住んでた世界も伝わってると思うんだ。」

英竜「待って、全王神の息子なのに、何故一緒じゃないの？」

ガルツチ「母さんに殺されたから。理由は聞かないであげてね。」

??? 「全王神様に殺されたって、ホントに何をしたのですか!？」

ガルツチ「だから訊くなって……………。それから、転生に転生して、今の姿になった。でもさ、殺されて良かったって思えるところがあるんだ。」

??? 「どういう事？」

ガルツチ「自分の幸せを、漸く見つけたことかな？元々真なる前世の僕は、誰も見てくれる人、存在を認めてくれる人は、居なかったんだ。でも転生して、発想を逆転した。いつそ死んで、この世から消え去ればいいのってね。」

英竜「なんて言うか、大変だったのね……………」

ガルツチ「まあね、彼らのお陰で、今があることだし。それに、自分の本当の前世と訣別したんだ。過去は過去で、今を生きるって決めたから。」

話を終えると、ぐだ子みたいな人が自己紹介を始めた。

??? 「そうだったのですね……………。あ、私は衛宮藍。実は前に別の世界で転生人生を送っていた。特典は、『Fateシリーズの全宝具』『どんな英霊の力も纏える体』『仮面ライダーアギトの無限進化能力』。」

ガルツチ「fateシリーズの全宝具って……………、マジか。って  
いうか無限進化って……………」

イフ「私のような能力だな。」

英竜「誰!？」

??? 「っていうか、いつからそこに!？」

そういえば、イフも無限進化持ってたね。

ガルツチ「あー、この人は完全生命体イフ。元々は、ある人のスタンドだったけど、今は僕のスタンドになってるんだ。」

???「其奴がスタンドって、強すぎるだろ。」

ガルツチ「まあね。」

英竜「それで、その擬人化したイフが貴方のスタンド?」

ガルツチ「いや、この右眼がスタンド。」

藍「どういう事ですか?」

ガルツチ「元々は両眼とも蒼だったんだけど、ある剣士の戦いによって失明して、今は義眼として使ってるんだ。んで、イフがこっちに来たことにより、スタンドに変わった。いや正しくは進化だな。」

???「進化って事は、原型が?」

ガルツチ「うん、元々は『ハミット隠者の紫』の鎖ババブルージョンだったんだ。名前は『THE VISION』。能力は相手のスタンドをコピーして、そのスタンドを自分でも使えるようにする。」

3人「何それチート!」

ガルツチ「つて、脱線したな……………。この話は後にして、それより、藍だっけ?」

藍「はい。」

ガルツチ「f a t eシリーズの全宝具っていう能力だけど、僕の宝具と似てない?」

藍「え?」

僕はすかさず、月のマークが描かれた白銀のカードケースを取り出し、皆に見せた。

藍「それは?」

ガルツチ「クラスカードケース、元英霊カードケースだけど、この中にf a t eシリーズだけじゃなく、ジョジョ、仮面ライダーシリーズ、ファイナルファンタジーシリーズ等の英霊カードが、この中に入ってるんだ。」

藍「何それ!?そっちの方チートでしょ!」

ガルツチ「それだけじゃない。プリズマ☆イリヤ式だけど、宝具限定ならインクルード限定召喚、自身の体を媒体にして一時的に英霊化するなら

インストリアル  
夢幻召喚、そして、他の英霊の力を融合して能力のパワーアップでき、  
特定の英霊と融合すると宝具自体もパワーアップするのが  
ユナイトインストリアル  
融合夢幻召喚が使えるんだ。」

藍「さすが全王神の息子……………、何でもありだね。」

イフ「まあ、これ自体が宝具つてだけで、後は擬似宝具を使ってる  
だけだしな。」

まあね。

藍「え？擬似宝具？」

ガルツチ「言ってみれば、このカード使わなくても、擬似宝具つて  
言う形で、発動できるんだ。代わりに威力が下がるが、連発して使え  
るからね。」

藍「すごいなあ……………」

凄く感心していると、次は青と赤のオツドアイ。青空のような鮮や  
かで美しい腰に届く程長い髪をした少女が自己紹介してきた。

???「それじゃあ、次は私ね。私は、夜神小夜と言います。前世が貧  
しかった為、特典はお金持ちになる為のものです。『黄金創造』とい  
う、黄金を好きだけ生み出す能力です。そして、『ONE PIECE  
E FILM GOLD』の『ゴルゴルの実』を食べました。因みに  
覚醒してますよ。次に、『無限成長』。そして最後に、裕福でいて弱者  
に優しい家庭を望みました。」

ガルツチ「悪魔の実を食べたって事は、弱点は……………」

夜神「海が弱点ですね。それが何か？」

ガルツチ「いやなに、僕だったらその弱点を消せると思うんだ。」

英竜「フア!？」

???「弱点の海を!？」

ガルツチ「まあね。一時的か永続的なんだが、それを無効化出来る  
んだ。」

藍「凄くないですか!?全王神の息子さん、万能すぎませんか!？」

ガルツチ「万能な訳ないでしょ。こちとら前は、薬草学で単位落と  
されてやめさせられたんだから……………」

ホントにあの頃は失敗したよ畜生め……………」

ガルツチ「まあ今は、必死こいて勉強したし、どうになったがな。」  
夜神「それで、海の弱点を消せるのはホントですか!？」

ガルツチ「うん、実際ルフィにも出来たしね。」

夜神「あのルフィにですか!？」

ガルツチ「うん。今はまだ準備出来てないから、すぐには出来ないけどね。」

夜神「ええええ………。」

ガルツチ「ごめん、ホントに。それで、そっちは？」

青く長い海のような髪に、凜々しい瞳をしている人に話し掛けた。

???「私の名前は五河士織。特典は、『デート・ア・ライブの精霊の力』  
『五河士織の姿』『デート・ア・ライブの精霊達』『無限成長』の四つだよ。」

ガルツチ「無限成長って、無限進化と違うのかな？」

イフ「いや、似てはいるが少し違う。それより、デート・ア・ライブの精霊の力って事は。」

士織「うん、文字通りの意味だよ。」

ケテル『なるほど、僕達みたいな力を持つてるって訳だね。』

バルカル『反転があるかは疑問だがな。』

4人「『剣が喋った!?!?!』」

ガルツチ「おいケテル、バルカル。勝手に出て来るな。あと念話だから。」

ケテル『驚かせて済まない。僕はケテル。我がマスターが持つ剣、  
生命の樹の剣セフィロトソードに宿る精霊だ。んでこのまっくろくろすけ的剣は――』

バルカル『おいケテル、馬鹿にしてるのか?』

ケテル『おやおや、沸点低いね。カルシウム採ってる?』

バルカル『黙れ、この女たらし!!』

ケテル『何を!!』

はあ、また此か。

士織「あの、その黒い剣は?」

ガルツチ「邪悪の樹の剣クリフォートソード。んでケテルと喧嘩してんのはバルカル、

悪魔さ。両方とも、デート・ア・ライブの力を持っていて、その進化版もある。」

英竜「フア!？」

藍「進化版!？」

ガルツチ「うん、彼ほどではないけどね。」

士織「嘘ーん……………、反転の力を持つてるとか……………」

英竜「つていうか、何であんなに喧嘩するの?もう打ち合いまで始め掛かっているけど。」

ガルツチ「ちよつと失礼。おいお前ら、いい加減にしないと、その刃諸共折るぞ!」

バルケル『すんません、勘弁してくれませんか?』

ガルツチ「全く、此奴らは……………。こう言えば、割と収まるんだ。」

士織「脅しで収まるって、貴方それでいいの?」

こうでもしないと煩いし……………。

ガルツチ「それで、英竜さんはどんな特典を?」

英竜「私は、『ウルトラマンシリーズの全怪獣の力を纏う』『ウルトラ怪獣を一度に二体まで召喚』『全てのウルトラマンの力を持つ』。」

はいいいいいい!?!?

ガルツチ「おい母さん!!なんだそのチート!!」

全王神『えー、!?!?って英竜ちゃんが決めてつていうから滅茶苦茶チートにしてみたんだけど?』

ガルツチ「うわー……………、こーもやばい力を持つてるとか、モンスターモード使っても勝てるのか分かんねえ……………。いや神話礼装でも勝てるか分かんないわ。」

藍「ガルツチさん、神話礼装なんてあるんですか?」

ガルツチ「使おうと思えば使えるけど、アレはマジでやばいときにしか使わない奴なんだ。」

英竜「それで、ガルツチの転生特典とかは?」

ガルツチ「いやない。」

4人「「「え?」」」

ガルツチ「いや、あるっちゃあるけど、あくまでサーヴァントになっ

たときだな。」

英竜「サーヴァントに？」

ガルツチ「うん。オリジナルスタンドを3つ同時に使えると言うこと。だけど今は二つだな。此奴は進化したし。」

士織「んじやあ、『THE VISION』ってスタンドは、今は？」  
ガルツチ「イフと融合して、この義眼がスタンドになった。名前が『PERFECT IF THE VISION』だ。能力はイフと一緒にだな。代わりに進化はないけど。」

英竜「そうなのか……………」

ガルツチ「後は波紋が使えるようにする。太陽の波紋だけじゃなく、月の波紋っていうDIOが言う気化冷凍法の波紋バージョンを持つてる。」

藍「ふえええ……………。んじやあ、もう一つのスタンドは？」

ガルツチ「進化しちゃったけど、見た目はスタープラチナに翼と鎧、そして左胸には月の刻印がある奴なんだ。名前は『ムーンライト・アウターヘル』。能力は終焉、あらゆる能力または効果を終わらせる力を持つてる。要は強制終了だな。」

まあ、強制終了なのは確かだしな。強力だけど。

英竜「てつきり凄い能力を持つてると思ってたんだけど……………」

ガルツチ「まあ母さんからは不老不死の呪いをくれたけどね。今はもう二度と解けないけど。」

英竜「ちよつと、悲しすぎでしょ？」

ガルツチ「まあ、息子の頃の力を取り戻したから、気にしてないさ。後はノアからノアの能力の一部と、怪獣達、皆の力をくれたんだ。まあウルトラマン全員だろうけど。」

英竜「ノアと出会ったの!？」

ガルツチ「ぶつちやけ言うと、アレは勝てない。つていうか勝てる気がしない。」

夜神「そこまで言わせるノアって凄い……………」

ガルツチ「後は僕のスレータスを見せておくよ。これ以上の説明が

未来「あれ？ガルツチ、こんなところで何してるの？」  
ガルツチ「あ、未来。」

オーフィス「というより、何故ここに？」

ガルツチ「英竜に連れてこられたの。」

藍「あの、あの人は？」

ガルツチ「ああ、ゴスロリ姿なのはオーフィス。その隣は、転生者  
かつ僕の恋人、門矢未来。」

4人「「「こ、こ、こ、こ恋人オオオオオオオオ「「「  
!?!?!?!?!

おいマジでやめろ！耳が壊れる!?

英竜「って、んじやあ全王神様が言ってた同盟組織って……………」

ガルツチ「そゆこと。あと耳が……………」

これで3度目だよ……………、鼓膜が破れないって凄すぎるだろ……………」

ガルツチ「因みに言うが、ああ見えて男の娘だから。」

英竜「（。D。）ポカーン」

藍「嘘、え？恋人？」

ガルツチ「まあ、子供いるが。」

それを言った瞬間、やばって思ったときには、既に遅かった……………」





## 第12話 同盟と襲撃

―エデンアジト―

ガルツチ side

英竜「あの、ガルツチ？大丈夫か？」

ガルツチ「いや、大丈夫じゃない……………少し、目眩がする……………」  
そりゃあんな超音波を2度も食らったら、僕でもやられるわ。しかし、1度と2度は未来、3度、4度はこの3人の超音波って……………、あう……………」

『ピョコッ。』

藍「!？」

未来「が、ガルツチ？み、耳が……………。っていうか尻尾!？」

ガルツチ「んむ？ああ、此か。どういう訳か、勝手にビーストモードになるんだよ。自分から発動させればジンオウガに、んでこっちは謎なんだが、尻尾は猫なんだけど、実際はジンオウガの尻尾だし、んでこの耳はプクリポっていう種族の耳が生えるんだよ。差し詰め、キヤットモードかな……………」

英竜「なんて言うか、見た目がアレなのか、可愛く見えてしまう。」

4人「「「確かに。」」」

確かにとか言うな、これでも恥ずかしいんだよ？フラン達以外に見せるの、初めてなんだから……………」

ガルツチ「あんまり尻尾とか耳とか弄るなよ？敏感なんだから……………」

オーフィス「そう言われても……………」

夜神「どう見ても……………」

英竜「弄って欲しいって……………」

藍「誘いが見えて仕方が無い……………」

士織「というよりは……………」

未来「誘ってるようにしか見えない。」

ガルツチ「なんでさ!?!誘い受けじゃないんだから、マジでやめて!?!」  
一応心眼で皆の心見たけど、めっちゃ欲望丸出しなんだけど!?!

何で僕、キヤットモードになるとこうなるのかな？そんなに欲情してしまうほどの可愛らしさとかあんの？っていうかそもそも、こうなったのって玉藻のせいだしな。

ガルツチ「つてあんたら、今日は僕を愛でるといいうかペロペロする為に集まったんじゃないだろ？」

藍「ド直球にペロペロとか言い出したね……………」

英竜「いや、ガルツチの言うとおりだ。彼を弄るのは、これを終わらせてからだな。」

ガルツチ「弄る前提なの!?ちよつとアンタ、何とか言つて!？」

「悪いが、無理だ。」

薄情者オオオオオオオオオオオオオオオオオ

!!!!!!

そんなこんなで、現在は情報共有、そして交渉をしていると、ふと目にした資料が見えた。

ガルツチ「なあ、その資料は？」

英竜「此か。我々の組織の中で敵視している奴らだ。」

ガルツチ「ふーん……………」

僕はすぐにその資料を取り、見始めた。まず最初に目にしたのは、財団X。仮面ライダーWに登場する闇の組織とも呼ばれている。

メンバーはみな白いスーツを身につけており、一様に無表情。

出資相手からの技術を使い、ドーパントなどの怪人に変身できる者が多数いるようで、その組織に魅了して合併を求める企業も多い。

どうやらガイアメモリ以外にも、セルメダル、ゾディアーツスイッチ等々開発をしているようで、中には魔法関連もあるらしく、更にはあのユグドラシル・コーポレーションの企業もあるのか、ロックシードも作っているようだ。

しかも驚いたことに、あのAPT X 4869、つまり黒ずくめの組織が生み出した薬すらも販売しているらしい。

どうやら英竜達は、とんでもない奴らを敵視しているようだ。というか、何じゃこりや!?怪人のバーゲンセールじゃあねえか!!

っていうか、財団Xって何者!?

ガルツチ「なるほど、敵視するのも分かるかも知れん。」

未来「それは？」

ガルツチ「英竜達が敵視する組織、財団Xに関する情報だ。それにしても、とんでもない組織だな……………」

英竜「元々は、我々の手で壊滅させたいところだが、意外としぶとくてね。」

ガルツチ「しぶとすぎだろ……………、この組織。っていうか巨大組織じゃん。黒の組織も居るんだろ？」

藍「うん、確かにね。」

未来「実は、ガルツチは1度その組織に絡まれた事があってね。」  
4人「!？」

ガルツチ「気絶だけじゃなく、指紋等採ったこともあるんだ。」

英竜「ええええ……………、凄すぎでしょ……………」

ガルツチ「でも資料は、既にコナンという少年に渡してある。今頃警察に渡してると思う。」

夜神「貴方、チート過ぎない？絶対転生特典持つてるでしょ？」

ガルツチ「全部努力して得た能力だ。後天的なチートなのかもな、これ。」

藍「もしそうだとしたら、相当凄い努力家かも……………」

実際、仲間や家族を守るために、色々と頑張ってきたからねえ……………。  
お陰で念能力は特質系と具現化系、そして放出系の技を覚えたしね……………。

英竜「……………出来れば、全王神の息子とは敵対したくないな。」

ガルツチ「いやいや、英竜達と敵対したくないのは、僕らも一緒です。」

未来「そうだね。そこで交渉したいので———」  
と、そのときだった。

『ドゴオオオオッ!!!』

「何だ?！」

いきなりの爆発音が聞こえ、皆は立ち上がり、すぐさまアジトの外に向かった。そこには……………。

英竜「くつ、財団Xの刺客か。でも、全部雑魚ばかりだ。」

藍「しかも大軍で来てるねえ。」

夜神「まあ、私達の敵じゃないのは確かだな。」

士織「まあ、ついでだから、未来達の実力、見せて貰うチャンスかもね。」

オーフィス「我、負けない!」

未来「そうだね。ガルツチ、準備いい?」

ガルツチ「ああ、勿論だと——」

言いかけの時に、何かのカードが飛んでくると同時に、今度は光線銃が現れた。

未来「それって、デイエンドドライバー?」

ガルツチ「……………何で急に? いや、それよりは此奴らと戦わないと。」

未来「んじゃあ、一緒に言う?」

ガルツチ「いいよ。」

僕はすぐさま、デイエンドのカードを挿入した。

未来ガル「変身!!」

『INFINITE RIDE <INFINITY DECADE>  
!』

『ANOTHER INFINITY RIDE <ANOTHER

INFINITY DIEND<!』

すると、僕の姿はディエンドの姿へと変わった。まさか海東大樹、此奴を渡しに来たわけじゃ………、いやそんなことはない。兎に角、やるべき事はやろう。

未来「ケニーさん、貴方は下がってて。」

「分かった。」

ガルツチ「そんじや、行くか!!僕の新たな力を見せるために!!」

未来「うん!行くよ、皆!」

t o b e c o n t i n u e d  
→

第13話 ANOTHER INFINITY D  
I E N D

—エデンアジト 外—

ガルツチ side

イフ「よもや、お前もその力を手にする時がくるとはな。」

本当に、それだな！

『ANOTHER INFINITY ATTACK RIDE へB  
LAST LASER へ!!』

ガルツチ「食らえ!!」

トリガーを引くと同時に、弾が放たれ、当たった敵からレーザーが放たれ、周りに居た敵は倒れていった。

『ANOTHER INFINITY ATTACK RIDE へT  
RACE ON へ!!』

今度はダイエンドドライバーを投影して2丁となって、そのまま敵に撃ちまくった。

未来「凄いな、それ。」

ガルツチ「皆、伏せてけよ!」

『FINAL ANOTHER INFINITY ATTACK  
RIDE へIsh tar Phantasm へ!!』

ガルツチ「さあ、逃げたい奴は見逃してやろう。立ち向かうのならば、この宝具に耐えてみるがいい!!」

そんなことを言った途端、恐怖に震え上がったのか、逃げ出す奴が多く現れた。が、それを逃すまいと言わんばかりに、英竜達は何かしらで、逃げた奴らを閉じこめた。

エグいことしてくれたな、おい。まあ良いか。

ガルツチ「行くぜ! 『山脈震撼す明星の薪』!!」

放った瞬間、閃光が放たれ、閉じこめた敵達に当たり、大爆発を引き起こし、敵すら見当たらない程消し飛ばしていった。

だが、それでも残っていたらしく、後の残り物は英竜達や未来と

オーフィスが片付けていった。

一方で僕は、別の方を向くと、そこにはデイエンドドライバーの持ち主である、海東大樹が立っていた。

ガルツチ「……………何の真似だ、海東。」

海東「ああ、それはプレゼントさ。」

ガルツチ「プレゼント?」

海東「そう、士が持ってたデイケイドの力は、未来に渡したんだろ? だったら、僕にも何かあげようかと思って、デイエンドドライバーとそのカードをあげたんだ。」

ガルツチ「……………って事は、アンタもディーラーと似た力を?」

海東「そう言うことだ。僕はもう、仮面ライダーデイエンドじゃない。まあ、士のディーラーではないが……………、敢えて言うなら……………」

すると、海東が持つてる首飾りから、一つのカードが現れた。

『MASKED RIDER DEMISE』

そうカードに書かれていた。そして、そのデイマイズであろうライダーの絵も描かれてあった。黄色で、デイエンドとは違い、横向きに円盤のような物が三つも付いている。なんだか刺さっているようにも見える。というよりは、どうやら、あのディーラーと似たようなものようだ。

海東「変身!!」

海東は、胸元の心臓部にカードを翳す瞬間、あの声が聞こえた。

『KAMEN RIDE』

海東を囲むように三つの輪が出現し、虹色に輝いた。しかし、それは決して眩しくなく、寧ろずっと見ていたい気分だった。

そして、胸にカードがくつつく瞬間……………。

『DEMISE!!』

あのカードと同じ姿となった。

胸の辺りには、やはり海東らしく宝箱のような紋章があり、その歯車の部分とカードが一体化している。そして、黄色のデイエンドに似

た全身鎧を身に纏った。

ガルツチ「終焉を意味するのに、何で宝箱なんだよ。」

海東「僕と言ったら、これだろ? とりあえず、手伝ってあげるね。」

ガルツチ「まあ、宜しく頼む。海東。」

sideChange

未来side

驚いた、まさかガルツチがディエンドの力を持つなんて。しかも、隣にいるのって、元ディエンドの海東大樹じゃないか!

英竜「あの2人、相対するはずなのに、的確に動いてるね。」

藍「ホントにそれよ!」

っていうか、僕の時と違わないか!? 僕なんか対決して負けたのに、ガルツチは海東と共闘して戦うなんて……………。

うー、なんか悔しい……………。

オーフィス「あの2人、楽しそうだな。土の時、大違いだ。」

未来「あつちは折檻だったからね……………。いいなあ……………。」  
でも、ホントにいいよねえ……………。

ガルツチ「背中は預ける、海東。」

海東「ああ、任せたまえ!」

しかも同じ姿で2丁……………、何で僕の時とは違うの?

ねえ……………。

『FINAL ANOTHER INFINITY ATTACK

RIDE<DIMENSION BURST SHOOT<!!』

『FINAL ATTACK RIDER<DEDEDEDEMISE<

!!!』

海ガル「いつけえええええええ!!!」

そしてそのまま、財団Xの刺客全員を倒し終えた。

sideChange



ガルツチ side

ガルツチ「ありがとう、海東。」

海東「気にするな。いずれにせよ、そのお宝は君の物だ。そして未来！」

未来「？」

海東「士の事は許してやってくれ！元々素直な奴じゃないからな！それと、これからもガルツチと仲良くやってくれ！」

そしてそのまま、海東はクールに去って行った。

ガルツチ「……………全く、未来がデイケイドで、僕がデイエンドつて。」

もうこれ、母さん狙ってるだろ。いつそ息子にも、仮面ライダーデイエンドにさせたいなあって、思ってただろうなあ……………。

全王神『何故バレた!?!』

やつぱりか！畜生！

士『まあこれで、ガルツチもデイエンドの力を手に入れたって事だな。いやー、未来の兄として鼻が高いよ。』

やかましい、お前の場合、未来を虐めただけだろ。そもそも、出会って早々折檻するなよ折檻！

士『おいおい、そりやあないだろ。あれは俺なりの———』  
黙らっしやい。いい加減にしないと、お前のところに繋げて、笑いの

ツボ押しまくるぞ!!

士『ちよ、洒落にならねえからやめろ!』

しかも未来の目の前でね。

士『俺の醜態をさらさせる気満々かよ!?!』

勿論です、これでも愉悦部の部員ですから。いやー、赤面の士の顔、見てみたいなあ。(愉悦顔)

未来「ガルツチ？何でその顔に？」

ガルツチ「いやなに、士の醜態を未来に見せたら、良いネタになるんじゃないかなあってね。」

藍「うわあ……………、君ギルガメッシュに感化されてるんじゃないの？」

ガルツチ「伊達にギルガメツシユのマスターをやったわけじゃないからね。愉悦部も入ってるし。」

藍「愉悦部入ってたの!？」

夜神「凄いわ、あのギルガメツシユをサーヴァントとして扱えたなんて、貴方凄いわ。」

英竜「まあ、とりあえず交渉の事だけど、此方もOKよ。貴方方の力も見させて貰ったし、それに、全王神様の息子にも出会えたしね。」  
あらま、交渉成立しちやつたよ。僕が居たお陰なのかな? いやまあ良いとして、とりあえず一件落着だ——

オーフィス「それじゃあ、ガルツチ。襲おう。」

5人「**「「「賛成!!」」」**」

あるえ〜? (´・ω・`)

つて、これのこと忘れてた!!

ガルツチ「逃げるんだよオ！」

英竜「逃がさないわよ!ブルトン！」

ガルツチ「セコオオ!『DIMENSION BREAK』!」

未来「ブルトン、皆をガルツチの目の前に繋いで!!」

『ブルブル〜!』

おいおいおい!!!目の前はないだろ!?!ボックスステップして、逃げる!!

夜神「あ、ボックスステップした!!」

オーフィス「逃がさん!」

何でこうなるんだよ!?

英竜「いいから、大人しく捕まって、弄られなさい!!」

ガルツチ「誰がなるか!?!弄られたくないんだけど!?!」

つとそこで、簪達も着いてきたのだが……………。

簪「未来、私達も手伝うわ!」

ガルツチ「おいおいおいおい!!!何でそうなの!!」

未来「よーし! ガルツチを捕まえ

ろオオオオオオオオオオオオオオ!!」

畜生オオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!味方なんていなかった

たアアアアアア!!!

!!!!

士『……………まあ、ドンマイ。』

おのれ、デイルーラー!!マジで笑いのツボ押ししてやるから、覚悟し  
とけよ!!!

全王神『ガルツチファイター。』

いっぱーつ!!って、そんなことをしてる場合じゃなかった!兎に角  
逃げ――

未来「捕まえた。」

あ、オワタ。＼( ^o^ )／

英竜「さあて、いっばい弄ってあげるね。」

ガルツチ「いやちよつと、頼みますから僕はそんなじゃないから、  
うん。っていうか、今の皆、怖いよ?ねえ、とりあえず落ち着こう?」  
本音「大丈夫、恐くない。ちよつと耳や尻尾をペロペロするだけだ  
から。」

そのちよつとが怖いんだけど!?ねえ!?

こいし「ペエ〜ロツペロオウ〜♡( ^ω^ )

ペエ〜ロツペロオウ〜♡( ^ω^ )

おにいっちやああんつをつペエ〜ロツペロオオオ〜♡( ^ω^ )」  
ガルツチ「あの、いやホントに、勘弁してくんない?( ^ω^ ;)」  
イリヤ「心配しなくてもいいよ、お兄ちゃん。ただ快樂という名の  
天国に連れて行くだけだから。」

ガルツチ「いやいやいやいや!!!マジで、ちよ、おい!マジでなめつ  
……………っ!耳あ、ダメだつて……………っ!」

全王神『うちの息子が、私が転生させた人達に、弄られるの巻。』

そう言うこと言うんじゃない!!って、未来っ!そこあ、首筋っ!  
簪っ、やめっ、そこあ、耳の裏だつてっ!



## 第14話 暗殺稼業2

―ロスサントス とあるビル― 月夜ノ刻―

ガルツチ side

『エデン』との正式な同盟が終わって、しばらくたったある日、千夏からまた依頼が来た。今度は麻薬の密売阻止に加え、ターゲット2人を仕留めることだった。

ガルツチ「まあ、そのまま麻薬を盗んで、薬に変えるつても良いかもしれないな。殆ど麻薬のイメージだけど、魔法薬に変えれば、陶酔薬とかにもなれるしな。後は、原料に戻して、麻の糸を作って服とか作って売るのもありかも知れないな。」

まあ、こういうのはマルフォイ専門だな。いや、あつちは変な服とか作りそうだな。それにしても……………、まだちよつと『ビクンツ！』つてするな……………。

いやまあ、仕方ないか。あんな長時間も弄られ、イカされ続けたらこうなるわな……………。なんなの皆、耳と尻尾以外に、首筋やら耳たぶとか、挙げ句の果てには胸も弄るつて。

とりあえず、リサ達が運んで色々してくれたおかげで助かったけど、ホントにキヤットモードはろくな事しか起こらないな……………。

全王神『大丈夫？アラヤ君に任せたら？』

ガルツチ「いや、彼奴は子供と言えど、容赦はしないからな。それに、一度スナイパーで撃たせたけど、100発中20発外してる。8割で充分かもしれないが、あの時の例もあるし。」

士『お前、子供に暗殺を教え込むつて……………。』

ガルツチ「いやいや、自分から教えてほしいつて頼み込んだんだ。しかも、弱音を吐かず、淡々と技術を高めていったし。」

士『おいおい……………、子供が暗殺者にさせていいのか？』

ガルツチ「何、愛情は注いでるよ。あの子を育ててるかぎり、僕のようににはならないさ。」

そう、あの親父が馬鹿なことしたからこそ、性格は歪みきつて、壊れてしまった。実体験してるからこそ、なつて欲しくないんだ。誰か

を守っても、自分を大切にする。そんな子に育てて欲しい。

ミスト『兄や、ターゲット2人見つけたよ。』

ガルツチ「OK、盗聴器起動。」

さて、仕事始めるか。

『おい、例の物は持ってきただろうな。』

『ああ、勿論だ。だが、念のために確認したい。お前が持ってきた、あれはあるか?』

『フツ、安心しろ。人数分は、ちゃんとする。この大金と……………  
『ロックシード』、そして……………『ガイアメモリ』だ。』

おいおい、早速やばい取引してんじやあねえか。『ロックシード』と、『ガイアメモリ』って、マジかよ。

『その代わり、その大量のヤクは、俺らが貰う。そして、この全部は、お前達の物だ。』

『だな、ホント。財団Xがここまで企業を伸ばしてくれて正解だったなあ。』

『違う。』

『よし、早速だから此奴を渡す。代わりに……………』

『分かっている。此奴はお前の物だ。好き勝手に暴れるがいい。』

ここだツ!!

ガルツチ「ショット!!」

『交渉成……………』

『なっ!?! どうし……………』

交渉成立と言い掛けたところで、ターゲット2人は脳天貫かれ、そこから剣が吹き出し、串刺しの状態になった。それを見た他の仲間  
は、何があつたのか分からず、急いで確認をした。

『ボス!! 如何したのですか!?!』

『剣が!?! なつ、なんだこれは!?!』

『ど、どうしやす?』

『と、兎に角……。あれは——』

ガルツチ「壊れた幻想。」  
ブローケン・ファンタズム

そう唱えた瞬間、取引先の場所ごと爆発し、建物全体崩壊した。

ガルツチ「ふう、とりあえず仕事は終わった。んで、藍。そっちは?」

藍「約束通り、大金と『ロクシード』、そして『ガイアメモリ』は盗んだわ。」

ガルツチ「仕事が早いな。」

藍「まあね、流石にあの爆発は焦ったけど……。」

ガルツチ「君だからこそだ。んじゃ、それらはエデンの物って事で、

僕は——」

藍「え? もう帰るの?」

ガルツチ「うん、仕事が終わったし、僕には3人の妻や2人の子供(今連れてる子供)もいるしね。」

藍「あー、そう言えば結婚しちやってたか。でも、未来と恋人って事は、やっぱりアレ、してるの?」

ガルツチ「してる。というか、実際子供出来てるし。」

藍「あ、あの鳳凰ちゃんとアラヤ君って、未来と君の子だったわね。って、貴方どういう身体してるの!?! 男の娘だよね!?! 子供産むなんて、有り得ないよね!?!」

ガルツチ「確かに、『男』の姿だったら、無理だろうね。」

藍「そうでしょうそうで……。ん? 『男』の姿?」

まあ、見せてあげてもいいか。

藍「あの、何で手の甲でハートを描いて——」

ガルツチ「Girls Change!」

『Drive! Type Girl!』

藍「……………ホントに、女の子になっちゃってる。」

ガルツチ「まあ、何故か声が高く、ロリに巨乳なんだけどね。」

藍「いやいや、声が高くなるのは当たり前前だけど、何でロリ巨乳？」

ガルツチ「僕に訊くな。」

さてと、見せたことだし、そろそろ元の姿に戻り——

『ビクンッ！』

あ。

藍「危ない！」

今にも落ちそうなところで、僕の腕を掴み、引つ張ったところでバ  
ランスを崩してしまい、そのまま押し倒している体制になった。

いや、なんでき。というか『女祝の相』スキル、自重しろ。

ガルツチ「あ、えっと……………ごめん。」

藍「ううん、無事ならそれでいいよ。それより、貴方って意外と肉食系なのかな？」

ガルツチ「肉食系は彼奴だと思っけど……………。僕の場合、魚食系なんだが……………。」

藍「そう言って、ホントは私を食べようとしてるんでしょ？  
キヤーツ！ガルツチさん獣くー！」

ガルツチ「あの時散々弄くりまわして何を言ってる。元々こうなっ  
たのって、弄くった皆のせいだからな？正直手元が狂ってミスするか  
も知れないっつのに……………。今だっつて、震えてるんだから……………。」  
実際、ここに来るまでの間、鎮静剤飲んで来て、すぐ来たんだけど、  
どうやらそれも切れたせいで、もう手足も震えてしまった……………。

藍「震えてるわね。」

ガルツチ「嫌い……………、責任とれよな？どうせ僕、受けになるんだ  
から……………。」

藍「あら？私も受けだけど。」

ガルツチ「え？」

藍「え？」

嘘、それって如何なの？

ガルツチ「……………悪いが、攻めに転じてくれ。」

藍「いやいや、貴方が攻めになっつて。」



ガルツチ「いやそもそも僕、いきなり攻めは無理だよ。君が攻めになつて。」

藍「え、君の攻め姿が見たいからガルツチさんからしてえ。」

ガルツチ「あのな、僕はやられっぱなしは性に合わないから、受けから攻めに転じるのが性分なの。『冠位復讐者』<sup>グランドアウエンジャー</sup>舐めんな。」

藍「え？それ初耳なんだけど。」

ガルツチ「無の神を倒したからだと思う。他にも『冠位弓兵』<sup>グランドアーチャー</sup>とか、『冠位救世主』<sup>グランドセイヴァー</sup>とか、『冠位獣』もあるし。」

藍「ちよつと待つて!?え？冠位多くない!?つていうか、何でグランドビースト!?人類悪じゃない!」

ガルツチ「おい、自覚はしてるが人にもよるんだから。ビーストだからつて、酷すぎる命令以外なら、ちゃんと従うし。」

藍「あ、確かにガルツチさんはビーストだけど、根っからの人類悪じゃないよね。」

あつたり前だ。宇宙だったら、ビースト枠にも入りそうだが……。

ガルツチ「それより、早く……、攻めてきてよ……。焦らす気か?//////」

藍「ホントに仕方ないね、私は受けがよかったけど、如何してもなら攻めてあげるね。後から文句は、受け付けないんで。」

ガルツチ「わ、分かつてるから、早くう……。//////」

藍「焦らしながら誘つてるガルツチさん、滅茶苦茶エロすぎる……。もう、全部ペロペロしてあげるね!!!!」

それからというもの、帰りは藍に担いでもらつて、『千夏アジト』に

到着後、フラン達に担がれ、ベットに運び込まれた。僕はそのまま悦  
楽に浸っていた。

t o b e c o n t i n u e d  
→

## 第15話 休養と夢

—千夏アジト— 月夜ノ刻—

ガルツチ side

ガルツチ「警察署に、襲撃……ですか？」

しばらく休んでたとき、千夏から新しい任務が飛び込んできたのだ。

千夏『そうだ。良いところを悪いが、明日の任務を説明するぞ。明日は、無実の罪で逮捕し続ける警察達が多く居る警察署を襲撃するんだが……、動けそうか？』

ガルツチ「済まない、まだ、身体が万全じゃない……。鎮静剤を飲んだとしても、動けるのは短時間だけだとおもう。長時間となると、途中で支障が起こるから、今回はパスさせてくれ。」

千夏『分かった、未来達に伝えておこう。』

ガルツチ「代わりなんだが、アラヤにするよ。」

千夏『え!?!子供だろ!?!』

ガルツチ「だが、年齢的に子供じゃない。戦闘面なら、足を引っ張る事はないはずだ。それに今回の任務は、アラヤが特化してると思う。」

千夏『どういう事?』

ガルツチ「アラヤがフランと一緒に散歩してたとき、その警察署のこの階層を把握しているんだ。無実の罪で捕まってる奴も、知っているはずだ。」

千夏『分かった。んじゃあ、明日はアラヤ君に頼んでおくれ。』

僕は通話を切り、直ぐさま寝転んだ。

フラン「じゃあ、しばらくは動けないの?」

ガルツチ「うん、というか誰かな?あの時僕をイカしまくったのは……。」

イリヤ「アハハ……。それはホントにごめん。まさかそこまでになるなんて。」

言ってみれば、あの暗殺稼業以降、未だに動いていなかった。それ

もその筈、あの時の快樂や暗殺稼業後に藍と百合ックスしたからか、上手く動けないのだ。

別に快樂に溺れたくないとは思ってない。ただ、今後に支障がないように犯し犯されていたのだ。

全王神『意外、ガルツチちゃんって未来みたいに性欲ないの?』

んな訳あるか、表向きはそう見えるが、本性は未来以上に高いの。元々有翼人の皆は、子孫を残す為ともっと快樂が欲しいが為に、三大欲の中の一つ、性欲だけは人間以上に高いんだ。まあその人にもよるけどね。

全王神『あらま、んじやあ今でもムラムラしてるって事?』

実際そうだな。それに有翼男性の人の精液って、種族の中で案外沢山作りやすいようだし、意外と無限に近いほど、溜まるんだよね。その分理性も高めだし。

全王神『じやあ、セックスし終わると、有翼人の皆って、理性がすぐ戻るの?』

いやあ、流石にそれは分からん。僕の体質上かもしれないし、皆がそうかもって言えるほどの根拠もないからねえ……………。

全王神『そっか。』

まあ、一応精力剤でも飲んでくか。

全王神『いや、何でそれ使うの?』

快樂で身体が動けないけど、精力剤を飲めば、性欲は高まる分、治る速度も早まるんだ。まあ、個人差だけどね。

こいし「それじゃあ、しばらくはお兄ちゃんお留守番?」

ガルツチ「そうだね、代わりにアラヤに頼むよ。」

フラン「分かった。ゆっくり、休んでね。お兄ちゃん。♡」

ガルツチ「うん……………、お休み。」

イリヤ「お休み、お兄ちゃん……………。♡」

— ??? —

ん?アレ?僕何時から、ビルの屋上に?ん?

??? 「へえ、驚いたな。彼奴の身体で、ずっと見てたけど、お前って面白いんだな。」

ん？誰なんだ？

??? 「おっと、俺は此処だぜ。彼奴の恋人さん？」

僕はすぐに右を振り向くと、未来らしい姿をした人が立っていた。未来には見えたが、だが雰囲気違った。

ガルツチ 「……………式？」

両儀式 「そう、初めましてというべきだな。」

ガルツチ 「何で、急に夢の中に？っていうか、ここは!？」

両儀式 「ここか？ここは『空の境界』の世界、オガワハイムのビルの屋上だ。」

って事は、f a t eの世界とは全く違う世界か。何だか、雰囲気似てるけど……………。

ガルツチ 「だが式、何で急にこんなところを呼び出したんだ？」

両儀式 「ああ、彼奴の恋人さんってどんなのか気になってることで、お前に伝えなきゃいけない事があるんだ。」

ガルツチ 「伝えなきゃいけないこと？」

どういう事なんだ？

両儀式 「そうだね、先ずは俺の身体を使ってる、『門矢未来』なんだが……………。彼奴の転生した肉体って、元々は俺の身体だろ？」

ガルツチ 「まあ、確かにな。」

両儀式 「だろうな。だったらさ、彼奴にも使えるんじゃないのか？」

ガルツチ 「『直死の魔眼』か。」

両儀式 「そう、お前の息子だって、あるんだろ？」

確かに、アラヤは『直死の魔眼』は持ってる。そして僕もまた、『直死の魔眼・絶望』を持ってる。変わってはしてるが、言ってみれば、これが僕の完成型の『直死の魔眼』かもしれない。

でも、未来のは見たことないな。

ガルツチ 「未来の中に潜む『直死の魔眼』は、どうやって目覚めさ

せるの?」

両儀式「そうだな……、能力覚醒となると……お前が今まで戦ってきた奴と戦わせるってのは?」

ガルツチ「つて事は、ミストラル達や、宵闇霊夢、殺生院キアラ、ヘブンDIO、ブラック、グランドライダー冠位騎乗兵のマーモン、女神イリアス、シーモア等の奴らと戦わせるのか?」

両儀式「そうなるな……。一応VRで再現出来るし、彼奴なら勝てるさ。」

ガルツチ「それで、晴れて習得でき——」

両儀式「いや、最後は自分自身と戦って、ようやく習得出来る。」  
「やっぱりそうなるのね……。」

両儀式「もし起き上がって、未来がここに来たら、こう伝えておけ。『いずれ君は、『直死の魔眼』が使えるようになる。だが、覚醒させるには、お前の恋人が、今まで戦ってきた奴らに勝ち、最後は自分自身と戦い、勝つ必要がある。手に入れば、それなりに楽になるからな。』つてな。」

ガルツチ「自分では伝えないのか?」

両儀式「俺には無理さ。もし、お前達がこの世界に来ることがありや、着いてつてやるぜ。地獄の果てまでとことん、な。」

それは、未来次第だな。

両儀式「んじゃ、彼奴に伝えておけよ。俺の恋人さん。」

ガルツチ「待て待て、なんでそうなの!?!」

両儀式「未来はお前の恋人だろ? だったら、俺の恋人にも変わりないさ。身体や魂、心も違えど、俺はお前の恋人だつて事さ。彼奴も、お前のことを気に入ってるしな。」

ガルツチ「……………そうか。」

両儀式「じゃあな、ガルツチ。もしこの世界に来ることがあれば、歓迎するぜ。」

そうして、式との話が終わると同時に、夢から解放された。

—千夏アジト—

目が覚めると、そこには任務に行く前に、僕の様子を見に来た未来が来た。

未来「千夏から訊いたよ。ゆっくり休んでね。」

ガルツチ「ああ、後行く前に、話がある。」

未来「何？出来れば、手短で。」

僕は急いで、夢の内容、そして未来には『直死の魔眼』を持っていくことを話した。

未来「『直死の魔眼』か……………」

ガルツチ「でも、使えるようにするには、僕が今まで戦ってきた奴らと戦って、最後には自分自身に打ち勝たなければならぬんだ。」

未来「……………そっか。分かった、ありがとう。」

ガルツチ「行ってこい、未来。応援してるよ。」

未来「うん。行って来ます。」

t o b e c o n t i n u e d →

## 第16話 鈴美とクリムゾン

—千夏アジト—

ガルツチ side

未来達が警察署の襲撃した後の事、鈴美さんが僕の部屋に入ってきた。

何だか真剣な顔をして、此方を見ていた。

ガルツチ「どうかした？」

鈴美「ガルツチちゃん、ちよつと話があるのだけど……………。あの時の言葉、覚えてる？」

ガルツチ「……………自分の正体を知る。それがどう言う意味か、分かるか？」

鈴美「ええ、何故なのか分からないけど、貴方の、誰だか知らない貴方が、何処か雰囲気懐かしく思うの。まるで、ママの事を、今でも大事に思っているような、そんな感じ。」

「どうやら、ジャックの存在も気付き始めて来たようだ。まだ完治してはいないが、日常生活にまでは、問題ない。そう思い、僕はジャックを呼び出すことにした。」

ガルツチ「分かった。それじゃあ、彼奴と話をしてくる。」  
僕は直ぐさま精神世界に入り、ジャックと話をしていた。

ガルツチ『ジャック、出番だ。』

クリムゾン『……………。』

ガルツチ『ジャック？』

クリムゾン『なあ、ガルツチ。』

ガルツチ『ん？』

クリムゾン『俺は、あの子にどう話せば良い……………？なんて言うか、彼奴……………、妹に見えて……………。』

ガルツチ『……………分かってる、その為の話し合い。だろ？』  
クリムゾン『……………そうだな。分かった、俺話してくる。』



そして僕は、人格交代し、ジャックが僕の身体を乗っ取った。  
side Change

クリムゾンside

あー、緊張する。鈴美さん、だっけ？何だか彼奴を見てると、スゲえハズい気がする。妹が、見えるって言うかなんて言うか……………。

クリムゾン「……………よう、鈴美さん。」

鈴美「貴方が……………、ガルツチちゃんの？」

クリムゾン「おう、そうだ。初めまして、だな。」

鈴美「そう……………ね。」

……………ここで会話が途切れてしまい、黙ってしまった。いや、鈴美さん！なんか話があつて、俺に話し掛けてんだろ!?!ちよつと!?!

フラン「えーつと、ジャック。私達、お邪魔だと思っから、部屋に出て行くね。」

クリムゾン「お、おう。すまねえ。」

何かの空気を読んだのか、フラン達は部屋を出て行き、今ここにいるのは、鈴美さんと俺だけだった。

流石にだんまりは我慢できなくて、俺から話を出した。

クリムゾン「それで、俺を呼び出したのって、何か理由があつてガルツチのどこに来たんだろ？言え、そうすりゃ少しはスッキリすると思っぜ。」

鈴美「あ、うん。えーつと、ジャックさん？貴方は、私が何者なのか……………分かるの？」

クリムゾン「……………何故、そう思っただ？」

鈴美「私、ママの写真集を見ていたとき、お婆ちゃんの写真があつたの。その中に、何故だか知らないけど、その写真に映つてるお婆ちゃんらしい人の隣の人を見ると、懐かしく思っちゃうの……………。出会つたこともない、知らない筈なのに、何故か、懐かしい……………。そんな気持ちになっちゃうの。」

なるほどな。彼奴、今でも持つてたつてわけか。ギルサンダーの奴

と結婚し、子を産み、その子に写真集を渡して子離れし、気がつけば  
ジョジョの世界に着き、其奴と結婚したときに、鈴美さんが誕生し  
たって訳か。

クリムゾン「そうか……………」

鈴美「だから、教えて欲しいの。私は……………、何者なのか。」

クリムゾン「……………酷な真実だが、聞くか？」

鈴美「教えて。」

クリムゾン「分かった。後悔しても、俺は知らねえからな。」

俺は少し、一息をつき、鈴美さんに話をした。

クリムゾン「いいか、鈴美。お前は、俺と同じ『零の龍神』という  
一族の血を引いてる存在なんだ。」

鈴美「『零の龍神』？」

クリムゾン「そう。嘗て無の神ことラヴオスを生み出した、始まり  
と終わりを司る『零』の存在たる龍神。俺や兄貴、そして妹もまた、そ  
の血を強く引き継いでいた。お前に流れる血は、俺の懐かしき妹の血  
『アサナト・カオス・ティポタ』、その血を引いてる。」

鈴美「え？」

クリムゾン「言ってみれば、お前の母親。いや俺からしたら、従姉  
妹になるな。其奴は俺が住んでた世界から来たというわけさ。」

鈴美「……………じゃあ、私のお爺ちゃんは？」

クリムゾン「……………『七つの大罪』の漫画、呼んだことあるなら良  
いが、ギルサンダーっていうのがお前のお爺ちゃんだ。」

鈴美「その人も、『零の龍神』？」

クリムゾン「いや、ドルイド族のクォーター。言ってみれば、お前  
は、『零の龍神』に加え、ドルイド族、その他の血が、お前に宿して  
るんだ。」

鈴美「……………」

言葉が出ない、多分それが正解だろう。普通なら、その反応が正し  
い。知っていたのなら、驚きだがな。

未来「鈴美、ここに……………あれ？ガルツチ？」

クリムゾン「彼奴はちよつと休んでる。それと未来、今ちよつと鈴

美と大事な話をしてる。聞くのは構わねえが、あまり邪魔をしてあげないでくれ。」

未来「あ、うん。分かった。」

未来が扉をしめ、どっかの椅子に座り、俺は話しの続きを言った。クリムゾン「今はまだ覚醒には至っていないが、それももうすぐで、目覚めようとしてる。」

鈴美「……………私、扱えるの？その力……………」

クリムゾン「それは、お前次第だ。それにどうやら、妹より先に、ギルサンダーの魔力が解放しきってるな。其奴が扱ってたのは『雷帝』、つまり雷を自在に操る魔力さ。」

未来「ねえ、それって『レッド・ホット・チリ・ペッパー』みたいな能力なの？」

クリムゾン「いや、それより強大な筈だ。『ウエザー・リポート』の中の一つ、雷雲を呼び出す事も出来れば、自身に身を纏わす事も出来る。『レッド・ホット・チリ・ペッパー』の使い手だったら、其奴の電気を奪うことも出来るしな。日常でも雷を帯びることが出来れば、大したものだ。」

鈴美「……………」

クリムゾン「いずれにせよ、お前は人間とかけ離れちゃった存在だ。能力といい、血族といい、お前は最初から普通じゃなかった。だが、俺の従姉妹は、そんな辛いことを背負わせねえが為に、どうやら何らかの封印をしたようだな。だがそれも、終わっちゃった……………。吉良吉影って男が、殺されちゃったことにより、封印の外壁もぶっ壊れた。正直スタンドで無理矢理壊される事は、想定していなかったのだから。」

未来「そういえば、『レッド・ホット・チリ・ペッパー』の電気の僅かが、鈴美に吸い込まれるようにいったけど……………」

クリムゾン「なるほど、少しずつだが解放していたのか。そしてガルツチ達が生き返らせたことにより、先にギルサンダーの魔力が解かれてたって訳か。」

こりや驚きだな。ギルサンダー、どうやらお前の孫が、その魔力を

きつちり受け継いでるようだぜ。喜べ、ギルサンダー。お前の子孫が受け継いでくれたぞ。

クリムゾン「怖いか？自分が何者なのかを知ったの。」

鈴美「うん……………、覚悟していたけど、やっぱり……………。」

クリムゾン「安心しろ、ここにはガルツチや未来、簪達がいるんだ。それに、俺もついてる。」

鈴美「……………」

話し終わったのか、鈴美は俺に抱き付き、静かに泣いていた。俺も優しく、抱きしめ、頭を撫でていた。こうすれば、アサナトの奴も、落ち着いて眠っちまうけどな。

未来「ジャックさん、鈴美は……………」

クリムゾン「ああ、分かっている。此奴は無意識のうちだが、雷帝の使い方をマスターしてる。後は此奴の気持ち次第だ。此奴が覚えているのは『雷帝の鉄槌』、『雷帝の粛清』、『雷獣の追走』。武器を持てば、『雷鳴斬』、『雷帝の剣』、『雷帝の重鎧』、『雷神の抱擁』。そして、どうやらオリジナルの技である『迅雷の天罰』、『裂雷の刃』とかも持つてるようだ。」

未来「分かるの？」

クリムゾン「妹の孫だろ？撫でただけで、分かっちゃまった。だが、鈴美は他の技も持ち合わせていやがるな。いずれにせよ、『零の龍神』の能力も目覚めるのは目に見えてる。その為には、戦闘に慣れさせなくばならねえ。鈴美もまた、戦いの運命には避けられねえようだしな。」

未来「そうか……………」

クリムゾン「んじや、俺はガルツチに変わるぜ。今度話すときは、俺が出て来たときだな。じゃあな。」

さあ、戻ってこい。ガルツチ。

sidechange

ガルツチside

どうやら、話は付いたようだな。実際、鈴美さん眠っちゃってるし。



キング『おいベリアル、貴様何かしたか?』  
ベリアル『いやいや、俺は全く手を出してねえぞ!?そもそも、俺は  
転生させる力なんてねえんだから!!』

キング『確かにな。』

だったら、ラヴオス!お前か!?

ラヴオス『いや、そんな奴は全く居なかったぞ?』

えええ……………。

未来「何で転生してるんだ!？」

ガルツチ「それはこっちの台詞だよ!母さんは、知らないそうだけ  
ど。」

簪「ねえ、アレって何?」

未来「以前ジョジョの世界で、僕が倒したはずのスタンド使い。」

ガルツチ「そしてあの白いタキシードを着ている奴は、僕とフラン、  
こいし、イリヤと結婚するときに現れた奴…………。貴様、一体どうやつ  
て!？」

???「教えられないねえ…………。それに、今回は此奴がついてる。闇を  
操るスタンド使い、だったかな?丸ちゃん。」

金欲「そうそう、オーズ君。彼奴には、今までの借りを、  
たあああああつぷり返さないとねええええ!!」

ちつ、闇を操るスタンド使いか…………。しかもオーズはあのベルト  
も健在。あーくそ!完治していれば、一気にたたみかけれるってのに  
…………。

つと、そのときだった。

鈴美「未来ちゃん、ガルツチちゃん。私に任せて。あと、その劍借  
りるね。」

未来ガル「鈴美!？」

なんと鈴美さんが、僕の聖剣スターダストソードを手に取り、前に  
出たのだ。

未来「鈴美!!危ないから下がって!!」

ガルツチ「それに、彼奴らは—————」

鈴美「だから何なの!!もう未来ちゃんやガルツチちゃんや簪ちゃん

達に、見守られるのは嫌!!私だって……………、私だって……………!!」

すると、鈴美の背後から、何かが見えた。すると空は暗くなり、雷鳴が轟いた。しかも驚いたことに、殆どが鈴美さんの周りに落ちていた。

鈴美「私だって!!皆を守りたい!!!来て!『ライトニング・ゼウス!!』」

雷鳴が落ちると同時に、スタンドは唸りをあげ、その雷を取った。途端に剣に変わり、鈴美の隣で浮いていた。

鈴美「貴方が闇のスタンドだというのなら、私はその闇を切り裂く雷になるわ!未来ちゃんを……………、ガルツチちゃんを……………、そして皆を護る雷として!!」

ライトニング「まさか、貴様のスタンドになるときが来るなんてね。いいだろう、新しく手に入った力で、その闇を断とう!!覚悟は良いか、レイミ。」

鈴美「ええ、行くわよ!ライトニング!!」

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
→





もしかしたら、まだ見ぬ敵の仕業なのかも知れない。それか、他の奴らの仕業か。どちらにせよ、あの2人が消えてよかった。

未来「凄い……………、凄いよ鈴美！」

ライトニング「やれやれ、兎に角一件落着だな。大丈夫か、ガルツチ。」

ガルツチ「ああ、済まない……。でも、ライトニングが鈴美さんのスタンドになるなんて。」

ライトニング「まあな。こうしてお前と出会うのも、久方ぶりだ。スノウもセラも会いたがってたぞ。」

ガルツチ「アハハ、彼奴らも元気か。」

鈴美「知り合いなの？」

ガルツチ「うん、ライトニングみたいに召喚獣とかは出せないけどね。」

ライトニング「何謙遜してるんだ？お前の場合『ナイトオブラインド』を召喚出来るなんて、凄いことだぞ？」

簪「『円卓の騎士』を!？」

鈴美「ガルツチちゃんって、何処まで規格外なのかしら……………」

ガルツチ「仕方ないだろ、ただでさえ僕虚王魔神なんだから……………」

鈴美「そういえば、そうだったわね……………」

それで納得するって、凄いよなあ。

千夏「まあ、皆が無事でよかった事で、今日はパーティーでもしよ  
うじゃないか!!!」

つというわけで、今夜は派手なパーティーとなった。

t o b e c o n t i n u e d →

sideChange

???

side

???

?? 「はあ、やつぱりあのデータで出来た奴を使ったとしても、無駄だったか。いや、そもそもあんなの役立たずだ。誰だ、彼奴のデータを取った阿呆は？」

?? 「それは其奴担当の奴だろう。まず、人選すら間違ってるだろう？ オーズ、金欲丸。能力は強力で、あれは宝の持ち腐れだ。せめて、その能力を誰かに移してからでないと……。それで、あの能力は、どうなった？」

?? 「残念ながら、どうやら丸々使って、能力すらないと。」

?? 「馬鹿だろ、ホントに。」

はあ、何であんな奴を雇ったのだ？ 抹殺してやりてえが、奴がいなければクローンを作り出せなかったのもまた事実。

?? 「まあいい、次の手を考えようではないか。」

?? 「お任せを……………」

新たな無の神『ゼロ』。

## 第17・5話 スリラーの真価とその正体

―VRルーム―

ガルツチside

鈴美が零の龍神の力を解放して暫くしたある日、僕は金欲丸が持っていたスタンド『スリラー』と呼ばれるスタンドの、試運転を始めるため、VRルームに向かった。

ガルツチ「千夏さん、何時でも準備OKです。」

千夏「分かった。念のために、こちらの流れ弾が来ないように、強力なバリアを張って置くぞ。」

ガルツチ「そうしてくれ。」

さてと、あのキモ男が持ってたスタンドはどれ程の物か、試させて貰う。

千夏「VR訓練始め!!」

ガルツチ「来い!『スリラー』!!」

sideChange

未来side

未来「え!?!何で彼奴のスタンド姿が違うんだ!?!」

あの金欲丸のスタンド姿は、ヘドロのようなドロドロの人型で、血管が浮き出ている。全身にはカチカチと開閉する口があった。

だけど、ガルツチのは違う……。ガルツチが出した『スリラー』は、ケルベロスの姿だった。しかも、黒い翼のおまけ付きだった。

イフ「恐らくだが、THE VISIONの頃的能力があるのか、自分好みの姿に変えたのかも知れないな。」

未来「変えられるって、なんだか凄いな。」

鈴美「でも、何であの男のスタンドを?」

フラン「お兄ちゃんの絶望の力と、彼奴のスタンドが何かと相性が良いって、ヘラが言ったの。」

簪「ヘラって、オリンポス神の?」

フラン「うーん、オリンポスじゃなくて、私に宿してる破滅の魔神の事よ。」

簪「ホントにややこしい名前がありまくりだね……………。(・|・)」  
それ僕も思った。

ガルツチ『んじゃあ、行くぞ。』

sideChange

ガルツチside

ガルツチ「ガイア、絶望の力と『スリラー』とリンクを。」

ガイア『リンク、完了。』

ガルツチ「目標、ロックオン！」

僕はすぐさま両手を挙げ、目の前にある的を見た。ロックオンの数が増えれば増えるほど、両腕から溢れ出る闇のオーラが湧き出し、ケルベロスの口から黒い光球が大きくなり始めた。

ガルツチ「よし、ダークマター、チャージ!!!」

ガイア『チャージ、オーバーロード!』

ガルツチ「これが、深遠なる闇の力!! 『ダークマター・メテオレイ』!!!」

解き放たれた闇は、無数の流星群と化し、ロックした的に当たると同時に、凄まじいほどの轟音と大爆発を起こした。的は砕け散り、結果表が出た。

『破壊力：EX 命中率：99, 99% 種別：対城技』

予想はしてたが、まさか対城宝具並みだとは……………。

ガルツチ「ふう……………」

???『お疲れのようだな、我が主。』

ガルツチ「？」

あれ？誰だ？

???『おい、我はここだ。』

ガルツチ「え？スリラー？」

???『我にそんな名を付けるな!!』

ガルツチ「!？」

え!?!喋った!?!

???'『いや、失礼。我が名を知らぬが、済まぬがスリラーという名はやめてくれ。彼奴を思い出して腹が立ってしまおう。』

ガルツチ「あ、はい。ごめん。」

えー?スタンドが話す……………、いや待て、スタンドにしてはなんか違う気がする……………。

sideChange

未来side

え!?!何あの威力、あんなのが僕に当たってたって言うの!?!

イフ「そのようだな。威力は、恐らく元のスタンド使いよりは、最も強力かも知れないな。」

鈴美「でも、それは未来ちゃんが、イフがいたからこそ、防げたんだよね?」

未来「そうだけど、でもガルツチのアレ……………正直受け止められる自信がない。」

イフ「あれが敵だったと思うと、ゾツとしていたかもな。」

ホントだよ。つて、あれ?あのスタンド、なんか様子が違う。

千夏「お疲れガルツチ。」

ガルツチ「疲れた。少し休むよ。」

???'『そうしたまえ、我が主。』

イフ「な!?!」

未来「え!?!」

ガルツチ「ん?どうかした?」

未来「一つ聞くけど、ガルツチ。そのケルベロスって、スリラー?」

???'『我にそのような名を付けるなど言ったはずだ!!』

未来「!?!」

嘘!?!ケルベロスが!?!

???'『いかん、知らぬ者がいたのをすっかり忘れてた。済まぬが、こ

の場にいる者よ。我をスリラーと呼ぶのをやめてくれ。あの者を思い出すだけで腹が立ってしまうからな。』

えー、まさかケルベロスが喋るときが来るなんて……。でも、何でスタンド片付けないんだ？

未来「ねえ、ガルツチ。」

ガルツチ「ん？」

未来「スタンド片付けないの？」

ガルツチ「それがさ。出来ないんだ。」

鈴美「え？」

ガルツチ「いや正しくは、これスタンドじゃ無くなってる感じかな？」

嘘くん……………。

side Change

—千夏アジト—

ガルツチside

???『度々重ねて済まぬが、我は『スリラー』とかの名前ではない。彼奴が勘違いして、呼んでいただけの事よ。』

ガルツチ「んじゃあ、お前真名あるのか？」

???『無論だとも。我はケルベロスの中での長とも呼ばれた者、名は『ディアボロス・マルドゥク』。まあ、難しいのならば……………その……………、『アムール』でも……………構わん。』

待て、なぜアムール？アムールって確か、『愛』または『恋』を意味するんだけど……………。

未来「えーっと、アムール？何でガルツチの事を、我が主って言うの？」

アムール『ああ、それか。いや正しくは、此奴の中にいる主に言っ



ているのだ。』

ガルツチ「えーつと？それって、ジャック？それとも、ガイア？」  
アムール『そう言うことだ。』

ガイア『ぬ？我って、ケルベロスを買っていたのか？』

アムール『お忘れになられてしまったのですか!?我が主!!以前貴方の使い魔として、生きていた我を!』

ガルツチ「ちよつと、落ち着け!!おいガイア、お前何も覚えていないのか!？」

ガイア『待て!思い出してみるから、少し待て!』

アムール『彼奴だな?彼奴が記憶を奪ったから、思い出せんのだなくつ、我が守れなかつたばかりに……………。おのれ宵闇霊夢ウウウ  
!!!我が主を殺した挙げ句、記憶を奪い去るとは!!!  
あれ?これって、気付いていない奴?』

アムール『教えろ!彼奴は何処におる!!我が成敗して——』

ガルツチ「あの、其奴はもう死んでるよ?」

アムール『何?』

ガルツチ「僕とフラン、こいし、兄さんとレミリア、さとり、そして早苗の手で、葬ったけど。」

アムール『なっ!?そ、そうだったのか……………。』

未来「あの、状況が読み込めないけど……………。取り敢えず、アムール?教えてくれない?その、ガルツチの中にいる人と君との関係を。」  
アムール『ふむ、そうだな。我と我が主は主従関係なのだ。傷付いていた我だったが、それを手を差しのぼしてくれたのは、他でもない…………。ガイアだったのだ。それから我は、恩を返すが為に、彼の使い魔として生きてきた。だが、あの宵闇霊夢のせいで、我が主は殺され、我は憎んだ。そして、気が付けば我は死んでいた。姿も形も変えられ、てしまい、あの金欲丸とかいう巫山戯た名を持った男の『スタンド』という者になってしまったのだ。』

未来「え!?!んじやあ、君は最初から、ちゃんと肉体があったんだ!？」

イフ「それで、ガルツチがコピーし自分好みに変えた結果、偶然にも元の姿に戻ったという訳か。」

えー、ホントに何でこうなったんだ？あんな趣味悪いスタンド姿が嫌だったから、ケルベロスの姿をしただけに、まさかの本来の姿なんて思っても見なかったんだけど……………」

ガイア『あー!!お前あの時の!!』

アムール『思い出してくれたのですか!?!我が主!!』

ガイア『迎えに来てくれたのか!!すまぬ、貴様には辛い思いをさせてしまったようだ……………」

アムール『いえ、主が無事で、我も嬉しいです……………」

……………」なんだろう、これって僕が居ちや駄目な空気がする……………」

ガイア『しかし、アムール。もう我は、肉体はない。だから、もう一度契約するのは、難しいのだ。』

アムール『そんな……………」

ガイア『だからガルツチ、頼みがある。アムールを、使い魔として契約して欲しい。この者の力は、闇だけでなく、憎悪、絶望、混沌の力を備わっている。上手く使えば、これまで以上に扱えるはずだ。』  
うーん、ガイアに言われるとなると、断ることは出来ないな。

ガルツチ「分かった。アムール、濟まないがこれからは、僕の使い魔として生きてくれないか？誰かを守るために、力を貸してくれ。」

アムール『良かろう、我が新たな主。名は?』

ガルツチ「ガルツチだ。」

アムール『では、新たな契約者ガルツチ。これからは、お主の闇と牙となりて、護ろうぞ。』

ふう、一時期どうなることかと――

『ピロリン♪』

ん?

『新たな宝具の使用可能。』

フリーレン・シャルフリヒター  
遙かなる者への斬罪

ランク：C

種別：対人宝具

レンジ：1〜5

最大捕捉：1人』

使い魔を持つだけで宝具が生まれるって、どういうこつちやな。

未来「でも、まさか使い魔がスタンドに変わるなんて、思っても見  
なかつたね。」

鈴美「ええ、私も。」

イフ「だが、これもまた運命かも知れないな。」

ガルツチ「……………取り敢えずこれからも、よろしく頼む。」

アムール『こちらこそ、我が主。』

t o b e c o n t i n u e d  
→



―ロスサントス―

ガルツチ side

いやあ、派手なパーティーのおかげで、食糧が結構無くなっちゃったな。しかし、鈴美さんホントに凄かった。いやまず、それを覚えることが出来た僕と未来も凄いけど、あの力、凄まじいよ……………。

因みに僕は、あの時未来の模擬戦で貰った次元 iPhone を使って、音楽を聴いていた。

聴いている曲は、『絶望性ヒーロー治療薬』という曲で、ホントに踊りたくなるほど気に入ってる。

さて、とりあえず食糧はこれで十分だな。しかし、エニグマか。凄いやなあ、全部入っちゃうもん。

そう思いながら、千夏レストランに到着し、料理人に渡そうとしていたとき、一人の少女が看板を見ていた。僕がそこを通り過ぎようとする時、その少女が僕の裾に掴んだ。

ガルツチ「？」

??? 「あの、この関係者ですか？」

ガルツチ 「え？ええ、そうだけど？それが、何か？」

何だろ、この子なんだか、あのノアより強大な力、いやディルラーより強いんじゃないのかと思ってしまうほどの力を感じる。

??? 「ここに、未来兄が居ますか!？」

ガルツチ 「……………はい?」

瞬間、この世界……………いやあの第零宇宙のところまで、カオスドラマイブが起こった。ちよつと待て、なんつった? 未来兄? え? ちよつと、なんだって? 未来に、妹とかいたの? いやいや、それ以前に、士に妹とかいたの! え? え? おい母さん!

全王神『ありのまま、今起こったこと話そう!! 私はいつも通りガルツチちゃんと未来ちゃん達を24時間ずっと見ていたとき、偶然滅



??? 「はい！（＾O＾）／」

うーん、でもホントに何者なんだ？可愛いを除外せば、なんだか凄  
力を感じる。しかも鈴美さんと同じ力も……………。

イフ、この子は一体……………？

イフ『分からん、それ以上に此奴、全ての力を備わってるかのよう  
なものを持つてる。おそらく、土や全王神、そしてTOAAという者  
を超えているやもしれない。』

？ーん。チートおん。

いや、チートを超えた理不尽すぎるチートやないか。とりあえず未  
来が終わるまで、待つてるでしょうとしたら、丁度未来が出てきた。

ガルツチ「む、迎えに来たよ。未来。」

未来「あ、ありがとうガルツチ。ん？その子は？」

??? 「未来兄いいい！会いたかったあああ!!!」

未来「フア!?え?え?この子誰!？」

ガルツチ「何でも、未来の妹だとかなんとか……………。おっと、超音  
波は勘弁だよ?とりあえず、先ずは一旦帰って、状況整理しよう。」

未来「う、うん。」

後から簪達も戻ってきて、未来の妹と名乗る謎の少女を見て、滅茶  
苦茶可愛いと言いながら鼻血をドバツと出しながら、幸せな顔をして  
気絶した。そのまま乗せて、千夏アジトに到着した。

悔しいけど、この子フラン達より可愛すぎる……………。ううう  
……………。

ー千夏アジトー

んで、到着し、皆に見せるや否や、その子を見た瞬間、鼻血をドバツ  
と大量にぶっかけられ、幸せな顔をして気絶した。

いやさ、正直ここまでだとは思わなかったんだけど……………。

もう一度、この子の姿を見ると、まさしく美少女らしい女の子で、海  
のように凄く綺麗な青色のロングヘアで、誰からも魅了してしまうほ  
どの澄んだ緑色の目をしていた。

だが、この子ホントに何者なんだ？可愛すぎるのを除いて、この子  
凄まじい程の力を持つてるし……………。

一見一般人からすれば、普通の美少女だけど、僕からの視点だと、な  
んて言うか……………神々しい程のオーラを放っている気がする。

ガルツチ「とりあえずだけど、皆起きて。先ず、君は何て言う子な  
の？」

そう言うと、待つてましたと言わんばかりに、机に乗り、ドヤ顔を  
しながらこう言った。

???'「よくぞ聞いてくれた！私は、未来兄の妹で、時空一の美少女ア  
イドル！全知全能で、絶対無敵、完全無欠のおおおおおおおおお  
おおお！」

ガルツチ「こら、調子に乗らない。あと普通に紹介しろ。そして、机  
に乗らない。」

???'「え？そうなの？」

………。  
どこが完全無欠だ……………。常識すらぶつ壊れてんじゃねえか  
……………。

ガルツチ「とりあえず、僕の膝の上に座ってなさい。」

???'「はい。」

全員「さり気なく膝の上に座らせた!？」

未来「何だかんだ言つて、ガルツチも可愛がつてるじゃん……………。」

ガルツチ「……………。／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

言わないでよ未来、恥ずかしいんだから……………。

???'「じゃあ普通に言うけど、私は『門矢愛花』っていうの。未来兄  
やガル兄を見つけるのに、凄く苦労したからね。」

ガルツチ「いやまず、僕未来に妹がいたなんて知らなかったけど

……………。」

未来「いや、それだったら僕もなんだけど……………。」

ガルツチ「士の奴も、滅茶苦茶動揺しまくってたよ？」

未来「デスヨネ……………。」

ライトニング「むしろ、なんなのだこの美少女……………。もはや可愛  
いって言う次元を越えているぞ！」



ガルツチ「おい、セラが嫉妬するからやめてやれライトニング。」  
しかし……、なんなんだこの子……。この子を見るだけで、  
滅茶苦茶理性が削られてくるんだけど……。しかもムラムラし  
てくるし……。

ダメダメ!!抑えろ!何を考えてんの僕は!?

愛花「えへへ、もっと甘えてもいいよ?兄に。」

ミスト『うー、悔しい……。私もこっちに行けたらいいの  
にいいいい……。』

イリヤ「ねえ、お兄ちゃん。その子を嗅いでも良い?」

ガルツチ「え?」

イリヤ「というか嗅がせて!!クンカクンカしてペロペロしだい!!」

ガルツチ「早速イリヤの理性が壊れたアアアアアアアアアア!!」

フラン「お兄ちゃん、私も良い!?もう待ちきれないから!!」

こいし「私も私も!!」

ガルツチ「嫁達が壊れたアアアアアアアアアア(ODO;」

未練組「こっちもお願いいいいいいいいいい!!?!?!?!?  
いい!!!」

ガルツチ「待て待て待て待て!!!皆落ち着けえええ!!!」

何なの皆!?!目がヤバすぎるんだけど!?

愛花「ねえ、兄に……。」

ガルツチ「?」

愛花「私のこと……、好き?」

あ、もうこれ勝てないや……。アラヤも鳳凰もリサも、この  
子の魅了に負けちゃってるし……。一言言えば、今ので  
……。理性が……。ぶっ壊れちゃった……。

母さん、少女には………勝てなかったよ。  
その後愛花を一日中滅茶苦茶可愛がった。

t o b e c o n t i n u e d  
⇒

## 登場人物2

ジャック・マッドネス・クリムゾン 不明（見た目的に26歳） 2  
月27日生まれ 性別 男

身長：170cm 体重：65kg

CV、中村悠一

種族：龍族（零の龍神）

髪の色：バニラ

目の色：深紅色

クラス：アサシン・バーサーカー

属性：混沌・悪

ステータス 筋力：SSS／耐久：B／敏捷：EX／魔力：EX／

幸運：C／宝具：？

ガルツチのもう一人の人格。と言っても、都合よく憑依した人格とも言っても良い存在。生前の頃の記憶は覚えているが、どういう訳か自分の名前を覚えていないようで、ガルツチが付けた名前で呼んでいる。

かつてジャックは、『零の龍神』の一族の一人なのだが、とあるきっかけにより亡くなってしまっても、ガルツチが転生と同時に、ジャックも転生する際に『鋼の錬金術師FullMetalALCHEMIST』に出てくる憤怒の罪『ラーズ』のマスターとして活躍していた。

それからしばらくは人格だったのだが、鈴美と出会った瞬間、同じ一族の力を感じると同時に、どこか妹の面影が見えるらしい。

殺人鬼とも呼ばれているらしいが、根っからの悪人ではない。そして、ガルツチが男である未来と付き合ってる事に関しては、最初は驚きを隠しきれなかったのだが、今ではすっかりと受け入れている。

生前の頃の力は、あの無の神ことラヴオスを一撃で倒せるぐらいの力を所持しているらしい。

門矢愛花 不明（見た目的に10歳） 誕生日不明 性別 女  
身長：134cm 体重：35kg

CV、豊崎愛生

種族：不明

髪の色：紺碧色

目の色：エメラルドグリーン

クラス：不明

属性：混沌・中庸

ステータス 筋力：不明／耐久：不明／敏捷：不明／魔力：不明／  
幸運：不明／宝具：不明

未来の妹と名乗る少女であり、今作のキーパーソン。完全無欠と自称しているが、実際はどこか常識が抜けているところがある。

万人には魅了してしまうほどの美少女で、少し見るだけでハートを射抜かれ、話し掛けるだけで鼻血が大量に出たり、密着するだけで理性蒸発させてしまうほど、可愛い少女。

未来達ですら魅了してしまうのだが、ガルツチは可愛さ以外の『何か』を感じ取っていた。

そして、イフからは『全ての力を備わってるかのようなものを持つてる』と感じ取ったらしく、どうやらディルラーの門矢士やウルトラマンノア、そして全王神、TOAAより強いらしい。

名前無し（全王神） ∞歳（見た目と言語的に7歳？） 誕生日不明  
性別 女（時に男にもなる。）

身長：不明 体重：不明

CV、豊崎愛生

種族：神

髪の色：不明

目の色：不明

クラス：なし

属性：混沌・善

カテゴリー：全

ステータス 筋力：―／耐久：―／敏捷：―／魔力：―／幸運：―  
／宝具：∞

虚王魔神であるガルツチを産み、あらゆる人を転生させた、女の子っぽい神様。もの凄く破天荒な上に、色々と暴走しまくってるが故に、ガルツチに悩まされている。（本人は全王神が母だと知るまでは、何があつたかさえ分からない。）

何でも出来てしまったが故に、弟にも神々にも界王達にも界王神達にも破壊神達にも、存在しない者として扱われていた為に、孤独を感じていた。

その為、全王神から転生させてくれる場合、神々を脅かすものでも、世界を滅ぼせるような力でもどんな物でもあげてしまう。

馬鹿なことをやれば止めたりはするが、基本口出しにはしないように、過保護過ぎるところもある。

転生させた人達、特に未来とガルツチは24時間ずっと見ている。しかもガルツチには何時でも念話で会話することが出来るが故、偶に殴られる事がある。（特に死ぬ間際のとこで邪魔された時には、気絶させられる程の拳が飛んできたこともあつた。それでも感謝はしているが。）

門矢士 20歳 3月20日生まれ 性別 男

身長：182cm 体重：63kg

CV、井上正大

種族：人間

髪の色：茶色

目の色：黒色

クラス：グランドルーラー・グランドライダー

属性：混沌・善

カテゴリ：調和

ステータス 筋力：EX／耐久：A＋／敏捷：∞／魔力：∞／幸運：  
C／宝具：∞

門矢未来の兄で、元仮面ライダーデイケイドでもある。現在は仮面ライダーデイルーラーとして生きていて、時々未来のところに行くことがある。

折檻したのか、未来だけでなく、ハーレム要員（オフィス、本音、簪）には嫌われている。

自分は完璧だとかかなりの自信家で、誰に対しても尊大な態度を取る俺様キャラだが、襲われている人を体を挺して守るなど、熱いハートも持ち合わせる。口調や仕草に癖が多い人物で、物事を何か比喻したアメリカンジョークをよく口にする。

全王神や束と話しめすれば、趣味でもある写真撮影もする。しかも何故か知らないが、ガルツチと念話することが可能。

実際ガルツチの存在は、虚王魔神の頃から知っているのだが、唯一完璧の士を打ち破ったのもガルツチだった。

そんな完璧な士でも、笑いのツボを押されると、身動きが取れなくなり滅茶苦茶笑い出してしまい、その事をきっかけに未来に知られてしまったため、押されないか心配している。ぶつちやけガルツチにも相当恐怖しているようで、笑いのツボを押されまくられながら、愉悦顔をするのではと思っている。というか天敵はガルツチと光夏海だけである。

## 第19話 零と全

—???  
—

風龍 side

士「風龍、何を讀んでるんだ？」

風龍「ああ、調べもんさ。『零の龍神』について、色々調べてたらさ、面白いのがあったんだ。」

葵連「面白いの？」

皆は僕が読んでいる本、『零と全を持つ龍神王』を見せた。

士「なんだ、これは？」

風龍「多分皆は、『零の龍神』の章だけは知ってるだろうけど、実際は他にも居るんだ。例えば『全の竜神』。零を相反する全の竜の神様とも呼ばれていて、この者らも同様、居なくなってる筈なんだ。」

イリア「筈って、貴方曖昧すぎないかしら？」

風龍「鈴美みたいに、子孫を残してる可能性もあるって事なんだ。だから、全の竜神だつて、子孫を残してるつても、ありえるだろ？」

葵連「確かにだな……………。って、うん？なんだこの龍は。」

風龍「……………こいつか。おそらく、全王神と同等の力を持つてる龍神の王。『零と全の龍神王』と呼ばれる奴だ。」

ただ、姿的に何故か幼女姿。どういうこっちゃな。

風龍「伝説では、全王神と全面戦争を仕掛けた事もあり、『第零宇宙』と『最終宇宙』の民や兵士達は、どちらが滅びるまで戦っていたそう。だが、ある日『虚数宇宙』と呼ばれるものが、そのどちらも戦争を仕掛けるのを見て、全王神と龍神王は手を組み、虚数宇宙と戦い、勝利したらしい。が、龍神王は虚数宇宙との戦いにより、疲弊していて、全王神はこれ以上犠牲を生ませないために、同盟を組んだらしい。それ以降の龍神王の姿を見た者は、全く居なかったそうだ。」

士「……………龍神王か。」

風龍「まあ、全面戦争の原因は……………これは呆れてものが言えない物なんだけど……………。」

葵連「知ってるのか？」

風龍「実は、異次元の人間と呼ばれて間もないとき、一度龍神王と出会ったことがあってね。んで彼女らの全面戦争の原因が……………」

『マンガープリン』の奪い合いからだとか。」  
皆はそれを聞いて、（。D。）ポカーンってしちゃったよ。そりやあそうだろ、プリンのために全面戦争を起こしたなんて、呆れて物が言えないだろうよ。

むしろそれにのった皆もどうかと思うけどね。

風龍「まあ、忘れる。彼女らの名誉の為にね。」

2人「「そうする。（・―・；）」」

しかし、龍神王の奴……………今頃どうしてんのかな？

s i d e C h a n g e

??? | ???  
??? |  
s i d e

??? 「ほう、ここに来たと言うことは、転生しにきたということか。」  
誰かの声がした。男なのか、女なのか、老人なのか、子供なのか、全く解らない。

だが解るのだ。それは、自然の摂理すら超越する存在。



「我は、お主の望みを叶えてやろう。」

「貴方は？」

「我は神では無い。そしてお前達の言う宇宙人でも、メタヒューマンでもない。お前の好きなように呼んで良い。」

「じゃあ、シエンロンで。それで、転生ですか？」

「そうだ。我は転生させることが出来る。お前が望めば、転生する——」

「いえ、興味ないです。」

「フア？」

「そもそも私、転生したいなんて思いません。私がやったことは、ただの復讐ですし、地獄で永遠と供養する事にします。」

「……………」フルフルフルフル

「あら？何で震えて……………」

「もう——————！！折角全ちゃんのシリアスモードを真似して神様っぽく言っちゃったのにいい！！此処はあれでしょ！！『ありがとうございます！！特典貰って楽しく転生人生送ります！』って、言うもんでしようがああああ！！」

あれ？なにこのシエンロン可愛い。キャピキャピとした女の子みたいな喋り方になってるし、っていうか全ちゃんって誰？

「まあ私は、この転生をしたくてしたくてウズウズしてたんだもん。というか全ちゃん狡い！私だって、最強の転生者を作りたいもん！ニヤアアア！！」

「知りませんよ、そんなこと。そもそも私は——」

「そうプリプリと怒っちゃやーよ。君自身は如何したいの？転生して好きなように生きたいと思わない？You, 転生しちやいなよ。」

「しません。そもそも私は罪人なので、地獄に行かなきゃならないので。」

「そんな必要なツシング！たてえ皆が地獄に行けと言われても、私は許しちやうよく！」

「だからって、私がやったことは——」

??? 「それに、君自身はそう願ってる。解るんだよ。さつきから目の奥が何だか悲しそうにしていたし。」

「関係ないで——」

??? 「あつるもーん!! こうして出会い、そして転生するしないの話をしている。此だけでも充分関係があるよ〜!!」

「煩い! 私に何が——」

??? 「ほら、もう泣き始めちゃったじゃない。辛かったよね? 寂しかったよね。望みが適って欲しかったよね。でももう良いよ。最期だし欲出しちゃえ!」

「……………ホントに、ホントに私が望んだ生き方に、なれるの?」

??? 「勿論!! さあ、どうする?」

てつきり、私がやったことは、許されない物だと思つてた。私の友達が、あのいじめっ子を殺されてしまって、それから私は、そのいじめっ子に復讐するために、殺人に手を汚してしまった。おかげで、私は警察に捕まり、それから死刑にされてしまい、世間を許せなかった。何でいじめっ子を、そうまでして生かしたいの? 先生も親も、誰も信じない……………。いじめっ子さえいなければ、あんな事にはならなかったのに……………。

でも、どうせ最後になるぐらいなら、転生でも何でもする!

「お願い! 転生させて!!」

??? 「待ってました! 任されました!!」

変わろう、二度とこんな思いをしないように!

??? 「それで転生先だけど、全ちゃんが作った世界に行つて、全ちゃんの転生者や息子と出会つて貰うよ。」

「その全ちゃんって、誰なの?」

??? 「全王神っていう、私の友達なの。あつちも転生してくれるように、今じゃ3人も転生したこともあるんだよ。」

「そうなのですか……………」

??? 「それで、転生する際には特典が与えられるんだ。神々を脅かすものでも、世界を滅ぼせるような力でも良いよ?」

「待って下さい、そうなると貴方が危険では……………」

??? 「かもね。でも放っておけないの。全ちゃんも昔、誰からも存在しない者扱いされていたんだ。何でも出来るってだけで、忌み嫌われてね。可哀想だと思った私は、話し掛けて、一緒に寄り添ってあげたの。それからかな? 友達になったの。偶に喧嘩もしちゃうけどね。」

神々の喧嘩って、私達からすればはた迷惑な気がする……………」

??? 「それで、決まった?」

「うーん、何でも良いですよね?」

??? 「うん。いくつ持っても構わないよ。」

「だったら、まずは『東方project』の『全能力』を扱えるようにして、全部のスペルカードを使えるようにして下さい。」

??? 「ほうほう、まだある?」

「fateシリーズの全宝具、そのスキルも扱えるようにしたいです。あと、不老不死、完全生命体イフのような無限進化が欲しいです。」

??? 「なる程。イフちゃん人気ねえ……。そういえば、息子も不老不死を持っていたわね。後は?」

「自分から戦いたいので、格闘や剣術、色々お願いします!」

??? 「OK! こんな感じかな?」

〈東方project〉

『全スペルカードを同時に使用できるようにする』『紅魔郷からの全員の能力を扱える』

〈fate〉

『全英霊の好感度は最大値』『全英霊の宝具、またはスキルをEX(狂

化は使用する場合のみ)』

〈無限進化〉

『完全生命体イフのような力を持ち、あらゆる能力を得る』『肉体強化のため、不老不死』

その他諸々

「自分で言うのもなんですが、チートですね。」

???「そうでしょそうでしょ？因みに全ちゃんの転生者も皆チートだよ。」

「出会ってみたいですわね……………」

???「それじゃ、早速転生させるよ。全ちゃんにも、連絡入れるから。」

「分かった。」

???「行ってらっしゃーい！」

私は、扉を潜る。此処から変わろう。私は、私の人生を歩むんだ!!!  
もう二度と、あんな思いをしないために！

sideChange

龍神王side

さてさて、あの子は無事転生したようだね。早速全ちゃんに連絡しよう。♡

???「もしもし全ちゃん！」

全王神『あ、龍ちゃん久しぶり〜！元気だった?』

龍神王「うん！もうアルティメットファイバーしたくなるぐらいだよ〜！」

全王神『それでそれで、何か用?』

龍神王「全ちゃんが作った世界で、私が出した最初の転生者を出したよ。」

全王神『お〜!!って事は、未来ちゃんやガルツチちゃん、あと英竜

ちゃんと出会うんだね!!何て言う名前なの?」

龍神王「その子はね、『神風深雪』ちゃんっていう、滅茶苦茶可愛いおにゃのこなの!」

全王神『えええええ!!羨ましい!!私も会いたいなあ……。』

龍神王「大丈夫、息子ちゃんとみつくんと出会えば、自動的に見えるから!」

全王神『ヒヤッホー!やっぱり。』

龍神王「可愛いはああああ!」

『『ジャステイス!!!!』』

sideChange

—千夏アジト—

ガルツチside

ガルツチ「ツ!」

愛花「如何したの?兄に。」

ガルツチ「何故か、一瞬寒気がした気がする……。』」

未来「いや当たり前でしょ……。』」

君が『大豪雪』を呼び起こしちゃったからだよ。」

仕方ないだろ!? 愛花が可愛すぎるんだから!!

ガルツチ「未来だって、楽しんでたじゃん。」

未来「まあ、確かにね。でも君の結界凄いね。アジト全体で護られてるんだもん。」

英竜「私もお邪魔させてしまったが、確かに凄いな。」

ガルツチ「まあ、雪が解けても沈まないようにした母さんは、凄いな。性格がアレだけど……………」

全王神『酷い! 何でガルツチちゃんはそんなに冷たいの? ツンデレなの?』

「ちよつとは僕の苦労を考えろ……………」

藍「それにしても、この子可愛いねえ。」

未来「でしよ?」

簪「それに、未来の妹だし。」

うーん、でもやつぱりその力は気になるよな。全王神でさえ超える力かあ……………」

全王神『あ、そうそう。未来ちゃんと英竜ちゃんに伝えて。龍ちゃんの初めての転生者が、この世界にいるって。』

え? っていうか龍ちゃん?

全王神『あ、そういえばガルツチちゃんは知らないんだっけ。私の友達に、龍神王っていう神様がいて、友達なの。』

嘘くん。全く知らなかったんだけど……………」

全王神『それで、名前は『神風深雪』ちゃんて言う、未来ちゃんみたいにつつごい可愛く、ちよつと英竜ちゃんと似ているって感じかなあ?』

マジですか……………」

全王神『んじゃ私、強化で忙しいから皆に伝えてねえ。』

丸投げされた……………。でも強化って、一体……………」

未来「ガルツチ? どうかした?」

ガルツチ「母さんから連絡があった。何でも、全王神の友人からの

転生者が、この世界にいるって。」

英竜「なんだって？」

藍「因みに、どんな人ですか？」

ガルツチ「可愛らしさは未来だけど、前世に関しては英竜と似てる感じかな？名前は『神風深雪』という人らしい。」

未来「深雪か……………」

どんな奴だろう……………。会ってみたいな。

sideChange

―ロスサントス―

神風side

クシユン！うー、まさか豪雪だなんて思わなかった……………。早く温まる場所……………。あ、もこたんの能力で、自分を暖めればいいんだ。

神風「さて、全王神がいう転生者は何処かな？」

to be continued  
→

## 第20話 幻影と破壊者と能力者

—ロスサントス—

深雪 side

さて、先ほどの豪雪が嘘のように消えたらしいけど、なんだったんだ？一度G T A Vやったことはあるけど、確かチートコードの一つに、何かがあった筈なんだよねえ……。

深雪「でも何処に居るの？全王神が言う転生者は。」

とりあえずナズーリンの能力で、探してみるけど………、駄目だね。何かと警戒しているのか、それとも全王神の息子という人が結界を張ってるかのどっちかだね。

まあ此処、G T A Vの世界だし、善悪なんてないのも当たり前だもんね。

深雪「だったら、自力で探すとしますか………。」

一応黄金律スキルでお金には不便がないけど、金銭感覚が狂っちゃうと駄目だし、必要な時以外は使わないで置こう。

でもまあ、ホントに何処なんだろ。まさか、その転生者は買い物に行ったりして………いやまさかね。

深雪「ん？」

あれ？なんだか揉め事が起こってるわね。ちよつと耳を澄ませてみましょう。

『ザッケンナコラーツ！』

『スツゾコラー！！』

………何でニンジャスレイヤーの忍殺語を使ってるの？って、あーあ喧嘩が始まっちゃったよ。皆迷惑になると思うし、止めてあげようかな。咲夜の能力で、お仕置きしないと。

まあ、お決まりの台詞は、ちゃんとと言わないとね。

深雪「『咲夜の世界』—時よ止まれ！—」

そして、世界は止まり、殴り掛かった男も止まった。さてと、先ずはこの男は、ゴミ箱のところに入れて、そしてこの人は袋に詰めて、ゴミ収集車にいれてつと。これでいいかしら。



深雪「そして時は動き出す。」

動くと同時に、これを見ていた皆は滅茶苦茶びつくりした。

『アイエエエ!』

『え!?あ、ありのまま、今起こったことを(略)』

『コワイ!』

『ゴボボーッ!』

だから皆何で忍殺語知ってるのよ。って上から2番目、絶対にポルナレフでしょ。でもまあ、転生者ならこれぐらいは知ってるでしょうね。って、大半の人失禁してるんだけど……………。いやまって、数人だけでイってるけど……………。

深雪「……………今の内に去りましょう。私は、何も見ていないって事で。」

私は何も見ていない。そして、何もやっていない。これ見てる皆、良いね?」

sideChange

ガルツチside

今日は愛花のために服を買いに、ロスサントスに来ました。何しろあの子、なんか知らないけど、白いワンピース1枚しか着てなくて、後はまさかの下着つけてなかったんだし。

未来「まさか、下着着けてなかったなんてね。」

ガルツチ「うん、僕もそう思った。」

もし僕達じゃなかったら、強姦魔に襲われてハイライトが消えてかつ孕ますまで犯し尽くすでしょうね。エロ同人誌みたいに。いやこれ自体が、エロ同人小説だったな。そもそも、この小説、名前変えたとは言え続編っぽい感じだし。

全王神『メタイ、さすがガルツチちゃん。メタ話を平然とやるわね。』

デッドプールと一緒にするなよ?」

そういえば、あの場所妙に騒がしいな……………って、あれ?何であの

人ゴミ箱に入ってるの？

そして、何である人はゴミ収集車に入ってるの？

何で大半の人は失禁してるの？

最後に何で、少数の人らは絶頂してるの？

ガルツチ「……………何があつたんだ？これ。」

未来「うーん、なんだろうね……………」

愛花「ねえねえ、次は何処なの？」

ガルツチ「お、おいおいちゃんと座って！見えちゃうって。」

とりあえず、後回しって事で、今は愛花の服と下着を買わないと……………つていうかあの時下着を着てないって、大丈夫なんかよ。

愛花「私はこのままで良いと思うなー。スースーして、ちよつと気持ちいいと思うけど。」

待て、それはそれで如何なの!?!とりあえず、急いで下着と服を買わないと、最悪ワンピースを脱ぎ捨ててしまう気がする……………いやそれだけは、絶対に避けないと。

ガルツチ「未来、ちよつと飛ばすよ。愛花がとんでもない事やらかす前に！」

未来「ラジャー！」

ガルツチ「ハイパーブースターオン！」

つてな事で、3分後服屋に到着し、子供服のところで似合う服を探し回った。途中で愛花が店員に下着を見せないパフォーマンスを仕掛けていたのを止め、下着のところで急いで似合うのを探し、そして見つけて買った。今回はおしゃれに余裕がなかったために、実用性重視になった。

まあ、仕方ないか。下着がないって言う非常事態だったし……………。

未来「何とかあったね……………」

ガルツチ「うん、きわどいところだった……………」

まあ、後はマルフォイに頼んでみようかな。うまくいけば、下着も作ってくれそうだし。

ガルツチ「さてと、後は帰るだけだな……………」

全王神『あ、そうそう。報告があるよー！』

ガルツチ「ん？」

全王神『天ちゃんとおつつくくんが作った、新たな世界が出来上がったっていう報告があるよ〜!』

新たな世界？

全王神『でもちよおつと問題があつて、まだ時代が決まつてないの。ううん、一応現代風なんだけど、時代の設定がまだつばいんだよねえ。一応G T A Vの和風バージョンつて感じ。』

ガルツチ「G T Aの日本バージョンつて言えば、『龍が如く』シリーズじゃないんですか？」

未来「あ、確かに。つていうか、龍が如くやってるの？」

ガルツチ「うん、0から6まで全部。」

未来「つていうか、ラジオを弄つて連絡してるの!？」

全王神『E x a c t l y !』

その通りで御座います

凄いな……………、ホントに。

ガルツチ「んで母さん、それで如何すればいいの？」

全王神『そこで!ガルツチちゃんには時代を決めて欲しいの!月夜見の継承者として!』

ガルツチ「……………虚王魔神かつ月夜見の継承者つて、なんか都合が良すぎる気がするが……………。まあいいですよ。その前に、英竜達にも話し掛けますんで。」

全王神『はいはい!でも、深雪ちゅあんも忘れないでね〜!』

ガルツチ「はいはい。」

つていつても、何処に居るつてんだ。如何見つければ良いんだ？

未来「うーん、ヒントになるのは……………あの場面だね。」

ガルツチ「え?あの場面つて、ゴミ収集車とゴミ箱に人が入つてたこと?」

未来「うん、他の人が見てたとき、大半失禁してるでしょ?酔っぱらいだったら、不思議に思わないけど、失禁する事だと思ふ?」

ガルツチ「……………あ、確かに不自然過ぎる。つて事は……………」

未来「その場に転生者がいた可能性がある事だね。」

ガルツチ「時間止めの能力者か、またはスタンド使いかのどれかだ

な……………」

でもスタンド使いの気配はない。しかもこの存在感ない力、恐らくは気配遮断かも知れない。それもEX並みの……………」

ガルツチ「イフ、転生者の気配探知をEX以上にあげて。探し回るよ。」

イフ「分かった。」

さて、一体何処にいるのかな？

sideChange

深雪 side

深雪「ご馳走様。お金はここに置いておくね。」

さてと、昼食を取ったことだし、もう一度ナズーリンの能力で……………つて凄いい反応!!

深雪「え?どの辺りなんだろう?」

何で急に?とりあえず反応がするところに行こう!!

つて、あれかな?なんだか凄すぎる反応があるけど……………」

『ガチャ。』

あ、開いたって事はこの人達だわ……………。つていうか、サイドテールの女の子に、男装した女性?そういえば、あの白いワンピースを着た子……………なんて可愛いのかしら。

深雪「あの、ちよつといいですか?」

???「あ、もしかして君が転生者?」

知ってるって事は、やっぱり転生者なのね。

深雪「そうよ。そう言う貴方も?」

???「まあそうだね。つて事は、君が神風深雪で良いね?」

深雪「ええ、そうとらえていいわ。貴女はなんて言うの?」

???「僕はガルツチ。全王神の息子で、かつて虚王魔神と呼ばれていた。こっちは門矢未来。君と同じ転生者だ。」

深雪「その可愛い女の子は?」

未来「僕の妹らしい子は、門矢愛花っていうんだ。」

愛花「宜しく、深雪お姉ちゃん。♡」

『ボビュルルルルルルルルルルルルルルルルウウウウウウウウウウウウウ  
ウウウツツ  
!!!!!!』

何これ……………、可愛すぎる……………。もう、ロリコンで  
……………いいかも……………。

sideChange

未来side

えー、鼻血出しながら気絶しちゃったよ……………。妹？が可愛いから  
仕方ないけどね。

未来「とりあえず、運ぼうか。」

ガルツチ「そうだね。」

それから暫くして、千夏アジトに到着し、英竜達が待っていたとき  
に球磨川禊という人が現れていた。

to be continued  
→

## 第21話 今起ころうとしてる世界

―千夏アジト―

ガルツチside

??? 『やあ、初めましてだね。』

そこにいたのは、学生服を着た青年の姿だった。そして、まるで怯えている鈴美もそこにいた。

念のために殺意のオーラを放つ。

ガルツチ「誰だ？あと鈴美さんに何をしようとする。」

未来「その人は球磨川禊。殺意は収めて、ガルツチ。禊、その人を離して。」

禊『はいはい。』

ガルツチ「……………分かった。」

未来がそう言うのなら、収めておこう……………。

未来「何か用？」

禊『うん、予想通り『零の龍神』の力、解放してるね。』『なじみの言うとおりだ。』

ガルツチ「なじみを知ってるの？」

禊『うん。』『それに彼女が目覚めた以上、どうやら動き始めそうだしね。』

深雪「動き始めるって、どういう事？」

禊『『運命の予言者』である、イエス・キリストから、あることを告げられたらしい。』『零と全が蘇る時、再び歯車が動き出す。』『新たな無の神、いや、虚神が虚数宇宙を目覚めさせ、再び全てを交えた戦いに赴く。』

ガルツチ「無の神!？」

深雪「え？あのく。状況が読み込めないんだけど。」

ガルツチ「かつて、無の神こと星の破壊者ラヴオスは消滅したと思われた。結構やばい状態だったんだけどね。」

未来「でも禊、虚神って？」

禊『恐らく関係してるのは、その妹と名乗る少女じゃないか?』『ガ  
ルツチとイフは気が付いているらしいけど?』』

未来「そうなの!？」

ちよつとではあるけど、まあそうだな。

ガルツチ「どうやらその愛花つて子、あらゆる世界の全員の能力が、  
この子に備わってるんだ。しかも全王神よりも、ディールーラー士より  
も強大な力を……………」

未来「嘘ーん、チートすぎない?」

深雪「私よりチートがいたなんて……………」

ガルツチ「だが、その子と一体なんの関係があるの?」

禊『それは、君達次第。』『それと鈴美、未来、ガルツチ、英竜、藍、  
夜神、土織。そして、龍神王に出会い、転生した者。君達にもまたそ  
の運命と闘う羽目になる。』』

おいおい、またかよ……………」

ガルツチ「何で運命は僕達を楽にしてくれないんだ……………」

禊『文句を言わない。』『それに君の責任じゃないんだ。』『だけど、  
最も重要な人物は……………」』』

すると禊は、僕を指差した。いや、正しくは……………」

ガルツチ「ジャックが?」

クリムゾン『……………俺と関係する、つて事は、お前のいい  
たいことが分かったぜ。』

ガルツチ「ジャック?」

クリムゾン『ガルツチ、濟まないが千夏アジトにいる全員に、この  
場を集めてくれ。』

数分後……………」

僕はジャックの言うとおりにし、フラン達と簪達、そして英竜達を  
呼び出し、大広間に集まらせた。

そして、禊はこれから起こることと、運命の預言者が予言した事を全て話した。そして、それに関係するジャックが、久方振りに姿を現した。

クリムゾン「ふう、久々だな！ここに出来るのは。」

簪「え!?!誰!?!」

クリムゾン「簪達には、初めましてかな？俺はジャックとでも呼んでくれ。鈴美の伯父だな。」

本音「へえ。伯父なのに、龍っぽい姿をしてるんだね。」

クリムゾン「俺達『零の龍神』は、いや龍族は皆この姿さ。鈴美は人間寄りだがな。」

鈴美「そ、そうだったのね……………」

クリムゾン「とりあえず、今回の元凶を話すが、恐らくは俺の兄貴『カオス・ゼロノス・デストラクション』。つまり『零の龍神』が、全てを掌握しようとしてる。」

英竜「ゼロノス?」

クリムゾン「あの野郎は相当な野心家で、俺や妹の事なぞ眼中になかった。彼奴はいつも、『いつかは全てを越え、全てを掌握してみせる!』って言ってたし、俺は兄貴と一緒にいるのが嫌だったんで、妹と一緒に出てってやった。」

それからは、ロストエンドの頃の記憶通りかも知れない。暫くして、僕はジャックに出会い、七つの大罪の世界で暫く居たときに、妹が殺されたと言い、ジャックは怒り狂い、七つの大罪の騎士に喧嘩を売った。だが、殺したのは別の七つの大罪の奴だったことを知り、その後の復讐を手伝い、見事撃破。

そして、ジャックとお別れして、僕は別の世界に出て、ジャックは妹を生き返らせるために、禁忌蘇生魔法を放って、ジャックの命の引換に、妹を生き返らせ、ギルサンダーに頼み、この世を去ったと思われた。

クリムゾン「正直、彼奴がやろうとしてんのが、此処までとなると、もう見逃せねえな。だから、皆に頼みがある！



『兄貴を、あの野郎の野望を打ち砕かせてやってくれ』!!頼む!この通りだ!」

ガルツチ「おいおい、何も土下座する事はないんじゃないんじや……………」

未来「……………英竜達は?」

英竜「確かに、全王神様を超えようだなんて、許せない奴よね。いいよ、手伝ってあげる。」

藍「私に出来ることがあるなら、手伝います!」

白夜叉「偶には、こういう刺激的なものもほしいのう。」

レティシア「まあな。」

フラン「それに、今更過ぎるわよ。ジャック。」

こいし「そうそう、ここには強い味方がいっぱい居るんだもん。」

ガルツチ「深雪は、如何するの?」

深雪「私は……………」

クリムゾン「行きたくないなら、俺は構わねえ。強制でも何でもねえしな。」

確かに、いきなり来て、いきなりこんなヤバすぎる戦に飛び出させるのって、やっぱり心配だしね……………」

深雪「私、行きたい。二度とあんな思いをしないために。」

クリムゾン「悪い、恩に着る。」

ガルツチ「だから、お願いだから顔をあげてくれない?あと土下座はいいから。」

あかんな、どうも僕土下座は苦手意識がでるな……………」

未来「それで、其奴の居場所は?」

クリムゾン「分かんねえ。だが、『零の龍神』に対抗するには『全の竜神』の力を貸さなくちゃならねえ。其奴は俺達と同様、滅んじまつてるしな……………」

未来「ううん、多分『囁告篇帙』か『神蝕篇帙』で調べれば、きつと出て来ると思うし——」

クリムゾン「甘く見ない方が良いいぜ。『全の竜神』は、俺達よりもひっそりと住んでいやがるし、何より何も残さねえようにしてるから、情報を探すなんざ雲を掴むぐらいの可能性だぜ？」

それ、完全に手詰まりになるんじゃないや………ん？

ガルツチ「あつたわ。」

クリムゾン「あつたんかよ!？」

ガルツチ「うーん、確かに滅んでるって書いてあるだけで、それ以外は曖昧だな。恐らく、何処かの世界で生きてるはずだ。」

クリムゾン「マジかよ………。」

簪「んじゃあ、暫くしたらこの世界に出るの?」

ガルツチ「千夏、お前は——」

千夏「大丈夫です。そんなことだろうと、すでにドツペルゲンガーの準備は出来ています。それよりまずは、天照大神様と月夜見尊様がお作りになられた世界の時代を——」

ガルツチ「それなら、もう決まってる。『平安時代』から『鎌倉時代』で頼む。」

全王神『はいはい——いい！天ちゃんとつくんに伝えるねえ〜!』

気軽だな………。

ガルツチ「まあ、完成するまでは、皆好きなようにしよつか。」

まずはあの2人が作った世界。舞台は平安時代の日本。だが、平安時代だが現代風。銀魂みたいな感じだが、ギャグ要素は、多分母さんが作るだろうな………。

ガルツチ「(さてと、次に大事が決まっちゃったことだし、そろそろ物語も動き始めそうだな。」

だが、僕は生き続ける。この幸せを、護るために!」

とりあえず、夜になったのは良いとして……………。

4人「二」「何が一体如何したらこうなった?」「三」

いやそもそも、何で来て間もない深雪さんとヤルの?そして藍達も  
乗り気だし、っていうか今更だけど、女性陣多くね!?!なにこのハーレ  
ム!?

英竜「なあ、何がどうしてこうなったのだ?」

レティシア「私に聞くな。元より、フラン達が企画したのだから  
……………」

深雪「え?っていうか私、何時から脱がされたの!?!」

こいし「私が脱がせました。」

ガルツチ「ごめん、深雪さん。うちの嫁達が……………」

未来「何でもフラン達は、親睦を深めるために、乱交パーティーを

始めたとか何とか………。」

英竜「ええええええ!!」

ガルツチ「マジですんません、うちの嫁達が………。」

愛花「それにしても、深雪お姉ちゃんのおっぱい大きいなあ………。」

ガルツチ「って勝手に揉んでるし!」

んで、肝心の簪は……。やっぱりペンもって、しかも露伴み  
たいに素早く書いてるわ………。

っていうか思うんだが、これリサ達には見せられないよね!?!早過ぎ  
るって!

まあ、寝ているから何も問題ないでしょ。多分………。

sideChange

アラヤside

どうも、未来父さんと母さんの息子のアラヤです。実はちよつと眠  
らない事があるんです。

何故なら……………。

アラヤ「この状況、如何すれば良いんですか!?!」

だって、鳳凰お姉ちゃんとりサお姉ちゃんの間で眠ってるんですよ!?!しかも、僕を抱き締めてるから、余計にドキドキします!

いえ、慣れてはいるんですが……………、一度エツチな本?っていうのを見て以来、凄くドキドキするんですよ!でも、りサお姉ちゃんとはともかく鳳凰お姉ちゃんとしたら、近親相姦になっちゃいます!

うー……………、見なければ、こんなことにはならなかったのに……………。僕のアレが、大変なことに……………。

どうか、お二人に気付かれませんように……………。

t o b e c o n t i n u e d  
→

## 第22話 深雪の過去

―千夏アジト―

ガルツチ side

ガルツチ「……………まさか、未来が性病に掛かるなんて。」

いやまあ、ぶっちゃけあれだけ出し過ぎたら、仕方ないよね……………。

うーん、一応性病でも治す薬とかあるし、案外強力なんだよね。ってかき……………。

ガルツチ「イフ、性病だけは何とかならなかったの？」

イフ「いや、治すことは出来るが、未来のは治す許容度を越えてしまい、治すことが不可能だったんだ。私がいなくても、なりはしないが……………。」

ガルツチ「結果、アジトがはみ出るほど出してたしね。未来の精子どんだけ出してんの……………。フェルグス・マック・ロイ並みの、いやそれ以上の絶倫なのかな……………?」

イフ「私もそう思った。だが、お前もお前で凄いなと思うぞ?」

ガルツチ「?」

イフ「何しろ、未来の精液を1日足らずで片付けたんだぞ?真似できないぞ?」

ガルツチ「あー、イフ達は知らないんだっけ?」

イフは首を傾げている。それもそっか。

ガルツチ「サキュバス達かき、時々でも良いから自分のでもいいから精液を取って、送ってもらえないかって言われてき。その時僕の量は半端なかったな……………。このアジトどころか、この世界を覆い尽くすんじゃないかと思うほど、いっぱい出したんだよね……………。」

イフ「お前もか……………。」

ガルツチ「でも、性病にはならなかった。」

イフ「おかしくね?身体感覚なくなっても、おかしくないだろう?」

ガルツチ「かもな。大体が風邪程度で済んじゃうから、逆に凄いや。」

イフ「確かに……………。お前の病耐性:反射でもあるのではないの

か？」

ガルツチ「反射だったら、風邪なんて引いてないよ。」

イフ「確かに。だが、気になるのだが……………何故サキュバスが？」

ガルツチ「ああ、実は最近、飲み物を開発しててさ。その時に僕が抜擢したんだ。結果は、大成功。あらゆる風俗店での販売が開始された。その後は……………まあご想像におまかせします。」

しかし、未来のも人気あるとはビックリだな。……………ん？待てよ？そういうえぼとあるサキュバスから、こんな事言ってたな。

『それにしても、この精液。飲めば飲むほど、性病すら掛からなくなってきたわ。』

これ使えるんじゃない!!って、おや？深雪さん。なんか暗い顔してた気がする……………。

イフ「行つて来い。大体が、お前の言葉で直るからな。」

ガルツチ「僕はカウンセラーじゃねえんだが……………。」

でも放っておけないし、一応追ってみるか。

sideChange

深雪 side

……………私、何してるんだろ。変わるために、転生してるのに……………これじゃあ——

ガルツチ「深雪さん？」

深雪「はい!？」

え？いつの間に私の後ろに来たの!?!あっちの方が気配遮断上手くない!?

ガルツチ「あの、どうかしました？なんか、暗い顔をしてた気がしたけど……………。」

深雪「あ……………」

嘘、生前の頃のポーカーフェイスが、全く通じてないの!? あ、さとの能力だったら、分かっちゃうか。でも顔で分かったって事は……………」

ガルツチ「あ、訂正すると、君の目が、なんか暗かったからさ。僕、ポーカーフェイスしている人の対策のために、目で見てるんですよ。動揺してたなら、分かりますしね。」

深雪「そうですか……………」

ガルツチ「何か、ありましたか？ 出来れば、力になりたいけど……………」

深雪「いいわ、こんなの私一人で十分だから。」

そうよ、これは私だけの問題。こんなの、私だけで——

『ギユウウウウウウ……………』

へ？ 何で抱き締められて……………？

ガルツチ「……………かつて、僕もそうだった。」

深雪「何が？」

ガルツチ「僕もまた、君と似たような事を思ってたんだ。『自分ならどうにか出来る。』『全員を守るなら、この命捨ててやる。』ってね。でもさ、無理だった。自分を騙し続けても、何時かはボロが出る。でも、それを見せないように、ずっと隠れていたんだ。」

深雪「……………」

ガルツチ「辛かった……………。隠し続ける自分と、もう本音を言っても良い自分と葛藤して、何時も、隠し続ける自分が勝ってる。皆に悟られないように、ずっとね。今はもう辛くなくなったけど、僕のような人を見ると……………放っておけないんだ。だから、お願い。暗い理由……………教えて。」

何でだろう、この人の声……………聞いていると落ち着いてくる。それに、安心感がある……………。

深雪「……………私の前世はね。」



ガルツチ「ん？」

深雪「普通の女子高生だったの。友達もいて、家族もいて、普通に、幸せに過ごしていたの。だけど……。ある出来事によって、その幸せが無くなった……。」

ガルツチ「……。。」

深雪「あるいじめっ子が、私の友達を虐めていたの。それも過激で、残酷で……。そして、友達はいじめっ子に殺された。私は許せなかった。何も出来なかった私を、友達を殺したいいじめっ子を……。。」

ガルツチ「……。復讐、したのか。」

深雪「ええ、だけどそれがいじめっ子の計画だった。でも関係なかった。友達の仇を取れば、それでよかったんだ。そして捕まり、判決で死刑が確定され、家族も会えないまま、牢獄にいたの。友達を殺したのは、彼奴なのに、復讐する顕現は、私にあるのよ！何で皆はいじめっ子に庇うのよ！私の友達を、殺したのに!!」

そうよ!!悪いのは彼奴、私は地獄に行く覚悟で、其奴を殺したの!!彼奴が虐めなかったら、どんなに良いことか!!

ガルツチ「……。僕だったら、徹底的に殺すな。」

深雪「でしょ!？」

ガルツチ「いじめっ子だけじゃない。仲間も、庇う奴も諸共、復讐するかもしれない。二度と、誰もいじめを起こさないように、恐怖を植え付けるかも知れないな。」

深雪「え?……。ちよつと、何もそこまでしなくても——」

ガルツチ「僕はさ、そんな奴が許せないんだ。例え全員が許そうとも、僕は絶対に許さない。滅ぼしてやりたいね。」

深雪「何で……。何でそこまで?」

ガルツチ「幼少期の頃、親父に裏切られた事があるんだ。お金がないからという、理不尽な理由でね。後から嘘だって分かったけど、でも僕にとって、許せないことだった。だから、親父も母さんを殺して、家を燃やし、あてのない旅に出たんだ。おかげで、僕の心は壊れちゃったんだ。」

深雪「……………ごめんなさい、思い出したくなかったでしょうに。」

ガルツチ「ああ、あんな思いは、二度と御免さ。俺だって、許せないさ。同情じゃなく、本気でね。其奴がこの世界に居たら、残酷な殺し方してやるよ。」

深雪「う、うん。って、ちよつと緩めて？ 苦しいから…………。」

ガルツチ「ご、ごめん。感情的になると、偶に『俺』になっちゃうんだよね。みつともないのに…………。」

意外、私だけじゃない。友達の為に、いじめつ子に怒る人がいるなんて…………。」

ガルツチ「復讐はいけないのは、重々承知かもな。許せないなら、それぐらいの仕返ししたって、いいし。お前は間違っちゃいないさ。」

深雪「はふう……………………。／／／／／／／／／／／／／／／／」

ガルツチさんが素晴らしい、私の頭を撫で始めた。凄く優しく、暖かい手だった。

でもガルツチさん、ちよつと恥ずかしい……………。なんだか、顔が真っ赤になっちゃいます…………。

ガルツチ「……………もう、大丈夫？」

深雪「うん、気に懸けてごめんね。」

ガルツチ「いいさ。放っておけないのは、お互い様っぽいしな。ホントは、優しい女性だから、笑顔を作らなきゃね。」

深雪「笑顔……………か。」

ガルツチ「そうさ。女性は、笑ってたほうが、可愛いからね。正直、僕が女の子っぽいって思われちゃってるけど……………。何で僕は女性扱いなの？ おかしくねえか？……………」

深雪「……………気にしてたのね。」

ガルツチ「これでもね…………。」

深雪「でも、そのサイドテール似合ってるよ。貴方らしいって言うか、なんて言うか。」

ガルツチ「なんか複雑だな……………。んじゃあ、僕はちよつとあるもの作ってくるから。」

深雪「分かった。」

私は手を振り、ガルツチさんは行ってしまった。

意外と、私みたいな人も居るもんなのね。復讐なんてダメってしかるかと思っただのに、肯定するなんて、少し歪んでるからこそなのかしら？

フランちゃんやこいしちゃん、そしてイリヤちゃんを受け入れたのは、もしかしたら……………。

だったら、今度は私が護らないといけないわね。

sideChange

ガルツチside

深雪さんを慰めてから暫くして、僕はあの時未来が出した精液の分析をするため、バケツにあった奴を小瓶に入れ、分析機で調べてみた。

ガルツチ「おいおい、ホントにこれマジで？」

一度人工で作った卵子で、未来の精液をかけた途端、すぐに細胞分裂をし始めていた。それを100回やった結果……………。

ガルツチ「マジかよ。妊娠対策しないとこれ、確実に妊娠出来るじゃないか。」

それだけじゃない。分析した結果、なんとあらゆる性病を無効化させる効果があると出た。更に、それを薬にすれば、それまで掛かってた性病は治り、二度と性病には掛からない体質に生まれ返させる力を持つていたのだ。

ガルツチ「……………これは、未来に伝えないと！」

僕は急いで、未来に電話をかけた。

ガルツチ「もしもし未来？朗報があるんだけど。」

未来『朗報？』

ガルツチ「君の精液を調べてみたけど、どうやら凄い薬にもなれそうだよ！」

未来『え!? 精液が、薬に?』

ガルツチ「一見信じられないけど、未来の精液には、大量のミッドカインに加え、あらゆる性病を無効化させる効果があるんだ。」

未来『嘘くん。僕の身体どうなってるの?』

ガルツチ「さあね。でも薬にすれば、それまで掛かった性病は治り、二度と性病には掛からない体質になるよ。」

未来『出来るのガルツチ?』

ガルツチ「魔法薬学の成績でSSランクを取った僕だぞ? 作ってみせるさ。ただ、デメリットは、あるかな?」

未来『あー、やっぱりあるよね。どんなデメリット?』

ガルツチ「それはだな。未来の精子つて、100%確実に妊娠出来るんだよね。それを薬にするって事は、相当な避妊方法じゃないと、確実に妊娠できるようになってるそうさ。」

未来『どうなってるの!? 僕の身体!』

ガルツチ「未来……………、頼むから電話越しで大声は勘弁して……………」

未来『あ、ごめん。』

また目眩が来てしまったら、困るしな。

ガルツチ「とにかく、未来の精液。使わせて貰うね。」

未来『僕のだけで良いの?』

ガルツチ「うん。案外それだけで、作れそうな気がするからね。」

未来『時間は?』

ガルツチ「それは作ってからじゃないと、分からないからね。んじゃ、作り始めるから切るね。」

未来『うん。楽しみにしてるよ。』

ガルツチ「サンキュー。」

『ピッ♪』

さてと、作るとしますか。量的に、余裕もあるし、失敗したのなら、レイス達に協力するってのも、ありだしな。

ガルツチ「んじやまあ、始めますかね!!」  
t o b e c o n t i n u e d  
→

## 第23話 性病を治す薬

—千夏アジト—

ガルツチ「……………出来たのはいいが、何故なのだ？」

僕は鍋の様子を見ると、オレンジ色をした液体が見える。材料は、勿論未来の精液。もう一度言おう。『未来の精液』。

それを入れて、攪拌し続けるが、結果は消滅。つまり失敗したのだ。どうやらそれだけでは完成は出来ないということになる。

だが諦めず、試行錯誤し続け、そして遂に完成した。が、気になる点があった。

ガルツチ「何で、僕好みの『ブラッドオレンジ』味なんだ？」

そう。毎回思うのだが、薬というのは、基本苦いのだ。勿論甘めもあるのだが、問題がそこだった。

初めて魔法薬を作ったとき、カシマール先生に伝えると、喜んでいますが、少ししてから不思議な顔をしていた。

カシマール『ガルツチ君、完成させたのは褒めよう。だがなぜ、チエリー味なのだ？』

何故か薬の『味』を変えてしまうのだ。

カシマール『しかし、なかなかの高度な魔法でもあるな。味の変化魔法、本来なら超高度な魔法と呼ばれていて、扱う物も少ない。

これを使い、毒薬を盛ることも可能だ。言わば暗殺特化魔法でもあるな。味を変えるだけで、薬の効果に変化はない。この吾輩を驚かせたことに、50点やろうではないか。』

当時は喜んでいたが、今となっちゃ、ちよつと罪悪感が湧き出てしまう。

ガルツチ「でもまた消すのもなあ……………。仕方ない、小瓶に詰めて、未来が帰ってきたら渡そう。」

一応効果は抜群。データで調べたら、永続的に性病には掛からない体質になった。まあ僕が飲んでも意味ないが、でも永続的は凄すぎる……………。

未来、ホントに君の身体どうなってんの？

本音「あれ？ガルガル君？何してるの〜？」

ガルツチ「薬を作ってたんだ。二度と性病に掛からない薬をね。」

本音「えー！凄い凄ーい！一口舐めて良い？」

ガルツチ「あーちよつと——」

本音「ん？これって、柑橘系〜？」

ガルツチ「大雑把過ぎるだろ……………。正しくはブラッドオレンジ

味、僕の好きな味さ。」

本音「へえ、それで私の身体は？」

ガルツチ「ちよつと待つてね。……………おー、成功だ。」

本音「ところで、材料は何に使ったの？」

ガルツチ「未来の精液。」

本音「……………ほえ？」

ガルツチ「もう一度言おう、未来の精液。」

うんまあ、普通かちこちになるよね。だって、未来の精液だとは知らずに舐めるなんて、多分気が付かないだろうしな。

本音「……………全部飲み干したくなつた。」

ガルツチ「おい待て!?保存用なんだから!？」

レテイシア「何の騒ぎだ？」

ガルツチ「レテイシア！濟まないが、本音を止めてくれ！未来のために作った薬を、失わせるわけにはいかないんだ!!」

レテイシア「え？まあ、手伝うが。」

本音「聞いて！みつくんの精液で使われた薬なんだって！」

レテイシア「フア!？」

おいこら！敵を増やすんじゃない!!

レテイシア「……………私は如何選べば良いのだ!？」

ガルツチ「悩んだアアアアア!!滅茶苦茶葛藤しまくってるウウウ

!!!!

簪「如何したの？」

本音「かんちゃん！聞いて聞いて！みつくんの精液を使った薬を作ってたんだって!!」

簪「なん……………ですつて!？」

ガルツチ「え？おい待て、簪！頼むから——」

簪「未来の精液ちよおおだああああああい!!!」

ガルツチ「アンタもかあああああ!!」

このままでは不味いと思つた僕は、咄嗟に大瓶に詰め、簪のスピードタツクルをよけた。

本音「『ジ・アース』!!」

ガルツチ「待ってっていつてるだろ!？」

っていうか、何でこの場で使うの!? やめろオオ!! ええい! こうなつたら、窓から飛び降りる他ない!

『バリーーーーンツ!!』

ガルツチ「そのまま錬金！破れることのないガラスに変えよ！」

簪&本音「待てええええええええ!!!」

2人も追いかけるように窓から飛び降りようとするも……………。

『ビターーーーンツ!!』

あつぶねえ、間に合つて助かつた……………。

『スタッ。』

未来「……………ガルツチ？何で窓から？」

ガルツチ「あ、未来お帰り。薬を完成したのはいいが、あの2人がね……………」

未来「（・——・；）」

ガルツチ「ほい、これが君の精液で作つた薬だ。」

未来「あ、ありがとう。」

しかし、なんのためらいもなく飲むって、どうかと思うけど……………。  
まあいいか。

未来「これで、性病にかからなくなったの？」



ガルツチ「うん、永続的だから二度と掛からないよ。」

未来「よかった。でも、なんかみかんの味がするけど——」

ガルツチ「あ、それブラッドオレンジ味。僕の好きな味。」

未来「そっか。そういえばさ。」

ガルツチ「？」

あれ、なんか妙に色目を使ってる気が——

未来「君の味は、どんなのかな？」

おい待て、流石にこの場は危ないって!!

未来「なんて冗談だよ。冗談。」

ガルツチ「洒落ならんよ………、凄くドキドキした………。／

／／／／／／／／／／／／

未来「それにしても、魔法薬学って凄いな。僕も習ってみたい。」

ガルツチ「うーん、今度カシマール先生に頼んでみるか。僕の元寮

官の人で、魔法薬学を教えているんだ。」

未来「そうなんだ。厳しい？」

ガルツチ「クセは強いけど、良い先生だよ。」

そういえば、鈴美さんのために、剣を作らないと………。暫くは忙

しいかもなあ。

t o b e c o n t i n u e d →

## 第24話 雷鳴を轟かす神罰の剣

—千夏アジト—

ノーム『おうガルツチどん、あんたが頼んでた鉱石、採ってきたぞ。』  
ガルツチ「すまん、恩に着る。念のため確認するが、何を採ってきた?」

ノーム『そうあせんなさつて。まず、最近になって登場した『サンダー・アダマンタン』に、『雷の玉』、『オリハルコン』、『クリプトン鉱石』、『雷神の宝玉』。後は、希少とも呼ばれとる『ゴッドフリークス・ダイヤモンド』じゃ。』

ナイスだ、ノーム。鉱石マニアとして、これまで以上に嬉しいことはないな。

ガルツチ「これなら、良い剣が作れるかも知れない。ありがとう、ノーム。」

ノーム『気にすることなか。例え旅を続けとつたつて、おいどんらの仲間じゃ!旅、がんばりんしゃい!』

ガルツチ「うん。」

さてと、久々に鍛冶の神の力を借りて、鈴美さんの武器を作るとしますか。でも、ここだとあれだな。ちよつと限定固有結界を使つてと。

ガルツチ「I am the bone of my blade  
e.

S o a s I p r a y,

『UNLIMITED WEAPON WORKS!』

僕は本来の詠唱を短縮させ、部屋一帯に果ての無い草原に、無数の剣。そして一本の大桜。

だが、あの血に塗れた草原や死体は何処にもなかった。夜の空には、無数の星が瞬いていて、一つの月が佇んでいた。おまけとして、空

から羽根が降り注いでいた。

ガルツチ「さてと、オリンポス神、炎と鍛冶の神へパイストス！コネク接続

!!」

『Connect Hephæstus please』

さあ、鍛冶の時間だ！

sideChange

イリヤside

今お兄ちゃんは、鈴美さんのための武器を作ってるらしい。確かに、鈴美さんの技量は驚いたわ。

私のバーサーカーヘラクレスには届かないけど、でもそれ以上に強いわね。あの力、多分9回ぐらいは殺すかもしれないわね。

ヘラクレス「お嬢様、紅茶で御座います。」

イリヤ「ありがとう、バーサーカー。」

未来「……………紳士だ。」

藍「紳士だね……………。狂化何処行っただらう?」

深雪「気にしたら、負けかも知れない。多分、ガルツチ達が知ってるでしょうね…………。」

まあ、私も驚いたわ。当時現博麗の巫女の時、突然喋り出すんだから、お兄ちゃんもビックリだったよ。

でも、慣れてって怖いわね。今じゃ普通に白いタキシード着て、射殺す百頭の全部の形態も復活したし、ホントに最強のバーサーカーナインライプスになったわね。あの金ぴかは除いてだけ……………。

認めたくないけど、あの金ぴかの宝具は勝てないわ。あんな無数な宝具、卑怯にも程があるわ……………。

鈴美「ガルツチちゃんは、何を作ってるのかしら?」



に強化させるぐらいの力を持つてるしな。

ガルツチ「んじや、手渡ししますか。」

固有結界を解除し、未来達がいるところに向かった。ぶっちゃけ言うが、僕の固有結界は、もう世界の改変させるぐらい強化している。未来は固有結界だと思ってるけど、あれでも加減はしてる奴だしね。まあ、いずれ見せるつもりだけどね。

ガルツチ「鈴美さん、完成したよ!」

鈴美「ホント!」

ガルツチ「これだ。ちゃんと鈴美さんに扱えるように、色々と調節しておいたよ。余った奴は、盾と刀にしておいた。」

鈴美「ありがとう、ガルツチちゃん!」

未来「鍛冶も出来たの?」

ガルツチ「いや?僕は鍛冶の神の力を借りて、作っただけだよ?」

藍「流石全王神の息子……………、真似できない。」

いやだから、僕は魔神だからって何でも出来るわけじゃないからね!  
!?何で神様ってだけで、何でも出来るって思われちゃうんだろ……………。

全王神『やつほー!!ガルツチちゃん!』

ん?母さん、どうかした?

オーデイン『全く貴様は、ホントに……………。』

えーっと、どちら様?

全王神『もう、オーデイちゃん!あ、ガルツチちゃんとは初対面かな?今のはオーデインって呼んで——』

何イイイイ!?レミリアが持つてるグングニルの持ち主だとオオオオオオ?!!?

オーデイン『まあそうだな。初めまして、全王神の息子よ。貴様も苦労かけてるようだな。』

ホントにそうだね……………。ホント、こんな母さんですみません……………。

オーデイン『気にするな、元よりこの神泣かせの扱いは慣れてる。』  
全王神『うー、オーデイちゃんが酷いこと言うなあ……………。全ちゃ

ん泣いちゃう。』

やめろ。また殴らなきゃならないのか。

全王神『またあの拳が来るの!?それは勘弁して!』

オーデイン『自業自得だろ、そりゃ息子がぐれるの当然だろ。』

全王神『(・ω・)』

それで、何か用かな?

オーデイン『そうだった。天照大神と月夜見尊が作った世界が出来上がったと、貴様らに報告しにきたのだ。』

おー!遂に来たか!!

全王神『でもその前に、行って欲しいところがあるの。』  
ん?行って欲しいところ?

全王神『みつくんがいた頃のジョジョの世界の4部、その後の世界だけ。』

..... 仗助が、いる世界か。

全王神『気まずい気持ちは分かるけど、あの仗助は違うからね?』  
分かってはいるが.....、それで何であの場には?

全王神『時空の賢者のプツちゃんから聞いたけど、新たなスタンド使いが杜王町を襲おうとしてるらしいの。』

..... 其奴らは、どんな奴らなんだ?

全王神『うーん、彼らは『円卓の騎士』と呼ばれるチームよ。リーダーは、勿論アーサーよ。ガルツチちゃん達は強いだろうけど、油断できない相手だから、気をつけてね。』

分かった。

オーデイン『信じているぞ、全王神の息子よ。』

さてと.....

未来「ガルツチ?」

ガルツチ「母さんとオーデインから知らせが来た。新たな世界が出来たって!」

こいし「ホント!」

ガルツチ「でも、その前に未来、ジョジョの世界に行かないといけない。」

未来「え？」

鈴美「杜王町で、何かあったの？」

ガルツチ「母さんが言うには、円卓の騎士と呼ばれるチームが、杜王町を襲おうとしているらしい。」

未来と鈴美は驚愕を隠しきれなかった。無理も無いだろうな……。

簪「それなら、尚更じゃないの!？」

本音「すぐ助けに行こう! みつくん!!」

オーフィス「我、助けたい!」

白夜叉「久々に、暴れ回ろうかの。」

レテイシア「未来、私と白夜叉はスタンドはないが、助けに行きたい。」

英竜「私も同感だ。」

ガルツチ「未来……。」

未来「……………行こう、杜王町に戻って、守りに行こう!」  
そして、皆は準備を進め、次なる世界に向かおうとしていた。

深雪「でも思っただけで、スタンドはスタンド使いしか見えないよね? 持っていない私達はどうすれば?」

ガルツチ「安心して。皆にはスタンドが見えるように魔法をかけておいたし、攻撃も出来るようにしておいた。」

士織「もうスタンドルールすら無視しちゃったね…………。」

イフ「では、戻ろう。未来と私の、始まりの地へ!!」

未来は扉を開き、僕達と英竜達は入っていった。

t o b e c o n t i n u e d →

未来の始まりの世界　く円卓の騎士く  
第25話　未来の始まりの地

―杜王町―

円卓の騎士 side

???「アーサー、準備は整いました。どうか、出陣の準備を――」  
アーサー「待ちなさい、ガウエイン。どうやら、この杜王町の何者かが入り込んだらしいです。」

ガウエイン「……………と、いうと?」

アーサー「おそらく、我ら『円卓の騎士』にとって、最大の脅威になりかねない者かも知れません。」

side Change

未来 side

戻って来ちやったね、僕の始まりの場所……………。

本音「此処がみつくんの始まりの場所かあ……………」。

簪「まさか、ホントにジョジョの世界で仗助達に会えるなんて、思ってもみなかったよ。」

ガルツチ「そうか?僕は気まずいんだけど……………。あの時敵同士だったし……………」。

フラン「うん。老ジョセフも、敵だったしね……………」。

こいイリ「うんうん……………」。



そこまでなのか……。つて、あれつて……。

良平「ん？ おお!! 未来ではないか!!」

未来「良平さん! ご無沙汰です!」

朋子「未来ちゃん!」

どうやら降り立った地は、仗助君の家だったようだ。仗助君、元気かな？

仗助「んく? どうかし……。ぬお!? 未来か!」

未来「久しぶり、仗助君。」

仗助「お前、久しぶりだなく! つて、鈴美!」

朋子「え? 嘘……。」

良平「見違えるように、変わったのう……。いやいや、鈴美が生き返った!」

ガルツチ「あ、それでしたら僕が説明します。」

ガルツチは此までの経緯を全部話した。

良平「なるほどのう、異世界の力つて羨ましい限りじゃ。まあ、自己紹介は——」

簪「凄ーい!! 生仗助だアアア!!」

仗助「!?」

未来「あ、その人は更識簪と言って、僕の恋人の一人なんです。詳しい話しは、中で。」

朋子「分かったわ。」

仗助「ついでだから、旅のことも話してくれねえか?」

未来「いいよ。」

そして僕は、仗助君の家に入り、今まで旅してきたことと、出会った人達、そして恋人の事まで話をした。

仗助「……。いやまあ、正直ここまで過酷だとは思ってもみなかったが……。」

良平「今一番驚きなのが、同じ男の娘と出来た子供がいるつて事が……。」

朋子「うん、私も驚いたわ……。その、ガルツチちゃんつて女の子な——」

ガルツチ「待て、僕は男だ！以前変わりなく！男です！」  
朋子「つて、言われても……………ねえ。」

『バタンツ！』

あ、ガルツチが倒れちゃった。しかも全身負のオーラが溢れ出ちやつてる……………。

ガルツチ「どうして僕こうなるのかなそもそも何で男の娘とかに生まれちゃったんだよおかしいだろ女体化で生まれたとは言えそれでも別に良いじゃ無いかも女として認めたくないよそもそもラクトが女体化させるのが悪いんじゃないか酷すぎるよ酷だよ残酷だよ誰も僕を男として見てくれる人がいないのかよなんでさなんでさなんでさなんでさなんでさなんでさ……………」

レテイシア「うわ……………、ここまで落ち込むガルツチは、初めて見た……………」

妻3人「大丈夫、お兄ちゃんのは発作だから。(ゝω・)b」

全員「発作なの!?! (OロO;)」

アレで発作って、滅茶苦茶怖いよ!?

アラヤ「そのお……………、母さんの事は気にしないで下さい。あと、女性扱いしたら、こうなりますし。」

東方家「以後気を付けます……………」

未来「アラヤと鳳凰は何ともないっばいけどね。」

仗助「どう言う基準してんだ……………」

イリヤ「気にしないで。」

良平「だが、何でまたこっちに帰ろうとしたのじゃ?」

ガルツチ「実はというとですね。」

東方家「復活早っ!?!」

うん、僕もそう思った。あの発作(?)が嘘のように復活し、座り直したのだ。なるほど、不死鳥とは伊達ではなさそうだ。

そして、ガルツチはここに来た理由を話し終えると、驚愕な顔をしていた。

良平「杜王町が狙われてるじゃと!?!」

仗助「その円卓の騎士の目的って、一体!?!」

ガルツチ「分かんないが、恐らくろくなもんじゃあないって事だな。」

朋子「そんな……………」

仗助「杜王町を泣かせようってんなら、この俺が許さねえ!」

すると、いきなりドアをぶち壊す音が聞こえ、滅茶苦茶焦った顔をした女性らしい人が皆を見た。

???「はあ、はあ……………」ガルツチ達というのは、貴方方ですか!?!」

ガルツチ「ん?誰だ?円卓の騎士の奴か?」

???「元ですが、コードネームはベディヴィエール。名前は佐々木愛梨、スタンド名は『アガードラム』」

仗助「ほう、早速敵が来たという訳か。」

ガルツチ「待って。元って、どういう事?」

愛梨「もうあのやり方にはうんざりだと思い、あの場から逃げたのです。奴らがやってることは、悪逆非道ばかりです!」

ガルツチ「……………」それでここに来たと。」

愛梨「そうです。目的は、善意も悪意もない平和にすること。つまり、闘争心、反逆心を持つてる者を全て殺し、誰にも逆らえない暗黒郷を作ろうとしているんです。」

全員「!?!」

ガルツチ「それで、裏切ったと。」

愛梨「ええ、そして叛逆の騎士であるモードレッドも、円卓の騎士を抜けています。」

ガルツチ「……………」信用しづらいが、今は君の言葉に信じよう。」確かに、急に裏切り、目的を話すなんてあまりにも不自然すぎる。

何か裏がありそうな気がするから、一応警戒した方が良くもただけど、今はこの人のいうことは信じるとしようかな。

簪「よろしく、愛梨さん。」

愛梨「はい。あ、重ねて言いますが、僕男ですからからね?」

仗助「なっ!?!俺女かと——」

『ドスッ!』

ん？何か刺さったような音が……。あ、愛梨さんとガルツチ  
が落ち込んでる。

だ、大丈夫なのかな……………？

t o b e c o n t i n u e d  
⇒

## 第26話 仮拠点

ガルツチ side

どうも、ジヨジヨの4部世界に到着し、早速出会うの気まずすぎる  
仗助に出会ってしまったガルツチです……………。

ぶっちゃけ平然と会話をしたのはいいけど、心底複雑な気持ちで  
す。だって、あの時敵同士だったんだよ!?平然と会話をしている自分  
が怖いよ!!

まあでも、まさか女の子と思われるなんて……………。オンナノコつ  
て……………。

ガルツチ「ハアアアアア……………。」

愛梨「……………。ズーン

イリヤ「これは、相当重いわね……………。」

朋子「ご、ごめんって……………。」

仗助「つて、それはそうと仮拠点はどうすんだ?流石に金かかるだ  
ろ。」

未来「大丈夫、お金はちゃんとあるから。」

ガルツチ「あ、それなら僕の魔法で空間を歪めて仮拠点の場所を作  
るけど。」

良平「……………どう言う性格なのか、分からぬのう。」

未来「でも、それがガルツチですから。んでガルツチが作る家は、  
やっぱり……………。」

ガルツチ「うん、というかもうお済みだね。というわけで、庭の  
方お借りしますね。」

仗助「おい、どこに……………ん?」

さてと、とりあえずこの辺りだな。

ガルツチ「Пространство обороны совещенства, Жемчужной реки защиты  
ты каждую катастрофу. (万全の守りの空間  
よ、あらゆる厄災を守りたまえ。)」

よし、白い渦が出来たな。後は中に入ってつ……………。

仗助「ん？なんだこの白い渦……………？」

未来「今あの空間の中で、家を作ってるんです。外装とか内装とか色々と。」

イリヤ「何で知ってるの、未来お兄ちゃん。」

未来「え？適当に言ったけど……………」

こいし「それで引き当てる未来お兄ちゃん、凄すぎるよ。」

ガルツチ「終わったぞ〜！皆、この空間の中に入って。」

しかし、まさか衛宮家の再現させてしまうとは、思ってもみなかったな……………」

イリヤ「これって、シロウのお家？」

ガルツチ「何故こうなったかは聞くな。でも部屋は多くした方だよ。一応布団も多めにしたし、何より無限の食材もあるからね。和洋中料理用や異世界の料理用の食材等々。まあ、僕らが食べれる料理限定だけだね。」

愛梨「それは有難い。何しろガウエインの料理は酷いもので、アースーですら食べた後決まってゴミ箱で吐いていましたし。」

あー、違うガウエインでも料理下手は同じだったのか……………。うん、多分ジャガイモを潰したただけなら料理とは言わないが、味付けすれば一応何とかなるが、とにかくガウエインは料理はしない方が良い。

アラヤ「どんな感じかな？僕みてくる。」

鳳凰「私も私も。」

ガルツチ「おいおい、はしやぎすぎて転けるなよ？」

リサ「わ〜い！」

簪「こら、リサ！」

……………うん、僕思うんだよね。ずっと思うんだけど……………。

ガルツチ「未来。」

未来「何？」

ガルツチ「結婚とかしないの？」

未来「フア!?／／／／／／／／／／／／」

フラン「あ、それ私も思った！」

本音「結婚かあ…………。そういえば、ガルガル君って、フラランちゃんとかいこいちちゃん、イリリンちゃんと、結婚してるんだっけ〜？」  
イリヤ「勿論よ。」

こいし「じゃなきや、指輪貰ってないしね〜。」

うん、何故だか知らないが、つていうか今更だけど、どうもこいしとイリヤと本音が会話をすると、どっちが話してるのか分かんなくなるよなあ……………。

全王神『そりやあ同じせ—————』

オーデイン『言わせぬぞ。』

うん、母さんが言いたいことはわかるが、やめたまえ。

未来「そういえば、ここガルツチが作った空間なのに、外と何も変わらない気がするんだけど、何で？」

ガルツチ「これか。実はというところ、どの次元にも属さない、いやそもそもどこにも存在する筈のない惑星なんだ。」

するとこの場にいた全員は、超音波並みの大声を放とうとしていたため、咄嗟に無言呪文版の『シレンシオ』を使い、超音波を防いだ。だってまたあの超音波を食らうなんていやだもん……………。

とりあえず超音波が来ないと思った僕は、すぐさま『シレンシオ』を切った。

レテイシア「貴様、そんなところを繋げるとか、どこまで規格外なのだ!?!」

白夜叉「そもそもよくこう言う星を見つけたな!?!私とて知らんかったぞ!?!」

ガルツチ「元々は隠居するためと思って、探しまくって、見つけたのが此処だったんだ。本当は、全てが終わったらこの場所で誰も関わらないようにゆっくりしたかったんだ。」

未来「あの言葉、元々そのつもりでいったのか!?!」

鈴美「つていうか、今さらつと隠居とかいった!?!」

オーフィス「ガルツチ、年寄りくさい……………。」

ガルツチ「元々ジジイの筈だったんだけど、どっかの誰かさんのせいで、若い姿になってんだよ察してくれ。」





## 第27話 聖弓のスタンド使い

―杜王町―

億安「ちつくししょう!!なんだってんだ!!」

???「フハハハ!!どうだ?我がスタンド『フェイルノート』の力は!!」

億安「(こりゃあ、俺のスタンドと相性が悪すぎるぜ……………。頼む、

康一!仗助を!!)」

『ドリアアアア!』

???「!?」

間に合った!つて、あの弓、まさか!!

ガルツチ「『トレース・オン投影開始』!我が錬鉄は崩れ歪む!爆ぜろ!!」

『カラドボルグX虚・螺旋剣』!!』

???「よつと!!」

僕が放った投影武器は易々と避け、弓を引くと閃光の矢が現れた。が、鈴美のスタンドを使い、防いだ。

仗助「億安!無事か!!」

億安「おうよ、仗助!」

未来「ガルツチ、あれつて?」

ガルツチ「なるほど、読めたぞ。『円卓の騎士』、つまり奴らが使うスタンドは、武器だ!そしてあの攻撃は妖弓フェイルノート。それを扱う奴はトリスタン、そうだろ?」

???「ほう、アグラヴェインが言ってたとおり、来ましたか!例え束になったところで、私のスタンド『フェイルノート』には勝てない!冥土の土産に名乗っておきましょう。私は遠藤鳥弓、えんどうちようきゆうアーサー王に従う『円卓の騎士』の一人だ!」

仗助「ちっ!『クレイジーダイヤモンド』!!」

仗助のスタンドと、鳥弓が放つ無数の矢がぶつかり合う。が、仗助は知らない。フェイルノートの恐ろしさは、こんなものではないと。

鳥弓「ハッ!真っ直ぐに撃っていると思ってるのか?」

仗助「なっ!?!」

一本の閃光の矢が、仗助の右肩部分に貫いた。

康一「仗助君!!」

鳥弓「ほらほら! 此奴はどうか——」

ガルツチ「やらせるか!! ナルト直伝忍術! 螺旋丸!!」  
カラドボール

未来「え!?!」

鳥弓「おっと! そういえば、お前達がいた事を忘れていたね。だつたらお前から先に!!」

ガルツチ「『アーチャー弓兵』! 『トリスタン』!! 『限定召喚』!! 無数の矢を見せてやる!!」

鳥弓「ふっ、そんなもの! 私には無意味だ!!」

ガルツチ「どうかな? それと………。未来達は他を当たってくれ! もしかしたら、他の皆も襲われてるかも知れない!! 此奴には、一度格の違いを見せてやらないといけないからな!!」

鈴美「倒せるの!?!」

ガルツチ「ああ、こんな奴。『赤子を殺すより楽な作業よ』!! 殺しはせんがな。」

鳥弓「吠えたな! 負け犬の遠吠えを!!」

ガルツチ「違うな、トリスタン。これは………。勝利への雄叫びだ!! 『擬似宝具』起動! 『ゲートオブパピロン王の財宝』!!」

鳥弓「何ツ!?!」

未来達は他の円卓の騎士を捜し当てるため、一旦バラバラに行動することになった。

ガルツチ「億安! 康一! 仗助を頼む!」

康一「わ、分かったけど、君は?」

ガルツチ「………。通りすがりの英霊使いだ。安心しろ、未来の仲間だからな。」

さてと、康一達はこの場から去ってくれた事だし、全力で行くか!

ガルツチ「無限の矢と武器を、グランドアーチャー冠位弓兵を、なめるな!! 征け!」  
鳥弓「穿て!」

弦を解き放つと同時に、双方の無数の矢と武器が走り、互いにぶつかり合い始めた。その光景は、まるでギルガメッシュとエルキドウの



ドローラーで無駄無駄ラッシュ使いますよ？

あとキング、僕は人じゃないんで。

ベリアル『そうだぞ！彼奴は化け物なんだからよ！』

キング『なっ、おい馬鹿!!』

ベリアル、それ悪口じゃない………………。どっちかというと、それ褒め言葉だよ。

4人『『『褒め言葉なの?!?!?』』』』

遠藤鳥弓

スタンド名『フェイルノート』

【破壊力：A／スピード：A／射程距離：A／持続力：D／精密動作性：  
使い手次第／成長性：D】

ガルツチに敗北 死亡<sup>リタイア</sup>

仗助「痛え……………、つてうわ、なんだこの惨劇。」

億安「なんじゃあこりやあ……………」。

あれ？仗助達が戻ってきた。

康一「あの、彼奴は？」

ガルツチ「見ない方が良い。というかあれは、地獄絵図だから。」

仗助「ああ、この惨劇から見てどれ程ヤバいのか、分かったよ

………。っていうかお前、スタンド使えよ!スタンド!!」  
ガルツチ「いいかい、仗助。この世にはな。『破戒<sup>ルルブレ</sup>すべき<sup>レイ</sup>全ての符<sup>カ</sup>』  
という物がある。」

仗助「それで?」

ガルツチ「このように、常識すらぶち壊すぐらいのものなのだ。とある究極生命体の言葉を借り<sup>!</sup>るならば………。『勝てば良<sup>!</sup>かろうなのだ<sup>!</sup>アアアアアアアアアア』!!!」

仗助「いやいや、それでもは! タンド使えよ!!」

ガルツチ「嫌そんなことしたら<sup>!</sup>、即死すると思うじゃん。僕のスタンド『ムーンライト・アウターヘル』の能力に『終焉』というのがあって、触れたらあらゆるものを終わらせる力があるんだよ。例えば人生つてのを———」

仗助「悪い、謝る。」

康一「うわー、チートじゃないですか。未来さん、この人規格外です………。っていうか今更ですが、鈴美さん居ませんでした!」

ガルツチ「今!」

仗助「ああ、その事ならガルツチが生き返らせたんだと。」

億安「マジで!」

正確には、聖杯<sup>ハト</sup>の『シン』を使って生き返らせたけどね。

ガルツチ「ただ、鈴美さんの事なんだけど、言っついていいか?」

3人「?」

ガルツチ「実は鈴美さん、彼女は『零の龍神』っていう血を引いて、元々人間とは程遠い存在だったんだよ。」

億安「え?それってつまり………」

ガルツチ「最初っから人間じゃあなかったって訳。だからって、冷たくするなよ?したらボロボロにしますんで。」

仗助「お、おう………。分かった、分かったからその殺意収めろ………」

ガルツチ「あと仗助、もし鈴美さんを傷つけたら、その自慢の髪形を丸刈りしますので、か・く・ご、しといてね?」

普通なら仗助はプツンとキレて殴り掛かるのだろうが、どうやら

僕の殺意によって恐怖をしたらしく、ガクブルと震えていた。  
さてと、まずは一人だね。

t o b e c o n t i n u e d  
⇒

## 第28話 叛逆の騎士VS裏切りの騎士

―杜王町―

未来side

ガルツチがトリスタンという人と戦ってる間、僕と鈴美、簪、本音、オーフィス、愛梨、そして愛花は円卓の騎士を見つけるために捜し回っていたら、紫の鎧を着込んだスタンドを持つてる男性と、由花子さんを守ろうと、ボロボロになっても守っている女性がいた。

???「まさか、我々を裏切るだけでなく、そのような者を守ろうとは、貴様は何処まで堕ちる気だ？モードレッド。」

???「黙れよ、ランスロット。関係ねえ奴を、いやそもそもお前らのやり方が気に食わなかったんだよ。」

愛梨「モードレッド！」

???「ちっ、その声はベデイヴィエール。貴様か。」

由花子「あ、貴方は？」

愛梨「話は後、未来さん！」

未来「う、うん！」

兎に角僕は、由花子さんを安全なところに避難させると、モードレッドという女性のスタンドが現れた。

少しだけその人と似ていたけど、スタンドの方は鎧を着込んでいて、何かの剣を握っていた。

愛梨「モードレッドさん、私も助力します。『アガードラム』！」

愛梨さんの右腕は銀色の隻腕に変わり、モードレッドと並んだ。

???「愚かな奴らめ、私の『アロндаイト』の力を忘れた訳ではあるまい？」

???「ああ、確かにあんたのスタンドは強いかもな。だからって、引くわけには行かないんだよ！行くぞ！『克蘭レス』！」

克蘭レスの剣はアロндаイトの剣はぶつかると、僅かだけどアロндаイトの方が、素早く攻撃していた。愛梨も接近して本体を狙うも、本体自体も剣で受け止めていた。

あれ？スタンドって、なんだっけ？

愛梨「セイツ！」

???「無駄だと、言ってるだろ！」

愛梨「ッ！」

???「ベデイ！」

???「最早これまでだな。では、潔く死ぬがいい！『アロンダイト・

オーバー——』」

鈴美「『雷帝の鉄槌』!!」

???「!？」

2人が殺されかけたときに、鈴美さんが丁度良いタイミングで雷を放ち、ランスロットと言う男を退いてくれた。兎に角、危ないところだった……………。

???「くっ……………、女。その力、もしや……………。いや、今は撤退する事にしよう。その前に女！名はなんだ？」

鈴美「杉本鈴美、『零の龍神』の最後の末裔よ！」

???「鈴美……………か、覚えておこう。命拾いしたな、ベデイヴィエール、モードレッド！」

ランスロットはそのまま光の扉のところに逃げ、消えていった。

???「すまない、助けられたな。」

鈴美「いいわよ、そんなの。貴方がモードレッド？」

???「ああ、俺は元円卓の騎士の1人、叛逆の騎士のモードレッド、真名『煉獄紅虎』だ。オレっ子だがこれでも女性だ。」

愛梨「ホント、無事で良かったです。」

紅虎「つていうかベデイ、危ねえだろ！下手したら死んでたかも知れねえつてのに！」

愛梨「モードレッドが心配だったんです！」

それからわーぎやーわーぎやーの何かと可愛らしい言い争いが始まった。うん、とりあえず助けられたのは良かったかもね。

ランスロット

真名 不明



スタンド名『アロндаイト』

【破壊力：B／スピード：B／射程距離：E／持続力：D／精密動作性：C／成長性：D】

見た目：f a t e／G r a n d O r d e r ランスロット（セイバー）

撤退

モードレッド

真名 煉獄紅虎

スタンド名『クランレス』

【破壊力：B＋／スピード：B／射程距離：E／持続力：C／精密動作性：E／成長性：D】

見た目：f a t e／G r a n d O r d e r モードレッド

生存

由花子「えーっと、ありがとう。それじゃあ私、康一君のところに  
行くね！」

由花子さんは、いつも通りだなあ……。康一君も、大変だね。  
あの人に好かれるのって。そういえばガルツチって、ヤンデレだった  
気がする。

うーん、なんて言うか天使と悪魔の両面を持つてるけど、どっちも  
可愛いからいつか。

紅虎「とりあえず、如何する？」

未来「そうだね、先ずは連絡した方が良いかもしれない。」  
今頃、みんなも助け終わったところかもしれないね。

t o b e c o n t i n u e d  
⇨

## 第29話 愛花の真意

―隠れ家―

ガルツチ side

ガルツチ「とりあえず、皆集まったね。」

未来「うん、先ずは杜王町の現状を、もう一度把握しよう。」

良平「そうじゃな。先ずは、今杜王町の現状じゃが――」

どうやらトリスタンと名乗る遠藤鳥弓とランスロットは囿だったようで、大半の杜王町の区域は占拠されてしまっている。

そして、それに生き残っていたのは、この世界のトニオさん、支倉未起隆、東方家全員、モードレッドが守っていた山岸由花子、虹村億安、広瀬康一、岸辺露伴。以外の人は恐らく死亡、又は捕縛した可能性もあるらしい。

未起隆「しかし、驚きました。何故円卓の騎士と呼ばれる者が、杜王町を襲ったのか。」

愛梨「それは私言います。円卓の騎士の目的は、恒久平和。つまり善意も悪意もない平和にすることです。」

仗助「改めて聞くが、矛盾してねえか？ だったら別に襲わなくたっていいんじゃないか……。」

紅虎「確かにそうだ。が、彼奴らは人類が邪魔、平和にするために、この世の全ての人類の力を奪おうと考えているんだ。虐殺だろうがなんだろうが、老若男女を殺していた。しかもそれを大勢の奴らに見せつけるために。」

ガルツチ「……………改めて聞くと、度し難い連中だな。それで愛梨さんと紅虎さんは裏切りをしたと？」

紅虎「ああ。」

相当な屑野郎の連中だな。トリスタンを殺したから、とりあえずはいいが……………。

仗助「とりあえず承太郎さんに連絡を入れようかと――」

ガルツチ「待った、承太郎は恐らく動けない。理由は不明だが、感がそう告げてる。」

仗助「なんだよそれ……………」

紅虎「あ、そういえばアーサー王の奴、何でか知らねえがやたらと  
いっても良いが、ある奴を探せとか何とか——」

愛花「!!」

ガルツチ「ん？」

あれ？愛花の表情が、一瞬強張った気が……………」

紅虎「何でも其奴はスタンド、能力、宝具、神器、異常、過負荷、精  
霊、反転等の全てを持っていやがるんだ。」

仗助「……………」なんだ其奴、勝てねえじゃねえか。」

紅虎「もし其奴が奴らに見つかり、捕まったら、一卷の終わりだ。も  
う円卓の騎士に逆らう者は、二度と現れなくなる。」

仗助「うっし！それじゃあ其奴を見つけて——」

未来「あれ？愛花？」

利用されるのではないかと恐れたのか、愛花は黙ってどこかにいつ  
た。

未来「ごめん、僕愛花の様子を見てくる。」

ガルツチ「僕も。」

紅虎「お、おう。」

とは言え、アーサー王がその力を求めてる理由が不明だな。でも、  
愛花が逃げるって事は、恐らく奴らの狙いは……………」

未来「愛花！如何したの？」

愛花「怖い……………」私……………」捕まりたくない！」

未来「え？」

愛花「痛い事なんていや！皆が死んじやうのはいや!!」

未来「愛花？ねえ、如何したの？」

ガルツチ「……………」愛花、もしかして……………」

愛花「……………」

ガルツチ「……………」なあ、聞いて良いか？愛花。何で、僕達に  
近づいたの？」

未来「え？」

ガルツチ「不自然過ぎるんだ。皆は教えていなかったら気付いていなかっただろうけど、僕には何か神々しいオーラを放っていたのが見えただ。」

愛花「……………そっか、ガル兄は気付いてたんだ。んじゃあ、白状するけど、私はある奴らのホムンクルス『実験台0号』なの。」

未来「ホムンクルス!？」

やっぱりか……………、人間にしては違和感を感じていたが。

愛花「造られたって事が分かったのは、名札だったの。私、造られたんだなあって。でも、なんのために造られたのか、分かんなかったの。でも、赤い服をきた如何にも優雅でうっかりしてしまいそうな紳士が現れて——」

ガルツチ「それ絶対遠坂家の1人じゃん。全く、”うっかり”一族め。」

愛花「それで、そのディスクつてのを触れた途端、凄い力が溢れ出たの。そして分かっちゃった。あの人は私を利用するつもりで、造られたんだって。だけど、全部の能力を得たお陰で、脱走して何処か遠くに逃げようと思ったの。そこで変わった世界の公園に着いたとき、未来兄とガル兄を見つけたの。それで咄嗟に思いついた。あの人の妹にして、隠れちゃえば良いんだって。」

ガルツチ「……………なるほど、だからあんな事を。」

でも先ず、そのオーラを隠していなかったのは失策だったと思うぞ？

さすがに違和感があったし。

未来「そうだったんだね。」

愛花「ごめんね、未来兄。騙したりなんかして……………。ガル兄も……………。でも、私これからどうしよう……………。このままだと、私……………。私……………」

ガルツチ「だからって離すわけないだろ？」

愛花「え?」

ガルツチ「ホムンクルスだからって如何した?妹じゃないから如何した?僕は別に気にしないし、これからも守るつもりだ。これでも

僕、大切なものを奪った奴はとことん奪い返し、二度と手を出さないようにメンタルブレイクさせてやるのが、僕なんだ。愛花が逃げてきたその組織に渡すつもりもない。」

未来「ガルツチ……………」。

愛花「兄に……………」。

ガルツチ「任せておけ。君が未来と僕に兄と呼んでくれた時には、もう僕らの妹だ。奴らに手を渡すつもりはない。」

そうだ。誰かを守るのなら、組織だろうがなんだろうが、敵にまわす覚悟ぐらいあるさ。

愛花「……………」ありがとう、兄に。」

ガルツチ「未来、絶対にこの子を守ろう。この子が殺される、又は手遅れになってしまったら、僕らの『負け』だ。」

未来「分かってる。絶対に守ろう。」

さて、戻るとしましような。多分話し合いは終わったことだし。

紅虎「戻ったか。」

ガルツチ「ああ、迷惑をかけたな。」

良平「それで、これから如何するんじや?」

愛梨「いずれにせよ、杜王町を奪還するほかありません。それから、アーサー王を殺すだけ。今はそれでいいです。」

ガルツチ「分かった。だが、アーサー王の相手は、僕と未来がする

—————  
深雪「待って、私もお願い。」

ガルツチ「深雪さん?」

深雪「貴方2人だけ格好付けさせる訳にはいかないわ。それに、何でだろ。そのアーサー王には、滅茶苦茶ぶん殴りたい気持ちなの。」

ガルツチ「……………」分かった、だが無理はするなよ。」

んじや、方針は決まったことだし、後は杜王町の奪還と円卓の騎士を倒すだけ!覚悟しておけよ、アーサー王。



## 第29・5話 麻婆を極めし者

―隠れ家―

とある日の朝、一人の男はあるものを作っていた。

仗助「ふああああ………、ん？おうガルツチ、おはよう。」

ガルツチ「おはよう、仗助。」

仗助「何作ってんだ？」

ガルツチ「麻婆豆腐。」

麻婆豆腐。

それは、ただ唐辛子が山のようにぶち込まれた一見雑な料理にも見えるが、豆腐を口に含んだ瞬間舌を焼く刺激がたまらない味覚をもたらす。

そう、辛さこそ至高、辛さこそ究極の味覚。辛くない麻婆豆腐など、

麻婆豆腐ではない！

仗助「ほう、麻婆豆腐………うげっ!？」

ガルツチ「？」

仗助「ほ、ホントに麻婆豆腐？」

ガルツチ「うん。」

仗助「グレートにへヴィイな色してるぜ………、大丈夫なんか？」  
ガルツチ「ああ、一応僕だけの一品だな。あー、味見はやめておけ。  
超越者じゃないと耐えられないぞ？」

仗助「ええええ………。っていうか、お前大丈夫なんか？もう一度聞けど。」

ガルツチ「大丈夫大丈夫、食べ慣れてるからな。おやつ代わりにもなるし。」

仗助曰く、あれでおやつ代わりになるのかよと、何とも言えない顔になっていたのだった。

そしてガルツチは、味見をしようと小皿を投影し、小皿に移し、舐めてみた。

ガルツチ「うーん、まだ辛さが足りないな。」

仗助「フア!？」





治してやれ。多分それで治る。」

やれやれと呆れ顔をしたガルツチは、持ってきたラー油を躊躇せずそのままドバツと入れた。

ガルツチ「後は暫く煮込めば、ようやく完成だな。一睡せず作ったから、もう踏ん張りだ。」

仗助「一睡せず、麻婆豆腐作ってたんかよ!」

億安「あううう……、腹があああ……」

康一「おはよ、仗助君。億安君? 如何したの?」

ガルツチ「僕の麻婆豆腐を味見してこうなった。それとおはよ、康一。」

億安「いいか康一、彼奴の麻婆豆腐は食うな! 地獄を知ることになるぞ!!」

康一「?」

由花子「おはよう、皆様。」

康一「由花子さん、おはよう。」

ガルツチ「あー、朝食は既に作っておいたから、後は食卓に置くだけだよ。由花子さん、すまないが代わりをお願い出来るか?」

由花子「ええ、いいですよ。後、何を作ってるんですか?」

ガルツチ「自分用の麻婆豆腐。味見はお勧めしませんよ? 億安みたくになりますんで。」

由花子「え? ええ。」

そして由花子は、ガルツチが作った料理を装い、食卓に持っていった。その途中、由花子はその麻婆豆腐を見た。

由花子曰く、あれは殺しに来ているかのような真っ赤な色をしていて、心底恐怖した顔をしていた。

ガルツチ「……まだ辛さが足りない気がする。」

2人「(あれでまだ!?)」

ガルツチ「ふうむ……、こうなったら言峰に聞いてみるか。ついでに例のアレのレシピの確認しなくては……」

そしてまた、キッチンから出て行き、庭の方に行った。

ガルツチ side

さてと、言峰に連絡するか。リアクターで、言峰に連絡つと。

ガルツチ「もしもし、言峰。ちよつといいか？」

言峰『これはこれは、愉悦部の精鋭隊のガルツチではないか。何か用かね？』

ガルツチ「ああ、今麻婆豆腐を作ってたんだが、どうも手詰まりでね。出来るだけ辛くしてはいるが、なかなか上手く行かない。」

言峰『ほう、それは困ったな。だが無理も無いだろう、何しろ『超究極天元突破四川風超絶激辛麻婆豆腐』を、お前が作っているのだからな。さすがの私でも、どう足掻いても駄目だったようだ。』

ガルツチ「何か、それに行き着く方法はないでしょうか？」

言峰『ふむ……………、如何すれば……………。』

バゼット『言峰神父、砂糖を持ってきました。』

言峰『ああ、ごく——え？』

ガルツチ「どした？」

言峰『バゼット、何故サトウキビなのだ？』

ダメツトエ……………、一体何処から何処まで脳筋なのだ？いや、流

石バーサーカーガールと言うべきか。

言峰『しかし、ホントに如何すれば……………ん？待てよ？』

バゼット『？』

言峰『……………そうだ！ガルツチ、これなら行けるぞ!!』

ガルツチ「どんな方法です!?教えて下さい！」

そして僕は、そのコツを聞きお礼の言葉を言った後、すぐさま冷蔵庫に走り、あるものを取り、摺り下ろし、『地獄のラー油』を混ぜ合わせ、そのままバツと入れた。そのまま攪拌し続け、味見をした。

仗助「……………ガルツチ？」

ガルツチ「……………。」

由花子「ガルツチさん？」

ガルツチ「……………。う。」

康一「う？」

ガルツチ「……………。美味しい。出来た、漸く出来上がった

ぞ。『超究極天元突破四川風超絶激辛麻婆豆腐』の完成だ!!!!!!」

4人「何その明らかに人間が食べたら死ぬほど苦しむような名前!?!」!!!!!!」

ガルツチ「失敬な、そう言うレシピがあつたんだ。察してくれ。」  
さてと、容器に入れて後は食卓に置くだけ。

未来「ふああああ……………、ガルツチおはよう……………」

ガルツチ「おはよう、未来。ご飯出来上がったよ。」

未来「分かった、みんな呼んでくるね。」

そして皆は起き上がり、すぐさま来た。4名は若干僕の麻婆豆腐を見て、引いてはいるらしいが……………」

フラン「お兄ちゃん、その麻婆豆腐って、まさか……………」

ガルツチ「そのまさかだよ。」

こいし「遂に出来上がっちゃったのね……………」

イリヤ「流石、もう麻婆を極めし者の称号を持つてもおかしくないわね……………」

未来「まあそれでも、僕らの口に合わせた麻婆豆腐を、作ってくれてるけどね。」

オーフィス「我、辛すぎるの、無理。」

簪「それにしても、まさか現実で呼ばれる日が来るなんて、思っ  
てなかつたよ。」

本音「私も……………」

白夜叉「不思議じゃのう……………、というかガルツチは辛い物好き  
じゃとは……………」

鈴美「そうね。」

レテイシア「無理はするなよ?」

ガルツチ「んじゃ、皆揃ったし、食べるか。」

未来「そうだね。それじゃ……………」

全員『いただきます!』

それじゃ、先ずはこの麻婆豆腐を食うとするか。さてさて、出来は  
良いとは言え、果たして……………?」

『パクッ』

ガルツチ「!!!!!!」

鈴木「ガル以ちちゃん？」

深雪「な、なんか凄い形相になってるが、大丈夫なの？」

大丈夫かつせ!? この世全ての苦しみを全て凝縮したかのごときの辛み、外部だけでなく、内部からも抉られるかのような痛み、そしてその痛みと苦しみの辛さを超えて至福とも言えるほどの旨さ。

一言言えば……………。

ガルツチ「美味しい。」

簪「……………あの幻想が現実のものになっちゃった。」

ガルツチ「言峰神父、やり遂げました……………。漸く、たどり着けました……………。  
アツアロン・マーボ全て遠き麻婆豆腐を……………。」

露伴「……………麻婆豆腐如きで涙するって、ちよつと食わせる。」

仗助「あ、バカ！」

露伴「ん？君は黙って——」

『バタンツ!!』

露伴「グオオオオオオオオ……………。」

鈴木「露伴ちやあああああん!!!!」

仗助「だから言ったのによ……………!!」

良平「んじやあ、儂も食べて——」

全員『それは絶対に駄目!!!』

自分が作ったのもなんだが、良平さん。あんた食ったら即死だぞ!!

露伴「凄い体験した……………、一生にないリアリティを手に入れたが、もうこれ以上はいい……………。」

ガルツチ「美味いとおもうんだけどなあ……………。」パクツ

愛花「普通じゃないと思うよ、それ。」

未来「(もう、超がつくほどのMなんじゃないのかな?)」

全王神『つつくん、アレ食べる?』

士『いやいや、俺は嫌だぞ!? 束、お前は?』

束『勘弁して死んじやいます。』

風龍『あ、それなら生き返った紫に食わせるのはどうだ?』

3人『それだ!!!』

なんか念話で変な会話をしている気がするが、まあいいか。とは言え、また作りたいなあ……………。

t o b e c o n t i n u e d  
⇒

### 第30話 杜王町奪還作戦

―杜王町だった町―

ガルツチ side

作戦決行の日となり、皆は外に出た途端、驚く場所が変わっていた。今までの杜王町の風景はなく、あったのは城壁ばかりだった。

仗助「俺達の町を……………!!!」

ガルツチ「戦闘向きじゃない人は、隠れ家に入っで。それにしても、此処までとは……………」

未来「……………如何する？」

ガルツチ「いずれアーサー王を倒すことになる。どうせなら、正面突破がいいだろう。簪達は、捕虜が居れば救出してあげて。アラヤ、鳳凰は僕達に着いてきて。フラン達も。仗助達は……………」

仗助「好きに暴れさせて貰うぜ。奪還するなら、奴らを滅ぼしてやらだしな！」

???「悪いが、私が居るかぎり壊させはしない！」

城門から現れたのは、鎧をつけ、大きな盾を持った青年がいた。

ガルツチ「その姿から察するに、ギャラハットか。」

???「ご名答です、アーサー王に楯突く者よ。私はギャラハット、真名『えのしまじゆん江ノ島盾』。この理想郷を守る騎士なり。」

ガルツチ「あの悪事を働いてるといふのに、それを守るとは……………大した忠誠心だな。」

盾「ふつ、元より彼女が外道に陥りようが、私はただ守るだけの存在。彼女の理想郷を邪魔する者は、一匹たりとも通しはしない！我がスタンド『ラウンドシールド』で、貴方方の野望を阻ませて貰う！」  
仗助「グレート、だかこつちだつて意地がある。そこを退かせて貰うぜ！『クレイジーダイヤモンド』!!」

『ドオオオオラアアアアアア!!!』

クレイジーダイヤモンドを出した仗助は、彼のスタンド『ラウンドシールド』に殴りを入れた。そのままラツシュをかける。が、耐えていた。

盾「悪いが、お前達のラツシユを使おうが、私には勝てない！」  
仗助「くつ、なんだあの硬さ!? ホントに利いてんのか!？」

ガルツチ「……………アレを使うか。『セイバー剣士』、『アルトリア・ペンドラゴン』、『盾兵《シールド》』、『ギャラハット』、『インク限定召喚。』」

僕は直ぐさま、アルトリアの宝具である『エクス約束された勝利の剣』とマシユが持っていた『ラウンドシールド』を召喚させ、前に出た。

というか、この盾重いな……………。多分重量再現させるためだとは思  
うが、此処までのものか？

ガルツチ「行くぞ、どちらの盾が碎けるか、勝負だ！」

盾「こい、私は決して屈しない！」

ガルツチ「おい、敵の僕が言うのも難だが、その台詞は禁句だ。」

絶対エロ展開になりそうな気がしてならないんだけどなあ……………。

ガルツチ「ハッ!!」

盾「無駄だ！」

魔力を込めて剣を振るうも、『ラウンドシールド』が邪魔されてい  
て、どんなに斬っても弾き返されてしまう。

ならば、之ならばどうだ？

ガルツチ「『シールドバニツシユ』！」

盾「!？」

ぶつかったのか、相手は仰け反る。チャンスだ!

ガルツチ「ストライク・エア風王鉄槌!!」

盾「くうう……………!!!」

仗助「すげえ……………」

ガルツチ「ヴォーテイガー反転! 卑王鉄槌!!」

盾「なっ!？」

未来「反転させた!？」

ガルツチ「『アトア・ライブ』の精霊つて、反転も出来るんだろ  
? その応用さ。」

盾「このままでは不味いですね、仕方ありません!

真名、開帳—— 私は、災厄の席に立つ。

それは全ての疵、全ての怨恨を癒す我らが故郷。



顕現せよ!! 『いまは遙か理想の城』!!!」

ちつ、ここで鉄壁の守りかよ! だったら、それを超える宝具で!! 彼方が対悪宝具なら、こっちは対善宝具!

ガルツチ「ギヤラハット、反転!」

盾「まさか……………」

ガルツチ「反転、開帳——我は、厄災をもたらす者。

それは全ての痕、全ての怨恨を蘇らせし、厄災の故郷。

怨念よ、高らかに叫べ!! 『いまを滅ぼす城の災厄』!!」

『ラウンドシールド』は崩れ去り、剣と化した物は黒い光を纏い、そのままギヤラハットで斬る。瞬間、相手のラウンドシールドにヒビが入った。

盾「ぐつ……………、このお……………!!!」

深雪「ガルツチ! 私も手伝う! 災禍『呪いの雛人形』!!」

盾「こんなところで、!! こんなところでっ!! 負けてたまるかああああああああ!!!」

盾から凄まじいほどの風圧が来た……………。それと同時に、相手のスタンドの損傷が激しくなっている。

ガルツチ「お前、いい加減にしろ! 死ぬ気か!」

盾「構わない! ここで死ぬのも本能だ!!!」

ガルツチ「馬鹿か!? スタンドが砕けたら、お前悲惨な事になるんだぞ!」

盾「重々承知だ!!!」

駄目だこの騎士、意地でも死ぬつもりじゃねえか!? あーもー!!! 自分が言うのも難だが、もうどうなっても知らんぞ!!!

ガルツチ「簪!! 『ウルトラ・モンスターズ』を頼む!! 飛びつきりデカいのを頼む!!! 城壁諸共吹き飛ばす威力を持った怪獣を!!」

簪「え、ええええええええ!? そんなことしたら、ガルツチと深雪が!!!」  
ガルツチ「安心しろ、食らって死ぬほど柔じゃない! だから!!!」

side Change

簪 side

ベリアル『まだ気にしてんのか、簪。』  
当たり前でしょ!?もしホントにガルツチに当たったら、最悪――

ベリアル『阿呆、彼奴の力を見くびりすぎだ！彼奴の覚悟は、俺ですら恐れ多い程のものだぞ！それを無にさせるつてののか!?』

確かにそうだけど……………、でも!!

ガルツチ「簪!!!だったら、姉を超えろと思つて放て!!僕は君の姉はどんな人なのかは分からない。けど、今の君は、姉を超えている!!後は、お前の覚悟次第だ!!!超えるべき姉を、今ここで見せつける!!!」

お姉ちゃんを……………、超える……………?!!!!!!

ガルツチ「僕はな、兄さんを超えようとは思つたことはなかったが、実力的には既に、兄さんを超えていた。本当に超えようと思えば、兄さんを超えることは出来る！だから、今一度だけ、お前の覚悟を、姉に見せつけるんだ!!!」

そうだ……………、今の私はお姉ちゃんを超えようと頑張つてたんだ……………。未来や、ガルツチと出会つたおかげで、私は強くなつてきてる……………。

本当に超えろつて言うなら、私は……………、私は……………!!!

簪「私は、もう迷わない!!!!!!」

『complete! One of ability Instability!!』

『モードハイパーモード  
形態超越形態移行。此より、『光の戦士達』と『大怪獣達』の使用が可能です。』

私の専用機から、自動音声が響く。

簪「行くよ!! 『召喚』!!」

『ハイパーゼットン』!! 『ダークバルタン』!! 『キングジョーブラック』!!』

すると、私の後ろにその3匹が現れ大きく唸り声をあげていた。

仗助「うげっ、でっけええええ……………」

康一「……………此もう、スタンド使っても勝てそうにないなあ……………」

仗助「俺もそう思う。」

露伴「凄い……………、簪君! 君は最高だ!!! 何というリアリティを見せてくれるんだ!!!」

未来「露伴さん?」ニツコリ

露伴「……………ごめん、それは勘弁してくれませんか?」

未来「簪!!」

ガルツチ「思いつきしやっただれええええええええええ!!!」

簪「お願い、ガルツチを援護して!!!」



盾「ハハハ……………、そう……………ですか……………。アー  
……………サー……………王……………。も……………う  
……………し……………訳……………ご……………ざ  
……………」。

盾のスタンド使いは、一筋の涙を流し、息を引き取っていった……………。

side out

ギヤラハット

真名 江ノ島盾

スタンド名『ラウンドシールド』

【破壊力：Z／スピード：―／射程距離：―／持続力：EX／精密動作性：―／成長性：E】

技 『ロード・キャメロットの城』

見た目 マシユが持ってた盾

防衛するも、守り抜く事出来ず 死亡<sup>リタイア</sup>

ガルツチ「……………」 『トレース・オン 投影開始』

何を思ったのか、ガルツチはスコップを投影し、アンジエロ岩の隣に掘り始め、人が入れるぐらいの穴となった途端、盾を抱え、その穴の中に入れ、そのまま埋め、石碑を建てた。

『アーサー王を守ろうとした英雄』

江ノ島盾

アンジエロ岩の横で眠る』

ガルツチ「行こう、杜王町を取り戻すために……………」

t o b e c o n t i n u e d  
→

### 第31話 太陽の騎士

—??? 玉座—

アーサー王「……………アグラヴェイン、戦況は？」

???「はっ、ランスロットは裏切り者により死亡、城壁の守りであったギヤラハットは死亡。その他は此方の資料を……………」

アーサー王「……………やはりこうなるか。まあ、どちらにせよ、ガウエインが負ければ、今度は私だろう。」

???「いけません！王直々に言っては——」

アーサー王「アグラヴェイン、お前は本当に頼りになった。元より、これを決めたのは——」

???「王よ、私の我が儘を付き合ってもなお、そこまで……………。」  
アーサー王「……………お前はすぐにあれの起動をしろ。」

???「ハッ！仰せのままに。」

—???—

ガルツチ side

しかし、まさか兵士やら傭兵やら色々雇っていたとは思わなかったな。まあ5人で一掃したから、是非もないよね。

ガルツチ「そろそろ玉座に近い、もうそろそろ——」

???「そこまでだ！『エクスカリバー・ガラディーン転輪する勝利の剣』!!」

ガルツチ「『ロー・アアス熾天覆う十四の円環』!!」

いきなり炎の波が襲って来るも、14の花弁の盾を使い、防ぎきつた。

???「なるほど、トリスタンを討つただけのことはあるな。」

ガルツチ「その聖剣、つて事はガウエインか。」

???「ええ、初めまして。私はガウエイン、真名は『焰陽炎』、アーサー王の幹部です。」

深雪「そこを退け！」

陽炎「断る。通りたいのなら、私を倒してからにするが良い!!行く

ぞ、『ソード・キャメロット』！

ちつ、存在そのものをガウエインになる能力か。結構厄介なスタン  
ドだな……………。

深雪「ここは私に任せて！『投影開始』！」  
トレース・オン

え!?何で僕の生命の樹の剣の投影出来るの!?

陽炎「たかがそんな物に、負けやしない！」

深雪「洪水『デリユーヴィアルメア』!!!」

おいおい、弾幕出すのかと思つたら本物の津波を引き起こしやが  
た!?

陽炎「水如きで、私の焰は消えん!!」

深雪「どうかしら?『氷結傀儡』!氷符『アルティメットブリザー

ド』!!!」

ガルツチ「あれつて、チルノのスペルカード!」

深雪「まだまだこんな物じゃないよ!冬符『ノーザンウイナー』!!!」

陽炎「くつ、愚かな攻撃をしたところで、私は負けん!『忠義の剣  
閃』!」

拙い、何が拙いかというと、属性的に相性が悪い。そう、ポケモン  
で例えるなら、氷技で炎ポケモンを攻撃するというぐらい相性が悪い  
!

まあぶつちやけ、うちには『ホワイトキュレム』を捕まえたことも  
あるけどね……………。

深雪「くつ、氷じや駄目って訳ね……………。だったら!」

陽炎「太陽オオオオオオオ!!!」

深雪「キヤツ!」

陽炎「不夜の力を、思い知るがいい!!  
『転輪する勝利の』—————』」  
エクスカリバ

未来「深雪さん!!」

ガルツチ「お前が昼なら、僕は夜となろう!!『不昼』!!」

陽炎「なっ!?!光が!」

夜が現れたのか、彼が纏っていた光が弱められ、僕はそのまま斬り  
裂いた。



陽炎「ガハッ!？」

深雪「ガルツチ!？」

ガルツチ「月夜見尊の継承者だぞ?それぐらいの対策はしている!今ここに日食が始まった。深雪さん、この刀を使い!!」

僕はすぐさま、月光・闇夜丸を深雪に投げつけ、その手に持った。ガルツチ「其奴には太陽を斬り裂く力も備わってる。ついでだ、妖夢の力を使い!!」

深雪「つて、カード!?いや、使い方はもう知ってはいるけど……………」

陽炎「こんなところで、負けてたまるか!!」

深雪「『セイバー剣士』『インストール魂魄妖夢』!夢幻召喚!!」

深雪の服装は変わり、妖夢の服装へと変わった。そのままガウエインに走り、技を使おうとしていた。

陽炎「威力は落ちようとも、お前を倒せるなら十分な火力だ。これで終わりだ!『エックス転輪する勝利のカッパ』……………」

深雪「断迷剣『迷津慈航斬』……………!!!」

陽炎「ッ!？」

深雪「ついでにもう1発!魂符『幽明の苦輪』!!」

うわ、深雪さんが二人になったよ。つていうか、もう一人は楼観剣と白楼剣の二刀流か。

W深雪「これで終わりよ!!剣伎『桜花閃々』!!」

未来でも驚くようなスピードを出した深雪は、目にも追い付かない斬撃を出し、そのまま鞘にしまった。

途端にガウエインは血飛沫と桜の花びらが舞い散りながら、倒れていった。

陽炎「こんな……………。答は……………。たかが……………、スタン  
ド使いじゃない……………。奴に……………。負け……………。」

深雪「悪いけど、貴方なんか私に勝てると思わないでよ。」  
そして妖夢のカードが戻り、元の白と青のワンピースに戻った。

ガウエイン

真名 焰陽炎

スタンド名『ソード・キヤメロット』

【破壊力：B＋／スピード：B＋／射程距離：E／持続力：A／精密動作性：Z／成長性：E】

装着型スタンド

見た目 fate／Grand Order ガウエイン 最終

霊基

深雪に敗北 リタイア死亡

深雪「ありがとう、ガルツチ。」

ガルツチ「気にするな。」

アラヤ「深雪お姉ちゃん、格好良かった！」

鳳凰「私も!!」

深雪「……………あ、ありがとう。」

今めつちや震えてねえか？つていうか、深雪さん。何か目覚めかけ

てない？とりあえず、刀とカードは戻り、ガウエインは倒れた。後は、アーサー王だけだな……………。

—??? 玉座の間—

僕等は玉座の間に着くと、そこにはまさしく王者と言うにも相応しいような服装をした女性がいた。

???「その様子、どうやらガウエインを退けたようですね。それと、おやおや。これは懐かしい顔がいますね。」

深雪「やつぱりアンタね、まさか転生していたなんて思わなかったよ。」

ガルツチ「知り合いなのか？」

深雪「ええ、本当に驚いたわ。誰に転生してもらったの？『門真小百合』。」

小百合「誰とは、また随分な言い草ですね。深雪。でも教えましょう、転生してもらったのは、全王様よ。」

深雪「全王様？」

ガルツチ「それって……………、まさか母さんの!？」

おい母さん、どういう事だ!？」

全王神『あの弟、どこまで私に恨みを持つてるのよ……………。巫山戯た幻想をお持ちのようだね、ホントに!』ガンツ

あれ？なんか珍しく苛立ちが聞こえる気がする……………。

小百合「全王様から直々に転生してくれて、しかもスタンドはfakeのアルトリア全員の宝具をくれたわ。貴方をもう一度絶望に陥れるために。」

深雪「何処までも不愉快ね、私の友達を奪って、何がしたいの!!」

小百合「決まってるでしょ？貴方に何度も絶望に落としてあげたいの。何度でもね。」

深雪「……………なんて吐き気を催す邪悪なの。最低最悪なアマだね。」

小百合「嬉しい褒め言葉ね、それが遺言って事でいいわ。どのみち、全王様から命令されてるの。『クソ姉貴に転生した者共を刈り尽く

せ』、ってね。」

ガルツチ「……………もういい、喋るな雑種。」

小百合「へ？」

今のでわかった、此奴は二度と転生させない方がいいな。

ガルツチ「母さんを侮辱したのは結構だが、あれでも僕の母親なん  
でね。たかが特典如きに、俺達を倒そうなぞ、無駄なんだ。無駄無  
駄。」

小百合「ふーん？私に倒せると言うのか？アヴァロンの宝具を持っ  
た、この私に。」

ガルツチ「勝てるね、何しろ僕は……………そのアヴァロン  
その物を消す力を持つてるんだ。お前がどんなスタンドを使おうが、  
お前には決して到達できない領域に居る。

その根端を見せてやる。」

さてと、見せてやろうかな。僕のを……………!!

『I am the bone of my blade.』

チ

205

shadow is my body, and phantom is my

I have created over a thousand blades

Unknown to Evil,

Known to justice.

Un<sup>た</sup>aw<sup>だ</sup>ar<sup>一</sup>e<sup>っ</sup> of<sup>の</sup> d<sup>闇</sup>ar<sup>に</sup>k<sup>墮</sup>kn<sup>ち</sup>ess<sup>ず、</sup>,

Nor<sup>た</sup>aw<sup>だ</sup>ar<sup>一</sup>e<sup>っ</sup> of<sup>の</sup> l<sup>光</sup>igh<sup>を</sup>t<sup>持</sup>.<sup>っ</sup>』

未来「あれ？詠唱が、全く違う。模擬戦に使ってた詠唱と、この詠唱は一体……。」

そりやそうだ、何しろこれから起こるのは、”第零宇宙”を巻き込むぐらいの力だからね。

Ever<sup>永</sup>last<sup>速</sup>ing<sup>の</sup> s<sup>苦</sup>uff<sup>し</sup>er<sup>み</sup>ing<sup>を</sup> h<sup>彼</sup>is<sup>の</sup> p<sup>者</sup>er<sup>は</sup>son<sup>自</sup> h<sup>分</sup>as<sup>を</sup> a<sup>責</sup>st<sup>め</sup>ray<sup>め、</sup>,

Yet<sup>け</sup>,<sup>れど、</sup> That<sup>そ</sup> s<sup>の</sup>uff<sup>苦</sup>er<sup>し</sup>ing<sup>み</sup> al<sup>も</sup>so<sup>解</sup>un<sup>き</sup>le<sup>放</sup>as<sup>た</sup>hes<sup>れ、</sup>,

Ex<sup>自</sup>cel<sup>由</sup>ent<sup>の</sup> in<sup>空</sup>g<sup>に</sup> d<sup>飛</sup>im<sup>び</sup>en<sup>立</sup>sion<sup>つ。</sup> of<sup>え</sup> freed<sup>る</sup>om<sup>。</sup> Fly<sup>次</sup> to<sup>元</sup> the<sup>空</sup> sky<sup>を</sup> of<sup>超</sup> freedom<sup>。</sup> Empty<sup>空</sup> sky<sup>雲</sup> lar<sup>雀</sup>k<sup>は、</sup> ground<sup>。</sup> Crow<sup>地</sup>l<sup>を</sup>over<sup>這</sup> the<sup>い</sup> ground<sup>ず</sup> unless<sup>り</sup> they<sup>け</sup> are<sup>れど、</sup> not<sup>。</sup>

This<sup>今</sup> is<sup>こ</sup> the<sup>こ</sup> on<sup>に</sup>ly<sup>翼</sup> path<sup>を</sup>.<sup>広げよ。</sup> I<sup>な</sup>ra<sup>ら</sup>ba<sup>ば、</sup> h<sup>我</sup>ave<sup>が</sup> n<sup>涯</sup>o<sup>に</sup> g<sup>意</sup>re<sup>味</sup>ets<sup>を</sup>.<sup>なすため</sup>

So<sup>こ</sup> as<sup>の</sup> I<sup>意</sup> pray<sup>識</sup>,<sup>は、</sup>



嘘オオオ!? 私の息子の力、ヤバすぎない?!?! 私の” 第零宇宙” が、息子の心像世界に変えられちゃったんですけどオオオオオオオオ?!?! キング「馬鹿な、ガルツチの『無限の剣製』は、これ程までの力を持っていたのか!?!」

全王神「いやいや、幾ら何でも凄すぎでしょ!?!」

私の息子、本当に凄すぎる……………。

sideChange

白夜又side

簪「え!?! 此処何処!?!」

白夜又「ほっほっほ、まさか私の『世界改変』を超えろとは、流石ガルツチじゃな。」

しかも、あの時と違って、血塗れじやった草原と武器の隣にあった屍は何処にもない。あるのは、蛍のような光が満ち溢れ、空には無数の星々に一つの青い月が、大きくそして優しく光っておる。

まさしく、ガルツチの心像世界は、究極の幻想とも呼べる世界に生まれ変わったのじゃな。

本音「でも、凄い……………。なんだか、うっとりしちゃう……………。」

愛梨「……………。うん、私も思う。」

紅虎「へへっ、やっぱりガルツチって奴は、すげえ奴だったんだな……………。」

レティシア「白夜又、お前はこの力を与えたというのか?」

白夜又「いや? 確かに世界改変の力は得させたが、この力は彼奴自身に手にした力じゃ。」

フラン「ホントにお兄ちゃんったら、こんな力を持つてるなんてね。」

こいし「えへへ、さっすがお兄ちゃん。」

イリヤ「これは、シロウお兄ちゃん達も、驚いてるだろうなあ……………。」

sideChange

ギルガメッシュside

我が雑種め、よもや此処までの力を……………。

エミヤ「なんて事だ、私の固有結界を超えているだ?!」

士郎「遠坂?」

凜「……………もうこれ、封印指定されてもおかしくないでしょ。いやされない方がおかしいわ?!何よこれ?!固有結界じゃなくなってるじゃないの!?!」

クロウ「ククク、流石ガルツチだ。」

アイリ「これ、ガルツチの宝具でよくない?」

切嗣「うん、僕も思う。というか、第4次聖杯戦争で召喚されたら、ルーラーが呼ばれてもおかしくないよ。」

さとり「うん、これがこいしだったら、お姉ちゃん勝てないわ。」

レミア「私も、此ホントに勝てない。」

ルツチ「……………ガルツチ、頑張れ。」

さあ、貴様の力、どれ程の物か、見定めて貰うぞ!!我が雑種!!

sidechange

風龍(作者) side

あーうん、知ってた。知ってたよ、ガルツチの力。でもね……………。

風龍「まさか始原の城を覆い尽くすなんて、思わなかったよ。」

士「ガルツチ、お前何処まで行くんだ……………。」

ユウスケ「抑止力全く働いてねえ……………。」

夏海「私もそう思う……………。」



鳴滝「おのれガルツチ！このような美しい世界に変えるとは！！」  
士「鳴滝、それ罵倒じゃない。」

アラン「つていうか、戻せるのかな？」

風龍「キングがいるから、一応問題ないかな？」

つていうか、こうも全てを覆い尽くすつて、相当規格外な奴を作っ  
ちやったなあ……………。

sideChange

ガルツチside

小百合「なつ、そんな馬鹿な!!なんだこの固有結界は!!」

アラヤ「母さん、これは一体!?!」

アラヤも鳳凰も、未来も深雪さんも、敵であるアーサー王も、恐ら  
く全員は驚いているだろうな……………。

ガルツチ「まあ、驚くのも無理はない。今全次元は、我が心像世界  
へと変わった。死体よ血塗れだった草原は、今では蛍のような光が満  
ち溢れる武器が刺さった草原に変わった。

これが僕の最終進化を遂げた『無限の剣製と幻影の世界』。

その名も『次元アンミリテッド・タイムンジョン・ワークスを超える無限の刃製』!」

小百合「なるほど、確かにあの英雄王も賛美を送るだろう。だが、そ

のような神妙な世界で何が出来る？私のスタンドは、全アルトリアの宝具を全て取り揃えた能力を持ったスタンド、『ステイナイト』の力に勝てるだけでも？」

ガルツチ「勝てるとも、この宝具を使用させた時点でな。最早お前の真作の能力は、僕の贋作を超えている。その神髄を見せてやる。」

未来「……………ガルツチ、僕も手伝うよ。変身！」

『FINAL INFINITY RIDE <PERFECT INFINITY DECADE>!!』

深雪「決着を着けよう、小百合。貴方を倒し、円卓の騎士を壊滅させてあげる！」

小百合「……………許さない、此処まで侮辱されたのは初めてだわ！覚悟しなさい!!!」

アラヤ『DEAD OR ALIVE』！

鳳凰「お母さん、未来お父さん、アラヤ、深雪さん。私がサポートするね！『Born to Love You』！」

ガルツチ「行くぞ、騎士王。死ぬ覚悟は充分か？『ムーンライト・アウターヘル』!!」

小百合「ハッ、思い上がったわね。」

今ここに、深雪さんにとって、因縁の戦いが始まった。

t o b e c o n t i n u e d ♪

### 第32話 VS 転生者 騎士王

ガルツチ side

小百合「行くわよ、ラムレイ！ダウン・スタリオン！」

ランサーのアルトリアか、どちらも強力だが、そんなの届くか！

深雪「『トリス・オン投影開始』！グングニル！！」

アラヤ「レミリア姉さん、力を貸して！夜符『デーモンキングクレイドル』！！」

アラヤは大鎌を回しながら体当たりを仕掛け、深雪さんはグングニルを投げつけた。

小百合「無駄です！『Wロソゴミニアド最果てにて輝ける槍』！！」

黒い閃光はアラヤにぶつかり、アーサー王が乗っているダウン・スタリオンは突撃し、深雪さんが投げたグングニルに当たった。

アラヤ「こんな力………、父さんの修行と比べれば、生温い！！」

深雪「この世界を変えてくれたおかげで、私も全力の投影術が使える！神槍『スピア・ザ・グングニル』！！」

アラヤ「深雪姉さん！！」

深雪「ええ！」

ん？何をするんだろう？

アラヤ「我が大鎌は、魂を刈り取る。死を恐れぬ者よ、我が力に挑んで来るが良い！！」

深雪「擬似宝具『門矢アラヤ』！」

アラヤ&深雪「『ジャツジメント・デス死神の審判』！！」

小百合が出した宝具は、完全に打ち破られ、2人の小百合は消滅し、次のアルトリアが来た。WヒロインXだった。

ヒロインX「どうも、ヒロインXです。」

ヒロインXオルタ「何で私まで………。」

ヒロインX「本当なら私の顔、またはセイバーを滅ぼすつもりですが、先ずは貴様達を殲滅してやりましょう！」

今思ったけど、何で此奴らを召喚出来るの？

小百合「言つてなかったか？彼女達を召喚する事ぐらい、容易いの

よ。」

ちつ、だが英霊ならやりやすい！

ガルツチ「行くぞ未来！」

未来「うん！」

未来ガル「来い、セイバースレイヤー!!僕らが相手だ!!」

ヒロインX「セイバー滅ぶべし!特にお前達を殺す!!」

ヒロインXオルタ「手加減しません、行きます!!」

僕はアサシンのアルトリアを、未来はバーサーカーのアルトリアとの戦いを始めた。

ヒロインX「その剣……………、私の銀河流星剣だ?!」

ガルツチ「お前がセイバーなら、これで殺すことも容易だろう。己がセイバーになろうとしたことを、そして生まれたことを後悔するがいい!!」

ヒロインX「貴様……………、やはり危険人物ですね。」

ガルツチ「全てのセイバーを守るために、セイバースレイヤーを殺す!セイバースレイヤー滅ぶべし!!」

ヒロインX「なるほど、セイバーを守る守護神か……………。いいだろう、だったら来るが良い!セイバーガーディアン！」

力を貸して、カラリス!アナザー!!

ガルツチ「グランドセイバー『冠位剣士』、グランドユニティンストール『カラリス』!『アナザー・ホライズン』!『融合冠位夢幻召喚』!!」

僕はその二つに融合され、あの2人の服装に変わった。すると、懐かしい声が聞こえる。

カラリス『久しぶりね、ガルツチ。』

アナザー『ああ、本当に久しぶりだ。』

カラリス!?アナザー!?お前ら、何で!?

カラリス『そういえば言ってなかったわね。』

アナザー『実はというと、其奴を使えばお前をサポート出来る仕組みにしてるんだ。』

な、なんつう仕掛けだ……………。

カラリス『それより、今から戦闘でしょ?あの素早さ追いつける?』

勿論だ。火力は殲滅せし滅亡の剣とアナザーの武器で対抗出来る。  
カリス『そつか、だったら言うことは一つよ。』

アナザー『ああ。』

『『全力で、敵を葬れ!!!』』

勿論だ!!

ガルツチ「ブースター・オン!!」

ヒロインX「星光の剣よ…赤とか白とか黒とか消し去るべし!!!」

sideChange

簪side

仗助「ぜえ……ぜえ……、簪……。なんだ此処は？」

白夜叉「此処はの、ガルツチの心像世界じゃ。」

あ、私が答える前に白夜叉が答えちゃった……。

仗助「彼奴ごんだけ規格外なんだよ?!いや反則過ぎるじゃねえか!?  
未来といい彼奴といい、凄すぎるだろ!!」

フラン「それ私達に言われてもねえ……。」

こいし「ねえ、あれ何？」

仗助「あん?つて、なんだありや!」

あれ?みんな私の後ろを指さして、どうかし……え?

オーブ『簪。』

ええええええええええ?!?!う、ウルトラマン!?

仗助「おい、あれなんだ!?!」

簪「ウルトラマンなんだけど、えーつと、あの姿は………ウル  
トラマンオーブなのかな?」

オーブ『そうだ。しかし、此処まで立派になったな。』

簪「どうかしたの?」

オーブ『実はこれを渡しに来たのだ。』

オーブから貰ったのは、輪っかのようなものがついていて、翼状の  
パーツと手持ちグリップが付いているものを貰った。

本音「これ、なんだろ？」

オーブ『それは、オーブリング。今は力を失っているが、彼らの力を借りれば、何時でもウルトラマンになれるようになるぞ。』

オーブ「皆？」

オーブ『ガルツチ、未来、本音、オーブ、レティシア、白夜叉、リサ、アラヤ、鳳凰、フラン、こいし、イリヤ、そして深雪の事だ。』  
フラン「つまり、私達の力を……………」

こいし「このリングに力を込めれば……………」

イリヤ「簪ちゃんは、何時でもウルトラマンになれるって事？」

オーブ『その通りだ。』

って事は、私……………本物のウルトラマンに？

オーブ『では、渡した物を渡したことだし、そろそろ行くでしょう。幸運を、ウルトラマンセラフィムオーブよ。それが、君がなるウルトラマンだ。』

それを告げた後、ウルトラマンオーブはそのまま宙へ飛び去り、消えていった。

イリヤ「凄いなあ、簪ちゃんがウルトラマンになるのか……………。って、こうしちゃいられない！早くお兄ちゃん達のところに行こう！」

簪「そうね、皆！急ごう！」

まだアーサー王と戦ってる最中かも……………、今間に合えば助けることが出来る！待ってて、未来、ガルツチ、アラヤちゃん、鳳凰ちゃん、深雪さん！

sideChange

ガルツチside

ガルツチ「如何した？もう限界か？」

ヒロインX「くそっ！私の無銘勝利剣が……、ガーディアンに届かなかったというのか!？」

ガルツチ「そうだ、これで終わりにしてやろう。我が刃は、理想郷を守るべく作られた剣。そして、此方の刃は、友を守るべく作られた剣。」

今ここに、アンドロイドの意志を見せてやる！

ガルツチ「『友と誓いし悠久なる剣』!!」

ヒロインX「ガハッ!？」

ガルツチ「もういっちょよ!!」『絆を結びし永劫なる剣』!!」

ヒロインX「グフツ………。あ、悔りましたね。

ですが、覚えておきなさい。私は必ず、貴方を倒す……。絶対に、絶対に!!」

ガルツチ「………。楽しみに待ってるよ。アルトリア・スカイウォーカー・ペンドラゴン。」

ヒロインXが青い霧となって消滅すると、未来が戦っていたヒロインXオルタも青い霧となって消滅した。

未来「さあ、あとはアーサー王だけだね。」

ガルツチ「うん。」

小百合「あの2人を倒せたのね……。でも、仮に倒せたとしても、私の『全て遠き理想郷』に勝てるのかな?」

深雪「『投影開始』！虹霓剣!」

あれって、フェルグスが持ってたオリジナルのカラドボルグ?

深雪「貴方が次元を超える防壁を仕掛けるなら、私はこのドリルで、それを貫いてあげる!」『貫通螺旋虹霓突』!!!」

4人「「いや、それドリルじゃない。それ螺旋剣だから。」」

見た目ドリルっぽいけど、ドリルじゃなくて剣だし……。ってええええええええええええ!?!あれにヒビが入った!?!

小百合「な、そんな!!アヴァロンが、砕け始めてる!?!最強の盾が、何で!?!」

深雪「簡単よ、このドリルは、そのアヴァロンを超える理想郷を持つてるからよ!小さい幸せだけど、それでも私にとって、理想の……」

幸せだから!!」  
全て遠き理想郷……………」。

宝具として真名開放すれば、数百のパーツに分解して使用者の周囲に展開され、この世界では無い『妖精郷』に使用者を隔離してあらゆる攻撃・能力・交信を遮断する、この世界最強の守りとなる。

弱点などないはずの宝具だけど、でももし、それを打ち破る方法があったら？

おそらくそれは、自分に取っての幸せ、または理想郷なのかも知れない……………」。

ガルツチ「つて、感傷に浸ってる場合じゃない!深雪さんを助けな  
いとー!」

『FINAL ANOTHER INFINITY ATTACK  
RIDEへDIMENSION BURST SHOOT』!!!』

未来「宝具を撃たせない。その鉄壁の守りを打ち砕く!」

『FINAL INFINITY RIDEへINFINITY D  
IMENSION KICK』!』

未来のライダーキックと僕が放ったエネルギー波は、その剣に当たり、回転が光速並みに速くなっていった。

小百合「嘘……………」、最強の盾が……………」!!」

アラヤ「深雪姉さん!」

鳳凰「深雪お姉ちゃん!」

深雪「私の……………」、私達のドリルを……………」!!!舐める  
なアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

小百合「いやそれ、螺旋剣——!!!」

4人「!」もうドリルでいいよね……………」。!」

小百合「4人が諦めて如何するの!?!」

いやもう、完全にドリルに見えるんだもん。仕方ないよね?

小百合「あーもう!!こうなれば、これで決着をつけます!!東ねるは  
星の息吹。輝ける命の奔流……………」。

『我が魂と絆を繋げる永遠の剣』!!!」

『災厄へと導く破壊の剣』!!!」



この声って…………。

ガルツチ「皆!!」

フラン達が放つ技が、虹霓剣に集まっていき、遂に最強の防御が打ち破られた。

小百合「零距离宝具を受けるがいい!! 『約束された勝利の剣』!!!!!!」  
つと思ったら最後の足掻きと言わんばかりの、エクスカリバー!! を放ってくる。が、それも虚しく、全員の力が宿った虹霓剣によって、宝具は打ち碎かれ、アーサー王を貫いた。

小百合「……………絶望に落ちるのは、私の方だったのね。」

深雪「私の勝ちよ、小百合。」

小百合「ええ、そして私の……………敗北ね。」

貫いた部分から、血飛沫や内蔵が落ちていき、彼女の口から血を吐いていた。普通に考えたら、即死と言っても過言じゃないというのに、彼女は喋り続ける。

小百合「参ったわね……………、これで……………アグラヴェインを……………、庇うことが、出来なくなっちゃった。」

深雪「え?」

小百合「良いこと、教えてあげる。元々、このような残虐非道を提案したのは、アグラヴェイン。提案した理由は、私の恋人だからよ……………。生前の、彼にそっくりで……………。」

深雪「……………。」

小百合「でも、その恋人を、貴方が奪った! だから報復で、貴方を絶望に陥れたかったのよ! 転生しようが、なんだろうが、私の恋人を奪った貴方を!!」

ガルツチ「黙れ雑種!!」

小百合「!?!」

ガルツチ「それが報復だと? 恋人を奪った? それで其奴の恋人は喜ぶのか!」

小百合「そ……………それは……………。」

ガルツチ「今頃、泣いて居るぞ? こんな歪んだ性格になったお前を見て、大泣きしてるはずだ。恥ずかしくないのか!?! 人の不幸を

.....」。

あかん、これモロブローメランじゃん。

小百合「.....泣いている、か。あの泣き虫.....、心配  
症め.....。こんな、私を.....今も愛してるなんて  
.....。

まあいい、どうせ自業自得.....ね。でも、出来れば  
.....アグラヴェインの.....幸せも、み.....た  
.....か.....ったな。」

深雪「小百合.....、あんた.....貫いてもなお、立っ  
ているっていうのか？」

だが、何故だか知らないけど、彼女の顔に、一筋の涙と、優しい笑  
みが零れていた。

アーサー王

真名 門真小百合

スタンド名『ステイナイト』

【破壊力：SS／スピード：B＋／射程距離：E／持続力：A／精密動  
作性：A／成長性：E】

能力 全アルトリアの宝具の使用、または召喚する事が出来る

リタイア  
死亡

さて、あとはアグラヴェインだけだけど……。どこに？

『ズドンッ!!ズドンッ!!ズドンッ!!』

って、なんだありや!?

??? 「王よ、貴方のご慈悲、しかと見させて貰いました。そして、よくも私の王を!!」

うげえ……。、なんかやばいロボットが出来上がってるな……。。

??? 「仇を討たせて貰う!そして、この世を変えてみせる!!善意も悪意も何も無い平和にさせるために!!我が名はアグラヴェイン。真名『八坂矢峰』だ!!」

つまりラスボスはロボットって奴かよ。うーん、『例のアレ』を使うわけにもいかないし、如何すれば……。ってそういえば。

ガルツチ 「簪、それは？」

簪 「あ、そうそう忘れてた。これオーブリングなんだけど、力がなくて……。」

未来 「え……。それ如何するの？」

簪 「これを皆の力を宿せば、使えるようになるんだって。」

ガルツチ 「どうやって？」

フラン 「簡単よ。みんな、簪ちゃんが持つてるのを掴んで。」

みんなはその通りに、リング状の部分に触れると、突然光が溢れ出

し、まるで全ての力が、そのリングに集まるかのように、輝いていた。

『Awakening!』

途端にそのリングが光り出し、簪の服装が黒いピッチリとしたスーツ姿に変わり、一枚のカードが現れた。

『セラフイムオーブオリジン』

そう書かれていた。

簪「ありがとう、みんな。あとは、私がやる!!」

ガルツチ「大丈夫、君ならやれる。」

簪「ありがとう、ガルツチ。」

未来「頑張つて、簪。」

リサ「お母さん!信じてるよ!」

簪「うん!」

さあ……………。

4人「「「やっちゃえ!!ウルトラマン!!」」」

簪「セット!」

『覚醒せよ!セラフイムオーブオリジン!!!』

『standby complete』

簪「ウルトラマンセラフイムオーブ!!!」

簪の姿は一変し、ウルトラマンオーブとよく似た姿へと変わった。そして、簪は巨大化していき、900m位大きくなっていった。

後ろには熾天使のように12枚の翼が生えていて、凄く神々しいウルトラマンへと変わった。

矢峰 「ウルトラマンオーブだ?!」

簪 『いいえ、私はウルトラマンセラフィムオーブ。貴方の野望を止める者よ。』

そして簪の手元には、剣らしき物を持っていた。

簪 『未来を、ガルツチを、リサ達を、仗助さん達を、世界を救うために!! 貴方を止めてみせる!! 行くよ、最後の円卓の騎士!! エネルギの貯蔵は充分か?』

矢峰 「思い上がるな!! 小娘風情がああああああ  
!!!!」

さあ、見せてくれ、簪。ヒーローの一端を!

t o b e c o n t i n u e d  
→

### 第33話 熾天へと輝く復活の剣

簪 side

凄いい、私本当にウルトラマンになっちゃった！って、そんなこと言ってる暇ないよね。今は、相手に集中しないと！

矢峰「おどりやあああああああああ!!!」

簪『ハッ!』

アグラヴェインが乗っているロボットは速そうだけど、まだ捉えられないぐらいの速さだったので、オーブカリバーを使って、その右腕を叩き切った。

矢峰「無駄だ、このロボットは再生する。バイドとゴジラの細胞で出来たこのロボットは、まさに無敵のロボットになったのだ!」

ゴジラの細胞?!しかもバイドってちよつと大丈夫なの!?

矢峰「まあ、正直これに乗るときは覚悟を決めたよ。王のためなら、喜んでこの命をくれてやろうとな!!」

簪『とんだ命知らずなのね………、いえ、それだけアーサー王の事を思つての行動なのね。』

矢峰「その通りだ!だから、我が理想のために、まずはお前が死ぬが———」

未来「ガルツチの友人たち、ルツチさん、力を貸して!」

『ELEMENT PHOENIX!INFINITY RIDE  
!』

ガルツチ「未来!アレを!」  
未来「分かつてる!」

『FINAL INFINITY ATTACK RIDE  
PERFECT INFINITY ELEMENT PHOENIX  
!!』

すると、私と同じぐらいの大きさの不死鳥が現れ、ロボットを傷つけていく。

ガルツチ「絆符『レインボーフェニックスレイン』!!」

その不死鳥は9匹となり、そのロボットに攻撃していく。いえ、再生すればまた叩き切るの繰り返し、遂には再生力が鈍くなり始めた。

ルッチ「みんな！アレ行くよ!!」

8人「「「「「おう（ええ）!!」「」「」「」

ガルツチ「簪！」

簪『分かった！』

私は炎の紋章のところで止め、トリガーを引いた。

『オーブ、フレイム!!』

途端に刃は煉獄の如く燃え上がり、不死鳥を囲むように輪っかを作っていた。

簪『不死鳥の如く、彼の者を焼き尽くせ!!』

ガルツチ「煉獄、深海、疾風、大地、迅雷、極寒、光明、暗黒、そして幻影!!全てを貫くは、我ら不死鳥の刃!!!」

簪『『オーブカリバー・ガラディーン転輪せし復活の剣』!!!』

ガルツチ『『エレメンタルフェニックスストラッシュ永遠に繋ぐ未来への不死鳥』!!!』

炎を纏わした虹色の斬撃は右肩を切断していき、そこから再生することはなかった。

ブレイズ「さすがガルツチだな。」

アビス「相変わらず、凄まじい力です。」

レイス「ありがとう、簪ちゃん！手伝ってくれて！」

カレン「いや、手伝ってたのは私達でしょ!？」

レイス「そうだった。(ゝω・)テヘ」

カレン「テヘじゃない！」

ノーム「はっはっは！まあよいではなか！」

マルフォイ「簪だったか？なかなか凄い力だな。これからもガルツチ達を守ってやってくれ。」

アルファス「さあ、また動きそうだけど、簪。頑張ってくれ！」

ルッチ「簪さん、どうかこれからもガルツチの事、お願いします。」

それを伝えた後、ガルツチの友人らしき人と、ルッチさんは黄金の霧となって消えていった。それにしても、凄かったなあ……………。

矢峰「ッ！右腕が修復出来ないだ?!?だが、左腕は生きて――

「  
未来「今度はこれだ!!」

『SCARLET FAMILY! INFINITY RIDE!』

今度はフラン達のご家族、つてあら? DIO達が居ないんだけど……。いえ、多分あの頃の家族つて事なのかな?

フラン「ウフフ、今度は私の番。簪ちゃん、一気に行くよ!」

簪「あ、うん!」

今度は水の紋章のところまで止め、トリガーを引いた。

『オーブ、ウォーター!!』

するとあのロボットは水の中に閉じ込められてしまい、身動きが取れなくなっていた。

矢峰「なっ、何故動かない!？」

『FINAL INFINITY ATTACK RIDE <PERFECT INFINITY SCARLET FAMILY>!!』

美鈴「さあて、久々に行くわよ! 華符『破山砲』!!」

パチュリー「全盛期の魔法、受けてみなさい! 日符『ロイヤルフレア』!!」

咲夜「お掃除の時間です。傷魂『ソウルスカルプチュア』!!」

レミリア「貴方の運命は、既に決まってるわ。宝具開帳!」  
『突スピア・ザ・グングニルき穿スピア・ザ・グングニルつ神槍』!!」

フラン「我が剣は災厄をもたらず剣。ロキの名を挙げ、今ここに煉獄の厄災を起こそう!」

簪「浄化の水刃よ、彼の者を斬れ!」

フラン「『災厄レイへと導ヴァく破壊テイの剣』!!」  
簪「『陽光煌オーブカリバー・ヴィヴァンめく復活の剣』!!!』

フランの家族と私の斬撃は、今度は左肩部分を切断させ、両腕が使い物にならない状態に追い込んでいった。

矢峰「バカな、奴らの力……。これ程までに!？」

美鈴「ヤッホー! 美鈴大勝利!!」

咲夜「なわけないでしょ、馬鹿美鈴。」

美鈴「あてっ?! 酷いですよ咲夜さん……。」



パチユリー「未来、ありがとう。私の全盛期の頃に召喚してくれて。簪さん。これからも、フランの事、よろしくね。」

咲夜「簪様、お役に立てたでしょうか？立てたのでしたら、私は嬉しいです。」

レミリア「さて、私も戻るわ。簪さん、私は応援してるわ。それとフラン。お姉ちゃん寂しいよ！帰ってい——」

ええええ……………、レミリアさんがカリスマブレイクしちゃったんだけど、如何すれば良いの？って思っていたら、フランのご家族はすぐ赤い霧となって消えていった。

矢峰「クソ！クソ!!だが、両腕が使い物にならなくとも、まだこっちの兵器が残ってる!!」

ちよつと、それってゴジラで言う放射熱線じゃ!?

矢峰「はっ s——」

???「させないわよ! 『深淵<sup>アビス</sup>の核融合<sup>コアフュージョン</sup>』!!」

謎の声と共に警報がなり、放射熱線が放たれると、その人が付けているものから、灼熱のような熱さを持った閃光が放たれ、ロボットが放つ放射熱線が貫かれ、頭部が破壊された。

未来「こいし、無意識とはいえ幾ら何でも僕が出そうとしていたのを勝手に取って入れないでくれる?」

こいし「えへへ、ごめんなさ〜い。」

未来「もう……………」

ガルツチ「ごめん、こいしが勝手なことを……………」

こいし「それじゃ、行ってきます。」

そしてこいしが私の目の前に現れると、3回目のあれが来た。

『FINAL INFINITY ATTACK RIDE へ  
PERFECT INFINITY EARTH SPIRIT FAMIL  
ILY<!!』

お空「さあて、最大級の核融合を放つよ!滅&爆符『グリーザゼロ  
エクスプローションアルティメットエクスフレア』!!」

お燐「あなたに、地獄を……………」デッドコーワールド『死体繁華街』!!」

さとり「貴方には、トラウマ級の宝具を与えます。アルテマウエボン『極光の斬撃』!」

こいし「簪ちゃん!」

簪『今度はこっちなね!』

次は風の紋章のところで止め、トリガーを引いた。

『オーブ、ウインド!!』

こいし「此よりは地獄。私は風、霧、無意識。恐怖の殺戮を、ここに!!」

簪『風よ、舞い上がれ!!』

こいし「『殺戮遊戯』!!」マッドネス・ザ・ゲームス

簪『風 帝 鉄 槌』!』オーブカリバー・ストライクスラッシュ

風を起こし、ロボットを中に上げるとこいしは神速の如く素早く斬り裂き、3人が放つ閃光が、ロボットに当たり大爆発を起こしていた。

こいし「やった!」

ガルツチ「油断するな!!こいし!!」

私も倒したかと思っただけで、違った。爆風が消えると、そこにはロボットの姿がなく、最早バイドとゴジラが組み合わさった怪獣へと変貌していた。

お空「ありやあ、あれはもうどうしようもないね……………」

お燐「これもう、死んでるか生きてるのか分かんないねえ

……………」

さとり「こいし、あの時酷いこと言っで、ごめん!こんな時で謝るのも——」

こいし「いいよ、お姉ちゃん。私は知ってるから。私は、誰よりもお姉ちゃんの苦しみを、孤独を、知っているから。」

さとり「こいし……………。簪さん、未来さん、皆さん。どうかこれからも、こいしの事、よろしくお願いします。」

さとりさんがお辞儀をすると同時に、3人は緑色の霧となって消えていった。





そしてバリアは割れ、最早バリアを張る力も無くなっていた。

未来「簪!」

簪『うん。』

今、楽にしてあげるね。アグラヴェイン、貴方の憎しみ、貴方の悲しみを癒やしてあげます。

未来「皆!行くよ!」

簪『ウルトラマンの皆、力を貸して!!』

『昭和ウルトラマン!!平成ウルトラマン!!ウルトラマンキング!!ウルトラマンベリアル!』

ベリアル『へっ、彼奴をどうにかするんだろ?手伝うぜ!』

キング『今回は初のウルトラマンの仲間になった記念だ。私も羽目を外そう!』

ゼロ『お、親父が羽目を外すなんて、珍しいな。』

ゾフィー『確かに。』

凄い、でも此過剰戦力じゃない!?これ!?いやこっちも十分過剰戦力だけど…………。

ガルツチ「さあ、ど派手に行くぜ!!!」

全員「おう!!!」

『FINAL INFINITY ATTACK FOAM RIDE  
E <ALL THE WORLD>!!』

皆の力、お借りします!!

『解き放て、オーブの力!!』

簪『束ねるは星々の息吹、輝ける光の奔流!次元を越え、大切なものを護るために、今ここに剣を振るおう!!』

此が、私の全て!!

簪 『熾天へと輝く絆の剣』!!!!  
 未来 『星光の破碎砲』!!  
 ガルツチ 『善悪・鶴翼三連』!!  
 フラン 『災厄へと導く破壊の剣』!!!  
 こいし 『殺戮遊戯』!!!  
 イリヤ 『我が魂と絆を繋げる永遠の剣』!!!  
 鈴美 『零に戻りし無の剣』!!!  
 オーフィス 『夢現へと連なる閃光』!!!  
 白夜叉 『アルティメットブラスタ』!!!  
 レティシア 『ギガントドラゴニックダブルスラッシュ』!!  
 本音 『アース・オブ・ザ・スパーク』!!  
 深雪 『大魔砲』ファイナルダブルダークマスタースパーク  
 !!!!!!!



簪達に完全敗北 死亡

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
→



## 第34話 月の花

―杜王町 病院―

ガルツチ side

あれから一ヶ月、簪はまだ病院で眠っている。無理もないだろう。あれだけの力を使えば、バツタリと倒れない方がおかしい……………。

そして杜王町だが、あの時円卓の騎士が破壊された場所は、2週間ぐらいで復興できた。まあ、殆ど僕がやりましたがね……………。

愛梨さんと紅虎さんかというと、何でも円卓の騎士として自首したそうなの……………。いい人なのに……………。

未来「……………」。

ガルツチ「大丈夫、簪は起きるよ。」

未来「でも……………」。

ガルツチ「死んだわけじゃないんだから、気をしっかり持とう。な？」

未来「そう……………だね。」

しかし、一番の問題は未来のショックだな……………。この一ヶ月間、未来を励ます為に色々頑張ってたんだよね……………。あのショックは凄まじかった。

『着メロ IS ed曲『SUPER ∞ STREAM 更識姉妹版』く♪』

ん？誰からだ？

ガルツチ「ちよつと電話してくる。」

未来「うん……………」。

僕は屋上のところにワープし、そこで電話をかけた。

???『もしもし、初めまして。』

ん？なんかクロエと似たような声が聞こえる……………。

ガルツチ「どちら様？」

???『あ、名乗ってなかったね。私は簪の姉、更識楯無よ。妹の事が気になって……………。』

ガルツチ「彼女の事でしたら、まだ眠っています。もう一ヶ月ぐらい

……。

楯無『一ヶ月!?!』

ガルツチ「おい、頼むから電話越しで大声は止めてくれ。」

楯無『ご、ごめん。それで大丈夫なの?』

ガルツチ「見たところ後遺症はない。力の使いすぎて、眠ってるだけさ。まあ、あれだけの力を使えば、眠らない方がおかしいさ。」

楯無『そっか……。でも、参ったねえ……。……。ありや私をずば抜けて超えちゃってくれたよ……。……。遠くから見ているとは思え、簪には追い抜かれちゃったし……。……。

もうアレは、姉に勝る妹だね。』

ガルツチ「そりやあ未来と一緒に旅をしているからね。っていうか思うんだけど、何で僕の番号知ってるの!?!」

今更だけど、何で番号も知らないはずなのにかけられたの!?!何で!?!楯無『そりやあ勿論、束が教えてくれたよ。』

ガルツチ「あんnyろ……。……。いつの間に番号を……。……。後で触手&媚薬責めしてやる。』

楯無『そこまで……。……。?まあ良いわ。』

束『ちよ!?!何で私酷い扱いなの!?!』

ガルツチ「そして何気に念話してくるな、束。追加として快樂責めだ。」

楯無『うわあ……。……。、エグイ。』

束が解せぬって言うてるが、デモ僕二ハ関係ナイ関係ナイ。

楯無『まあ良いとして、もし退院したら電話お願いね。』

ガルツチ「了解。刀奈さん。」

楯無『!?!』

ガルツチ「次に貴女は、『何で私の名前を!?!』という。」

楯無『何で私の名前を!?!……。……。。(。㇔。)ハッ!?!って何で!?!』

ガルツチ「単なる勘だな。」

楯無『勘でって、貴男ねえ……。……。……。』

ガルツチ「まあ、簪の事は心配ない。あの子はあの子自身で決めた事さ。どう生きるか、どういう道を歩むかは、彼女次第なんだから

さ。」

楯無『……………そうね。正直、未来と一緒に旅をするって聞いたとき、凄くビックリしたわ。っていうか、行って欲しくなかった……………。でも、あの子が幸せなら、それでいいよ。これからも、簪の事お願いね。』

ガルツチ「当然だ、それと一つ聞きたいんだが……………。」  
数分後……………。

楯無『ええええええええ?!?!いやいや、確かにまあ、あの子は料理出来るけど、でも歳の的に早過ぎじゃ……………』

ガルツチ「それだったら、見た目の僕も言えることだろ……………。今じゃ、∞歳になっちまったんだし……………。」

楯無『……………ごめん、それ訊きたくなかった。うーん、仮に私がOKしても、虚はなんて言うのかやら……………。実際あの子って、シスコンなどがあって……………。ちよつと映像があるから、見てみて。』

ミスト『楯無さんから送られた映像があるよ。見てみよう、兄や。』  
了解、さてどんな様子が……………

『ハアハア、本音のばんちゅクンカクンカ……………』ピッ

……………うん、なんか疲れてるのかな?今変質者っぽい人が居た気がする。もう一度再生つと。

『あああああああああ、本音ちゃん何故行っちゃったの!?!お姉ちゃん寂しくて寂しくて死んじゃいそうだよ……………。もし未来のお嫁さんになるなんて言ったら、私は如何すれば良いの!?!これからの私は如何生きれば良いの!?!あの子が幸せならそれでいいけど、もし苦しんでいたら、未来を殺してでも取り返さないと……………。っていうか私の本音ちゃんを返して〜!もう生パンだけじゃ物足りない……………。本音ちゃんのおもらしばんちゅも……………』ピッ



るなんて、思わなかった。ガルツチは眠っているだけっていったけど、もし簪が死んだら……………。

うわあああああああああ!!!考えたくない考えたくない!!死んで欲しくないよおおおおおおお!!!

簪「ん……………んんっ……………。」

ツ!?

簪「あ、あれ?ここは?」

未来「簪いい!!!」

よかった、目覚めてくれた!!

簪「未来!?!って痛い痛い!!」

未来「よかった……………、簪が生きててよかった……………。」

簪「待つて待つて、その前にここは!?!」

???'「お、ナイスタイミングで目が覚めたか。」

僕は後ろを振り向くと、いつの間にか花束を持ったガルツチが、病室に入ってきた。

簪「ガルツチ、おはよう。」

ガルツチ「おはようって……………、いや仕方ないか。ほら、月まで

採ってきた花だぞ。」

簪「っ、月!?!」

未来「月まで行ってきたの!?!」

ガルツチ「うん。しかし、ラッキーだったよ。まさか月の花こと『マ  
グノリアムーン』が多くあったとは思わなかった。」

っていか宇宙まで行ってくるって、ホントに凄いよ……………。

ガルツチ「調子はどう?」

簪「うん、すっかり良くなったよ。ところでどれぐらい寝ていたの  
?」

未来ガル「一ヶ月。」

簪「……………え、私そこまで寝ていたの?」

未来ガル「うん。」

簪「アハハ、そこまで寝てたなんて、思わなかった……………。皆  
は?」

ガルツチ「ちよくちよく見舞いに行ってるよ。そういえば、僕長野に行つて適当なところ掘つてたら、温泉が吹き出してね。」

簪「ええええええええええ!」

未来「うん、思いもよらなかつたよ……………。それで退院したら、ガルツチが引き当てた温泉のところまで宴をするつて。」

ホントにガルツチつて、運がいいのか悪いのか分かんないなあ……………。

簪「そつか、だったら頑張つてリハビリしないとね。」

ガルツチ「うん、退院したら連絡するよ。それじゃ。」

未来「え、ちよつと引つ張らないで。」

そして僕とガルツチは、そのまま病院に出て行つた。

ガルツチ「……………。」

未来「如何したの? 難しい顔になって。」

ガルツチ「いやなに、簪の事なんだけど……………。確か前に、一度死にかけていたんだよな?」

未来「うん。」

ガルツチ「……………。もしかしたら、いや信じたくないが……………。」

何で、そんなに悩むのかな?

未来「簪が死にかけたけど、それがどうかしたの?」

ガルツチ「多分だけど、別の種族が目覚めたんじゃないかって……………。」

未来「え? いやガルツチ、流石にそれはないよ。」

ガルツチ「まあね、あくまで過程なんだが、鈴美さんの祖先は『零の龍神』だよな?」

未来「そうだね、確かに彼女は『零の龍神』の子孫だったし……………。」

ガルツチ「それで思うんだ。表向きは人間だけど、血筋は……………『全の竜神』だったりして。」

未来「……………。いやまって、流石に簪が『全の竜神』は……………ありそうか。」

ガルツチ「まあ過程だけどね。」

確かに、ないとは言いきれないかもしれない。実際鈴美さんもそうだけど、多分それはウルトラマン達によつて生き返らせたんだと思うなあ。

でも、何でガルツチって深く考えるんだろう。

ガルツチ「まあ、今は杜王町を救つて、宴の事でも考えておくか！貸切もしておいたし。」

未来「でも、簪が帰ってきてからね。」

ガルツチ「そうだね。」

ついでだから、仗助達も誘おうかなあ。今回のVIPは簪だしね。

そしてしばらくして、簪は退院して、早速僕らは仗助達を連れて、ガルツチが掘り当てた温泉のところに向かった。その途中、簪の髪に違和感があり、よくよく見ると、ガルツチが送った花が飾られていたのを見た。

t o b e c o n t i n u e d →

## 第35話 奇妙な旅館

―長野県 とある旅館―

ガルツチ side

ガルツチ「着いたぞ。」

仗助「おう、ここか。しっかしお前凄えよな、こんな良いところ掘り当てるなんてよ。」

そんな会話をしながら、僕らは旅館の門を潜り、扉を開けた。

『ガラッ』

言峰「温まりますか？」

目の前に神父（カソック服の上に温泉宿の法被を重ね着した言峰37歳？）が居た。

黙って戸を閉める。

未来「ガルツチ？」

うん、なんかデジャヴを感じる。これ、前にもあったよね？

簪「どうかしたの？」

ガルツチ「いや、どう反応すれば良いのか分かんない人が居た気がして……………。今度は、覚悟して開けるわ。」

本音「ガルガル君？別に覚悟する必要ないと思うけど？」

『ガラッ』

言峰「おいでやす。」

京都弁で、オ・モ・テ・ナ・シ・をする神父（ガタイの良い渋すぎる声の中年）が居た。

ピシッと扉を閉める。

白夜叉「だから如何したのじゃ、ガルツチよ。」



ガルツチ「うん、なんか僕疲れてる気がするんだ。あり得ない程の幻覚が見えているようだ。」

未来「だったら、尚更入らなきゃ。僕が開けるよ。」

『ガラッ』

士「よう、未来。待ってた——」

『ピシヤン』

未来「嫌な事件だった……………」

未来も僕と同じように頭を抱えていた。つていうか、なんかいた？

仗助「いや、お前らどうかしたのか？」

未来「うん、あり得ない人が居た気がしたので。」

仗助「たかが従業員だろ？早く入ろうぜ？」

未来「うん、今度は勇気持って入る。」

イリヤ「もしかして……………」

『ガラッ』

東「おこしやす〜。♡」

『ピシヤン』

未来「……………変だね。なんだか見慣れた人が、ここに居る気がするんだけど。」

ガルツチ「奇遇だな、僕もだ。」

今一瞬浴衣姿の東が居た気がしたけど、まさか……………。

『ガラッ』

言峰&士&東「お客様、おいでやす〜。」

いや、もう我慢できないから言わせて貰う。

未来ガル「何でいるの!?!」

言峰「何を言う、此処と言ったら、私が居て当然の事よ。」

士「未来の成長も見たくて此処で働いてる。」

東「Me too。」

ガルツチ「あと言峰、お前、前もやってなかった!?!」

言峰「よいではないか、よいではないか。」

ガルツチ「あ”あ” ああああ……………、まあいいや。」

これ以上考えるのやめよう……………。まず、士と東がいた事に関して滅茶苦茶ビックリなんだが。しかも東の浴衣姿、滅茶苦茶似合いすぎだろ……………。

イリヤ「やつぱり言峰、あんた居たんだね……………。」

白夜叉「おお言峰、久しぶりじゃのう。愉悦ってるか?」

ガルツチ「知り合い!?!」

言峰「勿論だ、白夜叉もまた、愉悦部のエロ参謀長とも呼ばれるものでな。」

未来「初耳なんだけど!?!」

ガルツチ「愉悦部……………、奥深い。」

フラン「あ、お兄ちゃんが愉悦顔になってる……………。」

言峰「この調子で、愉悦部を広めようではないか。」

ガルツチ「そうしよう。」

未来「ガルツチの意外な一面が、また見えた気がする……………。」

そんなこんなで旅館に入り、ガルツチ一行は東による案内をしてもらい、廊下を歩いていた。

一方で仗助達は士の案内をして貰っていた。

ガルツチ「いきなり物凄い歓迎をさせられたね……………。」

未来「うん、忘れることも出来ないかもね……………。」

東「みつくん達はこっちの部屋だよ。」

本音「たつちゃん……、変なことしないでね？」

それはご尤もだな、うん。

レテイシア「それで、これから如何するのだ？」

フラン「お兄ちゃんの車に乗っていたとはいえ、疲れちゃったしね。」

アラヤ「だったら、お風呂に入ろう。」

深雪「そうだな、とにかく風呂に入って癒されたい。」

愛花「じゃあ早く荷物置いて、お風呂セット持っていこう！」

『それに賛成だ!!』

あれ？今何か聞こえた気がするが、気のせいか……。

僕らは部屋に荷物を置き、お風呂セットを持って、温泉宿のメインである浴場へと入る。そこで男湯のところに入り、アラヤはイリヤ達が任せてと言い、皆女湯に入っていた。

仗助「お？ガルツチと未来、今からはいるんか？」

ガルツチ「うん。って、今から？」

康一「僕達はもうつかり終わったからさ、着替えてるところなんだ。」

未来ガル「早くない!？」

いやいや、一体いつから入ったというのだ？まさか、士のやつ………なんかやつたのか!？」

露伴「しかし、さっぱりしたな。未来ちゃんもガルツチ君も早く入るがいい。」

そう笑いながら仗助達は先に出て行った。うん、ホントにビックリだよ。

未来「それにしても、広いね。」

ガルツチ「デザインは殆ど僕だったからね。というかもう、和風特化してんじゃないの？」

未来「有り得そうだね。」

僕と未来は体を洗った後、湯船に浸かり、ゆったりといた。

未来「そういえば、この湯どんな効果があるの？」

ガルツチ「うーん、解析してみたけど塩化物泉って言って、切り傷、火傷、慢性皮膚病、虚弱児童、あと女性なら慢性婦人病にも効果あるそうだよ。しかも、これ驚いたことにオリハルニウムって言うのがあって、あらゆる病気にも耐えられるようになるんだとか。」

未来「ジヨジヨの世界なのにオリハルニウムがあるって……………」

僕の幸運ランクがAなのかC—なのか分かんねえなあ……………」

そんなことを思っていたら、女湯の方から何かが聞こえた。

深雪『ちよ、こいし!やめっ!』

こいし『いやだいやだと言いつつ、ホントは興味あるんじゃないかなあ?』

簪『こいし!?子供達がいるんだから、今は我慢して!』

アラヤ『あ……………ああああ……………。／／／／／／／／／／／／／／／』

おい、なんかおっぱじめようとしてる気がするんだが……………。まさかこいし、そこでおっぱじめるつもりはないよね?

未来「あれ?日本酒?」

ガルツチ「温泉と言ったら、やっぱり日本酒だからね。飲めなくはないけど。」

未来「そういえば、結構歳取ってたんだっけ……………」

ガルツチ「まあ普通に考えたらシヨタジジイと思われても不思議じゃないんだけど……………」

未来「つて、あれ?ねえ、ガルツチ。アレ見て。」

ガルツチ「ん?」

未来が指差す方を見ると、そこには明らかに覗きしてくださいと、言わんばかりの穴が堂々と空いていた。

ガルツチ「なんでさ……………」

未来「誰が空けたんだろうね。」

ガルツチ「億安か露伴の誰かじゃねえの?」

未来「……………有り得そうだね。」

まあ覗きなんて無粋な事はしない……………よな?(実は少し興味

あるけど、駄目だよね。」

未来「……………ねえ何故か知らないけど、少しムラつとしてきたんだけど。」

ガルツチ「え？」

未来「なんて言うか……………、覗かれていたらって思うと……………」

ガルツチ「待て、流石に場所が場所だろ……………。一応言うが、覗かれながらヤルのは、恥ずかしいからね？」

流石に視姦は勘弁してほしい、どこかの誰かじゃないんだし……………」

未来「で、でも、僕のここが……………」

ガルツチ「……………分かった。分かったから、その目は勘弁して？あと本番するときは、寢床でいい？」

未来「うん、ありがと。」

ガルツチ「んじゃあ、フェラするから、あまり動くなよ？」

しかし、いつも思うんだが、未来のつて大きいよなあ……………」

sideChange

フランク side

簪「ねえ、その穴から見れる？」

フラン「うーん、駄目だわ。お兄ちゃんだったら見られないように境界を張っているわ。」

本音「う……………、みつくんもガルガル君も狡い……………」

アラヤ「覗き見駄目ですよ、皆さん。」

鳳凰「そうだよ、覗いちゃだめよ、ダメダメ。」

リサ「そうそう。」

愛花「あれ？覗き見は文化だって、誰かが言ってたような。」

全員「それこそ違う気がする……………」

う……………、こうなったら、音で聞くしかないわね。絶対に訊いてやるんだから……………！

ガルツチ『つて思ったけど、これ女体化してパイズリした方がよくない？今思えばフェラしようにも難しいかも』

未来『言われてみれば、確かに……………。』

ガルツチ『んじゃあちよつと待ってね。』Girls Chang  
e!』

『Drive!! Type Girl!!』

未来『やっぱり、女体化したガルツチつて、ロリ巨乳なんだねえ……………。』

ガルツチ『それは、言わないお約束。……………それじゃ、挟むよ。／／／／／』

未来『う、うん。』

あ、音だけはちゃんと聞こえる。それにしても、お兄ちゃん女体化したのね。

白夜叉「どうじゃ？」

フラン「うん、どうやら音だけはちゃんと聞こえるそうだよ。」

レテイシア「全く、お前達は……………。」

深雪「ホントにそうだよ……………。」

本音「う……………、スノーちゃんもレテイちゃんも一緒に聞こうよ……………」

深雪「私とレテイシアが聞いたら、ここの常識人が居なくなるだろ!？」

本音「え……………」

こいし「そう言いつつ、ホントは見たいくせに。いやん、むっつりなんだから。」

イリヤ「今は自分の本性を、さらけ出しても良いよ。」

レテイ深雪「だが断る。」

フラン「聞いてもいいのに……………。」

しょうがない、私達でも聞こうかな？

未来『んっ！ほ、ホントにつ、ガルツチのパイズリつ、上手なんだねっ。』

ガルツチ『もう、恥ずかしいんだからあまり言わないで。／／／／／』

／／／／／／／／

未来『うっ！こ、これっ、今にもっ出ちゃう……………！』

ガルツチ『もう？流石に早いと思うけど……………。いいよ、僕の乳  
圧で、いっぱい出して。♡』

未来『うっ、イクウウウウウウ  
!!!!!!!  
♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡』

『ドビュルルルルルルウウウウウウツ!!!ドボボボボボボボボボ  
ボボボボオオオオオオオ!!!』

ガルツチ『あうっ、凄っ！一瞬にして僕のおっぱいの中が、精液ま  
みれになっちゃった。顔にも掛かっちゃったし。』

ぶ、ぶっかけられた!？う、羨ましい!!!私も、私も参加したい!!

未来『はあ……………、はあ……………。気持ちいい……………。♡♡』  
ガルツチ『とりあえず、今はこれで勘弁してね?』  
未来『うんっ。♡』

うん、決めた。絶対に私も参加しよう。そう思った私達だった。

### side Change

### ガルツチ side

とりあえず、パイズリを終え、再び男に戻った僕だが、正直言うと  
……………持つのか心配だ！

そう思いながらあがり、浴衣姿となり、何処かの椅子に座っていた。  
ん？聞き耳させられてた？勿論知ってる。そこまで気が回らな  
かった。

言峰「随分とお楽しみだったな、ガルツチ。」

ガルツチ「アハハ、どうせ録音してただろ？」

言峰「さあ、何の事やら。」

ガルツチ「あと、あの壁発泡スチロールで出来てるんだろ？」

言峰「おやおや、気付いていたのか？」

ガルツチ「言峰、チエツクが甘かったね。僕の解析を、甘く見るなよ？」

言峰「それもそうだな。そろそろ、宴も始まると思うから、君達も来たまえ。」

ガルツチ「全部麻婆豆腐はないよな？」

言峰「悪いが、今回は私担当ではない。別の人がやってる。」

ガルツチ「ならいいが……。」

言峰「後ガルツチ、紫からの連絡が来て居るぞ？」

ガルツチ「ん？あの年増の紫がなんだって？」

紫「だれが 年増 ですつて「オラ。」ブギヤ!!」

— 今回の紫 ガルツチに殴られて死亡 —

紫「またこのパターン!?ちよ、ガルツチ!?酷くない!」

ガルツチ「蘇ってもその調子って、お前相変わらずだな。んで、どうかしたの？」

しかし、ホントに久しぶりだな……。

未来「紫さん?何でここに?」

紫「あ、貴男が門矢未来ね。初めまして。」

未来「初めまして?」

ガルツチ「多分未来が出会った紫は、別世界の人だろうね。それで、何か用?」

紫「いけずねえ。まあいいわ、実はもう一人の私から伝言を頼まれてるの。」

未来ガル「伝言?」

紫「何でも、また異変が起こってるそうなの。」

おいおい、何時になったら天照大神と月夜見尊が作った世界に行けるんだよ畜生!!



未来「それってフレディがいる幻想郷？」

紫「そう言うことよ。それじゃあ、伝えたことは伝えておいたから、じゃあね。」

ガルツチ「待てや。」

紫「ヒツ!!」

ガルツチ「このまま僕が何も言わずに戻る気か? (´ω´)」

紫「あ、あの……勘弁を。」

ガルツチ「安心しろ、一言言うだけだから。」

紫「へ?」

ガルツチ「お帰り、紫。言いたかったのは、それだけさ。」

そして紫は、顔を真っ赤にしてスキマに戻っていった。

全王神『息子のデレ来たー!!! \ (´o´) /』

母さん、あんたあ黙つとれい!!!

そんなこんなで僕らは大広間に行くと、既に仗助達は到着していた。それもその筈、今日は宴。皆でワイワイ騒ぎながら料理を食べ、そして歌いまくるからな。

ガルツチ「簪。」

簪「何?」

ガルツチ「あれを頼む。」

簪「了解。それじゃあ皆、杜王町奪還したのを祝って、乾杯!!」

全員『かんぱーい!!!』

その後ワイワイガヤガヤしながら料理を食べ、飲んでいると、カラオケ大会が始まった。まずは一番手の簪は『SUPER ∞ STREAM』と『ウルトラの奇跡』を歌い始め、途中から本音、リサ、オーフィス、果ての果てには未来と白夜叉と鈴美、そしてレティシアが歌い始めてきた。

そのまま『みんな大好きなウルトラマン』、そして『ETERNAL TRAVELER』を歌いまくっていった。相変わらず、凄いな。

仗助「んじゃ、今度は俺が行くか。『BLOODY STREAM』  
!!」

仗助が言うと、途端にBGMがなり始め、格好いい踊りをし始め、そのまま歌い始めた。

仗助「静寂のく、そこかくらく……………。目覚めるスタンド使い、時を越くえく……………。♪

深紅のく……………、血潮くがく……………。立ちほだかる勇気をつ。引き合わせるく……………。♪」

ちよつと乱入するか。と思っていたら、どうやらフラン達も同じ気持ちだったようなので、3人にもマイクを渡した。

ガルツチ「受け継ぐ愛をく……………、宿命とく、呼ぶならく……………。♪

微笑む目で、次の手をく……………!!」

フラン「闇を欺いてっ!♪」

こいし「刹那を躲して!♪」

イリヤ「刃すり抜ける奴らの間隙を突け!♪」

仗助「つらぬいた信念が、未来を作くる!♪」

4人「Like a Bloody Storm!」

仗助「熱くLike a Bloody Storm!♪絆に刻まれた運命に!♪」

5人「浮き上がる、消えない誇りの、絆くくく!♪握りしめてく!」

そしてそのまま億安達が受け継ぎ、二番を歌い続けていき、遂に僕らの正式な出番が来た。

歌う曲は『色は匂へど散りぬるを』。っていうか、今思ったけど、未だ達がウルトラマン系で、仗助達はジヨジヨ系、んで僕らが東方か fate系って……いやいいか。

ガルツチ「……………色は匂へど……………」

フラン「いつかく散りぬるを……………」

こいし「さ迷う、ことさえ……………」

イリヤ「許せなかつた……………」

間奏が流れると曲名と、歌うアーティスト名が記される。今回は、僕等7人の名前が記載されていた。

一番は深雪とアラヤ、鳳凰の3人が歌い始め、二番目に入り、僕とイリヤ、こいし、フランが歌い始める。ただ、フランとこいしは、僕とイリヤと違う歌詞で歌っていた。

こいし「弱さ知るアナタは今……………」

フラン「許してくれたく、求める者の欲を……………」

イリヤ「枯れていようと……………、凜とした生き様……………」

ガルツチ「演技ではない、悔いなしと悟りの証……………」

4人「色は匂へど、いつかく散りぬるを……………」

こいフラ「あなたの(あなたの)すべてに(すべてに)、幼く、委ねたい……………」

イリガル「愛しき、伝えても……………♪忘れろるため去ろう……………」

♪

4人「秤に(アナタは)、かけれぬ(優しく)、我が儘なく愛(見守る)だけ……………」

二番目が終わり、再び間奏に入ると、ここで3人は手拍子を始め、僕らは扇を持って舞い踊っていた。

踊れば踊るほど、どこからともなく桜が舞い散り、手拍子をするればするほど、水色の羽根が降ってきた。

そして最後に入り、気合いを入れて歌い始めた

7人「色は匂へど、すべてく散りぬる……………」

アラヤ&鳳凰「短き〜(短き〜)、記憶に〜(記憶に〜)。♪」  
深雪「溢れる、思〜い〜。♪」

こいフラ「愛さ〜れた〜ように〜。♪」

イリガル「愛し〜てあげよう〜と〜。♪」

4人「「「「いつでも〜(一緒に〜)、ず〜つと〜(一緒に〜)。」」」」

♪「「「

7人「「「「「ずっと〜、君といると〜……………。」」」」」」

そして、最後の伴奏が流れ、僕は演説をする。

ガルツチ「大切なものを守れる者こそ、真の正義の味方。」

言い終わると同時に、曲も終わった。

そして、最後は皆で『Bad Apple』を歌いながら踊り、途中で士達が乱入しながらも、宴の終わりを告げた。

それからというもの、仗助達は部屋に戻り、僕らも部屋に戻った。  
ガルツチ「いや〜……………、歌い疲れた……………」  
未来「そうだね、っていうかガルツチはほぼ踊ってたよね？リユウ  
タロスみたいに。」

ガルツチ「アハハ、確かに。僕ってリユウタロスと相性いいのかな  
？」

というか動きやすいつて、言ってたしなあ……………。

あ、ちなみにフラン達は隣の部屋にいますかねとか……………。

一方、フラン達はどうと……………。

フラン「3人は寝ちゃった？」

簪「うん、ぐっすりと。」

本音「それじゃあ、皆でガルガル君とみつくんの所に……………」

深雪「私はアラヤ達と寝るので、お休みだみよん。」  
9人『何故みよん?』

深雪「スー……………、スー……………。(――) z z z」  
白夜叉「そして早っ。」

愛花「……………。(――) スヤスヤ」

こいし「愛花ちゃんも寝ちやつてる!？」

簪「仕方ない、私達だけでも覗き見るしかない!」

鈴美「み、見つからないようにね?」

こいし「大丈夫、私の無意識を使えば、お兄ちゃんも未来お兄ちゃんだつて気づかないよ。」

レテイシア「もはや完全なステルス迷彩だな、お前の能力……………」

何か聞こえた気がしたが、別にいつか。

ガルツチ「んじゃあ、そろそろ……………」

未来「うん、始めようか。」

何を始めるかつて?そりやあ勿論……………。

f a t e / u n l i m i t e d c o d e s に決まってるでしょ

!

え?あれはしないのかつて?それは後でいいんじゃね?

ガルツチ「ところで未来は何を選ぶ?」

未来「ランサーかな?」

ガルツチ「んじや僕はアーチャー。」

未来「これ因縁の戦いだよね。」

ガルツチ「確かに。ステージは?」

未来「言峰教会前にしよつか。」

ガルツチ「さあ。」

未来「聖杯戦争を始めようか。」

『ズコォ!』

ん？なんか音が聞こえた気がするが……………。いつか。

一方フラン達は……………。

フラン「え、二人ともゲームしてない？」

オーフィス「意外。」

白夜叉「おかしいう。てつきりすぐにまぐわうかと思うたんじやが……………。」

イリヤ「私も……………。」

本音「もしかして、見られてるのがバレてたりして。」

こいし「そんなことはないと思うけど……………。」

簪「うゝ……………、なかなかの焦らしがくるね……………。」

レテイシア「やっぱり、あの時で満足したのでは？」

鈴美「多分ないんじゃないかな？」

こいし「もう少し、探ってみよう。」

うん、何かに見られていてどうしよもないわ、これ。

ガルツチ「行くぞ、ランサー。『無限の剣製』！」

未来「うわ、ちよつとこれやばい……………。こうなったら……………！

『突き穿つ死棘の槍』！」

ガルツチ「当てるか！『熾天覆う七つの円環』！」

未来「防御!？」

ガルツチ「これで終わりだ！『無限の剣舞』！」

ランサー『俺としたことが……………。』

未来「……………なんか悔しい。」

アーチャー『自慢の槍……………衰えたか？因縁だなランサー。君とのぎを削り合うのは楽しいが、次は本気で来てほしいものだ。』

ガルツチ「やっぱ僕って、エミヤと相性良いのかな？」

未来「え……………、んじやあお得意キャラじゃん。次別のキャラにしよう？」

ガルツチ「そんなじゃ、ギルガメツシユで。」

未来「おいおい……………でも今度こそ勝つよ。やっちゃえ！バーサーカー！」

そしてフラン達も……………。

イリヤ「殺っちゃえ！バーサーカー!!」

フラン「如何したの急に？」

イリヤ「なんだか言いたくなっちゃって。」

オーフィス「あるある。」

だが結果……………。

ギル『所詮はバーサーカー。戦うことしかできぬ物であつたか。雑種風情にしてはよく持ち堪えた。褒美を遣わそう。さあ、死を受け取れ。』

未来「ええええ……………、ちよつと羽目技しすぎじゃない？」

ガルツチ「それがアーチャー特権ですからね。」

未来「うー……………。こうなったら、ライダー！」

ガルツチ「だったらデイルムツド、お願いします！」

が、結果は……………。

デイルムツド『マスター……………面目ない……………。』

ガルツチ「あ、やっちゃった。」

ライダー『余興はここまでですね。私が揺らぐほどの魅了の呪い……………。……………互いに不自由な生を送った同士、気があつたかもしれないが……………。』

未来「勝った。(コロンビアのポーズ)」

ガルツチ「……………そういや僕、アサシンとアーチャー、ギルガメツシユ、衛宮士郎以外のキャラ使って、勝ったこと無いんだった。」

そんなこと言つた途端、未来はずっこけた。

『どんがらガッシャン!!』

あれ?なんか後ろからも聞こえタ気ガスル。マア、気ノセイダヨネ。うん。

未来「うー……………、こうなったら最も勝てる方法を使うしか……………」

ガルツチ「?」

何だろ、凄く嫌な予感しかし無いのは気のせいだろうか?だがその予感が、的中してしまった。

未来「君を犯して、2敗した雪辱を、屈辱を晴らす!!」

ガルツチ「いやいや、理屈がおかしくね!?何で犯す選択になるの!?それと関係無いよね!」

未来「だから如何した!とにかく君を犯して犯しまくる!!」

ガルツチ「何そのバーサーカー染みた思考!」

おかしいよね?いくら負けたからって、どう見ても八つ当たりだよ  
ね?

っと思っていいたら未来は僕の腕を掴みそのまま押し倒されてしまった。あれ?未来の筋力ってSSだった気がするんだが……………あ、そいや僕未来より軽いから押し負けし易いんだった。

最初は抵抗するつもりだったのだが、いきなり耳を舐め始めたせい  
か、一気に意気消沈しちゃいました。というかホントに僕の耳って、  
敏感だな……………。もう性感帯になってんじゃないの?

いや、よくよく考えたら……………、フラン達結構耳を舐めまくら  
れてた気がする。もう耳は開発済みなのか?

未来「ひょう?こようひゃんする? (翻訳:どう?降参する?)」



ガルツチ「何でっ、降参する必要がっ!!／／／／／／／／／／／／」  
未来「こうひゃんしなひなら……!んんっ!」

ガルツチ「っ!!／／／／／／／／／／／／」

耳が引っ張られてる!?ダメダメ待って!?さすがにそれはっ!!

フランク side

7人「Hシーン来たー!ー!ー!／＼(ゝoゝ)／」

予想外、ゲームの腹癒せでお兄ちゃんを攻めるなんて、私でも思い  
つかなかったわ!!

鈴美「つていうか、ガルツチちゃんつて、耳弱点なのね……………」。  
レテイシア「聴覚が敏感なのは、それが理由か……………」。

フラン「私とこいしちゃんといりやちゃんとで、いっぱい感じられ  
るように開発してたの。」

レテイシア「何してくれてるんだ!?!」

イリヤ「えへへ、それ程でも。」

レテイシア「褒めてない!!」

ガルツチ「ひゃあああ!!／／／／／／／／／／待ってっ、耳の中はっ

……………!／／／／／／／／／／／」

未来「んじゃあ、降参する?」

ガルツチ「いや何でそんな……………っ!!／／／／／／／／／／」

うわあ、耳の中まで舐め始めてる。未来お兄ちゃん凄い……………。

簪「あ……………ああああ……………、私も、私も舐められたい

……………」。

本音「やばい!かんちゃんをご乱心を!!」

レテイシア「落ち着け!見つかったらやばいぞ!?!」

鈴美「でも、おかしいわね。まるで、待ち構えてるような気がする  
んだけど。」

こいし「ま、まさかそんなこと…………………………、無いよね?」  
うーん、未来お兄ちゃんとはともかく、お兄ちゃんならやりかねない

わね…………。あの目が気になるし。

簪「もう限界!!私も混ぜてええええええ!!」

こいし「あ、かんちゃん!!」

未来ガル「ハイキャッチ。」

簪「あ。」

sideChange

ガルツチside

はあ、んなこったと思った。まあ当然と言ったら当然か…………。

ガルツチ「ほら、こいしも無意識解除して。」

本音「ええええ、こいこいちちゃん…………。何で〜?」

こいし「おつかしいなあ…………、お兄ちゃん達には見えないようにしてただけど…………。」

ガルツチ「欲情丸出しだったぞ。さっきの音といい、こっちに来たときから気付いてるぞ。」

3人「(そうだった、お兄ちゃんの無意識心眼を侮ってたわ。)」

ガルツチ「うー、っていうか未来、流石に耳の中に入れるなんて思わなかったよ…………。いくらこれが手っ取り早いとは言ってもねえ…………。的確過ぎでしょ。」

未来「でも途中で気持ちよさそうな顔してたじゃん。」

否定出来ねえ…………。むしろもっとやれって思ってたのが、一番痛い…………。あかん、段々M化し始めてきた気がするの僕だけだろうか?

ガルツチ「…………まあ、こっちに来た以上、どうせ乱交パーティーするんでしょ?」

フラン「さすがお兄ちゃん、話が早い!」

ガルツチ「やっぱりこうなるか。」

未来「もう定番だよね、これ。」

こいし「と言うわけで、ピョーン!」

未来「え!?何で僕!」

あらく、珍しい。未来の方攻めるとは。

こいし「ムツフー！前々から思ってたけど、未来お兄ちゃんもやりたいと思ってたんだよね。」

ガルツチ「しかも虎視眈々と!？」

簪「うゝ………、だったら私はガルツチさんと!？」

ガルツチ「マジで?」

しかも一瞬で裸になったし、あーもーこれ覚悟しましょう。うん。

7人「「「「行くよ、お兄ちゃん達。精液の貯蔵は充分か?」「「「「「

未来ガル「ふっ、思い上がるなよ?ついてくれるか?」「

レティシア「何これ………。」

鈴美「さあ………。」

そして僕らは乱交パーティーが始まり、皆仲良く搾り取られました。

sideChange

??? |  
side |  
??? |

ちっ、やはり円卓の騎士は役に立てなかったか。何処に消えおつた

?

時臣「及びでしようか。ゼロ様。」

ゼロ「貴様、いい加減うっかりを直す気ないのか!？」

時臣「う、うっかりですか!？」

ゼロ「元はと言えば、貴様のうっかりを招いた事だぞ!？」

時臣「も、申し訳ございません。」

ゼロ「いいか、次うっかりしたら、貴様を消す。」

時臣「了解……………しました。」

クソ、この計画は、必ず成功させる……………!絶対にだ!!

sideChange

―杜王町 仗助の家―

ガルツチside

そして、別れの日が来た。

仗助「もう行くのか?」

未来「うん、次の世界が待ってるから。」

億安「寂しくなるな……………。また行つちまうつてのはよ。」

鈴美「ごめんね、みんな。私達、やることがあるから。」

由花香「寂しくなるけど、仕方ないわよね。」

露伴「……………。」

康一「露伴先生？」

露伴「あーもう！言えば良いんだろ言えば!! 未来ちゃん、鈴美を頼む！もし傷つけたら、許さないからな!!」

未来「うん。じゃあね、みんな。」

鈴美「それじゃ、皆元気だね。」

仗助「それと、ガルツチ！」  
ん？

仗助「お前の知ってる俺じゃないが、謝っておく。すまなかつた！」  
ガルツチ「……………気にしないで、仗助。お前は悪くないから。バイバイ、ジヨジヨ。」

仗助達と別れを告げた僕達は、すぐさま次の世界に向かった。

―幻想郷 人里―

ガルツチ「幻想郷かあ……………、違う世界とは言え、懐かしいな。」  
フラン「そうだね。」

未来「んじゃあ皆、早速フレイ達のところに行こう。」

t o b e c o n t i n u e d  
→

恐竜ドラゴンとコラボ もう一つの幻想郷 東方  
影悪夢

### 第36話 悪夢を使う男

―博麗神社―

ガルツチ side

霊夢「あら、未来！久しぶり！」

???「ん？おう！未来!!相変わらず女装してんな。」

未来「おまつ、再会して早々それか!？」

博麗神社に到着すると、あの時未来が召喚した男、確かフレディだっけ？其奴とで会った。

霊夢「あら？そこにいるのって……………?！」

ガルツチ「……………多分君は僕のこと知らないと思うけど、一応言う。久しぶりだな、博麗霊夢。」

霊夢「どうやら、私のこと知ってるようね。見たところ、人間には程遠くなってるけど、妖怪でも無いわね。」

ガルツチ「有翼人って言う種族さ。」

???「ん？おい未来、なんか前来た時より増えてねえか？あの未来と違って男装してる奴は?！」

未来「あ、紹介するよ。あの人はガルツチ。幻影の不死鳥とも呼ばれていて、あのお方の息子だって。ガルツチ、この人はフレディ……………って、ガルツチは僕が召喚したフレディと出会ってたね。」

ガルツチ「宜しく、フレディ。」

フレディ「おう、宜しく。お前、未来と違ってちゃんと真面そうなの……………って訳でもねえか。何故サイドテールしてんだ?！」

ガルツチ「いいだろ別に、どうせ女性にしか見えないんだし……………」

フレディ「おいおい、ショック受けることなのか?！」

当たり前だろう畜生……………」

フラン「初めまして、フレディさん。」

フレディ「おう初め……………、ってフラン!? っつか胸デカっ!」  
フラン「あー、多分この世界の私ね……………。でも、私は貴方とは初  
対面よ。」

フレディ「あ、そうか……………。んで、その指輪は？」

ガルツチ「結婚してんの。もう14人ぐらいの子供居るからな。」

フレディ「フア!? この子14人で!」

なわけないだろ……………。

ガルツチ「フランとこいし、イリヤ、んで女体化ではあるが僕。」

フレディ「わるい、ちよつと混乱してくる……………。」

???「如何したツスカ? フレディ先輩?」

すると、誰かがフレディに声をかけた。

???「ってあああ!! 未来さん、お久しぶりっす!」

未来「久しぶり、ゴーストフェイス。」

ゴースト「お久しぶりっす。ところでフレディ先輩、如何したっす  
か?」

ガルツチ「いや、気にするな。なんか混乱してるだけだから。う  
ん。」

ゴースト「そ、そうっすか。それで、あなたは?」

ガルツチ「僕はガルツチ。戦場では幻影の不死鳥と呼ばれ、有翼人  
なんだ。」

ゴースト「ガルツチさんっすね。僕はゴーストフェイスっす。」

ガルツチ「宜しく。」

ゴースト「宜しくっす。」

しっかし、今思えばこれホラー映画に出てくる奴らだよな? いやい  
よ僕の恐怖感覚も狂ってきたか?

ゴースト「ってフラン!? なんか立派なものが——」

ガルツチ「待て、こっちは違うフラン。僕の世界のフランだ。ほら、  
指輪あるだろ?」

霊夢「指輪って、貴方結婚してるの!」

ガルツチ「うん。3人結婚してるしな。」

フレディ「いや待て、一つ聞け。お前が産んだってどういう事だ





こいし「仕方ないよ。風龍さんの作品の私とフランちゃんはロリ巨乳だもん。」

ガルツチ「わざわざメタ発言するか？しかも風龍さん自体登場してるし。」

フレデイ「いや待て、作者が登場するってどう言う作品だ!？」

フラン「そういうものなの。」

ゴースト「そんなことあるわけ——」

風龍「呼んだ？」

ゴースト「ってホントに来た!？」

だから言つたのに……………。

フレデイ「いやいや、作者がそこにいたら成り立たねえだろ!？」

風龍「それにはご尤もだけど、そう言うもんなの。」

フレデイ「うちのさ——」

『ガゴンツ—』

フレデイ「ゴフウ……………」

ゴースト「フレデイ先輩が倒れた!？」

未来「この人でなし!!」

ガルツチ「この人のクラスがランサーだったら、多分僕も言つてたな……………。多分彼方の世界の作者さんがやったに違いないな。」パシツ

ゴースト「す、すげえ……………。作者さんの攻撃を、意図も容易く受け止めてる。」

ガルツチ「いったら？この世の全ての刃だと。」

霊夢「作者の攻撃を防ぐって、普通じゃないわよ。」

ガルツチ「一度YouTubeしろ、殆どの作者が弄られてるぞ。」

ゴースト「もうメタ発言ばっかじゃないかつす。」

ガルツチ「気にするな。」

(ちなみに風龍は元の場所に戻りました。)

ゴースト「それで、その明らかに美少女な人は？」

イリヤ「私はイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。こいしちゃんとフランちゃんと同じお兄ちゃんの妻で、幻想郷に居た頃は博

麗の巫女をやっていたわ。」

霊夢「嘘!?!」

イリヤ「そういえば、何故か私になった途端、参拝客が増えたわね。」  
すると霊夢が・の目になり、凄惨な形相でイリヤを見つめた。

霊夢「どうやって稼いだの!?! ねえコツとかあ——」

ガルツチ「霊夢?」

霊夢「後にしてよ! それより教えて!?! ねえ!!」

イリヤ「お兄ちゃん……………」

イリヤを泣かせるとは……………、此奴にはちよつとばかしお仕置  
が必要だな。

ゴースト「え? あのガルツチさん? それって……………」

ガルツチ「スペルカード発動。殺符『夢想封印!! 殺』!!」

霊夢「え? ちよ、いやあああああああああ」

『ピチューン』

!!!!!!

——巫女復活中

ガルツチ「霊夢、次うちの嫁を泣かせたら、殺すからな?」

霊夢「ご、ごめんなさい……………」

フレディ「痛え……………、って何でガルツチがあんな殺意を!?!」

未来「気をつけて、ガルツチってヤンデレ要素もあるから。」

ゴースト「嘘!?!」

マジです。ホントに殺しますので。それから、白夜叉、レティシア、  
鈴美、アラヤ、鳳凰の順に自己紹介した。その後ゴーストフェイス、フ  
レディ、更には仲間達も来て、順に自己紹介した。

ガルツチ「はあ……………、こんなに疲れる自己紹介だったっけ?」

フレディ「お前疲れるなんて、情けなさ過ぎじゃねえの?」

ガルツチ「仕方ねえだろ、僕の身の回りにはカオスしか起きねえん  
だから。おかげで僕のSAN値ガッツリ削られたよ……………」

フレディ「わ、悪い。」

ガルツチ「そもそも何でカオスしか起きないんだよおかしいだろい



か。」

紫「まだあるわ。これも同類だと思うけど。」

ガルツチ「ん？っておい!？」

『特徴

普通の攻撃でも蘇る

魔法攻撃なら有効ただし気休め程度

後は先ほどの資料と同じ。』

ガルツチ「こっちはハートレスサーヴァントか……………」

今まで姿を見せてこなかったなと思ったら、この世界にいたのか。

未来「知っている奴なの？」

ガルツチ「ああ、以前聖杯戦争で現れた連中だ。今まで出ないと  
思ってたが、ここですか。」

少し予想するために先ほどの地図を投影し、居場所を特定するため  
に解析を始めた。

ガルツチ「『トレス・オン解析開始』。」

シャドウサーヴァント探知……………探知完了

セイバー 人里

アーチャー 紅魔館

ランサー 守矢神社

ライダー 地霊殿

アサシン 白玉楼

キャスター 白玉楼

バーサーカー 魔界

ハートレスサーヴァント探知………失敗

聖杯探知………完了

聖杯は守矢神社

ガルツチ「……………厄介なことになったな。」

フレディ「厄介なこと？」

ガルツチ「このままだと、聖杯戦争が起こりかねないぞ……………」

霊夢「聖？」

フレディ「杯？」

ゴースト「戦争……………すか？」

イリヤ「あ……………、これ正直説明が面倒なのよね……………」

ガルツチ「仕方ない、聖杯戦争を説明するから、よく訊いて。まず聖杯ってのは、いわば『万能の願望器』とも呼ばれている。つまり何でも。」

3人「何でも!？」

ガルツチ「つて言ってるけど、曖昧すぎる願いは無理なんだ。んでそれを得るにはサーヴァントつつう使い魔的な奴と共に戦うのが聖杯戦争。」

イリヤ「様々なルールがあるけど、基本的に7つのクラスがあるの。  
『セイバー剣士』、『アーチャー弓兵』、『ランサー槍兵』、『キャスター魔術師』、『アサシン暗殺者』、『ライダー騎乗兵』、そして『バースター狂戦士』の7つよ。場合によっては、『ルーラー裁定者』、『アヴェンジャー復讐者』、『セイヴァー救世主』、『ビースト獣』等のエクストラクラスがあるの。」

霊夢「うー、なんだか頭が痛くなるわね……………」

それからは、僕とイリヤの聖杯戦争の説明をしまくり、ようやくみんなは理解した。

フレディ「だがよ、何でこんな場所でおっぱじめる気なんだ？」

ガルツチ「さあな。原因不明だが、ろくな事にはならないのは確かだ。」

フレディ「ふーん……………、ところでガルツチ。」

ガルツチ「？」

フレディ「お前って強いのか？」

ガルツチ「うーん、どうだろ。加減してばかりだが、殆ど勝利して  
るようなもんかな？」

フレディ「なるほど、戦えば分かるって訳だな。いいぜ、外に行こ  
うぜ。」

ガルツチ「いいよ、悪夢と戦えるなんて、素晴らしい幸運だ。」

そうして、僕とフレディは白い渦に入ると、草原ばかりの場所に着  
いた。

ガルツチ「こっちは何時でもいいよ。加減は出来るだけするが、本  
気でこい。」

フレディ「いいぜ。」

【マイティアクションXー】

身に覚えのないベルトにガシエツト？

フレディ「変身！」

【ガシヤット！レッツゲーム！メツチャゲーム！ムツチャゲーム！  
ワツチャネーム!?アイム ア カメンライダー！】

……………ツッコミしか出ないけど、何かとやばいのは分かった。  
だったら……………。

ガルツチ「仮面ライダーなら、仮面ライダーだろうな。」

【ブラッドオレンジ！ ロックオン！】

フレディ「ブラッドオレンジ？」

ガルツチ「かの英雄王から貰った奴さ。変身!!」

【ソイヤー！ブラッドオレンジアームズ！邪の道、オンステージ……………】

フラン「お兄ちゃん、頑張ってる！」

ゴースト「フレディ先輩、ファイトつす！」

さあ、お前の力、見せてみる！

ガルツチ「Are you Ready？」

フレディ「OK。」

ガルフレ「いざ参る!!」

t o b e c o n t i n u e d  
→

### 第37話 エルム街の悪夢VS幻影の不死鳥

―隠れ家 草原―

ガルツチside

【Freddy Krueger VS phantom phone  
nix】

【Sword or Death】

フレディ「何だ、今の。」

ガルツチ「そういえば、一騎打ちの時に限って『fate／Ext  
ra』風になってたなあ……………」

というかゲームの仮面ライダーって、何かとヤバい気がするな。つ  
て思っていたら早速攻撃を仕掛けてきた。

フレディ「貰った！」

ガルツチ「よつと！」

フレディ「オラア！」

ガルツチ「ショット！」

僕はすぐさま無双セイバーを抜き、銃口をフレディに合わせて放つ  
た。

フレディ「グフオ!!」

ガルツチ「まだだ！」

そのまま持ち直し、フレディに斬り掛かった。ダメージは与えてい  
るが、ぶつちやけ言おう。ホントにゆるキャラ姿のまま戦っているの  
か？

フレディ「こりゃ、レベルアップしないとな。大変身!!」

【ガッチャーン！レベルアップ！マイティジャンプ！マイティキック  
！マイティマイティアクション！エックス!!】

あ、そつちの方が仮面ライダーらしい。んじゃそろそろ赤色の大橙  
丸を持って挑むとするか！

sideChange



未来 side

あれ？何でフレディが仮面ライダーに？っていうかいつからなったの？

未来「ねえゴーストフェイス。僕が居ない間何があったの？」

ゴースト「そうっすね。僕でもよく分からないっす。」

未来「そうなんだ。」

でもレベルアップ出来る仮面ライダーかあ……………、何だかいなあ。でも、ガルツチは何で戦極ドライバー持ってるんだろ？

簪「うーん、私どっち応援すればいいんだろ。」

フラン「やっちゃえ！お兄ちゃん！」

本音「フラランはガルガル君を応援してるけどね……………」

まあ僕も、ガルツチを応援するけどね。頑張れ、ガルツチ。

side Change

ガルツチ side

フレディ「行くぜ！火符『ファイアボール』！」

ガルツチ「マジかよ!?だが無駄だ!」

まさか仮面ライダーの姿でも放てるとは……………、だがその属性はミスったな？

フレディ「何!?俺のスペルカードが吸収した!」

ガルツチ「いや、属性だな。僕の魔術礼装『煉獄の衣』を着ているおかげで、あらゆる火属性は吸収、そして氷属性は無効化出来る力を持つてる。」

フレディ「なっ!?此奴はヤベえな……………」

ガルツチ「仕返しだ！火&斬符『フレイムブレードカーニバル』!!」

僕はすぐさまスペルカードを放ち、火の短剣、炎の剣、業火の大剣等の武器が現れ、フレディに目がけて放った。

イリヤ「あれ、あの金ぴかを意識してやってるでしょうね……………」

こいし「まあお兄ちゃんは、慢心というより、力の加減をしないと大変な事になるからねえ……………」

霊夢「え?」

イリヤ「お兄ちゃんの本気は次元を越えちゃってるのよ。それも破壊できるほど。」

霊夢「何それチート!?」

まあ事実ですしね。

フレディ「やっぱ鈍器より、こっちだろ!」

【ジャ・キーン!!】

ガルツチ「んじゃ、そろそろこれと行くか!」

僕はブラッドオレンジロックシードを外し、代わりのものを出した。

【カチドキ!! ロックオン!】

【ゲート・オブ・バビロン!! ロックオン!】

まああれも言わなきゃならないだろうなあ……。気が進まないが、言うか。

ガルツチ「A・U・O!!! 『CAST OFF』!!!」

【ロックオープン!!英雄王アームズ!!最強、最古、英雄王!!】

先ほどの姿は一変し、ギルガメッシュの『原初の神話礼装』の姿へ変貌した。

フレディ「おいおい、いきなり最強形態って、ねえだろ!」

ガルツチ「慢心なした。王の財宝、その一端を見せてやる。」

すぐさま『王の財宝』<sup>ゲート・オブ・バビロン</sup>を使用し、フレディに向けて放つ。

フレディ「こりゃ、此奴を使うか!変化『スーパーフレディ』!!」  
なっ!?全部受け止めた!?

フレディ「危ねえ、さて………仕返しと——」

ガルツチ「やらすか!『破戒すべき全ての符』!!!」

フレディ「グハア!?って、バカな!?無敵時間が強制的に!」

ガルツチ「この宝具は、あらゆる効果を初期化出来る短剣さ。無敵だろうが何だろうが、この宝具に刺されれば一瞬で終わる。」

フレディ「何そのチート武器!?ってアアアア!?変身も切れてる!?!」

ガルツチ「さあ、行くぜ!!原初を語る、元素は混ざり、固まり、万



夢に引きずってでも——」

ガルツチ「『破戒ルールすべき全ての符カード』」

フレデイ「なっ!?!」

ガルツチ「止めとけ、僕の悪夢は、お前が思ってる以上におぞましい世界だ。見ないことをお勧めする。」

フレデイ「りよ、了解……………」

結果、フレデイが降参し僕の勝利で収まった。まあぶっちゃけ、あれはやり過ぎたとは思ってる。でも一応手加減はした方だぞ!?!

ガルツチ「つて、ああ……………お前凄く怪我だぞ。やつぱり避けたと言えど、ダメージはあったか。」

フレデイ「オメエなあ……………」

ガルツチ「ちよつとこつち来い。治してやるから。」

sideChange

—隠れ家 大広間—

未来side

ガルツチ「おい馬鹿、動くなって!」

フレデイ「いやいや、お前消毒とは言え俺としたら無茶苦茶痛えんだよ!!」

ガルツチ「そう言うな。今から使う魔法は水を使うんだ。その前に、その怪我を消毒しないと。」

フレデイ「馬鹿!そこは大丈夫だって!!つておい!話聞け!!」

うわー、無自覚なのか天然なのか分かんないけど、色々なところ触りまくってるね……………」

簪「……………」フルフル

未来「あ、簪が震えてる。」

霊夢「如何したの?簪さん?」

ゴースト「簪さん?大丈夫ですか?」

簪「紙とペン持ってくる。」

ガルフレ「いや待て!?!なんか勘違いしてねえか!?!」

簪「大丈夫、ガルツチとフレデイの同人誌書いただけだから。」

ガルフレ「それこそ待てだろうが!?!」

またBL同人誌を書くのかよ。っていうか、何でこうなった。  
ガルツチ「つていうか消毒終わったとは言え、あまり動くな！一瞬  
で治すから動くなよ。」

フレデイ「いやなにすんだよ!？」

ガルツチ「癒しを。『湧ヒーリング・アクア水』。」

フレデイ「何々何だこの水!？」

あ、フレデイがガルツチの水に閉じこめられた……。あれって  
……。

イフ「あれはあらゆる傷を癒し、治すことが出来るものだ。まあ、フ  
レデイの顔はそのままだが。」

未来「凄いね、その技。」

簪「つまり、スライムプレ——」

ガルツチ「全然違うよ!？」

如何してこうなった……。いや、こうなったのって、大体がフ  
ラン達だよね……。

霊夢「あの、簪さん?」

簪「?」

霊夢「いつから、そうなったの?」

フラン「私が目覚めさせました。」

霊夢「何してくれてるの!？」

ガルツチ「ごめん、うちの嫁が……。」

ゴースト「こっちのフランって……。意外と、あれなんだね。」

ガルツチ「気にしないで……。とりあえず、これでよし。」

フレデイ「サンキュー。だが、あれは勘弁しろよ?」

ガルツチ「まあ、これが正式な治し方なんだけどな……。」

あれ?そういうえば、ガルツチの耳……。なんか違う。

こいし「そういうえばお兄ちゃん、お兄ちゃんの耳おかしいよ?」

ガルツチ「え?何がおかし……。フア!?何で羽耳になってんの?

僕……。」

どういう訳か、ガルツチの耳は、いつの間にか空色の翼の耳に変  
わっていた。

ガルツチ「……………まさか、僕羽化したの!？」  
t o b e c o n t i n u e d  
→

### 第37. 5話 有翼人の羽化

―スピリットレストラン 地下超大図書館― 夜ノ刻―  
パチユリースide

はあ、いずれ羽化する予兆はあったのは分かっていたけど、ルッチよりも少し遅かったわね。いえ、弟だから仕方ないかな。

マルツチ「師匠、新しい本を持ってきました。」

パチユリー「あら、ありがとうマルツチ。」

マルツチ「父上を見ていたのですか？」

パチユリー「ええ、どうやらガルツチは羽化したらしいよ。」

有翼人の羽化。正直言つて、原因は不明。ルッチの羽化も、気が付いたら肩から翼が生えたと言っていて、その現象はガルツチと似ている。ただガルツチは耳が翼に変わっている。

対して、その両親であるエアとフィンには、羽化の様子はなかった。普通羽化は幼虫から蛹、そして成虫、言わば進化みたいな感じなのだが、有翼人の羽化は不明処がある。

何故大人の有翼人がいるのに羽化がないのか。様々な有翼人に関する事を探し当ててみたけど、余り見つからなかった。

分かったことと言えば、有翼人は人間と翼のある種族、または天使と神、悪魔と魔神から誕生し、場合によつては長寿の種族とも呼ばれている。

姿は殆ど人間らしいが、背中には翼が着いている。色は皆それぞれだが、場合によつては翼の数が4つ以上あるとされていて、その人は特別扱いとされる。

現にルツチもガルツチも、4つ以上の翼を持っている。(2人が覚醒すればだが……。)

だけど不明なところがある。

その一つが羽化だった。成体と書かれたものは、決まって何処かに翼が生え、そのままの状態となる。例えば、両足のくるぶし部分とか太股部分、そして、両手に翼が生えるとか。

でも羽化するタイミングが、全く分からない。子供の時に早めに羽

化するのがあるれば、普通に大人になって羽化する事もあり、老人になってやつと羽化する事等がある。

2人に至っては、不老不死の呪いによって羽化する事は無かったのだが、どうやらそれとは関係がないようだ。

歲的には老人の歳なのだが、どうやら違うようだ。どうも、数千万歳になれば漸く大人になれば、不可数歳になれば老人扱いになるらしい。一言言わせれば……………。

パチュリリー「有翼人って、超長寿種族じゃないの？」

普通に考えたら気が遠くなる歳じゃない。でも滅びてしまった以上、確かめようがない。そして2人の両親から聞いたけど、どうも覚えていないらしい。

歳といい、羽化といい、ホントに謎すぎる……………。

マルツチ「父上が羽化ですか……………、と言うことは、何かしらのリミットが外れたんでしょう。」

パチュリリー「え？知ってるの？」

マルツチ「ええ、諸説ではありますが、父上は耳から翼が生えたのですね？」

パチュリリー「ええ、そうだけど？」

マルツチ「耳から翼でしたら、それは五感のうち、視覚は最も遠いところや人体の内部が見える事が出来、聴覚だったら地獄耳並みによく聞こえ、心眼使わなくても心の声が聞こえるようになるんです。」

パチュリリー「ええええ……………、敏感の理由はもしかしてそれ？」

マルツチ「いえ、父上が言うには、生まれたときから耳は敏感だったそうです。」

パチュリリー「な、なるほど……………。」

マルツチ「一方で伯父上の肩ですが、恐らく第六感が今以上に敏感になった事でしょう。何故かは不明ですが。」

パチュリリー「そう……………。」

マルツチ「ただ、羽化のタイミングですが、本来なら儀式をして試練を与え、クリアすることによって羽化するのですが、羽化したい人はあまりいないのです。たまに知らない内に試練を与られ、気がつけ



ばクリアして羽化していったつてのもありますが。」

なるほど……儀式ね……。

パチュリー「それじゃあ、今もその祭壇は？」

マルツチ「いえ、ないですね。遺跡でそれらしき物がありました、  
まともに使える物ではありませんね。」

パチュリー「うーん、それじゃああの2人が羽化し、何の試練を渡  
したのか不明つて事になるわね。」

マルツチ「あまり、詮索はやめておいた方がいいかも知れません。  
もしかしたら、とんでもない無理難題かもしれませんし。」

パチュリー「そ……そうね……。」

確かに、これ以上の詮索は止めておきましょう……。

マルツチ「しかし、少し疲れましたね……。少々、お隣に寄り  
添つてもよろしいでしょうか？」

パチュリー「むきゅ？ま、まあいいけど……。」

マルツチ「では、師匠。失礼……。」

あ、そのまま眠つちやつた……。それにしても、ガルツチの息  
子なのは分かつてるけど、なんて言うか……。可愛らしい外見ね。

まあでも、私も少し眠くなつたし、今日は……。添い寝でもさせ  
てあげましょう。

宙に浮かせる魔法使つてつと……。

パチュリー「いつか、マルツチと恋人になったら、なんてね。」

sideChange

—博麗神社—

ガルツチside

ガルツチ「まだ婿はやらんぞ!!」

フレディ「どした急にデカイ声出しやがつて。」

ガルツチ「いや、なんか知らんが……。その……。すまん。」

未来「あー、そういえば他にも息子が居たんだったね。」

ガルツチ「駄目だ、あの親父と切嗣に親バカが移されたか……。

おのれ切嗣と親父!!よくも親バカを移してくれたな!!」  
もうマジで許さん。あの2人には起源弾で殺るしかない。覚悟し  
やがれ……………」。

t o b e c o n t i n u e d  
⇒

## 登場人物3

神風深雪 18歳 8月31日生まれ 性別 女

身長：165cm 体重：50kg

スリーサイズ：B85/W55/H70

CV, 坂本真綾

種族：人間

髪の色：ピュアスノー

目の色：グレイブルー

クラス：不明

属性：中立・中庸

ステータス 筋力：B／耐久：A／敏捷：SSS／魔力：EX／幸

運：D＋／宝具：EX

元々は普通の女子高生だったのだが、ある出来事により、警察に逮捕され、死刑となった。が、全王神の友人である龍王神によって転生し、第二の人生を送っている。

現在は未来達と旅に同行している。

東方の紅魔郷からのキャラの能力と全キャラのスペルカード、fateの全英霊の宝具やスキルランクがEX(病弱は無し)、更には戦闘技術などの特典を持っている。

こう見えて可愛いものには目がなく、しかもアラヤや鳳凰、更にはリサを見てしまったためか、ロリコンとシヨタコンに目覚めかけている。

コラボ者の登場人物

フレディ・クルーガー 不明 6月9日 性別 男

身長：173cm 体重：70kg

CV, 置鮎龍太郎

種族：夢魔

髪の色：なし（髪自体ない）

目の色：空色

クラス：アサシン・バーサーカー

属性：混沌・中庸

ステータス 筋力：A／耐久：A／敏捷：SSS／魔力：EX／幸

運：E／宝具：EX

恐竜ドラゴン作である東方悪夢男の主人公。元々は、エルム街の悪夢に登場する主人公的な存在だが、忘れ去られたのか幻想入りさせられ、現在は霊夢のところに居候している。

焼きただれた顔、赤と緑の横縞セーター、焦げ茶色の帽子、右手に手製の鉤爪を持っていて、かつスタンドを持っている。スタンド名は『ナイトメア』で、一度未来を手こずらせた事がある。

能力は夢を操る程度の能力で、夢の中では最強でもある。2つも形態あるが、どうやらまだあるらしい。

しかも仮面ライダーエグゼイドでもあるが、一度ガルツチと戦うも、ガルツチの贗作宝具である『破戒すべき全ての符<sup>ルルブレイカー</sup>』により、敗北を喫している。

ガルツチ程ではないが、人を殺すことがあるが、殺すといっても悪人の方であり、時には焼きただれた顔の皮を剥がし、ガイコツ顔を見せて脅かすこともある。さらに夢の世界でも現実世界でも関係なく不死身。博麗神社に住み、人里に散歩に行ったり、材料の買い出しに行ったりする（といっても霊夢にパシられている）。実を言うとフレディは幻想郷を知っていて、場所はある程度分かるらしい。また、酒に弱い。酒に手をつけると何がなんだか分からなくなり、フラフラになったり、右手の鉤爪を振り回したりするので危険。その上、次の日には自分がやったことを何もかも覚えていない。それでも酒は嫌いではないらしい。自分の焼きただれた顔をけなされるのが一番大嫌いで、けなされると東方仗助の如くキレる。

ゴーストフェイス 不明 11月20日生まれ 性別 男？

身長：不明 体重：不明

CV，松野太紀

種族：一応人間

髪の色：不明

目の色：不明

クラス：アサシン

属性：混沌・中庸

ステータス 筋力：C／耐久：D／敏捷：A／魔力：EX／幸運：

E／宝具：A

フレディとは先輩後輩関係で、同じホラー映画の存在。（スクリーンという名の映画出身。）

顔がムンクなのだが、どういう訳かガルツチでも表情が分かってしま（らしい。）

フランにはトラウマとかあるのだが、ガルツチの妻であるフランとはどうも平気らしい。

レザーフフェイス／ジエド 不明 誕生日不明 性別 男

身長：不明 体重：不明

CV，大友龍三郎

種族：人間？

髪の色：黒

目の色：不明

クラス：アサシン

属性：混沌・悪？

ステータス 筋力：A／耐久：C／敏捷：EX／魔力：D／幸運：

E＋／宝具：不明

『悪魔のいけにえ』に出てくる怪物？で、フレディとはゴーストフェイスと同様ホラー映画の先輩後輩関係である。

喋れないのか、殆ど『ウガツ』と言っているらしいが、フレディに

は何を言ってるのか分かるらしい。

ガルツチも一応分かるのだが、勘違いするのがあれなため、現在普通に喋らせる薬を調合中。

チャツキー&ティファニー 不明 どちらも誕生日不明 性別  
チャツキー 男 ティファニー 女

身長：不明 体重：不明

チャツキーCV，金丸淳一 ティファニーCV，岡村明美

種族：人形（どちらも）

髪の色：（チャツキー）赤（ティファニー）金

目の色：（チャツキー）緑（ティファニー）青

クラス：アサシン（どちらも）

属性：（チャツキー）混沌・悪（ティファニー）中立・中庸

ステータス 筋力：C／耐久：D／敏捷：C／魔力：EX／幸運：

E／宝具：D

『チャイルドプレイ』という名のホラー映画の登場人物で、上記2人同様、フレディとはホラー映画の先輩後輩関係。

2人とも夫婦で喧嘩もするのだが、結構なかよし。

山本貞子 不明（見た目的に16〜18歳） 6月？日 性別 女

（実はふたなり）

身長：不明 体重：不明

CV，沢城みゆき

種族：霊

髪の色：黒

目の色：黒

クラス：キャスター・アサシン

属性：混沌・悪

ステータス 筋力：E／耐久：D／敏捷：A／魔力：EX／幸運：

E／宝具：B

『リング』というホラー小説の登場人物で、上記3人とは違うが、フレディとはホラー関連での先輩後輩関係。

ふたなりをお持ちで、ぶつちやけ男女どちらもいけるといいうバイセクシャルでもある。(実はガルツチの本質を見抜いている。)

しかもどうやら、BL好きの腐女子で、未来とガルツチが付き合っているのが分かると、早速簪のBL同人誌を買って読んでいるらしい。(2人はそれに気づかない。)

トライボグ 不明 誕生日不明 性別 男

身長：不明 体重：不明

CV、最上嗣生

種族：ロボット

クラス：不明

属性：秩序・中庸

ステータス 筋力：不明／耐久：不明／敏捷：不明／魔力：不明／

幸運：不明／宝具：不明

海外の格闘ゲーム『モーターコンバットXL』に登場するキャラ。スモーク、サイラックス、セクター、サイバーサブ・ゼロの姿をコピーした謎のサイバネティック忍者。基本ボディはスモークである。4つの姿を持つわりには名前にトライ(3つ)とあり、本人もそれにコンプレックスを抱えているらしい。

別の姿になるのはもちろん、別の姿を呼び出して戦うこともある。デスマシーンにも変身でき、相手を押し潰してレッドキューブにしてしまう。

普段は八雲紫の家に居候している(本人いわく『私はお手伝いロボットじゃない』)。橙の遊び相手をしたり、紫が冬眠した際は彼女の式の藍と共に幻想郷を仕切るんだとか…。

ちなみに性格は優しいが、怒らせると怖い。

仮面ライダーゲム／ジェイソン・ボーヒーズ 不明 6月13日  
性別 男

身長：192cm 体重：114kg

CV，森川智之

種族：人間？

髪の色：黒（ゲム変身時、変身前は生えていない）

目の色：不明

クラス：バーサーカー

ステータス 筋力：A／耐久：EX／敏捷：B／魔力：D／幸運：

C／宝具：―

『13日の金曜日』の殺人鬼。フレディの永遠のライバル。1歳の時、先天性の病で顔が醜く歪んでしまった。11歳の時クリスタルレイクで参加したキャンプで子供達にいじめられ湖に沈められたが奇跡的に無事だった。

あるフレディとの対決に母を変装して騙したのか、フレディと敵対している。

何故かキースに特別扱いされており、兵士達から内緒でもらったゲーマドライバーとプロトマイティアクションXガシャットで仮面ライダーゲムに変身する。

キースにとっての最終兵器でもある。

キース・シャードイス 不明 誕生日不明 性別 男

身長：不明 体重：不明

CV，最上嗣生

目の色：茶色？

クラス：不明

属性：（教官時）秩序・善（現在）混沌・悪

ステータス 筋力：不明／耐久：不明／敏捷：不明／魔力：不明／

幸運：不明／宝具：不明



元『進撃の巨人』出身の教官だったのだが、あまりにも厳しすぎるという理不尽な理由でクビになり、進撃の巨人の世界から幻想郷に追放された。その恨みを晴らすため追放先の場所で力をつけ、13人の部下達を集め、八雲紫及びその式2人を始末して幻想郷を支配しようとしている。

現在支配の邪魔をしているフレディ達と、今回この世界に来たガルツチ、そしてウルトラマンセラフィムオーブとなった簪を敵視している。

第38話 魔境狂乱世界 幻想郷 『エルム街の悪夢  
男』

—  
???

キース side

キース「ツ!」

この気配、まさか……。まさか、この世界に舞い戻ったというのか!? いや、確かに彼は、人類にとつての希望だった……。同時に、敵対すれば、確実に人類にとつての絶望にもなり得る彼が、この世界に来た……。

「如何なさいましたか?」

キース「拙いことになった。私にとつての天敵が、この世界にきた……。」

「貴方様に、天敵?」

キース「ああ、かつて我が世界は絶望の闇に覆われていた。しかし、一筋の光があった。その光は、一瞬にして巨人を両断し、更には町を救った。そして彼は、訓練生となり、立体起動装置、更には学問や身体測定でも完全に熟し、首席を得るぐらいの実力を持った。が、彼は首席を取りやめを頼み、変わりに2位の人を首席をあげてほしいという謙虚さもあった。」

「凄い訓練生ですね……。」

ああ、あんな奴が調査兵団に入るとは、本当に幸運だった。だが、今の私に取っては……。不運過ぎる。

キース「だが、人類は危惧していた。もし、敵対してしまえば、滅ぼされかねなかった。その男の名は……。」

『ラーク・バスター・ガルツチ』。ミカサ・アツカーマンの実力を超える、史上最強の男だ。』

sideChange

—人里— —月夜ノ刻—

ガルツチside

さて、まずは人里にいるセイバーを、どうにかして倒さないとね。今回セイバー討伐に抜擢したのは、僕、イリヤ、フレディ、そして本音の4人となった。

フレディ「んで？どの辺りなんだ？」

ガルツチ「うーん、反応が最も高い場所が何処かに……………あつた！」

本音「ここ？」

その場所は、人里の中心の場所だった。しかし、セイバーらしき姿はどこにもなかった。

本音「何もないけど？」

フレディ「おいガルツチ、本当にここか？」

ガルツチ「正確には、こことは違う世界だな。って、なると……………。イリヤ「そうね……………、致し方ないけど、ルビー。」

ルビー『はいはい。半径2メートルで反射路形成、鏡界回廊一部反転します!!』

ガルツチ「2人とも、この場から動くなよ?」

ルビー『ジャンプ!』

そして僕は、人里とは反対の世界、鏡面世界についた。

フレディ「な、ええええええ!!」

本音「なにこの魔法ステツキ!」

ルビー『おや?そういえば、今更ですが見慣れない人達がいまね。つて、そんなこと後々、皆さん。来ますよ。』

さあ、何が来る?僕はそう思っていると、黒い闇は形を変えていく。

そして、そこから現れたのは、黒いマントと黒い鎧に深紅色の線があり、金髪で黄色のレイプ目をした男性がいた。

ガルツチ「『<sup>セイバー</sup>剣士』の『ガウエイン・オルタナティブ』か……………」

『殺す……………、殺すツ!』

イリヤ「来るよ!」

フレディ「よっしゃ!行くぜ!」

【マイティアクションX!】

フレディ「変身!」

【ガシヤット!レッツゲーム!メツチャゲーム!ムツチャゲーム!ワツチャネーム!?アイム ア カメンライダー!】

ガルツチ「……………いつ見ても、何でLEVEL1はゆるキャラっぽい姿なの?」

フレディ「おっと、これだけじゃねえぜ。」

【ゲキトツロボツツ!】

すると、フレディが取り出したのは、さっきのガシエットとは違う物だった。つていうか、それどうやって持つてるの?

フレディ「大・大・大変身!!!」

【ガシヤット!】

【ガツチャーン!レベルアップ!ぶっ飛ばせ!突撃!ゲキトツパンチ!ゲキトツロボツツ!】

















フレディ「……………有り得なさすぎだろ、おい。」  
未来「それが出来ちゃうのが、ガルツチです。」

ガルツチ「んで、何か用か？1無量大数も歳をとった八雲紫さん？」  
紫「さすがにそれは言いすぎない!? まあいいわ、それより朗報よ。  
どうやらとある世界と天照大神と月夜見尊が作った世界が融合し  
たって話なのだけど。」

ガルツチ「もう、世界線歪みまくってね？」

紫「そう言われてもねえ……………、こくなつちやつたんだも  
ん。」

ガルツチ「ちつ、どれも此も全部ルビー！テメエのせいじゃん!!」  
ルビー『私関係ないでしょおおおおおおお!!?!?/?/?/?/?/?/』

全員『(酷い八つ当たりを見た……………。)(』

つとまあ、紫は帰り、再び僕は頭を抱えた。何しろ、今の問題であ  
る『猫耳』をどうかしなければならな—————

愛花「……………。」ウルウル

おい愛花!? 今それ止めろ!? 今それやったら—————

全員(ガルツチは除く)『グハツ!』

『ボビュルルルルルルルルルルルルルルルルウウウウウウウウウウウウ  
ウウウツツ!!!!!!!』

そして博麗神社から、大量の真っ赤な液体が流れて行ったのだっ  
た。しかも幸せそうな顔をして。だから言ったのに……………。(因み  
に、漸く愛花の可愛さの耐性がつきまりました。)

ガルツチ「つていうか、チャツキーとティファニーは人形の筈なのに、何故に？」

愛花「さあ……………」。

ガルツチ「いや、あんたが元凶だろ……………」。

さて、どうしたものか……………。とりあえず、次行くところはバーサーカーがいる魔界って事にしようかな？

確か、白夜叉と未来と霊夢、あとはゴーストさんだっけ？しかも、鳳凰も一緒に来るようだが……………。

大丈夫だろうね。うん。

t o b e c o n t i n u e d  
→

## 第40話 魔界のバーサーカー

—魔界—

未来side

霊夢「それにしても、この場所に行くのって、随分久しぶりね……………」

ゴースト「霊夢さん、ここ来たことあるんすか？」

霊夢「ちよつとね。色々あったけど……………」

霊夢さんが、この世界に来たことあるって、何しに来ていたんだろ？

鳳凰「未来お父さん、そろそろポイントに——ツ!!下がって!!」

え？ 一体如何——

『ズババツ!!』

突然謎の攻撃が襲ってきたが、鳳凰の防御魔法で防いでいった。

??? 「やはり、この程度の攻撃は効きませんか。」

霊夢「あら、随分なご挨拶ね。夢子。」

??? 「久しぶりね、霊夢。」

ゴースト「え？ 霊夢さん、知り合いつすか？」

霊夢「一応ね。それで、何の真似かしら？」

夢子「いえ、ただ仕事を熟していただけです。侵入者を排除するのが、私の役目なので。来なさい、頼光さん。出番です。」

??? 「あらあら、鬼が来たのね。だったら、お相手しないと。」

鳳凰「ツ!!皆、彼女からサーヴァント反応を起こしてる!あの人が、クラスカードの一人『狂戦士』バーサーカーよ!」

嘘くん。なんか、別の意味で有り得ないんだけど。シャドウサーヴァントの筈なのに、何で従えてるの？

ゴースト「ちよちよ霊夢さん!? 僕達鬼と呼ばれてるんすけど!」

霊夢「やれやれ、萃香じゃないのに……。まあいいわ、貴方が鬼  
というのなら、望み通り『鬼』になるわ。鬼人『狂オシキ鬼』！」

え!? 霊夢の姿が、別人になっちゃった!?

霊夢「奴ハ、私ガ引キ受ケル。ソツチハ、夢子ヲ！」

ゴースト「ま、任せるって——」

未来「分かった！来て、ラーマ!!」

ラーマ「やつと、出番だね。行くよ、マスター！」

白夜叉「小娘、降参するのも今の内じゃぞ？」

夢子「ご冗談を、すぐ終わらせます。」

白夜叉「そうか……。ならば容赦せん!!」

瞬間、魔界だった場所は、今では白夜叉の世界へと移されていた。

離れても使えるって、白夜叉……。実はそれ宝具でしょ？

ゴースト「だ、大丈夫つすか!？」

未来「大丈夫、ゴーストフェイスさんは耐久スペルカードを！」

ゴースト「りよ、了解つす！怪奇『ポルターガイスト』!!」

ゴーストフェイスさんの後ろに、不気味な“目”が描かれた額縁が  
出現し、額縁を中心として椅子、机、ナイフ、電球、皿、コップ、等  
の家具が現れ多数入り乱れ始めた。

鳳凰「私も手伝います！命&剣符『ソード・オブ・ザ・レインズ』!!」

鳳凰ちゃんはゲーム盤に触れると、様々な剣が現れ、しかも自分の  
意思で夢子という少女を襲いかかってきた。

夢子「私の知らない間、ルールが変わっているのね。でも、そんな  
攻撃、私の”短剣”の前には無力よ!!」

え？ちよつと夢子さん？それ、短剣じゃなくて剣ですよ？どう言う  
基準してるの？

鳳凰「だったら此はどう？」

汝、美の祝福賜らば、我その至宝、紫苑の鎖につなぎ止めん！氷の  
龍の剣よ、目覚めよ!!『アブソリュートドラゴンソード』!!」

鳳凰ちゃんが呼び寄せたのは、龍の姿をした氷の大剣で、それが夢  
子やあのバーサーカーを襲いかかった。

夢子「頼光さん、宝具開帳を！」

頼光「ええ。すぐに終わらせて——」

霊夢「私ヲ忘レテ無イ？終符『瞬獄殺』!!!」

頼光「え——」

『この効果音は、文字で表せないほど非常にエグい事になっています。ご了承お願い申し上げます。』

あのエグすぎる効果音が終わると、そこには背中に獄と描かれた血塗れの霊夢が立っていた。

夢子「ええええ………、嘘。」

鳳凰「余所見してる場合？」

夢子「しまっ!？」

鳳凰「つて思ってるけど、目的は達成したから、もうようはないわ。私達の目的は、あくまでこのカードだから。」

そう言うと、先程の龍の姿をした氷の剣は、姿を消した。

夢子「な………何のつもり——」

白夜叉「元々は、この異変を解決するために、此奴のような奴を探しておるのじゃ。それを集め終えたら、もうここに用はない。」

未来「白夜叉、本当は戦いたかったんじゃ……。」

白夜叉「まあ。ではの。『リターンクリスタル』！」

元々はガルツチが投影してくれたもので、設定場所は博麗神社になっっている。白夜叉が使用した途端、僕らは姿を消し、気が付くと博麗神社に到着した。

——博麗神社——

って早いよ!?!何あの短い戦闘シーン!?

ガルツチ「未来、それ僕が言おうとしてただけど……。」





ターが一緒って事は、恐らく佐々木小次郎とメデイア。でも、どういう事だ？」

フレデイ「なあ、今は深く考えない方がいいと思うぜ？俺達だって、まだ分からねえ事ばかりだしよ。」

イリヤ「そうよ、まずは残り5騎のサーヴァント達を倒しましょう？」

ガルツチ「確かに、そうだね。」

ガルツチは同人誌を読み終えたと同時に、誰かがやって来る事を察したのか、皆は鳥居のところをみた。そこには、フレデイの黒いバージョンの仮面ライダーが、立っていた。

??? 「あれ？なんか前来たときより増えてない？」

t o b e c o n t i n u e d  
→

## 第41話 仮面ライダーゲンム

―博麗神社―

ガルツチ side

え、何あのフレディが闇落ちしたバージョンの仮面ライダーは……。

フレディ「ゲンム？どうかしたのか？」

ゲンム「えーつと、暇だったので来ましたが……。……。っっていうか、人が多い。」

フレディ「あー、紹介するぜ。此奴はガルツチ、幻影の不死鳥という二つ名を持つてる。ガルツチ、彼奴はゲンムだ。」

ゲンム？にしては、あの鈍が気になるんだが……。……。っっていうか、何で変身したまま？

ゲンム「宜しく、ガルツチさん。」

ガルツチ「さん付けはいい。宜しく、ゲンム。」

ゲンム「何ですか？そのカード。」

ガルツチ「此？クラスカードっていう奴。どういう訳か、幻想郷のあちこちに散らばってるから、集めているんだ。」

ゲンム「ふーん……。でも、なんて言うか君、女の子っぽくない？」

『グサツ!!』

ガルツチ「おいゲンム、出会って早々言う台詞かよ……。っっていうか、僕男なんですけど……。」

ゲンム「え……。あーごめん!!」

フレディ「うわあ……。すげえ絶望オーラが漂ってる……。……。未来「えーつと、ゲンムさん。ガルツチは、あまり女性だと思われなく無いんですよ。どうもそれ言うと、相当シヨックを受けるかぶっつんとキレて、ぶん殴られてしまおうとか。」

ゲンム「そ、そこまで？」

ルビー『そうですよ。なんたつてあの人は、身も心も女の子ですべるぜバブっ!!』



だから着いてこなくていいよ。」

フレディ「お、おう。気を付けろよ?」

そして急いで走ると、丁度ゲンムが看板を見ていた。

—分かれ道—

ガルツチ「ゲンム、忘れ物だ!!」

ゲンム「え?あ、ああ!!それ僕の鉈!」

ガルツチ「やつぱりな、忘れ物するなよ?」

ゲンム「ごめん。」

鉈を渡し、博麗神社に戻る途中、あることを言ってみた。

ガルツチ「……………誰か復讐したい人居るのか?」

ゲンム「!?!」

ガルツチ「……………凶星か。」

ゲンム「何で……………、何で分かったの?」

ガルツチ「僕はね、ポーカーフェイスをしている奴には目を見ているんだ。」

ゲンム「目を?でも僕は——」

ガルツチ「仮面を付けていても、無意識の心眼があれば、視線で分かっちゃうんだ。どす黒い憎悪の視線がな。恐らく君の感情は、畏怖しているだろう。そして、殺意を僕に当てている。違うか?」

すると、ゲンムは膝を着く音が聞こえる。どうやら、当たってたようだ。

ガルツチ「なあ、教えてくれないか?いや、その前に変身を解いて欲しい。今この辺りは僕と君以外には来ないし、聞こえない、見られないようにしているから。」

ゲンム「……………他言しないって、約束する?」

ガルツチ「……………時が来るまでは、話さない。」

ゲンム「時が来るまでは?」

ガルツチ「隠していたとしても、いずれボロが出るだろう?どちらか、あるいは第三者から言うに違いない。だから、時が来るまではって事だ。」

ゲナム「……………分かった。」

【ガツチョーン！ガツシユーン！】

フレデイが着けていた変身ガチエツトが外れると、そこにはホツケーマスクを被っていた男がいた。

ガルツチ「やっぱり……………、『13日の金曜日』に出てくる——  
——」

ゲナム「ジエイソン・ボーヒーズ。そう、それが僕の真名だよ。ガルツチ。そして、キースの部下にして最終兵器なんだ。」

ガルツチ「は？キース？」

え？ちよつと待て、何で教官の名前が!?

ゲナム「知ってるの？」

ガルツチ「いや待て、もしかしたら人違いかもしれないけど、確認を取らせてくれ。キースって、『進撃の巨人』出身の、キース・シャーデイスなのか？」

ゲナム「うん、その人だよ。それがどうかしたの？」

ガルツチ「マジか……………。教官、一体何があったんだ？」

ゲナム「その前に教えて、キースとどう言う関係なの？」

ガルツチ「あー、実は僕のかつての先生でもあるんだ。僕は進撃の巨人の世界で、その世界の巨人と戦ってたんだ。まあ、あの装置がなくても飛べるが、あれはなかなかいい経験したよ。」

ゲナム「そ、そうなんだ。」

ガルツチ「んで、その教官は、何があつてこの世界に？」

ゲナム「それはね、あまりにも厳しすぎるといふ理不尽な理由で『進撃の巨人』の世界から幻想郷に追放。その恨みを晴らすため追放先の場所で力をつけ、強力なならず者や兵士達を集める。そして八雲紫及びその式2人……………八雲藍と橙を始末してこの世界を支配しようと思ってるんだ。」

はあ!?

ガルツチ「嘘だろ!?!あの教官だったからこそ、みんな精一杯頑張っ

て来たじゃねえか！なのに追放つて……。ちつ、あの世界の人間は、本当にクズばつかな。そうやって、使える奴らを減らして、自分で首を絞めているというのに……………」

ゲナム「ガルツチ……………」

ガルツチ「復讐とか八つ当たりなんて、馬鹿なことをしちや駄目だ。そう言うのは、僕のような復讐者がやることさ。君とフレデイに何があつたかは知らない。でも、復讐は止めておけ。後悔することになる。」

ゲナム「何で？」

ガルツチ「かつて……………、僕はこの世の全てを憎んだ事があつたんだ。理由は単純。”誰も、僕を見てくれる人が、居なかった”。」

僕は、かつて訣別した『遠藤宇宙』の頃の話をしていた。訣別したとしても、起こった出来事は、如何することも出来ない。

それでも、出来るだけ復讐心を止めようと、全て話した。

ガルツチ「——以上だ。」

ゲナム「……………そうだったんだね。僕よ、辛い思いをしていたんだね。」

ガルツチ「ああ……………。でも、未来と出会ったからこそ、ううん、転生を重ね、色んな人と出会ったからこそ、今の僕があるんだ。それにもう、あの惨めな宇宙はこの世に居ない。今ここに居るのは、本当の過去を否定し、大切なものを守るために、様々な奴らを殺してきた『この世の全ての刃』しかない。」

ゲナム「……………」

ガルツチ「あんたに対して復讐するなどは言わない。でも、フレデイを殺さないでくれ。母さんだって、望んでないから……………」  
そう言い、僕は直ぐさま博麗神社に戻ろうとしたが、ふと、あることを思い出した。

ガルツチ「そうだ。ついだから、教官にも伝えてくれ。『必ず、止めに来てやるから』ってな。」

sideChange

ゲムム（ジエイソン） side

ガルツチか……。不思議と、母さんのような優しさが感じた気がする。でも、ある意味僕の天敵になる人かもしれない。

彼の言うとおり、復讐はよくないかも知れない。フレディがママに化けて騙っていた事に関しては、彼も怒っていた。でも、復讐してもいいが、殺さないで欲しいって言ってたけど……。今更如何すればいいんだろ。ママ、僕は如何すればいいの？

【マイティアクションX！】

僕には分からない……。復讐するべきなの？しない方がいいの？

【ガシャット！レッツゲーム！メツチャゲーム！ムツチャゲームワツチャネーム!?アイム ア カメンライダー！】

でも、これだけは分かる。ガルツチ、君が最大の障壁なら……。僕はそれを乗り越えてみせるよ。

ゲムム「楽しみにしててね、ガルツチ。」

t o b e c o n t i n u e d ⇨



## 第42話 フランとフレディ世界のレミリア

—紅魔館 門前— —夜ノ刻— —天満月—

フラン side

どうも、フランだよ。今私は、紅魔館にいるアーチャーを倒すために、簪ちゃん、オーちゃん、アラヤ君、リサちゃん、そして鈴美さんと一緒に向かってたところよ。

まあ確かに、この世界の私と、お兄ちゃんと一緒に来た私とは、全く違うのは確かだけど、それでも本質は一緒なのかな？

因みに今回は、3つのグループで別れて行動してるよ。お兄ちゃんとイリヤちゃん、未来お兄ちゃん、フレディさん、ゴーストさんは白玉楼のキヤスターとアサシンを。

本音ちゃんとこいしちゃん、霊夢さん、深雪お姉ちゃん、愛花ちゃんはライダーを倒しに向かっているわよ。

ただ、ここで問題が起きたのが……………。

美鈴「アイエエエエエ?!? 妹様?!? 妹様ナンデ!?!」

厄介なことに、美鈴に見つかっちゃったのよね。珍しく起きてるし、そのまま紅魔館に入って行っちゃったんだけど……………。ついでうか、この世界の私と違うでしょ？

簪「ねえ、フランちゃん。」

フラン「うん、分かっているけど、さすがに咲夜なら気づくかな?」

アラヤ「だと、いいのですが……………」。

でも、さすがの咲夜も美鈴と同じ反応をされていて、そのまま気絶してしまった。うーん、此はどう言えばいいんだろう? まあ、この世界のお姉様なら、この運命も見抜けるはず——

レミリア「チーン チョロロロ

そう思ってた時期が、私にもありました。でも、この世界の私は驚いていなさそう。やっぱり、自分自身だからなのかな? っていうか、お姉様が気絶して失禁してるし……………。

お兄ちゃんという言葉を借りるなら………、なんでき。

—紅魔館 客室—

そんなこんなで、私達は紅魔館に入って、お茶していただけど、来た用事も話さないとアレだったので、私はすぐに本題を出そうとした。

レミリア「フラン、貴方の目的は分かっているわ。このカード、でしょ？」

なんと、自分から出し、しかも驚いたことに、それはアーチャーのカードだった。

簪「嘘!? 一体どうやって!？」

フラン「あらかた、パチエに頼んで、自力で倒したんでしょ？」

レミリア「ええ、正解よ。さすがね。」

鈴美「でしたら、どうかそのカードを——」

レミリア「でもダメよ。このカードは、私のだから。」

まあ、そんなことだと思ってたわ。お姉様は、手にした物は自分の物にしたがるからね。まあ、穏便には出来ないだろうけど………。

オーフィス「それ、危険。下手すると、世界を滅ぼしかねない。」

レミリア「そうかしら? そんな運命なんてないわ。見える運命は、私が持つて、この幻想郷を支配しているのが、目に見えるもの。」

(フレディ世界) フラン「むう、またお姉様変なこと考えてる。」

フラン「お姉様がそう言う慢心染みた事をいうから、紅霧異変の時に失敗したんじゃないの?」

レミリア「あら、面白い事言うのね。私がまた同じ失敗をすると? その能力を制御すら出来ない貴方が?」

フラン「残念だけど、私はもうあの時のような感じじゃないわ。制御どころか、強化したわよ。次元を破壊する事なんて、容易いわよ?」

レミリア「!？」

まあ、試したことはないけど、実際それぐらい強化してるってのは事実だしね。お兄ちゃんと一緒にいたおかげなのかもしれないしね。アラヤ「えーっと、この世界のフラン姉さん。少し、寄り添っても

いいですか?」

(フレディ世界) フラン「え?そ、そんなことしたら——」  
アラヤ「ダメ……………、ですか?」

(フレディ世界) フラン「うっ……………、わ、分かった。」

リサ「私も私も!!」

咲夜「……………何これ。」

フラン「甘えたい年頃だと思うよ?見た目的に、6歳ぐらいだもの。」

レミリア「へえ、まるで母親みたいな事を言うのね。」

フラン「実際そうだよ?結婚もしてるし、子供もいるよ。」

そんなこと言うと、お姉様は口に含んだ紅茶を吹き出した。

レミリア「な、なななななな、な、なっ!!」

フラン「大体4人ぐらい産んだかな。」

簪「平行世界のフランちゃんって、確か14人産んだっけ?」

フラン「そういえば、平行世界のバルツチが言ってたわね。」

レミリア「なっ!!?そんな運命あつてたまるものですか!?!」

フラン「あれあれ?否定しちゃうのかな?それとも、妹に先越される運命なんて、怖くて見たくないのかしら?」

簪「フランちゃん……………、煽りすぎは——」

すると、お姉様の武器であるグングニルが、私の右頬を掠めるように投げつけ、そのまま壁にぶつかった。

レミリア「どうやら、貴方の私は、私に対する礼儀がなっていないようね。」

フラン「そうかしら?でも、認めないっていうのはどうかと思うわよ?怒りの沸点が低いのは、悪いクセよ?」

レミリア「あらそう?その怒りを沸騰させたのは誰かしら?」

フラン「言われなくても、私よ。私のお姉様は、出来るだけ沸点を高めようと、色々と罵倒とか侮辱とかやっていたけどね。」

オーフィス「それ、もうSMプレイじゃ……………」

まあ、沸点が低いのを何とかしたいって言ってきたのは、他でもないお姉様だったしね。正直、他の人から見たら、妹に罵倒される姉の

S Mプレイみたいな感じに見えたり、そして気が付いたら、鞭打つてとか、罵倒しながら踏みつけて下さいとか言い始めてきたし。

うん、さすがに私引いたわ。そしてそれを心底楽しんでる私も引いてる。もう完全にS Mプレイだもん。最終的には、あのペニバンつてのを着けて、滅茶苦茶楽しんでたし……。

もう止めよう、これ以上はお姉様の名誉的に困るわ。私のお姉様はMなんかじゃない。此見ているみんな、いいね？

(フレディ世界) フラン「ねえ、もう一人の私。それ以上は——」

フラン「それは無理よ。元々ここに来た理由は、そのカードを回収しないと駄目なの。穏便ですませることは出来ないなら、もう方法を選べないのよ。」

レミリア「それはつまり、倒してでも奪い取るっていうこと？」

フラン「ええ、そうよ。アーチャーを倒してカードを手に入れようと思っていたけど、まさかお姉様に取りられていたのは想定外だったわ。出来れば渡してくれれば、こんな事にはならなかったけど。」

そう言い、私は立ち上がり、あの時バットマンV Sスーパーマンの世界に居たとき、バットマンが作り、渡してくれたクリプトンの槍を持った。

レミリア「私の真似事かしら？」

フラン「別世界の私の力、見せてあげる。」

そう言い、私とこの世界のお姉様は館の屋上に向かった。簪ちゃん達やこの世界の私達も、それについてきた。

t o b e c o n t i n u e d

## 第43話 破滅の魔神フランVS運命を操る吸血鬼レミリア

—紅魔館 屋上— | 月夜ノ刻— | 望月—  
フランside

【Lancer Remilia Scarlet VS Berserker Frandle Scarlet】

【Sword or Death】

先ず動き始めたのは、お姉様の方だった。私に追いつけないほどの動きで、私を突こうとしている。でも、私からしたら、鈍いわね。

フラン「遅い！」

レミリア「どうかしら？」

薙ぎ払う動作もしようとしているけど、お姉様。その攻撃は無駄よ。

フラン「よっと。」

レミリア「ちよこまかと、良く動くわね！」

フラン「私のお姉様だったら、もっと素早く動くわよ。こんな風に!!」

レミリア「ッ!？」

普通の人からしたら、一突きしたように見えるけど、実際には50回ほど突いていて、避けきれなかったのか、衣服が破けていた。

レミリア「やってくれるわね………………。スペルカード発動!紅符『スカーレットマイスタ』!!」

ここでスペルカードを使ってきたわね。でも、そんな狭きなんて、序の口よ。

咲夜「なんと…………。お嬢様の弾幕を、途惑う事なく、狭いはずの隙間に入って、近付いている…………。」

アラヤ「フラン姉さんは、もしレミリアお姉様と似た人物がいたら  
の対策で、ずっと修行していたんだって。」

(フレディ世界) フラン「凄いい……………！私も混ざりたい！」

簪「うーん、今は我慢して？」

(フレディ世界) フラン「むう……………。」

そういえば、当時の私もこんな感じだったなあ。

レミリア「余所見なんて、随分余裕ね！その心臓、もらったわ！  
あの構え、やはり来るのね。」

レミリア「必殺『ハートブレイク』!!」

フラン「トラップ発動！『テンタクルス・インカーセラム』！」

レミリア「え？キャッツ!？」

素早い攻撃で、私に当ててくるなんて甘いわよ。お姉様。そしてお  
姉様は、触手に捕まり縛られてしまった。

レミリア「ひ、卑怯よ!!触手をつ、使うなんて!」

フラン「罠に気が付かなかったお姉様が、どうかと思うけどね。そ  
れに私、まだ本気すら出してないわよ？」

レミリア「何ですって？」

フラン「だって、まだこの槍以外スペルカードも能力も使ってない  
んだもん。」

レミリア「……………どうやら、そこまでコケにさせら  
れているなんて、思ってもみなかったわ。いいわ、預言してあげる。  
この戦いで最後に勝つのは『私よ』！」

その途端、触手は無惨にも何かに切り裂かれてしまい、お姉様は自  
由に動けるようになっていた。多分あれは、咲夜ね。

咲夜「別世界の妹様、出来ればこう言う類の罠は使わない方がいい  
ですよ。」

フラン「それもそうね。まあ、さすがに能力を使われるぐらいなら、  
そろそろ宝具を使おうかな。」

レミリア「宝具?」

無駄な足掻きとか思ってるけど、その運命……………『破壊』して  
あげる。

フラン「一撃必殺！『スピア・ザ・クリプトン刺し穿つ碧緑の槍』!!」

レミリア「早っ——」

緑の一閃が走り、お姉様を貫いた。咲夜だったらわかるけど、他の人からしたら、まるで瞬間移動したかのように見えてしまうでしょうね。

フラン「私の勝ちよ、お姉様。」

レミリア「……………驚いた。戸惑い無く、私の心臓を射抜くなんて。本当に、私の妹とは思えないほどの、純粹な殺意ね。」

フラン「アーチャーのカード、頂くわよ。」

レミリア「ええ、どうぞ。好きなように。」

さて、アーチャーのカードが入ったけど……………どうやら此、『無銘』と描かれたエミヤさんの姿だった。ようはExtraのエミヤシロウって事になるわね。

フラン「さて、貫った物は貫ったし、お兄ちゃんのところ——

——」

レミリア「貫った！神槍『スピア・ザ・グングニル』!!」

フラン「つとてでも言うと思ってたわ。」

レミリア「!?!」

奇襲と言わんばかりに、グングニルを投げつけたお姉様だったけど、それは奇襲じゃなくて、悪足掻きっていうのよ。私はすぐに右に避け、グングニルを手に取り、そして……………。

『ズドゴン!!』

そのまま腹パンしました。それも内臓破裂してもおかしくないぐらいにとっても重い一撃を。

咲夜「お嬢様!?!」

フラン「安心して、咲夜。気絶させただけだから。」

咲夜「え……………」

お姉様はグツタリと私に寄り掛かっていたけど、死んではいなかった。あの腹パンが利いたのか、気絶してしまったようだ。私はお姉様を抱え、咲夜に渡した。

フラン「迷惑をかけちゃったね、咲夜。それと、もう一人の私。」

(フレディ世界) フラン「……………ねえ。」

フラン「なあに？」

(フレディ世界) フラン「私も……………、貴方のように、この能力を制御できるの？」

うーん、難しい質問してくるわね。

フラン「それは分からないわ。制御できず、自分自身を壊しちゃった私も居れば、能力その物を破壊しちゃった私もいるから、何とも言えないわね。」

(フレディ世界) フラン「そっか……………」

フラン「でも、それはあくまで可能性の1つよ。私は、ガルツチお兄ちゃんとお会ったお陰で、初めてこの能力で、守りたいって思っていたの。どんな障壁だとしても、私の手で破壊して、お兄ちゃんを守りたい。そしたら制御も出来て、更には強化したのよ。だから、如何するかは、あなた次第。パチエに魔法を教わるのもいいし、独学で色々学ぶのも良いかもしれないね。」

咲夜「ですが、それでは——」

フラン「何も教わらず、何も関わらせないっていうのは、酷な事よ。」

咲夜。お姉様にとっては、最善の道だけど、それは外の世界の関係を遮断すること。そして、能力の暴走を高めてしまう事よ。」

(フレディ世界) フラン「……………」

簪「フランちゃん……………」

アラヤ「フラン姉さん……………」

鈴美「フランちゃん……………」

フラン「いずれにしても、この子には色々教わった方がいいよ。何時かは、大人になって、私みたいに結婚して、子を持って家庭を築いていく。そんな生活が待っているんだしね。」

この世界のお姉様は、変なプライドを持つてるし。超えたくないな



ら、プライドを捨てて、必死に頑張ればいいのに……。だから軽く見られちゃうのよ。まあ、それでも私のお姉様だけどね。

フラン「それじゃみんな、帰ろう。」

(フレディ世界) フラン「待って！」

フラン「？」

(フレディ世界) フラン「此、持っていつて。」

この世界の私が渡してくれたのは、2人の人物が描かれたガシヤットと、ゴースト眼魂だった。

(フレディ世界) フラン「そのガシヤットはフレディおじさんに渡して。そしてこっちは、貴方の友達にあげて。きつと、役に立つと思うわ。」

フラン「ありがとう。ばいばい、もう一人の私。」

そして、私達は紅魔館を後にし、博麗神社に戻っていった。

—博麗神社—

ガルツチ「お帰り、フラン。丁度僕らも二人のカード回収したところだよ。」

こいし「私も。」

どうやら、お兄ちゃん達も終わって、先に戻ってきたようだ。

そして私達は一度カードを見せ合ってみた。アサシンとキャスターに関しては、お兄ちゃんの言うとおり、小次郎とメディアだった。こいしと戦ってたライダーは、アレキサンダー大王ことイスカンドルだったらしい。でも、こいし達はこの世界のさとりお姉様達と協力して手に入れたらしい。

未来「後は、ランサーを倒せば、何とかなるね。」

ガルツチ「でも、これまでハートレスサーヴァントの気配は無かったな……。ちよつと確認のために、地図出して、調べてみる。」

お兄ちゃんは地図を出して、解析を始める。その数十秒後、凄く驚愕した顔をしながらみんなを見ていた。

フラン「如何したの？」

ガルツチ「あり得ない……。そんな馬鹿な事が!!」

フレデイ「如何した？」

ガルツチ「ランサーと聖杯の場所が変わってる！しかも、なんだここ!?こんなところ、幻想郷には無かったぞ!」

未来「えっ!?この位置って……………、まさか……………。」

フレデイ「間違いねえ、以前アンブレラ研究所を潰したはずの場所じゃねえか……………」

ガルツチ「ん?この反応……………、ちっ!聖杯だけじゃない。ハー  
トレスサーヴァントもここにいやがる!」

ええええ!?って事は、ここが最終決戦場所!?

ガルツチ「……………いや待て、おまけにキースもここにいる。どうやら、本格的に幻想郷を支配しようとしてる。」

チャッキー「なっ!?!」

フレデイ「よっしゃ、だったら俺達の手で——」

ガルツチ「いや、ラスボスは僕がやる。」

未来「え!?ガルツチ、また!?!」

ガルツチ「キースは、僕の尊敬している先生であり、教官なんだ。彼奴が何があったかは、ゲームから聞いた。説得は無駄なのは承知の上。でも、僕は感謝しているんだ。あの教官だったからこそ、僕もエレンもミカサもアルミンも、ジャンも、コニーも、サシャも、胸張って頑張ってきたんだ。見抜けなかったのは、僕の落ち度だ。」

フラン「お兄ちゃん……………」

そういえば、お兄ちゃんは進撃の巨人の世界に行ってたんだっけ。確か部屋にも、立体起動装置が飾ってあったわね。

ガルツチ「安心しろ、僕は負けない。そして途惑わない。確実に、彼の苦しみを解き放つために、息の根を止める。」

フレデイ「……………その眼、なんだかジェイソンを思い出すぜ。」

ガルツチ「そうか……………。久しぶりに、殺戮の本能を、解放するか。ミスト、この場所の兵士の数を。」

ミスト『確認済みよ。ザッと、10億人の兵士がいるわ。その中に、ランサーのカードは植物室、ハートレスサーヴァントは実験室、そして聖杯は最深部。おそらくそこにキースさんがいるわ。』

ガルツチ「……………分かった。」

そんなとき、私はこの世界の私から貰ったガチエツトをフレディさんに、眼魂はこいしちゃんに渡した。

フラン「この世界の私から頼まれたものよ。フレディさんは、多分強化形態のガシヤットだと思うよ。こいしちゃんのは、多分私のアイコンだと思うわ。とりあえず、お兄ちゃんが言うには、これが最後の決戦であり、異変解決になると思うわ。」

ガルツチ「そうだね。みんな、疲れてるだろうけど、このままランサーの位置に行くぞ!!」

全員『おー!!!』

t o b e c o n t i n u e d ⇨

## 第44話 襲撃

—アンブレラ研究所 地下—

『Warning! Warning!! 侵入者が入り込みました! 直ちに排除して下さい!!』

「ええい! さつさとこんか!」

「そもそも、まだ眠いつてのに、侵入者?」

「俺今、エロ本読んでいたんだが……………」

「そんなの後にしろ!! っていうか、後で見せろ!!」

—アンブレラ研究所 ロビー—

ガルツチ side

「みなっ! 奴らだ! 少数だが油断す—————」

「隊長!!」

あーもー、手荒い歓迎だな!! 銃撃で挨拶ってんなら、こつちもしてやる!!

ガルツチ 「ホラホラア!!」

『ズダダダダダダダッ!!』

僕はすぐさま2丁サブマシンガンにし、やってくる敵兵を一掃していく。正直言つて脆すぎる。

未来「おかしいなあ? サブマシンガンの筈なのに、滅茶苦茶命中しまくってるんだけど。」

フレディ「奇遇だな、俺もだ。つてか、ガルツチの奴、銃の扱い上手すぎねえか!？」

フラン「お兄ちゃん、色々な銃を使って、相性の良い種類を探していたの。その中で気に入ったのは、サブマシンガン、リボルバー、そしてスナイパーライフルなのよ。まあ、スナイパーライフルは、エグい使い方していたけどね……………」

簪「どんな方法?」

こいし「聞かない方がいいよ。ジャック・ザ・リップーより残虐だから。」

ガルツチ「みんな、ここで別行動だ！未来達はハートレスサーヴァントが居るところに。フレディはフラン達と一緒にランサーのカードを回収して！僕は急いで、最深部に向かう。いずれにしても、自爆コード作動する可能性もある。脱出経路は、このデータで参考してくれ。」

フラン「無事に帰ってこれる？」

ガルツチ「安心しろ、ここで死ぬほど、僕は柔じゃ——」

『チュンツ！』

ガルツチ「話し合いの時に、邪魔をするな！！礼儀がなってないぞ！！」  
全員『いや、誰だつてそうするよ……………。』

みんなの心の声が聞こえるけど、僕二ハ関係ナイ関係ナイ。

ガルツチ「さて、深雪さん。君はフレディチームに入つて。」

深雪「分かった。武運を、ガルツチ。」

ガルツチ「みんなもね。じゃあな！！」

そして、皆は別々に動き始めた。僕は中央のエレベーターを最深部のところに押し、しばらく待っていた。

まあ、待っている間、音楽を聞きながら待ってますか。って事で、別サイド。どうぞ。

sideChange

—植物室付近—

深雪side

フレディ「この辺りだったな。」

深雪「ええ、とにかく入り——」

???「行かせないよ。」

私の目の前に現れたのは、ホツケーマスクを付け、鉈を持った男性がいた。

フレディ「お前、ジェイソン!?何でそこに!?!」

ジェイソン「また——あ、いや久しぶりだね。フレディ。お前を殺すことを、どれ程待ち侘びたか。」

深雪「いい加減話したらどうですか、ジェイソンさん。」

ジェイソン「何を？」

深雪「貴方、本当はフレディに毎回会うために決まって、ゲムムという偽名で会ってたんでしょ？」

ジェイソン「……………如何してそれを？」

深雪「私の能力、『東方キャラ全員の能力を操れる程度の能力』を持つているのよ。」

フレージェイ「何それ、チートだろ!?!」

深雪「まあね。帰ってきてすぐ、ガルツチの心の声を聞いてみたら、それで分かったの。ゲムムはジェイソンだってね。」

ジェイソン「やっぱり、こうなるんだね。そうだよ、僕がジェイソンだ。またの名を、仮面ライダーゲムム。ママに化け、僕を騙したフレディに復讐するために、自らキースの部下になった、最終兵器だ!!」

【ガッチョーン！デンジャラスゾンビ！】

ジェイソン「変身!!」

【ガチャット！バグルアップ！デンジャー！デンジャー！（ジェノサイド）デス・ザ・クライシス！デンジャラスゾンビ！（Wooooo!）】

その姿は、エグゼイドの黒バージョンではなかった。骨を思わせる白と黒を基調としたスーツと左右非対称の装甲、左目の水色のオッドアイ、左胸部には「死のデータ」を採取する際に突き刺したガシヤコンバグヴァイザーの銃口痕など、黒と紫を基調とする従来のゲムムとはかけ離れており、死霊とも言うべき禍々しい姿となっていた。

フレディ「……………深雪達、お前らは先に行け。ランサーはこの先だ。」

こいし「待って、私も戦う。」

フラン「こいしちゃん！」

こいし「えへへ、一度ぐらい格好付けさせて。」

すると、こいしの腰からベルトが現れた。けど、フレデイのベルトと違うけど、どうやらあの目玉が変身するのに必要な道具のようだ。ボタンらしきものを押すと、そこにはEXと描かれた赤い文字があり、そのままベルトに入れた。

【ア—イ—！】

こいし「無意識と破壊の融合、見せてあげる!!」

【サアバツチリミヤガレ！サアバツチリミヤガレ！】

こいし「変身!!」

【開眼!! フランドール!! 破壊の使い手、吸血少女!!】

先ほどの姿は一変し、フランと同じ服装へと変化した。フレデイ「ほう、可愛らしいな。だったら!!」

【マイティブラザーズXX!!】

フレデイ「変身!!」

【ダブルガシヤット！レベルアップ！マイティブラザーズ！二人で一人！マイティブラザーズ！二人でビクトリー！X！】  
……………やっぱりその姿は戦力が下がってるように見えちゃうけど、まあいいわ。

イリヤ「んじゃあ、任せたよ！二人とも！」

フラン「無事を祈ってるね！」

アラヤ「頑張ってる!!」

鳳凰「……………出来れば、ジエイソンを——」  
フレデイ「分かってる、殺しはしない。」

こいし「手加減はちやんとする。」

深雪「行こう、皆！」

そうして、私達は植物室に入っっていった。

—アンブレラ研究所 植物室—

中に入ると、そこにはランサーのカードが黒いオーラに纏っていき、現れたのは……………。

猫耳を付け、何やら極道の長みみたいな雰囲気を出して、薙刀を持った女性が立っていた。って、どう見てもこれ。

全員『S S F』（そのままでこしなさい藤村）

英霊なのは確かなんだけど、凄く萎えるんだけど……………。

sideChange

—アンブレラ研究所 実験室—

未来side

えーっと、なんだか闇の生き物らしきものが滅茶苦茶多いんだけ



ど、これがガルツチが言ってたハートレス？

簪「つていうかこれ、ウルトラマン達の技を使っても、全然効果が無い!!」

本音「『ジ・アース』を使っても、まだ湧いてくる!」

オーフィス「鈴美、何とかならない?」

鈴美「やつてるけど、灰色のハートが現れては、また湧いてくるのよ!」

白夜叉「むう、これが闇の魔物、ゼアノートが言ってたハートレスか……………」

レテイシア「如何する!？」

そういえば、ガルツチからキープレードとか何とかの力を貰ったんだっけ。でもどう取り出せば……………」

『シユーン!』

僕の右手に現れたのは、鍵らしきものがあり、まるで剣にも見えた。デイケイドのキーホルダーに連なるかのようなカード、イフのマシユマロ形態のように白く、剣身は赤と緑の剣をして、剣先は無限の形をしていた。

これが、僕のキープレード……………。名を付けるなら『ジャーニー・スルー・インフィニティ・デイケイド』かな。

僕はそのキープレードを振るい、ハートレスに当てると、先程の灰色のハートではなく、赤色のハートが現れ、そのまま何処かへ消えていった。多分復活することはないけど、小っちゃいハートレスはハートは無かった。って事は、こっちが本命のハートレスって事か。

未来「皆、どうやらこれがガルツチが言ってたキープレードだと思う。これさえあれば、ハートレス達を倒せるかも!!」

リサ「未来お母さん、でもどうやって出すの?」

未来「分かんない。でも、イメージしたら、出せた。」

簪「イメージ……………、ね。だったら!!」

簪の右手に、形状は違えどキープレードが現れた。

簪のキーホルダーは、ウルトラマンノアの赤いエネルギーコアで、それに繋がってるのは光の紐、柄は銀色の翼、剣身はオーブカリバーの刃、そして剣先はオーブリングのリング状だった。

簪「これを名付けるなら、『デイメンション・ノア・オーブ』よー」  
本音達もキーブレードを出し、振るっていたため、どんな形状なのかは分かんなかったけど、僕らはそのままハートレスを倒しまくり、遂に7騎のサーヴァントの姿を見せた。どうやら、『fate／stay night』に出てくるサーヴァントだって事が、すぐに分かった。

リサ「私はバーサーカーを倒すね！」

未来「じゃあ僕は、キャスターとアサシン！」

本音「私はライダー！」

オーフイス「ん、それなら我、ランサー。」

簪「私はアーチャーと戦う！」

鈴美「でしたら、セイバーは任せて下さい！」

レイシア「だったら、私達がハートレスの相手をする!!」

白夜叉「私のことは気にするな!!お主達はサーヴァントを！」

6人「コッコッ分かった!!」

さあ、僕達の大戦争を始めよう!!

sideChange

—アンブレラ研究所 最深部—  
ガルツチ side

時間かかりすぎだろ……………、  
どんだけ地下深く作ってんだ？  
んで、到着したのはいいが……………。

ガルツチ「エレベーターに、一つのドアのみ……………。殺風景すぎ  
ねえか？」

幾ら何でも、これはねえな。そんな愚痴を言いながら、僕はドアを  
開けた。この先に、キースが居ると信じ、その中へ入っていった。  
ガルツチ「待ってるよ、教官！」

t o b e c o n t i n u e d  
→

## 第45話 過ぎ去りし思い出 進撃の巨人

—アンブレラ研究所 ???—

ガルツチ side

ガルツチ「……………え？」

嘘だろ？ここって……………、ここって……………！

ガルツチ「ウォール・ローゼ南方面駐屯の訓練兵団の訓練場じゃないか!!」

どういう事だ!?!何でこんな場所に!?!っていうか、さっきのドアが無い!?!如何して……………?

ミスト『待って、兄や。この場所はVRの世界よ。』

ガルツチ「え?それじゃ……………」

ミスト『キースが作った世界かも。あれ見て。』

ミストが示す方向には、104期生らの人と、教官達が立っていた。その中央に居たのは、キース教官だった。

そういえば、あの中に、僕も入っていたな。今思えば、懐かしい。

『おい、貴様!!』

『はっ!』

『貴様は何者だ!?!』

『シガンシナ出身、アルミン・アルレルトです!!』

『そうか、馬鹿みてえな名前だな!!親が付けたのか!?!』

『祖父が着けてくれました!!』

今思えば、あの罵倒する理由も頷ける。教官は、通過儀礼であり、『それまでの自分を否定して真つさらな状態から兵士に適した人材を育てるため』に必要な過程だったからこそ、あの言い方をした。当時は分からなかったが、納得できるな。お?僕の番が来たな。

『貴様は何者だ!何しにここに来た!?!』

『シガンシナ出身のラーク・バスター・ガルツチ!ここに来たのは、この世の全ての巨人を滅ぼすために来ました!!』

そういえば、あの時は偽の出身と動機を言うために、あんな事を言っただったな。そんなこといったら、皆静まり返ってたな。

『……………貴様、この世の全ての巨人を滅ぼす、そう言ったのか?』  
『そうです!!領地を奪われた人間達の復讐するために、同じ屈辱と苦しみを、巨人共に味わわせてやりたい!そう思ってきました!』  
『ふんっ、面白い!貴様が口先ではないところを、この私が見定めてやろう!!』

アハハ、今思えば恥ずかしい……………でも、文字通りの意味にもなっちゃうとこだったしな。

すると、そこにいた人達は消えると、今度は立体起動装置の適性検査が見えた。僕は難なくクリアしたけど、なんか違和感があったな。今はエレンの適性検査の場面だが。あそこで一時的に、維持できなかった、そこで転けちゃったんだっけ。僕は見抜いていたけど、もう一人気付いた人もいたな。

言わずとも、教官だった。

『おい、エレン・イエーガーとベルトを交換しろ。』

『はい!』

あ、そういえば、僕がベルトを着ける担当だったな。

『教官、これ破損しています。』

『ふむ、やはりか。ベルトが破損するなんて聞いたことはないが、後で検査項目に入れておこう。』

結果はエレンも訓練に励んでいった。でも訓練事態は、僕に取っちや楽なものだった。格闘訓練は、特に楽なものだったな。もしも僕が盗人だったらどう行動するか、見つかったらどう戦うか、1番組んでいたのは、アニだったな。敵ではあったが、良い訓練相手だった……………。

ガルツチ「ほんと、懐かしいな……………。」

ある程度見ながら進むと、教官がいる場所に着いた。確かこの場面って……………。

『来たか、ガルツチ。』

『どうか、なさいましたか?』

『貴様、夜中にも鍛錬と狩りをやっているそうだな。』

『どちらも、癖というか、趣味のようなものです。食料に関しては、

問題ないとは思いますが、余分にあつた方が良いと思い、鍛錬を込めて、狩りもしていました。』

『なるほど、動体視力や身体能力を極限まで高めるのは良いことだ。だが休まなければ、襲撃したときに全力をだせんで。』

『ご安心を、休憩時には、必ず仮眠は取っています。』

『そうか、そろそろ戻るがいい。』

教官は、何かと気をかけていた。僕からしたら、罵倒するただの教官だと思っていたが、違った。教官は、皆に悔いが無いよう、厳しい訓練を心身諸共強くしていったんだ。

休みの時は、ちゃんと休んでたな。その時は、結構踊っていたな。まあ、一応鍛錬を意味しているけど。

そう思いながら、どう見ても場違いな扉を見つけた。

ガルツチ「恐らく、この扉だな。入ってみるか。」

—アンブレラ研究所 ???—

中に入ると、そこには果てしない草原と夕日の景色に着いた。その目の前には、教官がいた。

キース「遅かったな、ガルツチ。」

ガルツチ「……………教官。」

キース「ふつ、懐かしい。だが、こんな変わり果てた私を、まだ教官と呼んでくれるのだな。」

この声、間違いなく教官の声だ。

ガルツチ「ジェイソンから聞きました。教官を、辞めさせられたんですね……………」

キース「ああ、私は悔しかった。無能に変わり果てた私は、世界を追い出され、気がつけば幻想郷の世界に着いた。後は、ジェイソンの言うとおり、幻想郷を支配するつもりだ。」

ガルツチ「……………もう、如何することも出来ないのですか？」  
キース「すまないな。もう私には、幻想郷を支配する他ないのだ。」

説得は無駄だ。それに、もう私は、サイボーグだ。」

振り向くと、そこには全身銀ピカのサイボーグと化してしまった教官の姿があつた。確かに、説得は無駄のようだ。

ガルツチ「……………出来れば、貴方を殺したくなかつた。追いつ出した奴らの事に怒りを感じるのは、僕も同じです。」

キース「貴様……………」

ガルツチ「ですが、幻想郷を明け渡すわけにはいかない。この幻想郷は、僕にとつての故郷でもあるんだ。だから、貴方を殺します。教官。」

キース「ふっ、出来るものなら、やってみるが良い。」

すると、キースの腕は6本となり、ライトセーバーらしき剣を装着した。変わり果ててしまった教官、もうあの頃の厳しく、優秀で、思いやりがあつた教官は、もう何処にも居ない。だが、それでも僕は、僕にとつて、尊敬した教官とは、変わりなかつた。

どんなに変わり果てようとも、幻想郷を支配する他なくなつたとしても、それでも僕は、受け入れる。それを承知の上で、教官。貴方を殺す。だが、せめてだけでも、これだけは言いたい。

ガルツチ「教官、最後に言いたいことがある。」

キース「なんだ？」

僕は進撃の巨人にいた時、訓練兵だつたときの頃にやつた敬礼を、教官に見せた。

『心臓を捧げる敬礼を』。

ガルツチ「第104期生元訓練兵から代表して、このラーク・バスター・ガルツチから、最初で最後の感謝を贈ります!!」

キース「……………言うが良い。」

ガルツチ「3年間、心身諸共鍛え、巨人を打ち倒す知識を学ばせたことを、ここで改めて言います！」

ありがとうございます、貴方という教官で、良かったです。」

キース「……………そう言われると、私も少し救われる。やはり貴様は、他の奴らとは違っていたな。ならば私も、全力で殺さなくてはならない。来い、ラーク・バスター・ガルツチ!!教官として、我が最大の宿敵として、貴様を殺してやろう!!」

ガルツチ「では、もう敬語は必要ないね。」

絶対に、生きて帰る。

そう決心し、魔神化に加えて神話礼装を着けた。言ってみれば、これセフィロトソードがあれを除いた最終形態なのかもしれない。生命の樹の剣クリフォトソードと邪悪の樹の剣は自分で持ち、他の4つの剣と常闇月の刀は闇の魔手が持っていた。

実力は、教官より上。教官もそれに承知の上で、戦おうとしてる。ならば本気で挑まなくては……………!!

ガルツチ「行くぞ、キース教官。我が剣術の極地、恐れずして掛かってこい!!」

キース「ふっ、来るが良い!ガルツチ!」

t o b e c o n t i n u e d ⇨





ザーを防いでいく。そして攻撃が止むや否や、速攻で攻撃してきた。  
キース「ウオオオオオオ!!!」

ガルツチ「ちつ、これじゃあラチがあかねえ!!『アイアスバツシュ』  
!!」

キース「ツ!!」

一枚破壊される前に、熾<sup>ロ!</sup>天覆<sup>ア</sup>う十四<sup>イ</sup>の円環<sup>ア</sup>での体当たりをし、教官を吹っ飛ばした。

キース「まだだ!!まだ終わってない!!」

アムール『乗れ、我が主!!』

ガルツチ「分かった!」

教官の姿は変わり、今度は下半身を機械馬にし、ケンタウルスのサイボーグとなった。

ガルツチ「行くぞ、アムール!!」

アムール『了解した!!』

ガルツチ「憎悪よ!絶望よ!!混沌よ!!!彼の者を倒す刃と化し、貫け  
!!」

僕の後ろに居た魔手は鎌状のシェイプシフターのような形状にして、教官に目かけて襲いかかり、捕まってしまうた。

キース「なっ!?!しまった!!」

ガルツチ「断罪の時間だ!!『遙<sup>フリーレン・シャルフリヒター</sup>かなる者への斬罪』!!」

3頭の頭を持ったアムールは、僕が持った武器で斬り、中央は噛みつき、最後の僕は目にも止まらない斬撃を出した。そして、シェイプシフターらしき形状にヒビが入り、割れた。

キース「グアアアアアアア!!!」

悲痛がこの場所全体に木霊し、有り得ないことに血飛沫をあげていた。

ガルツチ「教官……………!!」

キース「お、驚いた。貴様、ここまで強かったとは……………。」

ガルツチ「まだ、続ける気か?」

キース「当たり前だ!!さあ来い!!!」

やっぱり、悲しいな。教官を殺すのは、やっぱり惜しい……………。で

も、幻想郷を、守らなきゃ!!

その途端、頭の中から声が聞こえた。

『ガルトツチ!! 途惑うな、奴はもう人間じゃない!』

この声って……、リヴァイ兵長!』

リヴァイ『お前は俺やエレンを超えた、最強の兵士だ! 恩人が殺せ  
というのなら、それに従うのは通りだろ!』

でも、でも僕は!!

『馬鹿野郎!! 辛いのはお前だけじゃない!! 俺たちだって辛いんだ  
!!』

エレン! だって事は、ミカサ!? アルミン!? お前らもいるのか!?

ミカサ『そうよ。ガルトツチ、貴方は誰よりも強い。私やエレン、ア  
ルミン、皆の希望になってくれた!』

アルミン『それに、教官が追い出されていたのは、僕達も悲しい。け  
ど、関係のない人が、教官によって苦しんでるところを見たら、もつ  
と悲しい!!』

サシャ『教官はいつも、私やコニーを叱っていたけど、あれ以上に  
良い教官なんていない!!』

アニ『私もだ。敵とは言え、あの教官は、本当に素晴らしい人だ。』  
ライナー『ああ、そのお陰で、大半の奴が頑張って訓練してきたん  
だ!』

ベルトルト『確かに、アニやライナー、僕が言うのも難だけど、あ  
れ以上の教官は何処にも居ない。』

ヒストリカ『ガルトツチさん、お願いです! 教官の苦しみを、野望を、  
止めて下さい!!』

ユミル『あー、つたくよく。教官が居なくなるのは、あたしらだつ  
て悲しいんだよ。だからさ、ガルトツチ。ヒストリカの愛人として、皆  
のためにも、教官の苦しみを解き放ってやれよ。』

おい待て、ユミル! 何でそうなるの!?

ユミル『いやだってオメエ、ヒストリカと一緒にどっか行ったとき  
に———』

ヒストリカ『ちよつとストップ! ユミル、何でそうなるのよ! だって

「どうか、ユミルだってそうしたじゃない!?」

ユミル『なっ!?』

ヒストリカ『どっちかって言うと、私とユミルは、ガルツチの愛人でしょ?』

あ、結局そうなるのね。つて、僕いつの間にか2人の愛人作ってんじゃない!?

ジャン『オメエ………………。まあいいか。ガルツチ、辛いだろうが、教官の為だ。思いっきしやれ。』

マルコ『ガルツチ………………。頼む。教官の苦しみを、解放してやってくれ!』

コニー『俺からも頼む、ガルツチ!』

皆………………。

ヒストリカ『さあ、ガルツチ。教官や私達の為に……………!』

……………分かった!

ガルツチ「これで、終わらせる!!」

キース「ウオオオオオオ!!」

教官は僕に向かって斬り掛かろうとする。だが、そこが狙い目!!!

ガルツチ「『フレイム・オブ・ザ・ブレイド紅蓮の刃』!!」

体当たりが当たる寸前、僕は素早く避け、真つ二つに横に斬った。

教官の上半身は落ち、馬の半分は爆発した。

ガルツチ「僕の勝ちだ、教官。」

キース「……………いや、まだだ。」

何?

【自爆装置が作動!!自爆装置が作動!!施設に居る人は、すぐさま脱出エレベーターに乗ってください!!】

ガルツチ「教官!?!」

キース「フフフ、私にとつての、最後の足掻きだ。いずれ、私は立ち上がる。だが、脱出エレベーターは、この辺りだ。貴様の仲間も、そこにいる。」

ガルツチ「何で、何で教えるんだ!?!」

キース「私にとって、最後の理性だからさ。もうすぐ、お前という

思い出が、消えてしまう。そうしたら、私は本能のまま、お前達を道連れにするだろう……………」

ガルツチ「教官……………」

キース「ガルツチ……………」、お前に、最後の任務を与える。もし、脱出途中で、私が襲いかかってきたら、すかさず、うなじに攻撃しろ……………」さあ、早く行け!!」

ガルツチ「……………」ありがとうございます。」

僕は涙ぐむも、すぐに拭き、この場から去った。

—アンブレラ研究所 脱出エレベーター—

フラン「お兄ちゃん!!」

未来「その様子、終わったんだね!」

ガルツチ「……………」ああ、だが今は脱出しよう!」

ジェイソン「皆、こっちだ!!」

【貨物エレベーター作動、緊急事態のため素早く動きます。酔いにはご注意ください。】

僕は急いで乗るとすぐさま発進し、地上へと目指した。

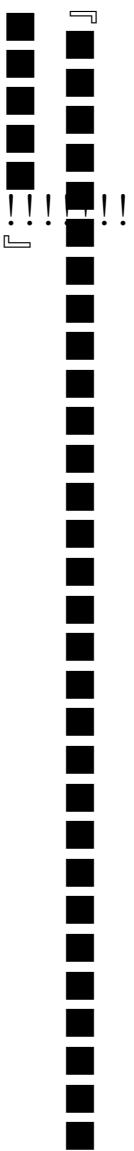
フレディ「それで、キースの事だが……………」その……………」、なんつうか……………」。

ガルツチ「言うな、フレディ。教官だって、頼んでた事だ。」

未来「でも、何だか嫌な予感がする。」

簪「私も……………」。

なるほど、って事はもうそろそろかな?



皆は後ろを振り向くと、そこには巨大化し、最早デスタムーアの頭部だけの状態となったキースが現れた。

フレディ「キース!?!」

鈴美「そんな、ガルツチちゃんが倒したはず!!」

ガルツチ「来たんだな。」  
未来「来たって……………」

ガルツチ「彼奴は、僅かな理性で、僕に忠告してくれたんだ。しかも、脱出場所も教え、最後に頼まれたんだ。」

未来「頼まれたって……………」

ジェイソン「何を、頼んでたんだ？」

ガルツチ『もし、私が襲いかかってきたら、うなじに攻撃しろ』。でも、これじゃあ狙えない!!」

クソツ!!どうすれば……………、どうすれば!!!

ジェイソン「前方に何か来ます!!灰色の機械が!!」

フレディ「待て!!それって!!」

皆はその灰色の機械を見ると、そこには『トライボーグ』が、逆方面から現れた。

トライボーグ『私が何とかする。お前達は先に行け!!』

そしてそのままトライボートは、教官の後ろへ回り込むと、彼方も後ろを向いた。見えた!!

フレディ「トライボーグウウウウ!!!」

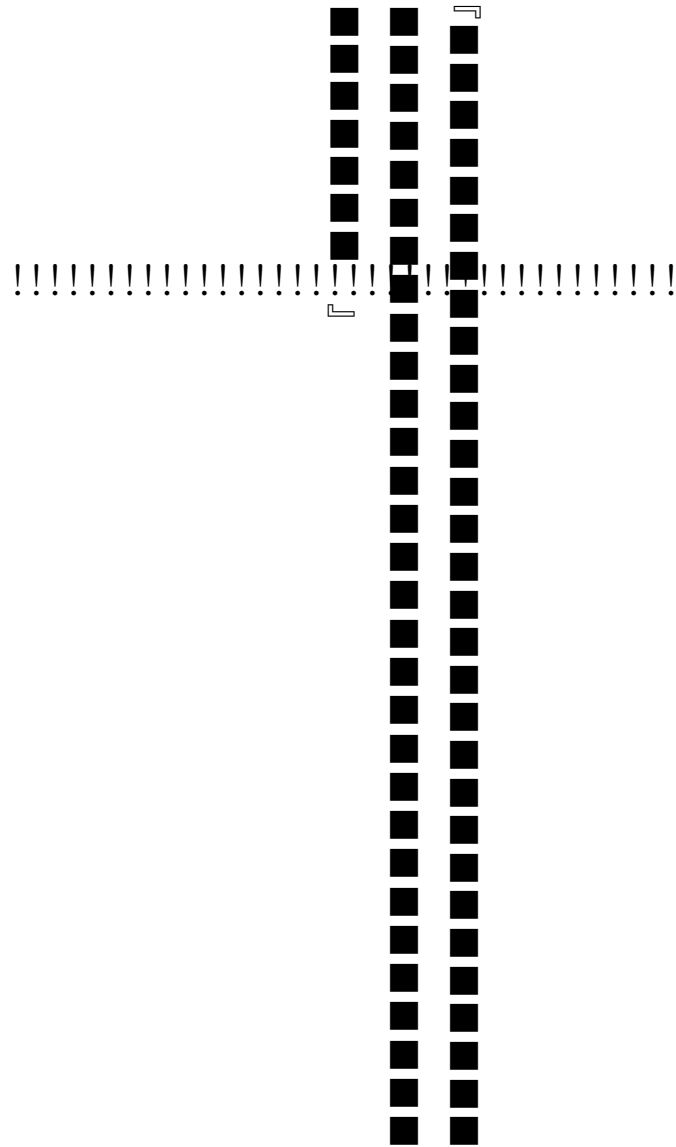
ガルツチ「済まない、感謝する!!」  
トライボーグ! 『トレース・オン』  
『投影開始』!!」

僕はエミヤが持つ弓を投影し、矢は炎を纏った魔法の矢を投影した。

『死に損ないの機械男め!!邪魔をするなああああ!!』

ガルツチ「……………お墓、建てますので、安らかに、眠って下さい。『必中の矢』!!」

その矢は放たれ、そのままキースのうなじを貫通した。それと同時に、トライボーグはキースの頭部を真っ二つにし、僕らの方に来た。



ガルツチ「……………さようなら、キース・シャーデイス教官。貴方の事は、忘れません。」

キース・シャーデイス

アンブレラ研究所と共にこの世から去る

t o b e c o n t i n u e d  
→

## 第47話 ガルツチの本心

―博麗神社―

ガルツチ side

霊夢「さあ皆、異変解決したことを祝って……………」

全員『かんぱーい!!!』

やっと終わった。クラスカードについては、7枚のカードを集めたのか、それらが融合し、一つの聖杯へと変わった。そしてそのまま『聖杯』の『シン』に取り込まれていき、願い事が15回に戻った。つまり、かつてアストルティア聖杯戦争で獲得した聖杯が叶う回数が増えた事になった。

フレディ「いやー、ようやく終わるんだな。カオスヘッダーの時といい、今回も大変だったな。」

ガルツチ「何かあったの?」

未来「そういえば、ガルツチは知らないんだったね。実は幻想郷がカオスヘッダーに幻想郷中にウイルスをまき散らしていてね。お陰で、魔理沙やアリス達が亡くなってしまったんだ……………」

ガルツチ「そう……………、か。」

霊夢「アレは大変だったわね……………」

トライボーク「しかし、それでも我々は生きてる。それだけでも充分だ。死んだ者達のためにも、今を生きるしかない。」

ガルツチ「そうだな……………」

僕はチビチビと、日本酒を飲んでいた。一応これでも成人だから、お酒ぐらい飲める。まあブラッドワインを飲んでいたしな。

ゴースト「ヒック、ガルツチすあ〜ん。そんな悲しい顔しないでくだしや〜い。」

ガルツチ「おいゴースト、酔ってんの!?!」

ジェイソン「そういえば、ここのところガルツチは悲しい顔してるね。」

フレディ「やっぱり、堪えてんだろ?キースを殺したことに關して。」



フラン「そういえば、そのキースって、お兄ちゃんの恩師だったね。」  
簪「確かに、ガルツチにとっては辛い体験だね。」

分かつてはいる。生き返らせたとしても、また異変が起こっても不思議じゃないのは、分かっている。

そう思っていると、僕はいつの間にか6本目まで飲んでた。

チャッキー「おい、彼奴7本目の日本酒飲んでるぞ!」

霊夢「意外とお酒に強いのかしら?」

未来「まだ未成年だから、まだ飲めないなあ。」

簪「私も。」

ガルツチ「いや、2人とも飲むなよ?」

深雪「えへへ、アラヤくん。膝枕になつてく。」

アラヤ「深雪姉さん……、一口で酔っぱらうって初めて見ましたけど。」

深雪「いいじゃない。アラヤくん。」

鳳凰「お酒を飲んだら性格が変わるって、居るのね。」

リサ「なんだか深雪お姉ちゃんが、猫みたい。」

そんなこんなで、カラオケ大会が始まるも、僕はそのまま隠れ家に入ることにした。

今回は、ちよつと歌いたい気分じゃ………ないから。

side Change

未来 side

なんだろう、今日のガルツチ、ホントに悲しそう。ちよつと心配だし、見に行ってみよう。

トライボーク『未来?どちらへ?』

未来「ちよつと隠れ家に行つてくる。」

そう伝え、僕はガルツチの後を追ひ、隠れ家に入る。

— 隠れ家 —

ある程度ガルツチを探していたら、月を眺めながら、一人でお酒を

飲んでいるガルツチが、縁側のところに座っていた。

ガルツチ「ん？未来か。」

未来「大丈夫？凄く悲しそうだったけど。」

ガルツチ「あー、やつぱりそう見えただか。いや、誰だってそう見えるか。」

何故だろう、まるで泣くのを我慢しているかのような声な気がする。

未来「やつぱり、キースの事？」

ガルツチ「……………ああ、そうだ。」グビツ

未来「君にとつて辛いのは分かるよ。でも幻想郷を守るには、殺すしかなかった。そうでしょ？」

ガルツチ「うん……………」

未来「……………生き返らせたいとは思わないの？」

ガルツチ「いや、仮に生き返らせたとしても、教官は望まない。教官がああなったのは、上の人間さ。」

『パリンッ！』

ガルツチが持ってたコップは、強く握ったのか、そのまま砕け散り、その手のひらからお酒と血が流れ出していた。

ガルツチ「俺は、許せない……………！教官を変えさせた人間共を……………、追い出した奴らを……………！！殺してやりたいほど憎い！！」

未来「ガルツチ……………」

ガルツチ「今更戻つて、其奴らを殺しても戻つてこないのは分かってる！けど、如何すれば良いんだ……………。一体、この怒りを誰にぶつければ良いんだ！！」

『ギョッ』

ガルツチ「……………未来？」

未来「なんだか、辛そうだったから、こうしなくなつた。それに、今にも泣きそうだったから。」

ガルツチ「……………そうか。」

ガルツチが握っていた拳を緩むと、コップの破片が落ち、そこには

切り傷から血が流れ落ちていた。

それはまるで、たった今誰かを殺し、後悔しているかのような、そんな光景が見えてしまった。

ガルツチ「いつか、僕の知ってる誰かが、変わり果てて、殺さなくてはならない日が、来るかもしれない。そうなったら……、……、僕は殺せるのか？」

未来「……分らない。でも、その人が望んでいるのなら、そうするしかない。だから、辛かったら、泣いて良いんだよ。」

ガルツチ「………だったら、未来の胸………貸して。」

未来「うん。」

ガルツチは僕を強く抱きしめ、僕の胸の中で、静かに泣いていた。今思えば、ガルツチは簪達とは違って、一番苦しい思いをしていた。きつと、頼ろうにも自分の素直な気持ちが出すことが出来ず、幸せを投げ捨てても誰かを守りたかった。自分の存在を、消してでも………。

『ガルツチはさ、もしあの時……倒していたら、消えていたの？』  
『恐らくな。でも、その前に消えていった世界を蘇らせた後に、この世を去り、そして地獄のところで永遠の供養をしていたのかも知れない。そして、僕がいた事さえ、忘れさせていたのかもしれないね。』  
ずっと、自分はいらない存在だと言い聞かせて、世界を平和にしたのはガルツチではなくみんなで救った。そしてガルツチは、その手伝っていたに過ぎないと思うだろう。

でも、そんなのは間違ってる。僕はガルツチが生きていて欲しい。フラン達を離さないガルツチのように、僕はガルツチを離さない。

ガルツチ「………僕さ、たまに思うんだ。」

未来「？」

ガルツチ「ずっとみんな女性だと言われ、否定し続けていたんだけど………。フラン達はともかく、いつそう………女性に——

——

未来「待って、もしホントにそうになったら取り返しの付かない事になるよ。」



一方……………。

霊夢「2人とも、遅いわね。」

簪「確かにそうだね。」

鈴美「でも、そつとした方がいいかも。」

フレディ「何でだ？」

レザー「私にはさっぱりなのですが……………。」

ジェイソン「知ってる人は知ってるけど、キースはガルツチの教官。ガルツチ自身だって、殺したくないって思っていたけど、苦渋の選択でやむなく殺した。」

アラヤ「それに、今辛い思いをしているのは母さんです。あんな風に変えさせた『進撃の巨人』の何者かを、憎んでいるが、帰ってくるわけでもないと思っていて、悔やんでいると思います。」

トライボーク『……………。』

本音「ホントに、ガルガル君は悲しそうだったね。」

フラン「……………お兄ちゃんは、今でも仲間だと思ってる人には、いつも殺すことを躊躇ってる。」

こいし「本当に殺意を持って殺すのは、平気で裏切り、平然と出来るやつだけ。」

イリヤ「お兄ちゃんはいつでも、キースさんは恩師だと思っていたし、キースさんもそうだった。」

フレディ「何でだ？」

イリヤ「キースさんらしき部屋に、お兄ちゃんとキースさんが写ってる写真が飾っていたの。それだけじゃなく、104期訓練生と呼ばれている写真集の中に、一部は抜き取られていたけど、それでも全員を憎んでいるわけじゃなかったんだ。」

ジェイソン「そういえば、そうだったね。チラ見してみたけど、確かに本当に憎んでいたのか、分かんないね。」

アラヤ「……………とにかく、母さんの事は、未来お父さんに任せましょう。」

フレディ「そうだな……………」

こいし「まあ、もしかしたら……………お兄ちゃん達今頃やっていたりして。」

霊夢「いやいや、さすがにないでしょう!？」

(風龍「霊夢、それはフラグだ。」)

士「奇遇だな、俺もだ。」

—隠れ家 寝室—

未来「ほら、ついたよ。」

ガルツチ「えへへ、ありがと。未来。」

とにかく、ほろ酔いにしては何やらふらついていたガルツチを介抱して、寝室まで連れていった。やっぱりこれ酔ってるよね!？」

未来「ねえ、ホントに大丈夫なの? 凄く酔っぱらってる気がする。」

ガルツチ「そう……………かな? 実のところ、50本も飲んだからかな?」

未来「ふあ!？」

いやいや、日本酒50本も飲んでたの!？これ相当重症だな……………。ここまでショックを受けてお酒を飲んでたなんて……………。いや、50本も飲んだことに関して凄いと思うよ?」

ガルツチ「普段、酔っぱらう事は、無かったんだけど、コップを割つてからかな? なんだかぼわーんとしちやって……………」

未来「(やっぱりあの怪我で、酔い始めたのか……………。怪我して酔うって……………)」

うーん、直接飲むのは何ともないが、怪我してる場所にアルコールが入れば酔うのか、ガルツチの体分らないなあ……………。

まあ、とりあえず簪達のところに戻ろうかな?

未来「それじゃあ僕、簪達のところへ……………」

ガルツチ「待って……………」

未来「え?」

行こうとしたら、ガルツチが僕の右手掴んで、離さなかった。

ガルツチ「お願い……………、1人にしないで……………」  
未来「ガルツチ？」

ガルツチ「行ったら、寂しいんだ……………」  
何だろ、酔ってるガルツチが、なんだか弱気になってる気がする。  
そういえば、ガルツチが弱気なところは全くなかった。むしろ好戦  
的で仲間思いで優しいところがあるけど、今は……………なんだか寂  
しそうで今にも泣きそうな子になってる気がする……………」

未来「分かった、何処にも行かないよ。」

ガルツチ「えへ……………、僕の我が儘なのに、嬉しいなあ……………」  
とにかく、今のガルツチは放っておけない。簪達には悪いけど、今  
日はガルツチと一緒に眠ることにした。

でも、聞きたいのは何故パジャマが、フランが着ている服なのか。  
いや、こいしが着てる服もあったね。って待つて待つて、ガルツチつ  
て女装しないって言うているけど、パジャマの何着かは女物なだけ  
ど……………。うーん、ガルツチが女体化するのは知ってるけど、つてい  
うかよく見たらこれ手作り!?

ガルツチの友人って、ホントに個性が強すぎるんだけど……………。  
まあとりあえず、これを着させようかな。

数分後……………。

ガルツチ「ううう……………、未来う……………。ちよつとこれ……………  
恥ずかしい……………」

おつふう……………。やばいこれ、ホントに可愛すぎる。確かアレ、ア  
ストルフオの私服だっけ?それ着させたら、なんだろ……………急にム  
ラアつときたんだけど……………。

未来「えーつと、布団一つしか無いけど、これって——」

ガルツチ「添い寝……………、かな？」

あ、もしかして誘ってるの?なんだかモジモジしてるし。え?これ  
ホントに?

ガルツチside

いやいや待って!?僕はさつきから一体何を言い出してるの!?というか今僕の声、エロくなってるない!?酒か!?傷口に酒が含んだからか!?そして未来!?なんか君のアレが滅茶苦茶主張しまくってるんですが!?

いやそれ以前に、僕のも同じぐらい主張してるし、もうなんでさ!?ガルツチ「それじゃあ、寝よつか。」

未来「う、うん。／／／」

なあに言ってるんだ僕はああああああ!!!

ラクト『もう理性そのものが働いてないね。』

クリームゾン『ああ、どう見ても本能のまま動いてる……。』

うゝ……。正直怪我してお酒に触れて酔うなんて思わなかった。そのせいか、今まで弱気な発言は言わなかったのに、凄く言ってるよ……。

そんなこんなで、僕の知らない間アストルフオの私服パジャマを着せられ、未来を連れて布団の中に入っていった。

ガルツチ「暖かい……。未来の温もりが、凄く気持ちいい……。♡」

未来「あ……。うん、僕も……。だよ。／／／／／」

……。後で謝ろう。

ガルツチ「でも、どうせなら……。寝る前に、未来とHしたいなあ……。／／／／／♡♡」

もはや完つ全に誘ってるだろオオオオオオオオ!!!いや別に、嫌じやないよ!?でもさ、弱気になってるし、こんな恥ずかしい思いをしているのに、挙げ句の果てにはセックスだと!?

未来「いいよ、僕も……。したかったから。／／／／／」  
……。もう、性別いいや。

ラククリ『待って待って、それだけは絶対にダメ!!!』



もう酔ってる自分に身を任せ、そのまま未来の唇を重ね合わせていく。(もう正直言って、どうにでもなれ……………。)

この場所には2人しかおらず、時間が止まった静かな夜みたいなのに、凄く気持ち良くなっていた。ただキスしているだけなのに、多幸感と陶酔感が溢れ出るかのように満ち溢れてきた。

それからはされるがままになり、僕の耳を舐め始め、乳首を弄んでいた。

ただ、正直に言おうと、この先何があったのかは分かっているが、これ以上は覚えてなかった。

そして……………。

僕が気が付き、酔いが覚ました時には、お互いに臨月位のお腹に、溢れ出てる精液、そして身体中に僕か未来、又はその両方の精液塗れになっていた。

そして、誰かが僕の寝室に入ってきた。

フラン「おはよう、お兄ちゃん達。昨日は凄く熱い夜だったそうね。」

ガルツチ「……………何も言えねえ。宴は？」

フラン「もう終わってるよ。朝になったし。」

ガルツチ「マジか。」

気を失ってる間、いや未来とやってる間、もう終わってたのか。

ガルツチ「んで、子供達はともかく、君等は何処まで見てたの？」

フラン「うーん、お兄ちゃんが騎乗位でお互い射精したところからかな？」

ガルツチ「全然気が付かなかった……………。いや、酔ってたから仕方ないか。」

フラン「お兄ちゃん酔ってたの!？」

ガルツチ「うん。ハードセックスしたことぐらいなら、一応……………。具体的などころまでは全く覚えてない。」

ただ、忘れることの出来ない悦楽と陶醉だった気がする。(どんな感じなのかは、ご想像におまかせします。)

フラン「でも意外、お兄ちゃんが酔うなんて思わなかった。はい、お水。」

ガルツチ「僕もさ。何だろうな、心の重荷を捨てて軽くなったかのような心地よさとか、なんというか……………」

フラン「ふーん。一度見てみたいなあ、お兄ちゃんが酔うところ。」  
ガルツチ「それはちよつとなあ……………、だからって酔わせる魔法とかかけないでよ？恥ずかしいし。」

フラン「興味はあるんだけどなあ……………」

むう、あまり見せたくないんだけどなあ……………。それに、あんな弱気……………見せたくないし……………。

フラン「でもさ、別にいいんじゃないかな？」  
ガルツチ「酔うのが？」

フラン「うん、なんだか新鮮だし、酔ってるお兄ちゃんが、なんだか可愛らしいし。」

ガルツチ「……………可愛らしい、か。もし酔って、僕の本心を言ったら、傷つくんじゃないかな？」

フラン「……………内容次第だけど、珍しいね。なんだか弱気だけど。」

ガルツチ「酔ってたときに、弱気だった気がするんだ。もう覚えてないけど。」

フラン「……………お兄ちゃん。」

ガルツチ「？」

フラン「もしお兄ちゃんが弱気になったら、私が守ってあげるね。お兄ちゃんの妻だから。」

ガルツチ「フラン……………」

未来「ん……………んんっ……………」

お、未来もようやく起きたか。

未来「ふあああ……………、おはよ、ガルツチ。」

フラン「おはよ、未来お兄ちゃん。」

未来「あれ？フラン？宴は？」

ガルツチ「終わったって。」

未来「あ、そっか。ところで今朝なの？」

フラン「うん。」

未来ガル「マジか。」

今更だけど、朝か。って事は、知らない内に気を失ってたってわけか。

簪「あ、やっと起きたんだね。」

ガルツチ「ん？」

未来「やっど？」

簪「もうフレディ達とお別れして、次の世界に着いたって伝えられたけど、なかなか起きなかつたから。」



次話で分かるよ。」

未来ガル「メタイし次話かよ!?!」

t o b e c o n t i n u e d  
⇒

コロ助なりくさんとコラボ 複合した世界 くらTi  
me Crisis EX)

## 第48話 混合した世界

—???

ゼロside

ゼロ「それで、奴は見つけたか？」

時臣「残念ながら、全く反応がありません。」

ゼロ「……………仕方あるまい。こうなれば、—1号の製作をするぞ。」

時臣「—1号って、大丈夫なのでしょうか？」

ゼロ「確かに、あれを生み出すのは危険を伴う。だが、上手く扱えば凄まじい兵器と化す。今回は俺が管理する。」

時臣「私は？」

任せてたまるか愚か者。うっかり時臣め……………。

ゼロ「お前は下がれ。」

時臣「畏まりました。」

さて、今度は上手く作るぞ。絶対に、全てを支配してやる!!

sideChange

—  
???  
—

ガルツチ side

はあ、まさか次の世界に着いて、早速隠れ家の結界を張ったのか。どうやったのかは謎だけど、いつか。

とりあえず僕と未来は、朝風呂に入り、お互いの精液を落とし、僕はいつもの和装ではなく、青い月のバッチが着いてる空色のYシャツを着て、黒いズボンを穿き、そして翼のヘアゴムを付けてサイドテールにした。

未来「珍しい、ガルツチがそんな服を着るなんて。」

ガルツチ「たまには良いだろ？それに、これを着ると特定の人物以外の人は普通の人間と変わりなく見えるんだ。一種の気配遮断だな。」

未来「凄いなそれ。」

とりあえず着替え終わり、朝食を食べ終わった後、皆は隠れ家の外に出た。その場所は……………。

もう複合しすぎてどんな世界なのか分からないところに着いてしまった。

ガルツチ「え？ここ何処なの？」

オーフィス「ここは……………、間違いない。我的世界だ。」

7人「「「「「え？」「」「」」」」

オーフィスは何か知っているらしいけど、分からないんだが……………。

未来「そういえば、皆は知らないんだっけ。ここはオーフィスと出会った世界。『リリカルなのは』と『ハイスクールD×D』、『プリズマ☆イリヤ』、『デート・ア・ライブ』等の世界が複合した世界なんだ。」  
ガルツチ「って事は……………。ミスト。」

ミスト『もう解析終わったよ。ここは『デート・ア・リリカルなのは』と言う作品の世界よ。』  
なるほどね……………。

全王神『あー、そうそう。この世界の龍神空って人なんだけど、実はある事件を救った大英雄なんだ。』

ある事件？僕が起こした無の神的な？

全王神『うーん、そこまでは分かんないけど、でもそれぐらいやばい事件だったって事だよ。』

なるほど……………。

全王神『因みに、英竜がここに来る前で、清浄星花と別世界の簪ちゃんか帰った後の世界だよ。』

別世界の簪……………、か。しかし、清浄星花か。あらゆるスタンドを持つてる能力者って事は、恐らくそいつか。

分かった、ありがとう母さん。

ガルツチ「とはいえ、何処向かおう。」

未来「だったら、空に会いに行こう。久しぶりに会いたいし。」  
オーフィス「賛成だ。」



確かに、僕も気になる。一度空とで会ったけど、その時は未来が召喚した時だったしな。

ガルツチ「んじゃあ、案内を頼むね。未来。」

フラン「空お兄ちゃんかあ……………」

こいし「どんな人なのかなあ……………」

イリヤ「あれ？『プリズマ☆イリヤ』もあるって事は……………」

ルビー『恐らく、平行世界のプリヤちゃんとプリエちゃん、そして美遊さん、そして可愛らしい私と、サファイアちゃんがいると思います。』

イリヤ「自分で可愛いって、言ってる恥ずかしくないの？」

アラヤ「……………」

鳳凰「アラヤ、もしかして……………」

アラヤ「一度警戒した方が良いかも、どうやら何者かが、僕らの行動を監視してる人がいるらしいよ。」

深雪「そうなの？」

アラヤ「うん。」

ガルツチ「……………アラヤ、今は逆探知するな。泳がせておけ。」

やれやれ、どうやらまた面倒な事件が起こりそうだな。まあいい、何者かは知らないが、敵を回したことを後悔してやるから、首を洗って待ってろよ。

sideChange

side

「Indeed, this time the target is this one.」

「その通りだ。そして唯一のターゲットである『龍神空』を、なんとしてでと捕獲するのだ。」

「It's an easy victory.」

「いいか、其奴らは強敵だ。特に、このサイドテールをした奴と、如何にも女装が普段着だと言う奴は1番厄介だ。確実に仕留めろ。」

「Leave it to me, Fang.」

「Yes, Dogg. Then, the contract or.」

さて、ゼロのために、先ずは彼を捕らえなくてはな。あの事件を救った大英雄、か。神々ですら感謝する程の凄まじい力、どの様な者かは分からぬが、採らせて貰うぞ。龍神空。

to be continued →

## 第49話 放たれる戦い

—海鳴市 空の家—

ガルツチ side

未来「着いたよ、ここだ。」

ほう、確かに大きいな……。しかも、如何にも転生者いますよって思うぐらいの力を感じる。

鈴美「ちよつとドキドキするわね……。。」

簪「私も初めてだし、どんな人かな？」

ガルツチ「とりあえず押すね。」

『ピロピロピロ〜、ピロピロピロ〜』

うーん、なぜ例のコンビニの音楽が流れるんかな？

???「はい、今出ますね。」

扉が開くと、そこには僕の見た目より1つ下の少年がいた。

???「どなたで……。って未来さん!?!いやまって、式さん？」

未来「正真正銘の門矢未来だよ、久しぶりだね。空。」

空「未来さん!お久しぶりです!!」

どうやら、彼が龍神空で合ってるようだ。しかし、式を知ってるっ

て事は、ここにも来たって事か。

空「ん?簪さん、何か忘れ物したのですか？」

簪「え?私初対面ですけど。」

空「え?」

ガルツチ「待った、多分君と出会った簪とは別の存在だ。」

空「あ、そうでしたか。っていうか人多い!」

???「空、お客様?」

ん?彼女は……。。

空「あ、十香。未来さんが来たよ。」

十香「未来がか、ところで其方は?」

未来「その前に、立ち話もなんだし中に入れてもいい?」

空「うん、いいよ。」

ってな訳で、空の家に入り、その場所で自己紹介することになった。

ガルツチ「んじゃあ、先ず僕から。僕はラーク・バスター・ガルツチ。幻影の不死鳥と呼ばれ、全王神の息子、虚王魔神という命名を持った、通りすがりの英霊使いだ。」

空「あの、ガルツチさん。まるで未来さんみたいな言い方ですね……………。通りすがりの英霊使いつて。」

ガルツチ「強ち間違いじゃないよ。このクラスカードケースっていうのがあって、fateシリーズの英霊だけじゃなく、他作の英雄達や反英雄達もこのカードの中にあるんだ。」

空達「何そのチート!？」

いやそう言われてもねえ……………。

バルカル『まあ、我がマスターはこういう人なのだ。気にするな。』

空「剣が喋った!？」

ケテル『なるほど、彼女らが……………。』

バルカル『おいケテル、貴様何鼻血出してる?』

ケテル『其方こそ、女性を見て興奮してるでしょ?』

バルカル『貴様のような変態と一緒にするな!!』

ケテル『何を言う!!貴様のアソコが主張してるくせに!!』

バルカル『なっ、何を言う貴様!これはアレだ!生理現象だ!!』

ケテル『どっちも変わらねえだろ!!』

あーもー、またこれか畜生め……………。

十香「あの、その剣は?」

ガルツチ「ああ、これらか。白い剣は『生命の樹の剣』セフィロトソード、黒い剣は

『邪悪の樹の剣』クリフォートソード。よく喧嘩するんだよね……………。因みに、『デート・

ア・ライブ』、つまり君等の力を持つてるつて事さ。反転はこの黒い剣だな。」

十香「えええ……………、つて事は。」

空「十香や四糸乃とかの反転の力も使えるつて事ですか?」

ガルツチ「E x a c t l y !」その通りで御座います

琴里「何なのそれ、反転の力も扱えるつて……………。」

美久「そういえば、結構前に凄く綺麗な歌声が聞こえたのですが、もしかして……………。」

ガルツチ「あ、多分それ僕だ。『破軍歌姫』とエリザベートという子の宝具を組み合わせてから歌ってたからね。」

空「規格外だ……………」  
母さんも聞いてたしな。

フラン「それじゃあ私ね。私はフランドール・スカーレット。お兄ちゃんの妻で、吸血鬼よ。」

空「……………はい？」

琴里「待つて待つて、貴方子供でしょ!？」

フラン「そうだけど？」

琴里「ガルツチ……………、貴方まさか——」

ガルツチ「ロリコンですみません。」

琴里「やつぱり!?!?っていか認めた!?!？」

ガルツチ「一応言うが、この子の姉も同意してるぞ。子供もいるし。」

空達「嘘オオオ!?!?!?!」

いやホントだし!?!?嘘言つて如何するの。

空「つて、ててててことは、アレなの?ききき、キスして、赤ちやんが出来たの?」

『ドンガラガツシャンツ!!』

ガルツチ「いやいや待て待て!?!?!ちよつと待て!!何その生息子発言!?!」

未来「空……………、君つて意外と……………?」

空「え?違うの?」

なんか純粹な目で見てるけど、キスして赤ん坊が出来るわけじゃないからね!?!いや、当初初心だった僕が言うのもなんだが、さすがにそんなんじゃ無かったぞ!?!

コウノトリが運んでくるならまだしもだが……………。

おい、今同じじゃないかって言った奴、去勢拳な?

ガルツチ「空、一応言うけど……………、確実に違う。というか出来る

方がよっぽどおかしい……………」

こいし「うん、どう見ても違うよ……………」

空「え?じゃあガルツチは、知ってるの?」

ガルツチ「……………」知つてはいるが、聞かない方が良い。一応これ、R18の同人小説だし……………」

空「メタイ!?っていうか、R18って何!?というか知ってるなら、教えて!」

ガルツチ「……………」後悔、しないよね?」

空「うんうん!!」

はあ、知らんぞ?とりあえず僕は空を連れて別の部屋に連れて行き、どうやって赤ちゃんが作れるのかを教えた。というか、保健体育から始めた方が良かったんじゃないの?

ガルツチ「えーつと、先ずその作り方だけど……………」ゴニョゴ

ニョ

空「え?ええ!?な、何でそんな行為を!」

ガルツチ「何でって、そりゃ……………」カクカクシカジカ

空「ちよちよちよちよ?!?!え!?そんなところが大きくなって、如何するのですか!?っていうか入れるって何を!」

ガルツチ「要するに……………」シカクイム?!?ブ。コンテ、シン  
トウジョウ。ダイハツへ。

空「ふあk b n v z d k n z。 d ; ねふえf m?!?!」

あー、やっぱりこうなったか……………」なんだぞ、あの頃酷く赤面  
していた頃の僕を思い出す。?!?!

空「嘘でしょ!?ホントにそれで作れるのですか!?!// // // //」

ガルツチ「真実は時として残酷である。じゃなきや、子供が作れんだろ……………」低い確率ではあるがな。(経験者は語る)」

空「……………」// // // //」

ガルツチ「それに、例えば小学生でもすれば、出来ないわけでもないからね。」

空「(。D。)ポカーン」

だから聞かない方が良いつて言ったのに……………」。全くもう



なんだって!?能力が使えないって……。僕はどうなってんだ!?

ガルツチ「『トレース・オン解析開始』!!」

能力使用	——	不可
宝具使用	——	不可
スキル使用	——	一部可能
戦闘技術	——	異常なし
飛行	——	問題なし
スタンド使用	——	不可
魔神化	——	不可

ちっ、なんてこつたい。ホントに使えなくなってる……。投影魔術は!?

投影魔術——可能　ただし、銃限定

銃限定か……………。

未来「大変だ!!スタンドが出ない!!」

簪「オーブの力も使えなくなってる!!」

イリヤ「私なんて、英霊を呼び出せなくなってる!!」

十香「何で、如何して!？」

ガルツチ「原因は不明だけど、どうやらヤバい事態になったって事は納得した。しかも、空が空が攫われるなんて……。なんだか嫌な予感がする!!」

四糸乃「如何するの……………、ですか……………!？」

ガルツチ「ミスト、空の居場所はどこ!？」

ミスト「攫われてから、そんなに時間かかってないけど、結構遠く



まで連れて行かれてるわ。北当たりに向かつてる!」

俱矢「ッ!」

アラヤ「母さん、何か手はない!」

手はないかって言われても、車がないと……………。

そう思っていたら、別の車両が現れ、僕らに銃を突きつけた。

「あのお方の命令で、お前達を始末しろと命じられた。ここで死ぬがいい!!」

「無能となったテメエらを仕留めるなんて、楽な作業だ——」

『ズダンッ!!』

「グハッ!」

「何ッ!? 貴様、何故能力を!」

ガルツチ「黙れ雑種、さっさと死ぬ。」

『ズダンッ!!』

「ガフッ!」

襲撃してきた者は、殆ど僕が投影した銃で息絶えていった。

ガルツチ「あの車両なら使える。しかも、トラックか……………。」

これならいける!

ガルツチ「みんな、あの車に乗って、空を助けるぞ!」

琴里「でも攻撃手段は!」

ガルツチ「僕が投影する贗作銃だ! 詳しくはあの中だ!! 急げ!!!」

そうして僕らは、トラックの中に入り、僕は運転席に、未来は助手席に乗った。後のみんなは後ろに乗り込んだ。

ガルツチ「未来、ハンドガンは扱えるか?」

未来「うん、全部命中って訳じゃ無いけど……………。」

ガルツチ「ならばこれを使え。『USP』だ。」

フラン「ねえお兄ちゃん! このトラック、いろんな銃があるよ!!」

ガルツチ「よし、みんな!! 到着するまで、扱える銃を選べ!! 飛ばすぞ!!」

さあ、空を取り戻しに行こう……………。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
⇒



ルビー『なんて言うか、結構楽しんでますねえ……………。』  
十香「それより、まだ敵が来るよ!!迎撃して!!」  
オーフィス「我、撃ちまくる!!」

『ズガガガガガガガガガッ!!!』

うわー、みんな凄い撃ってる……………。っていうかオーフィス、機銃使ってる!?

ガルツチ「こりや、テンション上がるな。って、前方に敵へり確認!!いや待て、アレは……………!」

未来「何が来たの?」

ガルツチ「シーカーだ!ちつ、窓ガラス割って、撃ち落とす!手伝え、未来!!」

未来「分かった!っていうかシーカーって、ハリー・ポッターのクディッチの選手ポジションのシーカー!」

ガルツチ「うーん、例えば間違っていない気がするけど……………」  
っていうかこんなに敵の数が多いなんて聞いてないよ!!一体何なのこれ!?

そう思いながら、ガルツチはサブマシンガンで、僕はハンドガンでシーカーと呼ばれる兵器を撃ち落としていく。

ガルツチ「クソ、数が多い!!」

『パーンッ!!』

ガルツチ「しまった!!みんな!降りろ!!」

みんなは言うとおりにし、トラックから降りると同時にトラックは横転、大爆発を起こした。

簪「危なかった……………」

六喰「しかし、まだ敵が来てるんじゃないか……………」

狂三「如何するのですか!」

美久「ガルツチさん、何かありません!？」

ガルツチ「待って、その前にシーカーを片付ける!!」

オーフィス「我に任せろ!!」

オーフィスが持つてる機銃により、すぐさまシーカーは一掃し、後は敵兵のみとなった。

ガルツチ「しかし、ここまでの軍勢を率いるなんて、変だ。」

ルビー『やっぱりガルツチさんも思っていましたか。』

ガルツチ「ルビー、これってもしかして……………」

ルビー『恐らく今回の件は、軍勢を率いるぐらいの組織を持った奴らというわけですね。それか、とんでもない組織だったりして……………』

ガルツチ「……………となると、かなり厳しいな。しかも能力が封じられた今じゃ、かなり厳しいな。」

ルビー『私的には、今は別チームに分かれて行動した方が得策だと思います。どのみちここで野垂れ死ぬ訳にはいきませんね。』

ミスト『だったら、3チームに分けた方がいいわね。』

そうなると、通信機が必要になってくるな。

未来「ガルツチ、人数分の通信機と無限バッチを投影できる?」

ガルツチ「どうかかなりそう。一応、その両方の機能を持ったバッチを作ってみる。27人分だな……………」  
『トリス・オン 投影開始』!」

すると、一瞬にして星形のバッチが作られていき、あつという間に27人分の通信機兼無限バッチを作り終わった。その時には敵は居なくなった。

十香「何とか追い払えた……………。つて、ガルツチ……………それは?」

ガルツチ「無限バッチ。見た目は星形だが、通信機の役割がある。みんな何処かに着けて。」

そして、みんなはバッチを着け終わり、ここでチームを分けた。僕とガルツチ、簪、本音、リサちゃん、アラヤ君、鳳凰ちゃんの7人でアルファチーム。フランと鈴美さん、オーフィス、愛花ちゃん、こいし、白夜叉、レティシア、深雪さん、イリヤの9人でデルタチーム、そして十香達11人のズールチームとなった。

ガルツチ「それじゃあみんな、ここで別行動だ。ルビー、空の現在地は？」

ルビー『空さんの居場所ですが、どうやらこの辺りでしょう。この場所は、どうやら何かしらの施設でしょう。』

イリヤ「むう………、どういう感じのルートが良いのかな？」

ガルツチ「だったら、僕らアルファチームは、このルートに行く。デルタチームはこのルート。ズールチームはこのルートで。合流地点はこの施設の入口、いいね？」

未来「よし、みんな、無事を祈るね。」

そして、3チームは別々となり、僕らはその施設に向かった。

t o b e c o n t i n u e d ↪

## 第51話 恐怖の支配者と痛みの支配者

—海鳴町—

ガルツチ side

「ターゲットだ！例のアレを！」

「了解、例の兵器を使用します。」

僕らはフラン達と十香達と別行動し、今は空が捕らえられてる施設に向かっていた。

ガルツチ「つていうか、ホントに数が多いな。少しは休ませろつてんだ。」

未来「確かに、僕もそう思うよ。」

ミスト『兄や！3時の方向に兵器が来るよ！』

兵器？僕はすぐに右を向くと、蜂らしきものがこちらにやってきた。

簪「ちよ!?!何あれ!?!」

ガルツチ「ミスト、アレは!?!」

ミスト『アレは、『タイムクライシス4』に出てくる蜂型テラーバイトよ。シヨットガン系が有効よ!』

アラヤ「僕に任せて!!」

アラヤが放つシヨットガンは、一瞬にして束になって襲ってきた蜂を落としていく。どうやらあの蜂はアラヤに任せた方が良いかもしれない。

本音「それじゃあ、私達は敵兵を相手にした方がいいね。それぞれ  
〜!!」

リサ「ほうちゃん、あのガソリンを撃って！」

鳳凰「分かった！」

鳳凰が撃った先には、漏れ出したガソリンがあり、それが引火し、その場に居た敵達は爆風によってやられてしまった。

ガルツチ「何とかなつたね。」

未来「そうだね。」

簪「でも、ここまでの大規模な軍を持つてるなんて、これちよつとおかしくない？」

ガルツチ「僕も思ってるんだ。一体、どうやって……………」  
そう思いながら進むと、いつの間にかジャングルらしき場所に……………ってジャングル!?

ミスト『みんな、どうやら敵の固有結界に入っちゃったようだよ。』  
未来「え!?!このジャングルが!?!」

ガルツチ「静かに、誰かいる。」

幸い、聴覚は無事で、僅かな音が聞こえた。木から木へ移る音。こちらに向かうかのような風を切る音。そして、蜂の音が聞こえた。

って待て、そんなまさか……………!!

???「漸く見つけたぞ!!」

蜂のテラーバイトがどんどん集まり、散り散りになった瞬間、そこに人が現れた。それと同時に、僕の近くにある木の上にある枝に、異様に腕が長い人が止まった。

???「ほう、此奴があ……………」

アラヤ「母さん!あの人達は!?!」

ガルツチ「まさか、メタルギアソリッド3に出て来る『コブラ部隊』まで、派遣されるなんて、思わなかった。」

簪&本音「『コブラ部隊』!?!」

???「ほう、俺達を知っているようだな。ならば名乗らねば。俺の名は、『痛み』。」

???「そして俺が、『恐怖』!」

未来「嘘くん、何でこんな奴らまで?」

ガルツチ「あんたら、正気か?」

ペイン「正気も何も、これが俺達だ。」

ファイアー「いずれにせよ、あのお方の命令だ。痛みと恐怖で苦しむといい……………」

ガルツチ「……………能力が封じられた今、この2人を倒すのが結構苦痛だが、負けるわけにはいかない!アラヤ、リサ、鳳凰。ペインを頼む!僕と未来、簪、本音はファイアーを倒す!」



鳳凰「分かった！」

リサ「任せて、ガルお父さん！」

アラヤ「母さん、負けないで！」

ガルツチ「よし、行くぞ!!」

ファイアー「来い！お前達に真の恐怖を味わせてやろう！」

ペイン「さあ……………、来い!!」

t o b e c o n t i n u e d  
→

## 第52話 コブラ部隊

—固有結界内—

アラヤ side

それにしてもこの蜂、一体何処から湧き出てるの？有り得ないほどの数なんだけど……………。

ペイン「無駄だ、どれだけの蜂を呼ぼうが、全てを滅ぼすなぞ不可能だ！」

アラヤ「だったら、此奴ならどうだ！拡散弾！」

トリガーを引き、大きく反動するも、ペインに近づくと同時に拡散し、当たりに居た蜂は死滅していく。

ペイン「は、蜂が!!」

鳳凰「今の内に撃ちまくるよ!!」

リサ姉さんと鳳凰姉さんの同時射撃により、ペインのダメージも侵攻している。でも、もつといい方法があるはずだ。

たとえば……………、火炎瓶で燃やすとか。

ペイン「いや待て、貴様何をする気だ!」

アラヤ「貴方を燃やします。蜂が酔ってこないように。」

3人「そんなことしたら、森が燃えるだろ(燃えちゃうでしょ)!!  
自然を大事に!」

えー、いい方法だったと思ってたんだけどなあ……………。ん？

ガルツチ「いい方法があるぞ、みんな！」

未来「何？」

ガルツチ「火炎瓶を使って、このジャングルの固有結界を燃やし尽くすってのは——」

4人「「「いやいや待て待て!!自然を大切に(しろ)!!」」」

ガルツチ「いや、敵のお前が言うことなの？」

ファイアー「当たり前前だろ!?最近地球温暖化の原因があるのだからジャングルを燃やしたら駄目だろ!」

ガルツチ「……………敵の筈なのに正論って。」

あ、母さんも同じようなことをしようと思ってたんだ。



なんと、毒にやられたのか、ペインはそのまま自爆をしたのだ。そして周りに居た蜂型テラーバイトは、ペインが死んだことにより、ほとんど息絶えていった。うーん、自爆するなんて思わなかったなあ。リサ「ねえ鳳凰ちゃん、何で自爆するって分かったの？」  
鳳凰「一瞬だけど、僅かだけどカチツって音が聞こえたの。」  
アラヤ「そういえば、狩人もやってたんだったね。」  
さて、後は母さん達の戦いを手伝わないと。きつと倒せば、この固有結界も解けるはず！

sideChange

ガルツチside

さつきの爆風からして、ペインは死んだか。いやまあ、やり方がエグいけど、何はともあれ倒したからいつか。だが、あの原始的な畏が、まさかここまで発揮してるとは……………。

『グウウ……………。』

ん？今腹が減った音が聞こえた気がする……………。

簪「ねえ、何か方法ないの!?これじゃあ撃つても撃つても、避けられちゃうよ!」

本音「それに、あの罨引つかかっちゃったら身動きが取れないよ!エロ同人誌みたいに!」

ガルツチ「いや、何故エロ同人誌が出てくるのか謎なんだが……………だが如何すれば……………。」

そういえば、アイリさんから貰った弁当の中見てなかったなあ。ちよつと開けてみるか。

そう思い、僕は銃をしまい、袋から弁当箱を取り出した。みんなは





!!!!!!  
』

アラヤ「あーうん、やっぱりアイリさん料理しちや駄目だね。」

全員『当たり前でしょ!?!』

っていうか、ファイアーがアイリさんの弁当食って死ぬって、嫌それ以前にあの戦いに意味があったのか!?!いや、時間稼ぎもあつたが、ま  
ずファイアー!よく躊躇いなく食えたな!?!

—海鳴町—

そう思いつつ、固有結界は解除され、先程起きてしまった戦いはな  
かったことにし、何食わぬ顔で、施設へ向かった。

ガルツチ「アイリさん、もう作るなよ？」  
t o b e c o n t i n u e d  
→



## 第53話 空を攫う理由

—海鳴町—

フランクサイド

フラン「結構進んだね。」

鈴美「ええ、未来ちゃん達、大丈夫なのかな？」

ルビー『つていうか、何で急にこうなったのですかね？空さんを攫うといい、イリヤさん達の能力を封じるといい。分からないことだらけですね。』

確かに、言われてみればそうね。何で空お兄ちゃんを攫ったんだろう。目的は一体なんなの？

イリヤ「うーん、オーちゃんと未来お兄ちゃん以外の皆は初対面だし、攫った理由が分からないよね。」

白夜叉「まあもう。一度、未来達の繋げてみるか。未来、聞こえるかえ？」

未来『白夜叉？どうかしたの？』

白夜叉「空が攫われた理由とか、知っておるか？」

未来『うーん、そう言われても、僕には——』

ガルツチ『その事なんだけど、一つ仮説があるんだ。レテイシア「なんだ？」』

ガルツチ『未来から聞いたけど、龍神空は転生者。つて事は、前世と何か関係があるんじゃないかって思うんだ。』

それって、お兄ちゃんや未来お兄ちゃんみたいな感じなのかな？

ガルツチ『それに、母さんから聞いたけど、龍神空っていう名前は、転生してからの名前で、本名は別にあるみたい。』

しかも、その前世は、神様にも感謝されるぐらいの事をしてたらしいけど、具体的なことに関して是不明なんだ。どちらにせよ、その空の前世に関わってるのは確かだと思うよ。』

白夜叉「成る程、つて事はその攫った本人を喋らせれば分かるのじゃな。」

ガルツチ『そう言うことだな。それじゃあ通信切るね。』

それから、私達は再び奇襲してきた敵達を一掃しながら進んでいった。でも、途中で厄介な敵が現れた。

『ズダンッ!』

こいし「伏せて! スナイパーよ!」

鈴美「分かるの?」

こいし「うん、そしてその先に居るのは……………」

???「ほう、よく分かったのう。そう、儂は『終焉』! だが、もう

一人おるぞ。」

オーフィス「もう一人?」

すると、隣の家がいきなり火事となり、そこから誰かがやってきた。ううん、正しくは何かを着込んだ人が現れた。

レティシア「な、なんだ此奴!」

愛花「暑くないのかな?」

深雪「いやそれ以前に、その貴様は何者だ!!」

???「私か? 私の名は『憤怒』。貴様らに憤怒の炎と終焉の鐘を届けに来た。」

深雪「終焉? 悪いけど、まだまだ終わるわけにはいかないのよ。貴方の炎、食らって返してあげる!! アサルトライフルとマシンガンの鉛玉をね!! フランちゃん、こいしちゃん、イリヤちゃんは私と一緒にフューリーを、鈴美と白夜叉、レティ、愛花ちゃん、オーフィスは、あの遠くから狙ってるエンドを倒して!」

3人「分かった!!」

白夜叉「さあて、お爺ちゃん。私達と遊んでやろうではないか。太陽神から直々相手になるから、ありがたく思え。」

END「ホッホッホ、面白い。では行くぞ!」

皆はそれぞれの銃を構えた。まあ私は、リボルバー式の『SCAR LET』(モデルはタウルス M44)と『CRIMSON』(モデルはS&W M500)で、挑むけどね。お兄ちゃんの真似事だけど、私だって得意だよ。魔理沙も言ってたじゃん。

『弾幕はパワーだぜ』って。どちらも高火力、貫通性もあるし一撃で吹き飛ばすことも出来るからね。

フラン「さあ、チーム戦の弾幕<sup>殺</sup>ごっこの始まりよ。」  
sideChange

—  
???

空 side

うーん、アレ？ここは何処？

??? 「漸くお目覚めかね？龍神空。いや、『』よ。」

えーつと、なんか全裸待機している人が……………つて、全裸!?

え？何あの人!？何で裸なの!?

に、逃げないと——

??? 「逃げようだなんて、無駄だぞ。貴様専用の鎖で縛ったのだからな。」

空 「って言うか、誰!？」

??? 「私か？私は『ヴォルギン』。貴様を捕らえるために、どれ程待ち侘びたか。」

ヴォルギンって、確かメタルギアソリッド3に出てくる………つて、はいいい!?

ヴォルギン「しかし、貴様の肌は綺麗だな。無垢な赤ん坊の肌だ。犯すのが惜しい。」

「(´\_`o^)`」ホモオ……。駄目だこの人、なんだか嫌な予感しかないんだけど。それにサラツと犯すとか言わなかった!?

空「や、やめて下さい!!俺をどうするのですか!?

ヴォルギン「ふむ、どうやら記憶が飛んでいるようだな。仕方あるまい、何しろ貴様は、ある厄災を救った大英雄なのだから………。」

空「え?」

俺が、大英雄?何の話をしてるんだ?

ヴォルギン「知らんのか?いや、今はどうでも良い。貴様を捕らえたのは他でもない。貴様の前世の能力を、再び目覚めさせ、私の力にする。」

空「そんな力を手に入れて、如何するつもりだ!!」

ヴォルギン「決まっておる。あのお方に捧げるのだ。無の神である

『ゼロ』様にな。」

空「ゼロ?」

ゼロって一体誰なんだ?聞いたことがない。

ヴォルギン「そして、貴様の力を捧げれば、我ら『リターン・オブ・ザ・アヴァロン』計画が漸く進む!!全ての生命を、全ての時を、全ての運命を『0』に戻し、我々が新たな1を生み出す!!そして、我々の理想郷を作り出す!!それこそが、『リターン・オブ・ザ・アヴァロン』計画だ!!」

空「そんな、滅茶苦茶だ!!全部を0だなんて、おかしいよ!!」

ヴォルギン「そうかな?だが、無駄な抵抗は無理だぞ。『———』、『お前を逃がすわけには行かない。たつぷりと調教し、可愛がってやろう。』

まずい、何とかしないと……。お願い、助けて……。助けて……。助けて……。助けて………!!!

!!!!!!!

空「未来さん……………、ガルツチさん……………」。

sideChange

—海鳴町—

ガルツチside

ツ!!

簪「如何したの？」

ガルツチ「空が危ない!!」

未来「僕も感じた!!急ごう、ガルツチ!」

ガルツチ「ああ!!済まない簪!!他の敵兵は任せた!!僕と未来は急いであの施設に向かう!!」

簪「あ、ちよつと!!」

待つてろ、空!!お前を、助けてやるからな!!!!絶対に、絶対に!!!!!!

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
⇒

## 第54話 破壊者VS狂狼 不死鳥VS狂犬

―謎の施設―

ガルツチside

って、簪達より先に到着したのはいいけど、勢いで来ちゃったなあ……でも、仕方なかったんだもん。今空から、助けてって声が聞こえたんだから。

未来「つていうか、ここの敵相当多いよね。」

ガルツチ「まさに、ここが本拠地と言ってるようなもんだね。」

未来「でも、空は何処に居るんだろう。」

ガルツチ「分からない。この辺りなのは確かなんだけど……。」

ミスト「兄や、未来お兄ちゃん、空さんはここから地下に何か途轍もない兵器を作ってる部屋があるから、そこに……！2人とも、避けて!!」

未来ガル「!?!」

未来と反対な場所に避けると同時に、扉が破壊されるのが見え、そこから誰かがやってきた。

???「Surprise, Surprise。」

ガルツチ「あれって……、ワイルドドッグ!」

未来「知ってるの!?!」

ガルツチ「タイムクライシスに出てくる登場人物、VSSBの宿敵とも呼ばれてる狂犬だ。って事は、そのとなりは……。」

ワイルドドッグのとなりにあった瓦礫がこちら側に飛んできたが、すぐさま避けた。

???「I can see you at first. My name is Wild Fang。」

ガルツチ「よもや、お前らと対面することになるとは思わなかった。だが邪魔だ、そこを退いて貰うぞ！狂犬共!!未来、フアングを頼む、僕は狂犬を倒す!」

未来「分かった、無茶はしないでね。」

ガルツチ「行くぞ、ワイルドドッグ。VSSBではないが、今度こそ仕留めてやる!!だがせめて、日本語話せ。」

ドッグ「……………コウルサイ小僧。」

ガルツチ「喋る一声はそれか!？」

しかし、ワイルドドッグか。まあ奴はどうせ爆破オチで来るだろうけど、絶対に逃がさない。

ドッグ「hahaha!!」

ワイルドドッグは笑いながら、左腕のガトリングで僕に撃ちまくる。それに対抗し、僕はサブマシンガンでワイルドドッグを撃ちまくる。多分他の皆から見れば当たってないように見えるが、実は僕が狙っているのは、ワイルドドッグが放っている弾を狙って当てているのだ。

普通に考えたら、有り得んだろうな……………。

ドッグ「You seem to be doing pretty good。」

「It can not be translated by you。」  
貴様にやられる訳にはいかないからチ

っていか何気に僕も英語使ってるけど、別にいつか。

ガルツチ「当たれ!!」

ドッグ「グオツ!？」

一つの弾がワイルドドッグに直撃。すると、あの謎の施設に逃げ込んで行った。って逃がすか!!

sideChange

未来side

未来「つていうか、物蹴り飛ばしすぎでしょ!？」



どうなってるのあの人の足!?!いや、ガルツチ程じゃないけど、でもおかしくない!?!凄い速度で蹴ってるもん!

フアング「How was it? How about that?」

未来「言わせておけば!!」

でも、あの厄介な物を避けながら銃で当てるって、結構大変だね。ぶっちゃけ言うと、一度ガルツチと一緒にガンシューティングゲームで遊んだけど、一度も勝てなかった気がする。っていうかガルツチ強すぎでしょ。さすがグラントアーチャーは伊達じゃなかったのか。

未来「そこだ!!」

フアング「ツ!?! It seems a little over head.....」

どうやらフアングも、あの施設に入ったようだ。だったら僕も! 待ってて、空。絶対に助けるから。

—謎の施設内—

中に入ると、そこは兵器ばかりの施設だった。戦車もあればミサイルもあり、中には核爆弾らしきものなど、まるで何時でも戦争が出来るかのような施設だった。っていうか核爆弾があるって、大丈夫なの!?!これ、刺激を与えたら多分海鳴町壊滅しちゃうね。

フアング「Fight for this person!」

って、戦車を蹴り飛ばした!?!

ガルツチ「うわあ.....、おい.....。あれ大丈夫なんかよ。」  
ドッグ「.....」。

フアング「There is more, there are more!」

未来「ヤバっ!?!」

フアングが蹴り飛ばしてくる戦車等の車両がこちらに飛んで来ても、ギリギリのところまで避けた。というか、完全に殺しに来てる。

ガルツチとワイルドドッグも、ワイルドフアングが蹴り飛ばした物



ことが出来たのか。そして、異様な魔力の気配。特に、ワイルドドッグとファングから。となれば、答えは一つ。

「ワイルドドッグ、貴様何時召喚された！あのコブラ部隊と同じように!!」

t o b e c o n t i n u e d  
→

## 第55話 サークヴァントソルジャー

—???

ガルツチ side

ガルツチ「ワイルドドッグ、貴様何時召喚された！あのコブラ部隊と同じように!!」

未来「!？」

ドッグ「……………サアナ。タダ、我々ヲ召喚シタノハ、『ヴォルギン』ト呼ブ男ダ。」

ヴォルギン!?メタルギアソリッド3の!?あのバイセクシャルの!?雷電似と呼ばれるライコフと滅茶苦茶セツクスしまくって……………いや待て、少し落ち着こう。

そうなるも僕も変わらない気がする。っていうかあの筋肉モリモリマツチヨマンの変態と一緒にしたくないんだけど!?

ガルツチ「奴の目的は？」

ドッグ「ソレハ、ヴォルギン二聞ケ。ダガ、私ハ通サナイ!!」

ガトリングが変わった!?一体何を……………。

ドッグ「Eat this!!」

ガルツチ「ちっ!」

『スパッ』

ドッグ「何!？」

未来「えっ?」

ガルツチ「……………あらあ。」

何故か知らないけど、ワイルドドッグの持つ機械で、その辺にあった戦車を投げつけ、僕に当てようとして、僕が蹴ろうと横振りしたら、どういう訳か戦車が綺麗に真つ二つに斬れてしまった。

……………あの時刃すら折る事が出来る脚と言ったが、訂正するよ。戦車ですら真つ二つに斬れる脚だったわ。

ガルツチ「どうなってるんだよ、僕の脚。」

未来「それ僕が聞きたいぐらいだよ!何その凶器の脚!？」

こつちも疑問に思ってたんだから答えられないよ……………。

ドッグ「コウナレバ、『宝具』ヲ使ウシカナイナ!!」

ガルツチ「なっ!？」

ドッグ「Eat this!! 『固有時間危機』!!」タイムクライシス

え? 何その宝具……………? って、タイムクライシスって事は……………。げっ!?

ガルツチ「未来!! 急いでワイルドドッグを倒すぞ!!」

未来「え?」

ドッグ「モウ効果ヲ見破ツタカ。今貴様ヲニハ、制限時間ヲ与エタ。0ニナレバ、ライフガーツ減リ、0ニナレバ戦闘不能ニナルノダ。最モ、私ノ弾ニ当タレバライフガ減ルケドナ。」

ガルツチ「くっ、厄介な宝具だ……………!」

僕と未来は急いで銃を構え、ワイルドドッグに向けて撃つ。が、先程の兵器を使用し、真つ二つに斬つた戦車を盾にして、投げつけてきた。

与えられた時間は40秒。それまでにワイルドドッグを怯ませる、または撃破しないと、どこからともなくダメージを与えられてしまう。それも、強制的に。

ドッグ「hahaha!!」

って、逃げる気か!? だが!

ガルツチ「それで終いだ!!」

『ズドンッ!!』

ドッグ「ウグアアアアアアアア!!」

僕が狙つた部分は両足で、そのまま転げるかのようにそのままバタリと倒れる。

どうやら動かなくなったようで、僕と未来はそのままワイルドドッグに近付く。が、手探りで何かを取り出すと、そこにはスイツチらしきものが見えた。



未来「ガルツチ!? 何処に行くの!？」

ガルツチ「ワイルドドッグを追いかける!! 彼奴は、逃げの自爆をしたんだ!! 未来は先に行って空を頼む!!」

未来「分かった!!」

僕はその爆風に向かって走り、ワイルドドッグが今何処に居るか探した。

そして、意外な場所にいた。海鳴町のとある崖のところ<sub>に</sub>いたようだ。だったら、そこに急ぐのみ!!

―とある崖―

ガルツチ「居た、やはりここに逃げていたか。」

僕は直ぐさま飛行を解除し、ワイルドドッグに向けて銃を突きつけた。

ガルツチ「観念しろ、もう逃げ場はないぞ。」

ドッグ「……………久シブリダ、アノ自爆ヲ見抜イタノハ、貴様デ2人目ダ。」

ガルツチ「何?」

ドッグ「改メテイオウ。サーヴァント『ソルジャー傭兵』、真名ハ文字通り、『ワイルドドッグ』ダ。ソシテ、マスターハ『ヴォルギン』ダガ、他ニイル。」

ガルツチ「ヴォルギンのサーヴァントじゃないって事か？」  
ドッグ「ソウダ。本当ノマスターハ、『ラーク・ブライアン・ロード』  
ダ。」

………はい？え？今ワイルドドッグは、なんて言った？一瞬、お爺ちゃんの名前が聞こえた気がするが………。

ドッグ「アア、ナルホド。マスターノ孫ハ、貴様ダツタノカ。確力ニ、似テイル。」

ガルツチ「待て、僕のお爺ちゃんは死んでいるはずだ。」

ドッグ「イヤ、マスターハ死ンデイナイ。今モ生キテイル。」

ガルツチ「ハア!? どういう事だ!? お爺ちゃんが死んでいないって!!」

ドッグ「ソウダナ、貴様ハドコマデ知ツテル？」

ガルツチ「無の神に敗北するも、最後の力を振り絞り、『グラント・ゼロ』という自爆魔法を………、え？」

ちよつと待て、まさかあの自爆って………!!

ドッグ「アノ自爆ハ、私ガ教エタ。恰モ自爆シテ、死ンダカト思ワセルヨウニ。」

ガルツチ「そんな!? じゃあ何で皆の前に——」

ドッグ「死人トナツタ人物ヲ、態々皆ノ前ニ出レルト思ウカ？」

ガルツチ「………ロマンはあるだろ。」

ドッグ「イヤ、ロマンハナイ。」

でしようね。

ガルツチ「そつか、お爺ちゃん生きていたのか………。じゃあ、あのファンクは？」

ドッグ「彼奴モママ、ロードノサーヴァントダ。」

ガルツチ「ええ………、僕知らずに殺しちやっただけど………。」

ドッグ「安心シロ、アアミエテマダ生キテイル。」

ガルツチ「何だそのワイルド一族的な感じ………。」



ドッグ「ソウイウナ。」

ガルツチ「ハア、何だ。本人かと思つたら、お爺ちゃんのサーヴァントなら、殺す気失せたよ。」

ドッグ「ソウカ。マアトニカク、奴ラノ計画ト『データ』ガ取レタカラ、ロードニ渡スカ。」

そう言うのと、ワイルドドッグの姿が薄まっっていく。って、その前にお爺ちゃんの事言わないと！

ガルツチ「待て、ワイルドドッグ！お爺ちゃんは、今どこで生きてるんだ!？」

ドッグ「……………知リタカツタラ、東風谷早苗カ蒼天星龍ニ会ウガイイ。デハ、マタ会オウ。ロードノ孫ヨ。」

そして、ワイルドドッグは何かの荷物を持ちながらこの世界から去って行った。代わりに、溢れ出る力を感じ、一度解析すると、どうやら力を取り戻せたようだ。

さて、ヴォルギンのところに向かうか。

sideChange

―謎の施設 内部―

未来side

あれ？なんだか力が戻った感じがする。もしかして、ワイルドドッグが居なくなっただけで、力が戻ったのかな？

フラン「未来お兄ちゃん!!」

未来「フラン、皆。」

簪「未来、速いよ……………」

十香「ガルツチさんは？」



## 第56話 メタルギアエクセルサス牙

―謎の施設 地下―

ガルツチside

ヴォルギン「ほう、まさか最短距離として上から来るとは思わなかったな。」

ガルツチ「待たせたな、ヴォルギン。空を取り返してきた。何処に居る!!」

ヴォルギン「安心しろ、空は私の隣にいる。全く、調教の真つ最中だというのに、無粋なことを……………」

美久「調教つて、あなたダーリンになんて事を!!」

つていうか、一体ナニをしてたんだよ……………。今更だが、ヴォルギン裸なんだな……………」

空「み、みんな……………!!」

十香「空!」

琴里「つてあんた、何で裸なの?」

ガルツチ「多分、ヴォルギンに無理矢理脱がされたんだろ。」

二亜「ㄗ(ㄗ^o^)」ホモオ……………」

未来「何その顔……………」

ヴォルギン「ふつ、だが早くここにたどり着くとは想定外だ。空のデータを取れば、我らの計画が進むというのに……………」

計画?此奴は一体何が言いたいんだ?

ヴォルギン「まあいい、邪魔が入った以上、貴様らを始末しなくては……………!来い、メタルギアエクセルサス牙!!」

すると、ヴォルギンの後ろから、巨大な機械が現れた。4本脚の……………つてあれ!?

ガルツチ「メタルギアエクセルサスだつて!?バカな、アームストロング自ら破壊された筈の機械が、何故!」

ヴォルギン「ああ、貴様は見たことあるのか。だが、此方は違うぞ?何しろ、メタルギアレックスとメタルギアジーク、サヘラントロプ

ス、メタルギアレイ等のメタルギア形式の機械や性能、そして武器を取り揃えた最高傑作のメタルギアなのだ。」

ガルツチ「ちつ、相当厄介なもん作りやがったもんだな……………」  
未来「ねえガルツチ、何であれを知ってるの?」

ガルツチ「以前僕が反乱軍だったとき、此奴のオリジナルと戦ったことがあるんだ。まあ、その後は皆の力で、戦意喪失させたけど、結局はアームストロングって言う阿呆な政治家がぶっ壊したけどね。ぶつちやけ、持ち上げたことあるし。」

本音「えええええ!?」

簪「メタルギアを、持ち上げた!?」

レテイシア「どれだけ腕力あるというのだ!?」

白夜叉「腕が細いのに、ようやるのう。」

十香「もう規格外ってレベルじゃない……………」

他の精霊『うんうん。』

5人『どうなってるの……………、その腕。』

みんな酷い……………、いやブレイズ達もそう言われた気がする……………」

ヴォルギン「ほう、エクセルサスを持ち上げたのか。面白い、ならばこの機械で、持ち上げられないほどの圧力で、貴様を踏み潰してやろう。」

空「くうう……………!!」

ガルツチ「空!」

『バキンッ!!』

ガルツチ「よつと、大丈夫か?」

空「な、何とか無事です……………。貞操も、どうやら間に合ったようですし。」

ガルツチ「そうか。」

空を助け出すと同時に、エクセルサス刃が動き始め、上から核兵器と合体していき、二足歩行のメタルギアへと変貌していった。その中には、ヴォルギンが入っている。

ヴォルギン「フハハハハハ!! さあ来るが良い、捻りつぶしてくれ

る!!!

ガルツチ「封印された分、派手にやるか！セファイロト『絶滅天使』！  
クリフォト『救世魔王』!!」

折紙「ホントに使えてる?！」

琴里「へえ、確かに凄いわね。」

ガルツチ「ついでだ………！フラン、こいし。アレをやるぞ！」

フラン「アレね！」

こいし「いいよ!!!」

イリヤ以外全員『あれ?』

ガルツチ「Connect

Despair darkness Gaiia Evil God

！」

フラン「Connect

Ruin Brake Heran Evil Goddess!

こいし「Connect

Slaughter Ripper Hades Evil God

！」

3人「混沌を統べる力よ、我らに目覚めたまえ!!!『Connect  
in chaos Stone guardian!!!」

僕とフラン、こいしが黒く光ると同時に、直ぐさま変化が訪れた。

先ず僕の方は、デビルメイクライ4に出てくるネロのような腕は、両腕となり、翼は『完全生命体デストロイヤー』、顔の右頬には闇のような刻印が浮かびあがった。

フランは両腕両脚にミラバルカンの装備へと纏い、ミラバルカンの翼が追加された。

こいしに關しては、宙に浮くと同時に両腕両脚に水色と白のヒレが現れ、そこから風と水を纏い、こいしのサードアイはアマツマガツチのヒレに覆われていた。

ガルツチ「我らは大魔神にして1人の存在。」

フラン「大切なものを守るために。」

こいし「今ここに、混沌を統べる力を持ち。」

3人「彼の者を倒さん!!」

ヴォルギン「混沌を統べる3大魔神か……………まさか此奴らに宿していたとはな。あの宵闇霊夢が言っていたのは、本当だったとは……………」

ガルツチ「何ッ!?!」

フラン「宵闇霊夢だっつて!?!」

こいし「まさか、彼奴生きて!?!」

ヴォルギン「な訳あるか、貴様らが殺しただろ。」

3人「「デスヨネ……………」」

マジでビツクリした。生きていたら、一体どんなトリックで蘇ったのか自問自答してたとこだった。

ヴォルギン「さて、お喋りもここまでだ。ここが、貴様らの墓場だ!!」

簪「やらせない!!セツト!!」

『覚醒せよ!セラフイムオーブオリジン!!』

簪「ウルトラマンセラフイムオーブ!!」

ヴォルギン「ぬお!?!これが、ウルトラマンだと!?!」

イリヤ「あれ?簪ちゃんのとおりにあるのって……………」

となり?僕らは直ぐさま簪の右となりを見ると、デイケイドのケータツチらしきものがあつた。そのケータツチは、イリヤのところに止まり、手にすると9つのマークが描かれていた。

イリヤ「もしかして……………」

『Sabber!Archer!Lancer!Rider!Caster!Assassin!Berserker!Avenger!Ruler!』

FINAL SPIRIT RIDE〈DECADE〉!!』

イリヤの服装が一変し、ジャンヌ・ダルクの衣装へと変わった。それに加え、イリヤの背中に、虹色の翼が生えていた。最早仮面ライ

ダー要素が見当たらねえ……。いや、どっちかというところプリキユアの方が近いかな。

ルビー『あらあ、まさかコンプリートフォームになっちゃうなんて、私でも想定外ですね。これもこれで可愛いですけど。』

イリヤ「ルビー、シヤラップ。踏み潰すよ?」

ルビー『何その冷たい目は……。』

イリヤ「鞭打ってもいいのよ?」

ルビー『何でツ!? S M プレイする気ですか!?!』

ガルツチ「お前が悪い。」

全員『激しく同意。』

ルビー『解せぬ……。』

ヴォルギン「ま、まあいい。さあ来い!!」

ガルツチ「行くぞ、ヴォルギン。兵器の貯蔵は十分か!!」

t o b e c o n t i n u e d ↘





そういえば、何故か空は上の空になってた気がする。しかも、あの異様な力。神様なら同格ではあるだろうけど、僕や母さんこと全王神程の力は無いかもしれない。でも、この違和感は一体。

ヴォルギン「余所見してるとは、随分余裕だな。」

ガルツチ「『響け虚の歌』!!」

複数から放たれる魔手が僕を守り、他の魔手はメタルギアエクセルサス刃に向けて攻撃を仕掛けた。右腕は引き千切るも、どうやら他の物が吸収され、再生されたようだ。

しかし、再生か………………。あの再生をどうにかしないと、どうやっても破壊しきれないな。まあ、あの巨人共よりは殺し甲斐があるけどね。

未来「ガルツチ、どうやってたら再生止められる?」

ガルツチ「いやそう言われてもだな。あの再生、思ってるより厄介な奴だ。あのアームストロングのナノマシン並みに再生力が高いしな。つて、会話中邪魔するな!!『日輪』!!」

簪「確かに、私も何回も斬っても、何回も瞬時に再生してくるよ。あの再生力を何とかしないと、本体を攻撃できない!」

アラヤ「ですが、どうやって——」

つとその時だった……………。

『俺達に任せろ。スネーク!!』

『ヴォルギン! 改造型のレールガンを食らえ!!』

白い一閃が走り、メタルギアエクセルサス刃の頭部分が貫通、そのまま頭部は崩れ落ちていった。しかも、再生すら起こらなかった。

ヴォルギン「何ッ!? バカな、何故再生されない!? しかもその声……………、まさか!?!」

???「多分それは、BIG BOSSの事だろうが、あえて言わせて貰おう。『久しぶりだな、ヴォルギン』。」

ガルツチ「スネーク!?!」

スネーク「ほう、俺を知ってるとは、まだまだ捨てたものじゃない

な。なあ雷電。」

雷電「ああ、そのようだな。あとスネーク、もう一度チャージを。今度は胸部を。その間、俺が時間を稼ぐ。」

スネーク「分かった。」

みんなは後ろを向くと、そこにはレールガンを持ったスネークと、サイボーグ化されている雷電がいて、その雷電が僕の近くに来ると、僕を見ていた。

雷電「君、あそこまで飛ばせるか？」

ガルツチ「え？まあ一応は。」

雷電「そうか、なら頼む。」

ガルツチ「分かりました。しかし……………、貴方が雷電ですか……………」

雷電「？」

ガルツチ「サムから聞きました。僕の目は、貴方に似ていると。」

雷電「サムが？君とサムとはどういう？」

ガルツチ「サムは僕の剣術の師匠でもあり、ライバルなんだ。」

雷電「なんだって!?それじゃあ、サムは……………」

ガルツチ「そう言うこと。って事で、行ってこい!!」

話の途中で切り上げて、雷電を力一杯投げ飛ばす。同時に赤い一閃がメタルギアエクセルサス刃に大きな傷跡を残すと、そこにはヴォルギンが乗っている場所が見えた。

ヴォルギン「バカな!?イワン!?お前だということのか!？」

雷電「いや俺、イワンじゃない。それよりその巨人!今の内にメタルギアを!!」

簪「え?ああ、うん!!」

簪がオーブカリバーをぶっさすと、そこにはメタルギアエクセルサスの姿が見え、そのまま取り出し、宙に投げ飛ばされた。

ヴォルギン「しまった!?このままでは……………!!」

雷電「今だ!!撃て!!」

スネーク「発射!!」

『ズギユウウン!!!』

今度は赤い閃光が走り、メタルギアエクセルサスは貫通、そのまま爆発するも、小さな点だけは残った。言わずともヴォルギンだ。

ヴォルギン「まだだ!!まだ終わってない!!!!!!」

ガル深雪「「彼奴の『戦闘続行』スキル絶対高いだろ!?!?!」

未来「でも、今がチャンスだ!!行くよ、みんな!!」

全員「おう!!」

『解き放て、オーブの力!!』

『FINAL INFINITY ATTACK RIDE <DIMENSION KICK>!!』

『FINAL ATTACK SPIRIT RIDE <DEDED ECADDE>!!』

ガルツチ「ヴォルギン!!!この一撃を食らいやがれ!!!『咎得テ釘放ノ閃光』!!!」

フラン「破滅へと落ちなさい!!『緋色月下・狂咲ノ絶ノ斬撃』!!」

こいし「これが殺戮の極限!!『墮天厄災ノ大嵐』!!!」

イリヤ「『オールエクスカリバー・メサイア全て約束された幻想の剣』!!」

簪「『エクスオーブ・カリバー熾天へと輝く絆の剣』!!!」

未来「いけええええ!!!」

鈴美「『ゼロノス・ド零に戻りし無の剣』!!」

オーフィス「『トゥルファンタジーオブザスパーク夢現へと連なる閃光』!!」

白夜叉「『アルティメットブラスター』!!!」

レティシア「『ギガントドラゴニックダブルスラッシュ』!!」

本音「『アース・オブ・ザ・スパーク』!!」

深雪「大魔砲『ファイナルダブルダークマスタースパーク』!!!!!!」

空「これが我が奥義………………。零を全に変え、全を零へ戻る。『—

』!!!」

最後に空が何の技を出したのかは聞こえなかったが、みんながそれぞれの高火力の技を出し、そのままヴォルギンにぶつかる。

BGM終了

ヴォルギン「ぐうう……………!!ここままでか……………!ゼロノス様……………、申し訳……………、御座いません……………!」

s i d e C h a n g e

空 s i d e

え？あの技、俺が出したの？なんだろう、この技使ったら、凄く疲

れた気がする。誰か、声が聞こえた気がする……………。

でも、ちよつと疲れてるから少し寝てからにしよう……………。

だけど、あの声は誰だったんだろう。それに、ガルツチさんを見たら、違う人に見えた。ううん、その違う人が、何故か懐かしく見えて……………、今はいいや。寝よう。

t o b e c o n t i n u e d  
⇒

## 第58話 ロードの居場所

―病院 屋上―

ガルツチside

なあ母さん、空が出したあの力って何なの？

全王神『あれ？前世の力だよ。多分空ちゃんはまだ気が付いてないと思うけどね。』

そうか、でもいつか思い出すんだよね？僕や未来みたいに。

全王神『そうだね、そうになったら空はどう言う決断をするのか、楽しみにしてるよ。』

まあ、決めるのは空自身だしな。僕みたいに、前世と訣別するのか、またはその前世を受け入れて人生を歩むか。

でも今気になるのは、お爺ちゃんの生存だな。

全王神『え？ローちゃん生きてるの!？』

ちよつと待て、なんだローちゃんつて。ていうかお爺ちゃんと知り合い!？

全王神『もつちろーん!!ローちゃんはね、全の竜神の後継者とも呼ばれるほどで、凄いイケメンなんだよ!!』

ウエイ!?(O W O) 全の竜神の後継者!？それ初耳なんだけど!？つていうかどんだけ僕の爺ちゃん知らなさすぎなんだよ!？

それじゃあ、お爺ちゃんの居場所も知ってる――

全王神『期待してて悪いけど、そこまで分かんない。』

なんだよ、それ……。まあ、確かに母さんですら生きてたなんて知らなかったんだし、無理も無いか。

むう、こうなったら星龍と早苗に聞きに行かないとだな……………。

全王神『あ、それならこのことの平行世界に行った方がいいと思うよ。そこにガイア君の両親もそこにいると思うから。』

ありがとう、母さん。

僕はそう思い念話を切り、次は別の念話に繋げた。言わずもがな、空を知っているこの世界の『ゼウス』だ。

聞きたいことがある、ゼウス。

ゼウス『ぬお!? 誰だ!? 一体どうやって念話を!?!』

驚くのも無理は無い、この念話は一応どんな奴でも繋がる優れものだ。それよりも聞きたいことがある。

ゼウス『なんだ?』

どうしてそこまで空を気にする。彼はもう転生して、自由に生きても良いはずだ。それなのに、連れ戻そうとはどう言う根端だ?

ゼウス『それは……………』

彼の前世は何かと英雄だろうけど、元を正せば一人の人間だ。どう生きようが、どう死のうが、それは神々が決めることじゃない。彼自身が決めることだ。

ちなみに、何者かと言うと、僕は虚王魔神。全王神の負の感情から生まれた存在だ。

ゼウス『虚王魔神!? な、何故生きて——』

死んでる扱いなんか。全く、もしそっちにいたらぶん殴ってたぞ? 生きてる理由は、転生してるからだ。特典は地味にしろ、努力で以前の力よりも増してる。さて、ゼウス。これ以上空を手を出すなら、一度覚悟しておけ。

ゼウス『はい?』

貴様らにとつての大いなる厄災を起こす。それも、とびつきり的な。

ゼウス『お、脅しですか!?!』

当たり前だ。分かったら空に手を出すな。他の奴らにも伝えろ。

ゼウス『は、はいいいい!!!』

念話を切り、僕は溜息をついた。

ガルツチ「らしくないこと、しちやったな。それとも、虚王魔神の頃の僕に、戻ったりして。」

確かに、あの頃の僕は、なんて言うか………自分で言うのもなんだが、つまらん存在だったな。

でも今は違う、ちゃんとした心を持つてる。負の感情の、特に絶望と憎悪が強いけど、それでも僕は、僕で居られる。

ガルツチ「さてと、空の様子を見に行くか。」

イフ「……………ガルツチ、一つ聞きたい。」

ガルツチ「ん？」

イフ「君の願いは、なんだ？」

ガルツチ「……………何時までも強敵と戦い、そして延々と世界を回ることかな？ 未来達と一緒に死ぬことがあっても、ずっと旅していきたい。救うときは救うし、手伝うことは手伝うかな？」

イフ「そうか、では空に会いに行こう。未来達も見舞いに行ってるし。」

ガルツチ「そうだな、ところでイフは、ずっと一緒に居てくれるか？」

イフ「どうだろう、未来と同じように私が消えるかもしれない。」

ガルツチ「……………そっか。それまでは、今の一時を楽しまないとね。」

イフ「確かに、そうだな。」

そうして僕とイフは、空がいる病室に向かった。



―病院 外―

未来 side

未来「空が大事にならなくて良かった。」

簪「うん、あんな力本当にビックリしちゃったよ。」

十香「でも、あの力何処で？」

未来「確かに、不思議だね。」

でも、ガルツチは何か知ってるらしいけど、何も言ってくれない。教えたくないのかな？

オーフィス「そういえば、グレードレッドから聞いたが、また宴を始めるそうだ。」

ガルツチ「なにこの宴率……………。高くね？」

オーフィス「しかもどうやら、何処かの旅館で始めるとか。」

ガルツチ「宴に続いて旅館!？」

レッド「良いでは無いか、空が無事だと分かったんじゃしな。」

ガルツチ「まあさすがに、言峰達も来ないよね?」

全員『ガルツチ(母さん)(お母さん)(お兄ちゃん)、それフラグ。』

ガルツチ「……………もう来てるな、絶対。」

それ言っちゃ駄目だろ、ガルツチ。本当に来ちゃったらどう反応すればいいの？

ガルツチ「まあ、来たら来たらで、スルーしようか。」

未来「また随分な投げやり……………」

ガルツチ「ツツコミしきれないし、しかもこのままだと貧血で倒れそうだし。」

未来「待って、ツツコミと貧血関係ないよね!?!何で貧血起こすの!?!」  
ガルツチ「こつちが聞きたい。いや、貧血の理由はわかるけど、こ  
うも続くと厄介だな。気を付けてるとはいえ、いい加減何とかしない  
と……………」

でも意外だね、ガルツチって見た目健康そうなのに貧血を起こすな  
んて。

十香「そういえば、泊まるどころある?」

ガルツチ「大丈夫、隠れ家っていうのがあるから、そこで休むよ。」  
二亜「そっか。ところで簪ちゃん。」

簪「？」

二亜「あの同人誌、いくら買ってきてくれる？」

ガルツチ「フア!!」

アラヤ「!/?//////////////////」

あれ?何でアラヤ君が顔真っ赤に?

簪「そうね、今なら——」

二亜「よし買った。」

深雪「何故だろ、凄くいやな取引を見た気がする……………」

イリヤ「そういえば、他にどんな同人誌作ってるんだろう……………」

本音「他には、『月の魔神』とか『雨降りし時に出会うふたり』とか。

『月の魔神』は、もはやこれまでと、魔神は目を閉じるも、気が付くと何処かの場所で、そこには自分に殺されたはずの勇者がいて、それから色んな物を見て距離が縮まっていき、最後には愛し合う仲に……………」

未来「月の魔神って、多分これガルツチだね。」

ガルツチ「うん、どうもそうだね。勇者って事は……………」

未来「如何してこうなった……………」

本音「ちなみに、ふたりの設定は基本みつくくんがSでガルガル君がMだから。」

未来ガル「いやいやちょっと待て!?!まさかとは思うけど、S Mプレイとかないよね!?!」

簪「え?書いて欲しいの?駄目だよ、期待してるけど、私のはイチャラブ系だから。」

未来ガル「そこじゃあない!!」

琴里「何でこうなったの?」

3人「私達がやりました。」

琴里「何やってるの!?!二亜が腐っちゃったら如何するの!?!」

ガルツチ「琴里さん、それもう手遅れです。」

未来「うん、あの時書かせてしまった時点で、最早手遅れなんだ。」



『ここからは会話だけです。』

ガルツチ「さてと、未来。君も知ってるだろ？あの力のこと。」

未来「うん、とてもじゃないけど、あれは空が出した技だよね。」

ガルツチ「しかも、あの技は零と全を応用した技。普通じゃないよ。」

未来「ガルツチは、あの力を見たことあるの？」

ガルツチ「いやない。零と全を組み合わせた技なんて、聞いたことがない。でも、確かにあれは『零の龍神』の力と『全の竜神』の力だった。二つの技を所持してるのは、少なくとも龍神王ただ一人の筈だ。だが空は、それを持ってた。いや、正しくは、前世の時に持っていたことになる。」

未来「前世か……………」

ガルツチ「母さんは知っていきそうだけど、恐らく知らないっぽい。でも、いずれ連れ戻そうとする神々や、空を狙う輩が居るのは少ない。念のために、連れ戻そうとする神々には釘を打っておいた。」

未来「うーん、空を連れ戻すってどういう事なんだろ？転生したんだから、自由に生きても構わないと思うんだけど。」

ガルツチ「それには僕も賛成さ。少なくとも、手を出すことはない

が、狙う輩はどうにも出来ない。そこは、自分の身は自分で守って貰う他ないな。」

未来「でも、何かいい考えはあるんだよね？」

ガルツチ「まあね、ただどんなのがいいのか悩んでるんだ。指輪かチョーカーか……。」

未来「？」

ガルツチ「実は、僕らの力を一時的に扱えるような効果を持ったアクセサリーをあげようかと思っててるんだ。まあ、あの力はさすがに無理だ。絶望、破滅、殺戮の力は、空には似合わないからね。こういうのは、汚れ仕事の僕やフラン、こいしがやることだから。」

未来「またそうやって自分を犠牲にしようか……。」

ガルツチ「それを止めるのが、未来でしょ？」

未来「その言い方、ちよつと狡くない？」

ガルツチ「狡くないよ。だって、未来のこと好きなんだからさ。離れたくないほど、好きだし。」

未来「……………ホントに、ズツと一緒にいてよ？」

ガルツチ「安心して、僕はずっと一緒に。死ぬときも、一緒に。」

未来「もう、そう言うところ狡いと思うんだけど。」

ガルツチ「そうか？狡いと思ったら、如何するの？」

未来「それは勿論、君の耳を舐める。」

ガルツチ「やつぱりそうなるのね……………。でも、出来れば戻ってか  
らにしない？」

未来「勿論そのつもりだよ。楽しみにしてね。」

ガルツチ「うん。」

t o b e c o n t i n u e d  
→

## 第59話 魔眼の試練

―空の家 トレーニングルーム―  
ガルツチside

さてと、粗方ギフトゲームの紙が完成したけど、もう一度確認した方がいいな。

ガルツチ「白夜叉、こんな感じでいいか？」

白夜叉「どれどれ？」

その内容は、こう書かれていた。

〈ギフトゲーム：直死の魔眼の試練〉

プレイヤー：門矢未来

クリア条件：ガルツチが戦ってきた敵達を倒す。

クリア方法：その敵の全滅

敗北条件：なし

クリア報酬：『直死の魔眼・破壊』の習得

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

“サウザンドアイズ”印

白夜叉「ふむ、よく出来ておるの。流石じゃな。」

ガルツチ「んじゃあ、後はあの機械に挿入するだけだけど、念のため確認しよう。」

そう言い、僕は中央にいる未来の方を見た。

ガルツチ「いい未来？これを挿入したら、僕は手助けは出来ない。

その先は一人で戦う必要がある。覚悟は良い？」

未来『うん、いいよ。君が戦った奴ら、どんな奴なのかは分からないけど、必ず習得してみせるからね。』

ガルツチ「よし、それじゃ行くぞ。」

未来の覚悟を確認し、僕はその機械に挿入すると同時に、僕らが戦った宿敵達が現れた。

ウインズオプデストラクション  
破滅を呼ぶ風とアームストロング、宵闇霊夢、殺生院キアラ、ヘブンDIO、ブラック、マーモン、女神イリアス、シーモア等が、未来の目の前に現れた。

そういえば、こんな奴らがいたなあ……………。

空「あれが、ガルツチが戦った奴？」

ガルツチ「そう言うことだ。」

イリヤ「それにしても、随分な強敵そろいだね。」

ガルツチ「まああくまで、当時の強敵だけ……………、多分未来なら勝てると思うな。」

雷電「つていうか、奴らと戦ってたとは、驚いた。」

ガルツチ「今じゃミライっていう子と一緒にいるから、生前よりはいい人だよ。」

雷電「信じられんなあ……………。」

ガルツチ「それよりほら、始まるぞ。」

さあ未来、その試練乗り越えて見せろ!!

sideChange

— ??? —

ゼロノス side

時臣「……………ゼロノス様、どうやらヴォルギン殿は、彼の伝説の存在のデータを——」

ゼロノス「知ってる、失敗したのだから？しかも我が弟の奴らに。」

時臣「ハッ、その通りでございます……………」

クソ、奴を逃したのは我々にとっての痛手。あの龍神空とか言う人物は、恐らく強大な力を持ってたはずだ。それを逃すと言うことは、我々の計画が大きく後退することになる……………」

時臣「どうなさいます？」

ゼロノス「いや、慌てるな。まだ他の奴もいるから、そのデータさえとれば、何とかなる。」

時臣「ふむ、そうですね……………。確かに、空の能力の代わりも居るといふのも、また事実ですな。」

ゼロノス「そうだ、では時臣。頼んだぞ。」

時臣「畏まりました、ゼロ様。」

ゼロノス「……………なるほど、弟よ。そうまでして邪魔をしたいというのか。我が計画さえ成功すれば、完全な世界へと生まれ変わるというのに……………」

まあいい、所詮我が理想に理解できぬ愚かな弟だ。愛とか絆とか、そのような下らんものに縋っていれば、いつか破滅に導くというものを。

しかし、問題は英竜と呼ばれる存在。どうやら宇宙侵略をもくろんでいるそうだな。どちらにせよ、邪魔な障壁になるのは確実だ。

ならばただ一つ。あれより最もチートを持ったホムンクルスを送り込めばいいのだ。

『ガチャ』

ゼロノス「俺だ、早速だが頼みがある。試作品型のホムンクルスを、英竜が居る世界に送りこめ。ついでだから、奴とその仲間のデータもコピーし、その後は殺害でもさせろ。よいな？」



よし、これで布石は打った。フッフ、奴等を始末さえすれば、我が計画も進めることができる。

ゼロノス「……………さてと、紅茶でも飲も——（ズズズツ）——  
ブウツ!!」

なんだこれ!? マツズ!? 何なのだこれは!?

時臣「失礼しま——ゼロ様!? 如何なさいました!？」

ゼロノス「如何なさいましたじやない!! 丁度良い、時臣。これを飲んでみる。」

時臣「紅茶ですか? 一体——（ズズズツ）——ブウツ!? ゲホツ!  
!ゲホツ! な、何ですかこの紅茶!? 実に優雅ではない!!」

ゼロノス「誰だ!! 不味い紅茶を入れた奴は!!!」

くそ、しかもこの紅茶。俺の嫌いなブランドものではないか!! 俺が気に入ってるのは、『アールグレイ』ただ一つだ!!

全く、誰だブランドものかつ不味い紅茶を作った阿呆は!! この俺が直々に成敗してくれる!!

（風龍「そういえば、ガルツチが飲んでた紅茶も『アールグレイ』だったな。」

士「彼奴安物が好きなのか?」

風龍「落ち着くだとか何とか。」

side Change

—空の家 トレーニングルーム—  
未来side

BGM Fate/Extra CCC BB戦『bottom  
black, moon gazer』

アームストロング 「ぬおおお!!死にやがれええええええ!!!」

未来 「見切った!!」

『ブシャアアッ!!』

アームストロング 「ゴフッ!」

未来 「よし、そのままあの霊夢に投げつける!!」

『ブンッ!』

宵闇 「ってちよちよちよ!?こつちに来るぎやあああああ!!!」

あ、2体同時に倒しちゃった。確かに、強敵なのは確かだったが、  
攻略さえ見つければ、勝てない相手じゃなかったね。

宵闇霊夢に関しては……………、何あれ?ホントに強敵なの?アーム  
ストロングに押しつぶされて死ぬって、ちよつと引くんだけど  
……………。

ガルツチ『いや、あれは間違いなく強敵なんだが……………。原因は、  
やっぱりアームストロングに潰されたからかな?』

フラン『かつて恐怖の鬼神とも呼ばれた宵闇霊夢が、今じゃポンコ  
ツの……………。ウフッ』

ガルツチ『お、おい。やめ……………フフフフ。』

滅茶苦茶笑いを堪えてる……………。やっぱり分かる人には分かるつ  
て事かな?

H D I O 「余所見をしていいかな? 『ザ・ワールド・オーバー——

未来「やらせない!!力を貸して!!『ムーンライト・アウターヘル!!』」  
僕は一時的にガルツチのスタンドを召喚させ、ヘブンDIOのスタンドを攻撃した。すると、ヘブンDIOのスタンドの頭が砕け散ると、ヘブンDIOも同じように頭部がエグいぐらいに砕け、そのまま消滅した。

って、ガルツチのスタンドって、そこまでパワーあったっけ?いや  
まって、そういえばあのスタンドを攻撃するとき、一瞬ひび割れの  
マークがスタンドの頭が見えた気がする。

マーモン「このっ!!ドワーフ帝国のために、今一度死  
ねええええええ!!!!」

未来「ッ!」

あのドワーフからは、全身にひび割れのマーク……。もしかして  
!

未来「『砕け』!!」

マーモン「なっ!?何で俺のからだか、砕け……………!?!」

『ガラガラガラ……………。』

砕けと言った途端、あのドワーフは落石のように砕けていき、跡形  
もなく消えていった。

ガルツチ『あれって、直死の魔眼とは違う魔眼!?!』

フラン『しかもそれ、私のとよく似ている!!』

未来「え?直死の魔眼じゃないの!?!」

ガルツチ『恐らくそれは、『破碎の魔眼』だ!直死と似たようなもの  
だけど、ひび割れのマークが見えると、そこが弱点となって、触れた  
瞬間砕けるようになるんだ!』

未来「嘘くん。直死じゃないのかよ……………。」

でも、その破碎の魔眼のお陰で他の強敵を倒し、ついにクリア。そ  
う思ってた。

??? 「へえ、すげえな。確かに、肉体的には俺と同じだな。」

突然女性の声が聞こえ、後ろを振り向くと、そこには短刀を持った僕らしき人物が立っていた。

ガルツチ『式!?!お前、『空の境界』に居たはずじゃ!?!』

両儀式「ああ、予定が狂ってな。今すぐ未来って奴に会いたくてこっちに來たんだが……。なるほど、確かに同じにして全く違う存在だな。」

未来「え?。」

両儀式「決めた、俺の力を使わせてやる。受け取りな、『直死の魔眼』をな!。」

すると、僕の目に急激な痛みが来るも、すぐ引いていき、目を開けると、そこには僕らしき人物がいなかった。

両儀式『いなかったじゃなくて、お前の人格になったんだ。』

未来「え!?!人格!?!」

両儀式『そうだよ。つて、なるほど。なんか居るかと思っても分かんなかったが、此奴のことだったんだな。』

「両儀式」『そう、やっと見えたのね。初めまして、と言うべきかしら?。』

未来「だ、誰!?!」

「両儀式」『初めまして、門矢未来。私は「両儀式」、出来れば式セイバーと呼んでもらえるかしら？彼女とかぶるとあれだから。』

両儀式『確かに、俺の名前と一緒にするのはちよつと気味が悪いな……………。』

未来「なんて言うか、これでガルツチは中の人格と会話してたんだ……………」

ガルツチ『そゆこと。まあとりあえず、試練は終了。『直死の魔眼・破壊』に加え、『破碎の魔眼』も手に入ったことだし、結果オーライかな？』

そうだね、結構疲れたなあ……………。

「両儀式」改め式セイバー『そういえば、未来って女装するんだっけ？』

未来「女装じゃなくてこれが普段着。」

両儀式『いや、それはお前だけだぞ？』

嘘……………、この体の持ち主まで言われちゃった……………。

両儀式『まあ何にせよ、これからは宜しくな。未来。』

『未来に新たな能力を習得』

『直死の魔眼・破壊』

魔眼と呼称される異能の中でも最上級のもの。異能の中の異能、希少品の中の希少品。

無機、有機問わず、〃生きている〃ものの死の要因を読み取り、干渉可能な現象として視認する能力。直死の魔眼から視た世界は〃死の線〃で満ちた終末の風景であり、まっとうな精神構造ではこれと向き合つての日常生活は難しい。魔眼の中でも最上級のものとされる。

未来の場合『破壊』の属性が付与していて、短刀で使わなくても、死の線を断ち、死の点を突くことが出来る。

式とは違い、右眼は赤い眼、左眼は蒼い眼というオッドアイ状態になる。

『破碎の魔眼』

直死の魔眼とよく似た力を持った魔眼。

ひび割れのマークが現れ、そこに攻撃すると砕け散り、跡形もなく消し去ってしまう能力。

此方は両眼緑色の眼に変わる。』

まあ、何にせよ。此方もよろしくね、式さん。式セイバーさん。

t o b e c o n t i n u e d  
→

## 第60話 大宴会

—京都府のとある旅館—

ガルツチ side

えー、早速ですが結論から言いますよ……………。

『どうしてこうなった?』

アザゼル「しかしお前さん、本当に男なのか? 女装がこんなに似合ってるというのに。」

ガルツチ「やめろ、そもそも着させたのは——って、そのアンタ!! うちの息子にナニさせようとするんだ!?!」

ヤハウエ「まあまあ、別に良いでは無いですか。宴だ宴だ。」

ガルツチ「いや宴つつたつてなあ? ってそのアンタ、うちの嫁に変なことさせようとするな!!」

未来「うわー、忙しそう。」

サーゼクス「ところでガルツチさん、貴方の娘を——」

ガルツチ「まだ嫁には行かせない!!」

未来「まだって事は、行かせる予定はあったのね……………」

サーゼクス「まあでもさ、我々よりはまだ酔っていない方だぞ? 他のところ見ろ。」

ガルツチ「?」——いや、なにあのカオス。

殴り合いもあれば人目も気にせずヤってる奴もいるし滅茶苦茶酔いながら暴走しまくってんじゃん。」

アザゼル「そう言うことだ。」

いや、そう言うことだっていうけどね? こうもカオスだと收拾が付けられないんだけど。何あのカオス……………。どこからどこまでツツコミを入れればいいのかすら分かんないんだけど?

未来「ところでガルツチ、それで何杯目?」

ガルツチ「100杯目?」

アザゼル「お前さん、よく酔わないな……………。というか飲みす

ぎだろ?」

サーゼクス「案外豪酒なのか?」

ガルツチ「な訳ないだろ。人並みだ人並み。」

未来「いや人並みじゃないよ!?普通に考えたら、昏睡状態になってもおかしくないからね!」

ガルツチ「まあ、あの時はホントに酔ったけどね。まさか切り傷で

『イヤアアアア!!ヤツダバアアアアアア!!オラアアアア!!』

……騒がしすぎて、会話すら出来ねえ。何なのホントに

ガルツチ「悪い、先に抜けるよ。」

アザゼル「え?」

ガルツチ「空は確か、温泉だったよね?」

未来「うん、それが……、ああそう言うこと。」

サーゼクス「?」

ガルツチ「それじゃ。話せて良かったよ。」

そして僕は、宴の席を抜け、お風呂セットを持ち、お風呂場に向かった。

―旅館 温泉―

腰にタオルを巻き、露天風呂のところに向かうと、ゆったりとくつろいでる空がいた。

空「あれ?ガルツチさん?宴はどうしました?」

ガルツチ「途中で抜けたんだ。あまりにもカオスだったんで、抜けてきた。」

空「そ、そうだったんだ……。」

ガルツチ「まあ気にするな。」

それに、あの馬鹿騒ぎに我慢できるほど、そこまでもてないしな。特にあのカオスは、止める気失せたよ。

ガルツチ「はあ……、いい湯だ……。」

空「……ガルツチさん。」



ガルツチ「？」

空「あの時、俺を助けてくれてありがとうございます。」

ガルツチ「気にするな、未来の友人なら助けるのも通りだろ。僕の絶望は、誰かを救い、守るためだけにあるからな。」

空「貴方の『絶望』って、端から見たら悪人が使っているような力でしたけど……………」

ガルツチ「ハハハ、違くない。でもな、光とか闇とか、希望とか絶望とか、そういう物は結局、其奴がどのように使っていくかと言う事さ。光だって、使い方を間違えれば闇以上にヤバいことになるよ。逆に闇は、誰かを守る、誰かを助け出す為に使うなら、きつと頼もしい力にもなるかもしれない。結局は、その力をどのように使うかで決まるんだ。」

空「そっか……………」

まあ、僕は善悪二元論なんて無いし、そもそもヒーローよりダークヒーローが似合う。衛宮切嗣みたいに、9を救うために1を殺す正義の味方じゃなく、大切なものを守るために世界が敵だとしても戦い続ける殺戮者<sup>正義の味方</sup>。ある意味、僕はこちらに性に合ってる。悪に近い中庸だが、悪人なんかじゃない。守るときは守るし、殺すときは殺す。僕の刃は、鞘すらなかった『この世の全ての刃』。でも、未来という鞘がない、今は収まってる。

空「ガルツチさんって、未来さんと一緒に居るのは分かっていますか、その人と出会ったのって、何時頃ですか？」

ガルツチ「何時頃か。そうだな、僕が故郷の星に帰る途中、フランの様子がおかしくて、相談して聞いてみたんだ。その後には黒化したフランが襲いかかってきて、劣勢だったときに、出会ったんだ。」

空「そうだったんですね。」

ガルツチ「んで、その後は未来が居た世界で協力し合ったんだよな。それから、フラン達が乱交パーティーが始まって、どういう訳か僕と未来がやりあう羽目になったんだ。」

空「あの、おかしくありませんか？男同士で子供なんて出来るはずが

ガルツチ「僕が女体化してヤリあつてたんだ。本来僕は、野郎とヤリあう気はなかったけど、未来とヤつてたら、不思議と安心感があつたし、未来なら構わないかなって思ったんだ。」

空「そ、そう……。」

ガルツチ「今でも感謝してる。未来に出会えて、ホントに良かったよ。」

空「そっか。」

ガルツチ「話変わるけど、空。」

空「？」

僕は真面目な顔をして空を見る。

ガルツチ「君の前世って、何も思い出せないんだよね？」

空「う、うん。」

ガルツチ「……………ならば、これだけは忘れないで。いずれ君は、この先君の前世を思い出すかもしれない。そうなれば、選択せざるを得ない状況に陥るかも知れない。前世と訣別するか、前世と共に今を生きるか、それは君次第だ。敵は、ヴォルギン以外にも他に居るし、君を狙う輩もいる。」

空「……………。」

ガルツチ「恐らくその頃は、僕が居るかどうかは分からない。助けようにも出来ないかも知れない。だから、僕が作ったこれをあげるよ。」

僕が取り出したのは、水色の小さな剣が付いている青色のチョーカーで、それを空の首元につけた。

空「これって、チョーカー？」

ガルツチ「うん。僕の手作りだけどね。ちなみにそのチョーカーは、僕達の力を一時的に扱えるような効果があるんだ。流石に、『混沌を司る3大魔神』の力は無理だけど。」

空「ありがとう。」

ガルツチ「いずれ次の世界に行かなきゃならないし、また全ての世界を揺るがす戦いが起ころうとしている。その時は、君にも手伝って貰うことになるかもしれない。その時は、力を貸してくれるか？」

空「勿論です。俺を救ってくれた恩もあるし、ガルツチさんには感謝していますしね。」

ガルツチ「ありがとう、空。」

さて、いずれにせよお別れは来るだろうな。今度の世界は少し見えた。こことは違う平行世界。イリヤとなのはと呼ばれる女の子が会い、そして僕と似たようなものだが英霊達の力を使い、敵と戦う少年。そう言う光景が見えた。

ガルツチ「やはり、世界を旅するのは止められないな。出会いがあれば、別れもくる。生と死と同じように……。この旅を続けければ、きつとお爺ちゃんにも出会えるかもしれない。終わりが来るとなれば、それは『死』だろう。いや、まだ旅を続けたい。そして、戦い続けたい。永遠が許されるかぎり……………。

『今を生きたい』。」

空「ガルツチさん？」

ガルツチ「ん？」

空「あの、どうかしました？」

ガルツチ「いや、気にするな。」

それから、いつの間にか宴は終了し、お別れがやってきた。

空「もう行くんですね。」

未来「うん、次の世界にいかないよ。」

こいし「それじゃあね、空お兄ちゃん。」

十香「どの世界でも、元気だね。」

二亜「簪さん、我が同士よ。また会おうね。」

簪「うん！」

ガルツチ「いつの間にか同士になってるし……………」

未来「それじゃ、行くよみんな！」

そうして、僕らは次の世界へと向かった。今度の世界は……………。

『新部署プリズマ☆イリヤ』と描かれた看板がある建物の前だった。

未来ガル「……………なにこの建物？」

イリヤ「プリズマ☆イリヤって、まさか……………」

ルビー『どうやらFate／kaleid linerプリズマ☆イリヤの平行世界の様子ですね。つまり、平行世界のプリヤさん、プリエさん、美遊さんが居る世界ですね。』

???「ほう？これは驚いた。このようなフェイカーがいるとはな。」

え？この声って……………、まさか！

???「我は貴様とは初対面だが、貴様はこの我を知っているようだな。  
ならば敢えて言おう。」

『久しぶりだな、我が雑種』。」

ガルツチ「英雄王ギルガメツシュ!？」

t o b e c o n t i n u e d  
→

やくびようがみXとコラボ 狭間の世界 〽全の竜神〽

## 第61話 部署プリズマ☆イリヤ

―プリズマ☆イリヤ 前―

ガルツチ side

驚いた……………まさか平行世界のギルガメツシュと出会うなんて思わなかった。

つて事は、ここにも英霊が――

??? 「あ、ギルガメツシュ。お帰り……………つて、何この人たがり!？」

ガルツチ「人たがりつて……………イヤ実際多いもんなあ……………」

ギル「喜べ、此奴らは異世界の客だぞ。」

??? 「異世界!？」

ガルツチ「まあ、ぶっちゃけ旅人だしな。ところで、『プリズマ☆イリヤ』つて、何? 何故作品名を?」

??? 「あー、詳しくは中で話します。皆さんもどうぞ。」

―プリズマ☆イリヤ―

中に入ると、自宅と同じような広さの部屋につき、先程の人が窓のところで座って待っていたため、僕と未来はその場に座った。フラン達はどこか別のとこに座った。

??? 「えつと、まずは自己紹介ですね。俺は高町総刃、このプリズマ☆イリヤの、つまりよろず屋の者です。」

ガルツチ「よろず屋だったんだ……………んじやあ今度はこつちね。僕はラーク・バスター・ガルツチ。幻影の不死鳥にして、この世の全ての刃、前世は全王神という神様の息子、虚王魔神と呼ばれた者だ。まあ、転生者というわけでよろしく。」

未来「僕は門矢未来、通りすがりのスタンド使いだ。色んな世界を

旅をしている。」

総刃「ガルツチさんと未来さんですね。お二人はどう言った——」

ガルツチ「あー、出来ればタメ口で頼む。」

総刃「分かった。んじやあガルツチと未来は、どう言う関係？」

そこ聞かあああ……。まあ言うけど。

ガルツチ「関係といたら、恋人兼愛人だな。」

『ガンッ！』

ギル「フェイカー、貴様ホモか？」

ガルツチ「なんでき。どこぞに筋肉モリモリマッチョマンの変態と一緒にしないでくれる？こっちは妻子も居るんだし。」

『ガンッ！』

未来「総刃さん？大丈夫？」

総刃「いやちよつと待って、恋人兼愛人？男同士なのに？というかガルツチ、妻子いるの!?14歳なのに!」

ガルツチ「いや、ぶつちやけ言うのと、見た目的に老人に入りそうな歳んだけど、歳が∞になってるから、とろうにも取れないし、ぶつちやけどれ位とったのか、忘れちゃったし。」

総刃「えええええ……。」

ガルツチ「まあ呪いだな、不老不死の呪い。」

総刃「え？不老不死って、呪いなのですか？」

ガルツチ「まあ価値観はそれぞれだが、僕は呪いだと思ってる。生の有り難みを感じられず、死ぬことも出来ない呪いのようなものだしな。」

総刃「そ、そうなんだ……。でも妻子がいるって、誰ですか？」

ガルツチ「あそこに居る3人。」

『ガンッ！』

未来「何で机で頭ぶつけるの？」

総刃「3人!?重婚してるんですか!」

ガルツチ「うん。フランとこいしとイリヤ。んで子供が14人。うち二人は僕と未来の子。」

総刃「もうどこからどこまでツツコミを入れればいいのか分からない……。」

イヤ僕が言うのもなんだが、全部ツツコミ入れたらきりが無いから止めておけよ。

総刃「つて今更だけど、イリヤと結婚してるの!?!」

ガルツチ「うん。でも、違う世界のイリヤだぞ?」

総刃「どういう事?」

ガルツチ「平行世界のイリヤ、つまり『Fate／Stay Night Unlimited Blade Works』のイリヤで、原作ではイリヤはギルガメッシュに心臓抜かれて死亡するんだけど、その時に転生したらしくて、その時に出会ったんだ。まあなんやかんやあつて結婚して、3人目の妻になったんだ。」

総刃「そ、そうですか。俺が知ってるイリヤとは、違うのか。」

ガルツチ「そう言うこと。」

総刃「さて、それじゃあ本題に入りますが、このプリズマ☆イリヤは、いわば何でも屋なのですが、出来る範囲なら出来ます。」

出来る範囲か……。ちよつとダメ元だけど、聞いてみるか。

ガルツチ「それじゃあ、今人捜しをしてるんですが。」

総刃「誰ですか?」

ガルツチ「『蒼天星龍』、または『東風谷早苗』を探してるけど、知らないか?」

総刃「『蒼天星龍』と『東風谷早苗』……ですか?どう言った関係で?」

ガルツチ「星龍は憎悪の大魔神で、早苗は恋と愛の女神、んで僕とその二人の関係だが、正しく言えば僕の中にいる絶望の魔神の両親なんだ。あることを聞くために探してるんだけど、知らないか?」

総刃「うーん、正直聞いたことは……?待つて、何処かで耳にした気がする。」

僕は思わず勢いで立ち、机に思いっきり叩いてしまった。そのせいか、机がぶつ壊れてしまった。

しまった、加減を忘れて壊してしまった……。



ガルツチ「ごめん、錬金ですぐ直すよ。」

総刃「え？」

僕が手を合わせ、粉々になったはずの机に触れると、青い稲妻が走り、一瞬にして元に戻った。

未来「ガルツチ、それって錬成陣なしでやった錬金？」

簪「ガルツチって、人体錬成とかやったの？」

ガルツチ「したかな？ 今後にも必要になるだろうと思うし、因みに代償は、あらゆる全ての感情さ。」

未来「ええええ!?!じゃあ何で感情持って——」

ガルツチ「とある世界に行って、取り戻してきた。時間はかかったけど、思い出したくない。それより、何処で聞いたの!?!」

総刃「確か仕事の時に少し。何でも銀行強盗が逃走中に、刀を持った人が車に乗ってた人ごと真つ二つに斬って、奪われたお金を返していつて立ち去ったとか何とか。名前は聞かなかつたけど、その人は『憎悪』を司る者だといいました。」

ガルツチ「思いつきし星龍じゃないか!!星龍はどこに!?!」

総刃「そこまでは、全く……。」

そうか、星龍はこの世界に居たのか。

居場所は分からなかつたけど、少しだけ安心した。

ガルツチ「分かつた、それだけで十分だ。」

未来「じゃあ、これから如何するの？」

ガルツチ「調査と言ったら、情報収集。つうわけでしばらくは、自力で探すしか——」

『バンッ!!』

突然ドアがぶつ壊れると同時に、一人の男性が物騒な剣を持ちながら入ってきた。

総刃「失礼ですが、何かご用——」

???「貴様が聖船総刃か？」

総刃「？」

ガルツチ「此奴、まさか……!」

???『零の龍神』様からの命令で、貴様を捕縛しにきた。大人しくす

れば、家族の命を奪わん。」

鈴美 「『零の龍神』!?!」

総刃 「何それ?」

ガルツチ 「零の龍神は、嘗て無の神を作り出した龍神とも呼ばれる存在だ。つて事は、あんたがジャックの兄の手下か。」

???' 「ほう、『零の龍神』様を知つてると言うことは……………。なるほど手間が省けた。ついでながら貴様らも殺してやろう!!」

我が名は『災<sup>Disaster</sup> 厄』! 戦闘型ホムンクルス9号と呼ばせて貰おう!」

愛花 「!」

ガルツチ 「全く、初戦はこの男か。強敵なのは確かだが、負けるわけにはいかない! 行くよ、みんな!」

未来 「ああ!」

『INFINITY RIDE』

『ANOTHER INFINITY RIDE』

未来ガル 「変身!!」

『INFINITY DECADE』!

『ANOTHER INFINITY DIEND』!

鈴美 「私も、変身!!」

僕と未来、そして鈴美は仮面ライダーとなり、武器を構える。油断は出来ないが、負けるわけにはいかない。

必ず、勝つ!!

t o b e c o n t i n u e d ↪

## 第62話 復讐と狂乱のガルツチ

―プリズマ☆イリヤ 前―

未来side

早速ですが、一言言います。まさかの敗北です。

ガルツチ「クソ!!鍛錬を怠ったのが運の尽きだったのか……………」  
?」

未来「しかも、何あの尋常じゃない力は?」

総刃「はあ……………、はあ……………」

災厄「フハハハハハハ!!弱い、弱すぎるぞ!!いや、俺が強すぎるからかな?」

正直、あの災厄の技が、殆ど天災人災等の災害を操っているけど、此奴は規格外過ぎる。それ以上の災害を起こしてきた……………。

災厄「まあいい、どうせここで死ぬんだ。手始めに……………この小娘から殺そうか。」

ガルツチ「ツ!イリヤ!!」

イリヤ「あ……………ぐっ……………!!」

災厄「どうだ?苦しいか?安心しろ、すぐに楽にしてやろう。しかし良い肌だ。まずは骨までしゃぶりついてやろうか。」

『ペロッ……………』

あの災厄がイリヤを舐め始めた瞬間、ガルツチから何かが切れる音が大きく聞こえた。まるで、何かの琴線を強く触ったかのように、先程のダメージがなかったかのように、ガルツチはすぐさま立ち上がった。

災厄「ほお?まだ立てるのか?意外と突きが浅かったのかな?」

ガルツチ「……………黙レ、造花。」

瞬間、僕の背筋が凍ってしまうほどの恐怖を感じた。まるで、死の間際に立たされてきているかのような、恐怖を。総刃という人も同じだった。

そして、ガルツチの目には光が無く、むしろ今まで僅かの光を取っ

払ってしまい、その瞳にあったのは、憎悪と絶望、ただそれだけだった。

ガルツチ「貴様ハ、触レテハナラヌ領域ヲ、大キク踏ミ込ンダ。ダカラ、肉片残ラズ、殺ス！」

災厄「そのようなボロボロな貴様に、何が出来る？ と言う手を使おうが、俺の能力には勝て——」

ガルツチ「オルタナティブモード、起動。」

『Loading: Alternative, Set!』

『反転モードに移行、これよりガルツチの属性は混沌・悪に変化します。』

髪の色は黒く染まり、目には白い部分が黒く変色し、紫色の光が強く輝いていた。それだけでなく、体から紫色の刻印が張り巡らせながら光らせていた。

でも、僕は何故か分かる。これが、ガルツチの前世、本来の『虚王魔神』の姿なんだと。きつと、皆には見せたくはなかったんだと思う。

『真名：ラーク・バスター・ガルツチ・オルタナティブ（虚王魔神）

CV、内山？輝

クラス：アヴェンジャー&バーサーカー

マスター：なし

性別：男

身長：150cm

体重：45kg

属性：混沌・悪

ステータス 筋力：∞／耐久：Z／敏捷：∞／魔力：∞／幸運：A

(C)／宝具：∞

クラス別スキル

復讐者：EX

恨み・怨念が貯まりやすい。特にガルツチの場合は、憎悪を最大限





ガルツチ「そう……………か……………」

『バタンツ！』

未来「ガルツチ!!!」

???「一体何ご……………って、幼い頃の私が居る!」

イリヤ「あ、プリヤちゃん……………。って大人になつて……………」

ルビー『え!?あれがプリヤさんですか!?幼女じゃなあああい!!!』

プリヤ「プリヤって何!?待って、名前もプリヤになってるし!」

ルビー(プリヤ)『いいじゃないですか。でもその前に、何ですかこの状況。』

未来「お願い、死なないで!!死んじやイヤだよ!!」

フラン「待って未来お兄ちゃん!?落ち着いて!お兄ちゃん死んでないよ!」

こいし「とうか寝てるだけだから、落ち着いて!!」

???「さっきの爆音を聞いて急いで戻ったけど、何なのこれは……………」

???「私に聞かないで。理解不能だから。」

イリヤ「あ、プリエちゃんと美遊ちゃんもヤッホー!」

プリエ「つて、幼いイリヤ!?つていうかプリエちゃんつて何!?可愛いからいいけど。」

美遊「幼いイリヤ?でも雰囲気はクロに似てる。」

ギル「あれは平行世界、もとい異世界から来た者だ。しかし、彼奴の力……………正直あれは人類悪と言っても過言ではないほどのものだった。」

総刃「人類悪!」

ガルツチ「ハハハ……………、否定は……………しないよ。」

未来「ガルツチ!?よかつた……………」

ガルツチ「勝手に殺すな、未来。」

総刃「ガルツチ、人類悪つてどう言う!」

ガルツチ「ギルが言ったとおりそのままの意味だ。僕のクラスには、ビーストもあるんだ。しかも冠位獣<sup>グランドビースト</sup>。だが、別に滅ぼしたいとか思ったことはないし、そもそも滅ぼすぐらいならデイストピアのよう

な世界を滅ぼすさ。」

全員『それはそれでどうかと思うけど……。』

ガルツチ「それは言わないお約束。」

それにしても、ガルツチがここまで元気になるなんて。本当にすごいなあ……………。

???「ありやま、もう終わってたのか。いやまあいつか、懐かしい顔ぶれも居るし。」

4人「二二！ その声って!!」

総刃「あ、貴方は？」

僕らの目の前に現れたのは、桜の絵柄の和装を纏い、氷のオーラを纏った刀を持った青年が、ガルツチを見ていた。

っていうか、この人は一体……………。

星龍「久しぶりと言いたいが、初対面の人達もいるから自己紹介するよ。僕は蒼天星龍、またの名を憎悪の大魔神『ディテスト・シエイド・クロノス』だ。詳しい話は、僕に付いてきて、皆。」



t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
→

## 第63話 ガルツチの祖父との出会い

—???  
—

深雪 side

総刃「え？ちよつと星龍さん!?ここ何処ですか!?!」

星龍「何処かって？少なくとも、ミッドチルダではないよ。そうだな、君達が言う『英霊の座』と言うべきか。」

美遊「英霊の座!?!」

え、英霊の座って、これが!?!一軒家があつて、庭園っぽい庭もあるけど、これが!?!

星龍「まあ、ちよつとした理由があつて、この場所にいるんだけどね。」

『ガラツ』

星龍「早苗、帰ったぞ。」

早苗「あ、お帰りなさい。星龍さん。つて4人とも、久しぶり!」  
フラン「早苗さん、久しぶり!」

星龍「早苗、悪いけどガルツチを頼む。」

早苗「え!?!何があつたの!?!」

ガルツチ「キレて、スタミナ切れと貧血を起こした。以上。」  
未来「あれで!?!」

いやいや、普通に考えてあれスタミナ切れと貧血で済ませる分けないでしょ!?!

それで済ませるガルツチって何者!?!あ、虚王魔神だったわね……。つてそれでも変やないか!?!自分おかしいと思わんか!?!つて、いつの間にか方言に戻った気がする。

星龍「……まあいいか、とりあえず皆。上がってくれ。」

そうして私達に案内した場所は、不思議と落ち着く和室のところに到着した。

ルビー『ほっほう、これは一種の固有結界的な場所ですね。』  
イリヤ「分かるの?」

ルビー『こんな魔力ダダ漏れなら一目瞭然です。素人なのか、それ

ともわぎとなのでしょうか。何かと戦意喪失させるような落ち着かせる魔力を出してますし。』

ルビー（平行世界）『流石私、やっぱり分かりますか。でも、誰が出して——』』

???「これはわぎと魔力を放出してるんだ。んで、こういう部屋にしたのは僕だよ。」

若々しい声が聞こえた。その声の方を探すと、そこには髪の色が4色も分かれ、右から順に山吹色、空色、エメラルドグリーン、緋色で、顔立ちはアラヤ君みたいに童顔、ただ体つきについては凄く、男らしいです。うん、不思議と抱かれても良いなんて思ってしまうほどの、いい男です。

未来「貴方は？」

???「まあ待て。まずは座つて、お茶でも飲んで、話をしよう。星龍、彼は？」

星龍「今少し休ませています。後で様子を見に行つた方が良いでしょう。」

???「分かつた。もう下がつて。」

星龍「了解。」

うーん、でも誰なんだろう。

そう思いながら座ると、人数分のお茶が現れ、私達は手に取つた。

???「さてと、先ずは初めましてだな。こうして久しぶりに生者と話が出来るのは何時ぶりだろうか。」

未来「死者なのですか？」

???「ううん、どっちかというと生きてる方。まあ死者扱いも当然か。」

フラン「死者扱い？あれ？どこかで聞いた気が……。」

???「まあ、先ずは自己紹介だな。多分フランとこいし、イリヤも聞いたことはあるらしいがあえて言わせて貰う。」

僕は『ラーク・ブライアン・ロード』。ガルツチの祖父で、『全の竜神』と呼ばれる有翼人だ。」

えっ？ガルツチのお爺ちゃん？滅茶苦茶若いのに!?何でや!?どう見てもお爺ちゃんとはいえへんがな!?おかしいとちゃうんか!?

深雪「というかおじちゃん!?何処が歳取ってんねん!?少なくとも26歳にしか見えへんやん!!」

未来「あれ？深雪？何そのしやべり方？」

本音「スノーちゃんって、実は大阪出身なのかな？」

深雪「あ………………。えーっと……………その、とにかくどう見てもお爺ちゃんとは言えません!!」

簪「逸らしたね。」

総刃「深雪さんって、もしかして関西出身？」

深雪「なっ!?!なななな何をいいいい言ってるのかかかかかかな?」

オーフィス「声が震えてる。凶星だね。」

うー、バレてもうた。うち本当はこの方言で話すの苦手なんや……………。

だって恥ずかしいやん!人前で方言で話すなんて!!いややく、うちどうすればええんや……………。

深雪「って、それより!何処にお爺ちゃん要素が!？」

ロード「いや、隠居なんだけど。」

深雪「あー、隠居ね……………。って、納得するか!!」

『バシンッ!』

ロード「あいたつ?!ハリセン何処から出したの!?!」

深雪「やかましい!!全く、どうしてくれるんや!!これ隠すの大変やったんやからな!?!」

鳳凰「……………深雪お姉ちゃんの方言、可愛い。」

深雪「ツ!!／／／／／／／／／／」

アラヤ「これはこれで、アリかも。」

深雪「ツ!!!／／／／／／／／／／／／／／／／」ゾクゾクッ!

リサ「ねえ!深雪お姉ちゃん、たまにでも良いからそのしやべり方してくれる?」

『カチッ』

深雪「もう、シヨタロリコンでいいや。」パタンッ

悔いはあらへん、ここがうちのアヴアロンだったんや……………。

sideChange

ロードside

えー、あの子鼻血出しながら気絶しちやっただけど、どうしよう……………。

アラヤ「ねえ、えーつと……………曾お爺ちゃん。深雪姉さんが気絶しちやっただけど……………」

ロード「あ……………、うん。この子にはまた後で説明するよ。それより先ず、僕に聞きたいことはあるかな?」

総刃「それじゃあ聞きますが、死者扱ってどういう事ですか?」  
あー、そこからか。

ロード「そうだね。多分ガルツチから聞いたと思うけど、僕は無の神との戦いで、敗れてしまい、自爆魔法で死んだと皆は思ってるだろう。」

フラン「確かに、絵本でも書かれてたわ。」

未来「でも、何で生きてるのですか？」

ロード「まあ、ワイルドドック式だね。でも、出ないようにしてただ。」

簪「何ですか?! ガルツチと再会したら喜ぶと——」

ロード「いや、それこそ駄目なんだ。関係してるのは『全の竜神』だ。」

オーフィス「全の竜神と再会しないと関係が？」

ロード「うん。つて言つても、ワイルドドックが答え出しちゃったから意味ないけど。実は『全の竜神』っていうのは、竜神だと思われてるけど、ちよつと違うんだ。勿論本物の竜神はいるけど、それになろうつて言う人物も結構いるから、其奴らも『全の竜神』と呼ばれることが多いんだ。」

鈴美「え? 『零の龍神』みたいな一族も?」

ロード「いや、残念ながら、『零の龍神』みたいに一族は存在しない。居るのは『全の竜神』と、それになろうと思う人だけ。」

そう、正直『全の竜神』が1体だったのは驚いた。『零の龍神』と違って、『全の竜神』は天上天下ただ1人だが、弟子募集はしてたようだ。そして、『全の竜神』になるには条件があり、その条件が『死んだ者扱い』にならないという。

ちなみに、入っちゃえば、例えばバレても気にしないようだ。

未来「それじゃあ、貴方は死んでいた間は、その『全の竜神』の元で修行を?」

ロード「そう、そして晴れて皆より先に『全の竜神』になって、修行を終え、ここでのんびり隠居していたんだ。そして、君達を見ていたんだ。正直、孫の前世が無の神を生み出したのは驚いてたけどね。」  
あれは驚いた。ガルツチが無の神を作ったなんて、思わなかったから。でも理由は納得した。確かに誰もが見てくれなかったら、あんなのは仕方ないよね。

イリヤ「じゃあ、お爺ちゃん。お願いがあるけど——」

ロード「とは言え、残念ながら協力は出来ない。」

未来「何故!？」

ロード「その、自爆魔法で使った魔力が、あまりにも膨大すぎたから、まだ回復しきつてないんだ。せいぜい日常的に使える分しか使えないから、役には立てない。」

未来「そう、ですか。」

ロード「とは言え、今の君達だと『零の龍神』には勝ち目はない。先程のホムンクルスだけど、あんなのは序の口だ。」

???「ロード様。お茶のお代わりを持ってたぞ。」

ロード「あ、ありがとう。レイ。」

この子はどういう訳かうちに来て、弟子にして下さいといった少女。レイ。どうやらこの子は、今ガルツチ達が戦おうとしている『零の龍神』が生み出したホムンクルスの一人だが、英竜と呼ばれる子に負け、愛でさせられ、その力が入った宝珠を持って何処かに向かったら、たまたま僕が居る場所に到着し、いきなり『弟子にしてくれ!!頼む!!』って、いきなり言うからびっくりしたよ……………」

未来「君は?」

レイ「レイだ。今英竜との勝負に勝つため、ロード様の元で厳しい修行をやってる。」

未来「英竜と!？」

レイ「ん?知り合いなのか?」

フラン「うん、お兄ちゃんも英竜と出会ったことあるよ。」

レイ「なるほど……………」ロード様————」

ロード「慌てるな。さてと、君達も聞いたとおり、今から君達には修行をしてもらう。レイ、教育を頼んだぞ。」

総刃「あの、俺らもですか?」

プリヤ「え?何させられるの?」

プリエ「いやまさかそんなことは————」

ロード「また襲われても遅くないように、お前達も修行してくれ。」

プリヤーズ「「やっぱりかアアア!!」」

美遊「イリヤ達を守るなら、私は構わない!」

レイ「よし、皆着いてこい。」

そして、皆はレイに連れられ、地下室に向かった。  
さて、ガルツチの顔でも見ようかな。

sideChange

???

ガルツチside

ここは……、昔見た悪夢か？今まで見なかったのに、何故今更これ？

???'「やれやれ、見るに堪えないな。この転生者は。」

ん？ってこいつ、虚王魔神の頃の僕？

ガルツチ「なんで僕の目の前に出て来るんだ？僕はあの頃のお前じゃない。」

虚王魔神「ああ、お前は俺じゃない。だが、腐っても俺はお前だ。この事実は変えられない。だから、俺がお前に出て来るのも不思議じゃないだろ？」

ガルツチ「どうだか。一応言うが、僕はお前のようなつまらん存在にはなる気はない。」

虚王魔神「よく言うな、俺は過去のお前だぞ？」

ガルツチ「だが、もうお前のような失敗をするわけにはいかない。」

虚王魔神「無理だな。」

過去の僕は嘲うかのように、声をあげていた。

虚王魔神「お前の前世が俺である限り、また失敗を冒す。永遠に、誰も守る事なんて出来ない。」

ガルツチ「………かもな。薄々思ってるさ。だが、それはお前の失敗を引きずっていたらの話だ。」

虚王魔神「何？」

ガルツチ「確かに、あの言葉にキレ、母さんを守るためとは言え、大変な失態を犯し、殺されたのは事実だ。否定はしない。でも吹っ切れたさ。イリヤの肌を舐められ、一度狂化した時にな。」

虚王魔神「おい待て、俺の姿を狂化扱いか!？」

当たり前だろ。その頃のお前、つまらんだけじゃなく、狂信者的な



存在だったんだぞ？それなら狂化あってもおかしくないはずだ。

ガルツチ「どちらにせよ、お前は邪魔だ。この人生は僕のものだ。」

虚王魔神「ふっ、お前。俺を忘れたとは思っていないだろうな？」

ガルツチ「耐久と幸運以外∞なんだろう？確かに、今の僕は弱体化してる。だからどうした？そんな物は関係ない。もう僕は、以前のお前じゃない。消してやる！貴様は、僕なんかじゃない!!」

虚王魔神「そうか。ならば例の台詞を言うか。」

「我は影……、真なる影。」

ガルツチ「ペルソナの台詞かよ。」

虚王魔神「いや、否定したらこれ言うのが常識だろ。」

ガルツチ「お前が言うか……。」

過去の僕の姿は変わり、8つの腕が生え、血に塗れ剣が刺さった大地は割れ、それぞれの場所に浮いた。なるほど、あれが僕の影。まさしく化け物そのものだな。

あれに負けたら、確実に死ぬ。これで勝てたら凄いいけど、まあ足掻くとするか!!

ガルツチ「来いよ、虚王魔神は2人も要らない！僕が消してやる!!!」

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
⇒

## 特別編 修学旅行

旅館 寢室

『スー……。』

フレディ「おう良いじゃねえか。俺はここだ!!布団にダイビング!!」

空「じゃあ俺はここで!」

総刃「全く騒がしいなあ……。」

未来「僕はそこだ!!」

ルツチ「んじゃあ僕はここで。」

『グシャ!』

フレディ「おい総刃!テメエ踏むんじや——」

未来「よーし、飛び込むぞ!!」

『グシャ!』

フレディ「ゴハツ!?未来……………、テメエ……………!」

『グシャ!』

空「痛っ!?!」

未来「ルツチさん、退いて退いて!そーれ!!」

『ズサア!!』

ガルツチ「ちよ、未来如何したの。」

未来「いやスタンドに乗り移っちゃったみたい、今。」



『Z Z Z Z Z Z Z Z!!』

ガルツチ「おいうるさいぞ、フレディ！」

フレディ「ムッフ〜。」

ガルツチ「頼む寝てくれ。」

フレディ「ムフフフフ。」

ガルツチ「マジで寝てくれよ。」

フレディ「ふう〜……………。ムフフフフフフフフフフフフフフフフフフ……………」

総刃「何でそんなに静かに出来ないんですか？」

フレディ「フフフフフ……………。フ〜←ウ〜↓ン♪→」

『ズー!!!』

ルツチ「うるさいよ。」

『カチッ』

ガルツチ「うるさいマジで。」

空「そうですよフレディさん、眠れないじゃないですか。」

ガルツチ「ホント、うるさい!」

『バシッ!』

フレディ「いってえ〜……………、失礼だろ!」

ガルツチ「シヤラップ!」

『バシッ!』



『カチッ』

ガルツチ「いやマジでいい加減にしろよ、テメエ！」

フレデイ「ハハハハハハ!!」

ガルツチ「ホント、いい加減にしろよ？」

フレデイ「何だよガルツチ。」

ガルツチ「何笑い我慢してんだ？」

フレデイ「何回も起こすんじゃないやねえよ……。」

ガルツチ「いやそれ以前に、いびきかくなよ。五月蠅いんだから

……。絶対寝ろよ？」

って、兄さん何故笑ってるの？」

ルツチ「フフフ……。」

ガルツチ「……………（———；）、絶対に寝ろよ？ホントマジで。」

『カチッ』

ガルツチ「(今度こそ———)」

空「痛い痛い痛い痛い痛い痛い!!!痛い!痛いよ!!!」

ガルツチ「(ぬああああああ!!!)」

総刃「ホントに五月蠅いですよ。」

『カチッ』

ガルツチ「兄さん!?何してんの!？」

空「痛い!ホントに痛いって!ってというか見える!見えちゃうって

「もう、ルツチさん何をしてるんですか。」ポロンツ  
フレディ「ノーパン!？」

ガルツチ「いや、空のことは良いとして（意外と大きいな……。・・；）、兄さん何してんの？」

ルツチ「ごめんごめん、興奮して眠れなかったんだ。」

未来「えええ。」

総刃「いやだからって、それはないと思いますよ?」

ガルツチ「もう、兄さん500歳でしょ?しっかりしてよ。」

フレディ「つて事は、ガルツチはフランちゃんと同じ495歳つて  
事か。」

（ちなみに、設定上ガルツチは495歳でルツチは500歳です。）

ガルツチ「もう寝よう?」

ルツチ「分かった分かった、寝るよ。」

ガルツチ「んじゃ、お休み。」

『カチッ』

ガルツチ「（流石に騒ぐことは——）」

空「痛い痛い痛い!!待って、ホントに痛いって!!」

『グキリッ!』

フレディ「グオオ!!おい総刃!?!今グキッつて!?!ギヤアア!!」

ガルツチ「（あーもー!?!）今度は何だ!?!」

『カチッ』

ガルツチ「つて、何じゃこりや!?!」

フレディ「ストップストップ総刃、それだけは——」

総刃「フンッ!」

『グキッ!』



フレディ「ガッハアアア!!」

総刃「このままトルネード!」

フレディ「待て待て待て!!それはギヤアアアアアアアア!!?!」

未来「うわー、凄いこれ。w w w w」

空「る、ルツチさん!!これ以上はああああ……。」

ルツチ「まだまだ、此からだよ。それ!」

空「待つて待つて!?!落ち着いて——」

ガルツチ「つて、おい!おい!!おい!!おいちよつと!!皆?」

未来「アハハハ!!駄目だ、お腹が……! w w w w w w w w」

ガルツチ「おい、いい加減にしてくれ……。もう眠たいんだけど

……。」

ルツチ「あー、体が火照っちゃった。」

ガルツチ「兄さん、それ以上はいけない。それに、明日早いよ?多

分だが。」

空「でも、1番五月蠅いのつて、ガルツチさんだよね。」

ガルツチ「おい、巫山戯るなよ?次同じ台詞を言ってみろ。という

か次騒いだら、宝具使用しまくるからな?」

『カチッ』

ガルツチ「もう寝たい……。……、此本当に寝不足で倒れそうな気がするよ……。……。」

『ギギギッ……。……』

ガルツチ「(……………はあ。)」

『カチツ』

ガルツチ「何してるの君達？」

フレディ「え？いや、何してるって。」

総刃「寝返りです、ガルツチさん。」

未来「そうそう、寝返りだよ。」

空「寝返り、寝返り。」

ガルツチ「いや待て、何だよさっきの寝返りは!?何だよ今の!？」

フレディ「おいガルツチ、まぶいって〜！」

ガルツチ「って、何で兄さんは汗かいてるの?」

『バシッ!』

ルツチ「アハハハ、だって暑いんだもん。」

ガルツチ「やれやれ……………、マジで寝かせてよね?」

『カチツ』

ガルツチ「(やばい、本気で寝ないと、ホントに—————)」

『痛い痛い痛い痛い痛い!!』

総刃「未来さん!?背骨が!？」

フレディ「重い……………!!」

ルツチ「ま、まだですか……………?」

空「背骨!背骨!」

ガルツチ「(がああああああああああああああ(」

!!!!!!

『バチッ!』

未来「人間ピラミッドく!!!」

ガルツチ「……………何してるの?」

未来「さてと、満足したし寝ようつと。」

総刃「ジャンケンに負けなければ、こんな事は……………」

空「あーあ、てっぺんやりたかったなあ……………」

フレデイ「痛え……………、マジで背骨が折れるところだった……………」

ルツチ「さて、寝よう寝ようつと。」

ガルツチ「……………」

フレデイ「邪魔するなよ?ガルツチ?」

ガルツチ「……………やれやれ。」

言峰『こうして午前0時、6人はようやく就寝に入ったのであった。』

f i n

## 第64話 未来達の修行

ーロードの家 地下室ー

あー、久々のナレーションだ……。つと失礼、では……………。

レイと呼ばれる少女に着いていく未来達は地下に着くと、そこにはあらゆる修行用の道具や器具、色々なものが揃っていた。更には、VRルームもあるようだ。

未来「え、ここが？」

レイ「ああ、ここで日々鍛錬している。いつか英竜に勝てるようにな。」

こいし「ねえ、殆ど血が付いてるけど。」

レイ「死に物狂いでやっていると、何時かは血が出る。ホントにオーバークックじゃないかと疑いたくなるほどさ。」

???「戻ってきましたか、レイ様。」

レイ「げっ……………」

機械的な声がし、レイはガタガタ震えながら後ろを向くと、そこには女性のようなアンドロイドが立っていた。

???「全く、何処をほつつき歩いていたのですか？まだトレーニングは終わってませんよ？」

レイ「終わってるから!?死に物狂いで必死に頑張ったから!？」

???「ん？其方の方々は？」

レイ「ロードの孫の関係者。妻も居れば子供、恋人友人など色々。」

???「そうですか、では自己紹介を始めます。私は2B、この修行のアンドロイドとしてやっている者です。」

未来「2B？」

簪「聞いたことのない名前ね。」

こいし「あ、多分あの人『N i e R : A u t o m a t a』の主人公よ!。」

2B「その通りです。」

本音「聞いたことないタイトルだなく。」

白夜叉「ほうほう、って事は9Sも居るといふのかの?。」

2 B 「いえ、9 Sは工作中です。それよりレイ様、早速続きを――」

「どうやら2 Bは話を聞かないようだ。一度その内容が気になり、こいしがトレーニング内容を見ると、滅茶苦茶引いていた。」

こいし「うわぁ……………、確かにこれは厳しいわね。」

未来「どれど……………、いや幾ら何でもスパルタ過ぎでしょ?」

『どんなトレーニング内容なのかは、ご想像でお願いします。』

2 B 「つまりそう言うことです。それに、あなた方にも修行の内容も完成しています。」

全員 『早っ!?!』

フラン 「子供にも容赦なんてないのね……………。」

2 B 「殆ど強敵に備えての修行です。」

早速ナレーションの仕事放棄するというけど、幾ら何でもおかしくね!?!?それで肝心な時に動けなかったら如何するの!?!?

2 B 「ちなみに休息は、食事と入浴、そして睡眠のみです。」

総刃「待つて待つて、それはどうかと思うよ!?!僕仕事とか――」

2 B 「ご安心を、この世界は時空に影響していません。終われば入る前の時間に戻ることが出来ます。」

白夜叉「だとしても、いや今は良かろう。それよりは、ガルツチが目を覚ましたら、修行に入るのか?」

2 B 「いえ、彼はその必要はないです。」

アラヤ「え!?!何ですか!?!」

2 B 「彼は、いや元々アレは普通じゃないのです。恐らく、全王神様が転生させた一人、『星空英竜』と同等、いえそれ以上の力と技量を持っています。」

リサ「それって、どういう事?」

2 B 「難しい質問ですね。世界を飛び回りながら修行とかしていたようですし、それ以前にアレは、間違いなく加減はしています。それ

に、全王様から聞いたのですが、彼は限界突破と言いつつ、あれで10割の本気を出していないのです。」

未来「えええええ!？」

長年の付き合い出会ったフラン達ですら、驚愕を隠せていなかった。何しろガルツチには、今までの戦いで本気だった戦いが、実は手加減していたということだった。

そうなれば、ガルツチの本気とは一体どういうものなのか気になってしまった。

2B「とにかく、話はここまで。早速だけど、動きやすい服装はあつちにあるから、着替えて頂戴。それから内容を教え、始める。」

—  
???

風龍（作者） side

一言言う。飽きた。ナレーションやらなかった内に、飽きちゃったよ。

全王神「何で飽きちゃうのかな、風ちゃんって。」

風龍「風ちゃん言うな。それにナレーションをやらなくなっちゃったせいで、もうナレーションやらない方が良いんじゃないかって思ってたんだよ。」

士「いやそれはそれでどうかと思うぞ。」

束「それはそうと、ガル君の事だけど、あの子は何時まで隠すつもりなんだろう。」

風龍「……………分かん。そもそも全王神、何で息子にする際に、あれを使ったんですか？」

全王神「あー、あれね。確かに、私の息子にするには一度肉体が必要になるの。何しろ魂はよくても肉体を持たないといけないからね。ぶっちゃけ敵だったはずの肉体を、ガルツチちゃんの魂を入れ、胎内回歸させて息子にさせるのって、普通じゃ考えられないからね。何しろあの肉体、元は『虚の龍神』だしね。」

『虚の龍神』、かつて全王神と龍神王が全面戦争をしていた最中、虚数宇宙からやってきて襲いかかった『龍神』。

二人と同等なのは驚いたが、それでも何とか勝利し、そのまま虚数宇宙にいる『虚偽の偽竜神』を倒した。全面戦争は終わってから数日、その日に宇宙ことガルツチと出会い、転生はなんと全王神の息子にして欲しいと頼み込んでいたのだ。

ぶっちゃけみんな驚いてたよ。全王神の息子になりたいだなんて、前代未聞だ。だがそれを快く受け入れた全王神も凄いなと思うよ？

そもそも虚の龍神は、『偽り』『虚無』『虚数』などの全く存在しない力を持っていて、全と零に取っては天敵でもあった。

風龍「何時かは目覚めるんだよね。」

全王神「うん、あの肉体は元々彼のものだったけど、魂と精神が無くなってるから、ガルツチのものだよ。だから、あの能力はガルツチちゃんのもの。」

『虚の龍神』の復活は、ガルツチちゃん次第よ。」

ヴォルデモート「風龍、ここに居ましたか。」

全王神「アレ？ヴォルちゃん？どうしたの？」

ヴォルデモート「全王神様、お久しぶりでございます。」

風龍「ヴォルデモート、どうかしたのか？」

ヴォルデモート「実は、モンスターハンターの世界で——」

ええええええ!? 黒の大厄災が起こっただっ!? それによりモンスターと人間が激減しただど!?

ヴォルデモート「原因は7つの絆石が完全汚染されて、浄化不可能に陥り、それを発生させたマネルガーとイチビッツは、未だに逃走中だと言うこと。」

風龍「分かった、報告ありがとう。それじゃあみんな、僕は急いで絆石をどうにかしてくる。」

士「おう、頑張れよ。」





意思是本物なり!!」

虚王魔神「まずい、全ての力を使っても!!!」

ガルツチ「我に眠る内なる龍神よ! 目覚めよ!!!!」 『フォールス・ゴツドマスタードラゴンモード』!!」

これは僕の無意識なのか分からなかったが、それを唱えた途端、光に包まれていき、姿が変化した。

両腕は絶望の魔神の腕の見た目ではあったが、少しだけスマートで、鱗の色は白く、爪の色は青く輝いていた。服装はアンリマユのよくな姿ではあったが、紋章は青く光っていて、布の部分は白く、そして翼はいつも以上に神々しく光っていた。

虚王魔神「貴様、何者なんだ!?! 何故滅んだはずの龍神の姿になれるのだ!?!」

ガルツチ「さあな。だが、おかしいよな? 何故そんなことで驚くんだ? 影の僕と言えど、これを知らないなんて、おかしいよな? そうだろ? 僕の影を偽り、僕を消させ、僕の肉体を乗っ取ろうと企んだ、『偽物』の起源を使うホームンクルスさん?」

虚王魔神(?!?)「なっ!?! 何を言う!?! 俺はお前の——」

ガルツチ「僕はこれを使うまでは知らなかったが、お前もまた知らなかった。過去の虚王魔神なら、自分の肉体はどんなものなのか知っていたはずだ。」

虚王魔神(?!?)「……………よもや、贋作の貴様に、偽物に見破られるとは。まあいい、見破られるのは想定外だったが、気が変わった。貴様諸共消してやろうではないか!!」

ガルツチ「はあ、正直未来達がいたから、本気とか出さなかったけど、僕とお前だけしかない世界なら、好都合だ。」

『久方ぶりに、本気で殺してやる』。来い、名も無きホムンクルスよ。遊んでやるから、掛かってくるがいい。」

t o b e c o n t i n u e d  
→

## 第65話 虚の龍神と全の竜神

—???

ガルツチ side

何時からだったのだろうか、本気でこの力を扱ったのは。元々この力は、世界を及ぼしてしまうほどの力を持っていて、使わないように極力気を付けていた気がする。

使わなくなったのは、多分母さんに殺されて以降かな？

虚王魔神（？）『「八つ裂き光輪」！』

ガルツチ「無駄だ。”消えろ”。」

何処かのウルトラマンの能力なのか、偽物は手にギザギザの鋭い刃のついた輪を生み出して、僕に投げつけてくるも、たった一言で消滅した。

ガルツチ「今度はこつちだ！」

虚王魔神（？）「なっ!?早っ——」

『ドゴッ!!』

虚王魔神（？）「ゴハッ!」

僕は自前の俊敏さで、偽物に溝打ちを放った。物凄い音が鳴ったと同時に、偽物は凄いい勢いで内臓ごと吐き出し、息切れ寸前の状態に陥っていた。

虚王魔神（？）「嘘だ……………、あり得ない……………。これが、

本気だ?!?たかが、溝打ちで……………!?!」

ガルツチ「あーあ、内臓がこんなに出しちゃって……………。それで耐えてくれたら、まだ面白味はあったのに。まあ、精々5分ぐらい持ったぐらいかと思っただが、3分だな。」

虚王魔神（？）「クソッ……………!こんな……………、はずじゃ……………」

ガルツチ「もう良い、これで殺す。消滅しろ。」

『カトプロトン・スペースコロップス  
『虚ろなる宇宙の崩壊』!!』

途端に、この夢も、その場に居た虚王魔神の偽物はビッグバン並み

の爆風に飲まれていき、そして目の前の光景は、あの悪夢の世界は消え、代わりに僕の宝具である『次元を超える無限の刃製』の世界に変わった。

それと同時に、龍のような姿をした存在が、僕の目の前に現れた。

??? 「ようやく、目覚めたのだな。」

ガルツチ 「……………貴方は？」

??? 「我は『虚の龍神』、虚ろの世界、存在しない世界を生み出す龍神だ。まあ、気軽にフェイクとでも呼んでくれ。」

ガルツチ 「フェイクか……………。んじやあ聞きたいが、この力はお前のか？」

フェイク 「ああ、元々は我のものだった。だが、今はお前のだな。」

ガルツチ 「何故この力を？」

フェイク 「何を言う、お前は全王神の息子になりたいと言ったのだろう？だからこそ、全王神は快く賛成し、我の体を使わせたのだ。『虚』の力を持った、全王神の息子としてな。しかし、まさかこれを使わずに戦つてたとは思わなかったな。」

ガルツチ 「フェイク、貴方も知っているでしょ？この力は、未知数であり、下手すれば仲間も巻き込まれる程の力もあると。」

フェイク 「なるほど、確かに『虚』は、『全』と『零』と同じぐらい未知数だ。下手すれば仲間も当たるというのも、通りかもしれないな。あの頃とは、変わったのだな。ガルツチ。」

ガルツチ 「かもな。でも僕は、例え変わろうが、『虚王魔神』にして『■■■■』ということには、変わらないさ。」

フェイク 「そうか、やはりお前は……………存在そのものが、変わり者だな。」

変わり者……………か。

まあ確かに、滅茶苦茶変わり者なんだけどなく。

フェイク 「ガルツチ、お前は今まで他人や自分の偽の力を使って、戦ってきたけど、そろそろ自分の本当の力『虚』の力を解放するべきじゃないか？」

ガルツチ 「え？でも——」

フェイク「いいか、相手は『零の龍神』。今までの力を使つてたら、きつと行き詰まるだろう。それに対抗出来るのは、『全』だけじゃない。『虚』だ。今解放しなくては、仲間を守る事はできないだろう。」

ガルツチ「……………フェイク、その『虚』で守る事は出来るのか？」

フェイク「ああ、お前は今まで『絶望』や『憎悪』を使つてるけど、殆ど守れてるじゃないか。ならば『虚』も守れる。」

ガルツチ「……………どんな力でもか？」

フェイク「何を今更、お前は今まで私欲のために力や技、心を使つたことがあるか？いやあつたとしても、ほとんどは誰かを守るためだけに使つてたはずだ。違うか？」

ガルツチ「……………やれやれ、そう言われたら、否定できないじゃないか。分かったよ、フェイク。使つてやる、お前が言う……………『虚』をな。」

フェイク「……………安心した、さて我は消えるでしょう。」

え？消えるって、まさか……………。

フェイク「元々これは、お前のだからな。久方ぶりに顔を出せたが、本当にお前は面白いものだ。だが、忘れるな。我は何時でも、お前と共にいる。それを忘れるな。」

それを言い残し、さつさと姿を消し、まるでフェイクが僕と共に生きていくかのような心地良さが感じた。

だが、それと同時にもう二度と姿を現さないと思った。何故なら、本当の『虚の龍神』であるフェイクは、もうこの世に存在していないからだ。

つまり、此より僕は、『虚王魔神』と同時に『虚の龍神』の後継者という事になったのだ。いずれにせよ、守るべきもののためなら、とことん利用してやろう。

そう思いながら、視界が明るくなった。

目を覚ますと、そこには何故か目隠しをした少年らしき人物がいた。いや、誰この人？

??? 「あ、やつと目が覚めたのですね。」

ガルツチ 「いや、その前に誰？」

??? 「失礼、僕は『9S』。気軽にナインズと呼んでください。」

ガルツチ 「ならナインズ、僕はどれだけ眠ってた？」

ナインズ 「大体2週間ぐらいだと思います。」

あー、はいはい2週間……………はあ!?

ガルツチ 「2週間!?僕そんなに寝てたのか!？」

ナインズ 「ええ、ぐっすりと眠ってました。」

おいおい、あのホムンクルス……………時間感覚すらゆがめるんかよ!?!そんなに時間かかったって言うのか!?!いやそれ以前に、そこまで眠りが深かったのか!?

しかも何だよオルタナティブモードって!?!属性すら変わっちゃったよ!?!完全に闇堕ちじゃねえか!?!いやそれ以前に堕ちてるな。

ナインズ 「まあ、いいとして。そろそろロードさんが来ますので、入室の許可を出して良い——」

ガルツチ 「是非、会わせて下さい!!」

ナインズ 「あ、はい。(そんなに会いたかったんだね…………)ロードさん、どうぞ。」

多分歳のに爺さんだろうし、流石に歳は——

ロード 「起きたか、ガルツチ。」

僕と同じぐらい若かったです本当ありがとうございます。結局爺さんもかよ……………。

ロード 「ん?意外か、僕がこんなに若かったのは。」

ガルツチ 「うん、歳取って老人になってたんかと思った。」

ロード 「ハハハ、確かにね。まあでも、会えて嬉しいよ。我が孫よ。」

ガルツチ 「僕もだよ、爺さん。どうして、兄さんや姉さんのところに会いに来なかったの?」

ロード 「そうだな、簡単に言えば……………。僕は『全の竜神』の規

律で、会うことを許されなかったんだ。だから、会うことはできなかった。」

ガルツチ「え？爺さん、『全の竜神』なの!？」

ロード「ああ、そうだ。でも、君の期待はできないんだ。」

期待出来ない？

ガルツチ「如何して？『全の竜神』なのに、何で戦え……………」  
爺さん、まさか……………」

ロード「うん、あの時自爆魔法を使って、何とか生きることが出来たけど、魔力が結構持つてかれたからね。日常生活に使うだけで精一杯さ。だから、すまないが協力は出来ない。」

魔力不足、確かにお爺ちゃんが使った自爆魔法『グランド・ゼロ』は『無』と『零』の力を融合した危険な魔法とも呼ばれていて、足りない分は生命力も使ってしまうため、実質自爆魔法を覚えようと必死に頑張る大魔術師も居るのは事実だ。

だが、まさか魔力だけで自爆魔法を使ったなんて、爺さんの魔力はそれだけ足りてたって事になるんだな。

ロード「でも、協力してくれる『全の竜神』は一人いるぞ。」

ガルツチ「マジで!？」

ロード「うん、ただ彼に出会うのは結構骨が折れるぞ。連絡はしてるとは言え、何時でもその世界に留まってる訳ではないからな。」

ガルツチ「ん？ディルーラーの土みたいなの？」

ロード「そうだけど、土じゃない。というかあれは完璧過ぎるとは言え、『全の竜神』には入らない。」

ガルツチ「んじゃあ、一体……………」

ロード「なら、これなら聞いたことはあるか？

仮面ライダー達にとって、原点にして頂点の仮面ライダーを。」

ん？原点にして頂点？その仮面ライダーって………って  
ハア!?

ガルツチ「まさか、伝説の仮面ライダー1号と呼ばれてる『本郷猛』の事か!？」

ロード「そうだ、彼は全王神の部下であり、『導き手』と呼ばれてる人物だ。彼なら、僕以上に協力してくれるはずだ。」

本郷猛、まさか彼が『全の竜神』になってるなんて、思っても見なかった………。でも、世界を飛び回ってるのか。確かに、これは結構やばいな。

ロード「まあ一度、『地獄大師』から聞いたが、猛はゼロノスが放ったホムンクルスを倒すために、あらゆる世界を飛び回っていると聞いたことはあるな。」

ぬおおおい!?!何でショツカーの首領と知り合いなの!?!っていうか何時知り合ったの爺さん!?!

ロード「まあ、『地獄大師』は今、ゼロノスとの戦争に備えて、英竜に使者を送ってるだとか。」

ガルツチ「ショツカーですら英竜の力を求めるって事は、それだけ脅威だって事か。」

ロード「ゼロノスは文字通り、やばい存在なのは確かだ。実際、転生者を虎視眈々と狙っては奪い殺すし、他の世界を侵略し、男女平等



に皆殺しもしてるし、奴隷として無理矢理働かせてるというのものもあるからな。」

ガルツチ「改めて考えると、随分度し難い奴だな……………」

ロード「それと、ファングから聞いた話だと、僕らの故郷星の『End of The World』は、英竜達との同盟を交わしたそうぞ。」

え？何それ初耳なんだけど!?兄さん、マジで何をやってるの!?

ロード「まあ、英竜となら信頼出来ると思つて、お互いの技術等を教え合つたりしているからな。」

ガルツチ「兄さんえ……………」

ロード「それと、ガルツチは知らないだろうが、今では『End of The World』だけでなく、他の星々の代表者を集めて、『星際連合』というのを作り出したというのもあるが。」

ガルツチ「マジで!?んじゃあ、他の星々も……………」

ロード「全部の星々は、英竜の侵略を全面協力することになった。ガルツチ「なるほど、僕らが居なくなつてる間、こんな事が起こつていたとはな。」

ロード「いずれにせよ、今期待されてるのは、英竜と未来、そしてガルツチ。君達なんだ。」

ガルツチ「期待は勘弁なんだけど……………つてちよつと待て、そいや未来達は?。」

ナインズ「未来達でしたら、2Bのスパルタトレーニングをやっているとしますよ。」



## 第66話 ホムンクルスの襲撃

―ロードの家―

未来side

うん、正直あそこまでスパルタだったとは思わなかった。お蔭で滅茶苦茶疲れたけど、その分なんだか強くなった気がする。

力だけじゃ、如何することも出来ないか。確かに、ここに来る前までは、ほとんどが転生特典である『イフ』を駆使して戦いながら、色々な人達の力を使ってたけど、それでもあの土に勝てなかった。

でも、勝てなかった理由が、ここ2週間鍛えられて分かった。技術が足りなかった。ガルツチは、その技術を隠して戦っていたらしいけど、如何してそこまで隠したかったのか。

早速聞いてみた。

未来「ガルツチ、聞いても良いかな？」

ガルツチ「？」

未来「2Bから聞いたけど、『英竜』と同等、またはそれ以上の力と技量を持つてると言ってたけど、どういう事？」

白夜叉「そういえば、私も聞きたかったところじゃ。如何なんじゃ？」

ガルツチ「あー、そう言うことね。多分それは、虚王魔神の頃の肉体と関係してるんだ。」

フラン「肉体？」

アラヤ「母さんの肉体と？」

ガルツチ「うん。多分皆は、『全の竜神』と『零の竜神』は知っているだろうけど、実はもう一つ居るんだ。」

もう一つ？でも全と零しか知らな……………あ！

未来「待ってガルツチ！そのもう一つって……………」

ガルツチ『虚の龍神』、存在するはずも無い、囁告<sup>ラジエル</sup>篇帙にも神蝕<sup>ベルゼバブ</sup>篇帙にも載っていない龍神だ。」

本音「ふえ？でも『虚の龍神』なんてどこに……………」

ガルツチ「居るじゃん、目の前に。」

目の前について、ガルツチしかいないけど？

ガルツチ「おーい、皆何処見てる。」  
簪「いや、そんなこと言われても。」

オーフィス「何処にもいない。」

ガルツチ「……………いや、気づけ。」

フラン「でも、何処にも……………え?」

こいし「もしかして、お兄ちゃんが?」

イリヤ『虚の龍神』なの?」

他の人『え?』

ガルツチ「気づいたのは嫁達って……………。——?—」

アラヤ「母さんが『虚の龍神』!」

鳳凰「でもお母さん、虚王魔神じゃなかったの!」

ガルツチ「いや、虚王魔神のはあつてる。問題が肉体だ。」

……………ええええええええええええ!!?!

未来「ガルツチが、『虚の龍神』だって!」

ガルツチ「おい待て、少し落ち着け。順序よく説明するよ。まず、転生するとき、僕は全王神の息子になりたいと言つてね。その時に母さんは快くOKはしてたけど、問題があつたんだ。」

白夜叉「問題とな……………。その問題とは?」

ガルツチ「その問題が、肉体だ。魂と精神はそのままに、肉体をどうにかしない限り如何することも出来なかつたんだ。」

レティシア「何故肉体を?憑依すれば、それで——」

ガルツチ「いやいや、全王神の息子、つまりその肉体を胎内回帰させて、その中に憑依して初めて全王神の子供になるんだ。ただ問題が、それに耐えられる肉体——」

数分後

ガルツチ「——というわけで、虚王魔神の頃の肉体は、『虚の龍神』の肉体を使って現在に至る。」

未来「(。 ㇿ。 )ポカーン」  
リサ「ガルツチさん、とことん規格外に……………」

アラヤ「母さんの規格外が、レベルアップした。」

ガルツチ「アラヤ、それは傷付くからやめて……………。 自覚してるから。」

未来「自覚してたんだ。」

ガルツチ「まあ、本来転生したら、その肉体は消えるんだけど、どうやらそのままになってるらしいんだ。 転生しても、この肉体さ。」

未来「……………もしかしたら、ガルツチの転生特典って、それだったりして。」

ガルツチ「『虚の龍神』の肉体が？」

未来「うん。」

「どうかそれ以外有り得ないよ。」

プリヤ「つていうか、そろそろここから出よう？ 流石に長居は出来ないよ。」

プリエ「それに、なんだか嫌な予感が……………」

ガルツチ「嫌な予感？」

『Pr r r r r, p r r r r r.』

『ソウバ、クロノから連絡だ。 しかも緊急の。』

総刃「繋げて。」

『ピッ!』

『ソウバ！イリヤ！クロエ!!緊急事態だ!!』

総刃「何かあったのですか？」

『謎のホムンクルスの軍勢が、我々の街に襲撃している!!』

「なんだって!?!僕達は立ち上がると同時に、ガルツチは総刃が持つてる機械を取り、話し掛けた。」

ガルツチ「そのホムンクルスの人数は？」

『ん?お前は?』

ガルツチ「話と説明は後で、それよりホムンクルスの数を!!後住民の避難は!?!」

『わ、分かった。 まずホムンクルスの数は、10万人。 住民の避難

は、まだ最中だ。そういえば、ゼロノス様が何とかって、言ってたよ  
うな———」

ガルツチ「ゼロノス!? クソツ、奴か!! 今からそちらの街に戻ります  
! それまでに、住民の避難を! そして、出来るだけ食い止めてくれ!!!」

『いや待て、何故見ず知らずのお前が———!!!』

ガルツチ「つべこべ言うな!!! 急いで避難場所に移動させろ  
俺らがそつちに来るまで、極限まで耐えるんだ!!!」

『イエ……………、イエツサー!!!』

『プツツ……………。』

!!!!!!!

うわー、容赦ないなあ……………。

総刃「あの、一応言うけど、クロノは僕らの上司なんだけど  
……………。よく怒鳴ったね。」

ガルツチ「うん、悪いとは思ってるけど、時間がない以上、急いで  
戻らないと。」

星龍「じゃあ、急いで戻ろう。入ってから10秒後のところに戻す  
から、急いで救いに行つてね。」

レイ「私も行って良いか? ロード様の恩返しをしたい。」

星龍「分かった。」

愛花「……………レイちゃん。」

レイ「何だ? 愛花。」

愛花「怖く……………ないの?」

レイ「……………同じホムンクルスを殺すのが怖くないと言えば、  
嘘になるが。だが、戦うしかない。愛花も覚悟を決める。私と同じ、  
ホムンクルスだろ?」

愛花「……………うん。」

僕達は急いでこの場所から出て行き、ミッドチルダへと戻った。

sideChange

—ミッドチルダ—

ガルツチside

イリヤ「何これ!？」

プリヤ「殆どの建物が燃えてる……………」

オイオイオイオイ、これじゃあ冬木市で起こった出来事と一緒にじゃないか!!

総刃「如何する?」

ガルツチ「総刃達は、他の住民の避難を!!僕達はホムンクルスの軍勢を全滅させる!!」

総刃「分かった。厳しい修行で覚えたこれを使ってみるか!汝理を破りし者!然れど、汝全てを救う者!!ドリームクロス夢幻交差!!『ラーク・マスター・ルツチ』!!」

つて、総刃が兄さんが着ている服装に変わっちゃったんだけど!?

???「なるほど、もう戻ったのか。」

総刃「なっ!?!お前は……………」

???「久しいな、総刃。地獄の底から帰ってきたぞ。」

ガルツチ「……………」何者だ?ゼロノスの配下か?」

???「ほう?誰に向かってその口を開いてるんだ?」

ガルツチ「質問を質問で返すな!疑問文は疑問文で答えろと、親にでも教えられたのか?僕は誰なのかを聞いている、下郎。」

???「ふっ、うるさいゴミめ。まあいい。俺はダークネス・エンデ、総

刃に殺されるも、ゼロノス様が蘇らせ、今やそのお方の配下の者だ。」

未来「如何する、ガルツチ。」

エンデ「しかし、驚いたな。まさか0号と1号がここにいるとは。しかも、のうのうと裏切ってるではないか?」

まあ、裏切り者は……………」

『ズダンッ!』

エンデ「なっ!?!まだ喋ってるのに、妨害するか!?!」

ガルツチ「本音、簪、アラヤ、鳳凰、リサ!!!愛花とレイを!!!」

アラヤ「分かった!!!」

5人は愛花とレイを連れて、ホムンクルスがいる場所に向かった。





感じる。隣には総刃なのに、兄さんと一緒にいるかのような感じがする。

総刃 『巡り合う運命に、輝ける心の光。』

『shadow is my body, and phantom is my shadow.』  
総刃 『幾度の世界を飛び回りて絆を繋ぐ。』

『I have created over a thousand blades.』

目の前の光景は、僕が生み出す剣と兄さんが作り出したキープレードが草原に刺さっているのが見える。

総刃 『ただ一度の絆を断つことなく。』

ガルツチ 『Unknow to Evil.』

総刃 『友を守るために戦う。』

ガルツチ 『Nor know to justice.』

空には太陽と月が重なり合い、晴天の昼と星空の夜の混合した空へと作り出す。

ガルツチ 『Unaware of darkness,』

Nor aware of light.』

総刃 『担い手はここに独り。』

ガルツチ 『His person has astray,』

Everlasting suffering.』

総刃 『巡り巡る繋がり、心を生む。』

ガ  
ルツ  
チ  
「けれど、

That suffering also unleashes,』

Crawl over the ground,』

Empty Skylark,』

Fly to the sky of freedom,』

exceeding dimension.』

未来「凄い、2人の固有結界が、融合していく……………」

総刃 「『ならば、その繋がりには』」  
ガルツチ 「『ならば、我が生涯に意味をなすために、』」  
総刃 「『運命の歯車へと変わる。』」  
ガルツチ 「『This is the only path.』」

そして仕上げに、1本の大桜と、空から降る羽根が現れた。

総刃 「『この繋がりには、』!!』」  
ガルツチ 「『So as I pray, ……………。』」

総ガ  
UNLIMITED DIMENSION WORKS  
そして、唱え終わると同時に、その光景には、半分が兄さんでもう半分が僕の固有結界が別たれていた。  
エンデ 「くっ、何とか耐えられ……………つてなんだここは!？」

ガルツチ 「驚く事じゃない。だが、ここなら誰も邪魔する者はいないだろう。エンデ、貴様はどうも一足遅かったようだな。もう少し早ければ、僕を殺せたというのに、そのチャンスを逃した。」

エンデ 「何が言いたい?」

ガルツチ「何、今のお前は、僕にとっては敵じゃないって事だ。まあ、遊んでやるよ。僕と、未来と、総刃の3人でな!!」

未来「行くよ、総刃。ガルツチ。」

『FINAL INFINITY RIDE <PERFECT I  
NFINITY DECADE>!!』

さて、行きますかね!!

ガルツチ「覚悟は良いか？」

3人「僕(俺)達は出来ている!!!」

エンデ「はっ、思い上がったな? 貴様ら。」

to be continued  
→

## 第67話 夢現に続く希望の光

—次元を超える無限の刃製と無限の鍵製—

ガルツチ side

『無限の剣製』、元を辿ればエミヤシロウが生み出した固有結界に過ぎなかった。だけど、今更だがこの世界を作り替えたのは、大昔何処かの大図書館で読んでた時だっけ？

その時に目に止まったのは、『一時的に心像世界を作り替える魔法の書』。その時だっけ？でも、それを作り出すには詠唱があつた。

詠唱の種類は多かったが、それによって心像世界は違っていった。しかも、自分の深層心理が変われば変わるほど、心像世界も変わっていった。それと同時に、僕は詠唱を変えた。

ガルツチ「悪夢再現『無限の剣製と幻影の世界』!!」

エンデ「何!?!」

最初は『悪夢』。両親に裏切られ、憎悪と絶望、そして喪失が作り出した最初の固有結界。血に塗れた武器達が、エンデに向かって襲いかかってきた。

エンデ「だが、所詮は贋作!この俺の敵では——」

ガルツチ「僕の贋作を舐めるなよ?此奴は………『対真作宝具』とも呼ばれるぐらいの贋作宝具だからな。” 剣よ、奴の動きを停めろ”。」

血塗れの剣はエンデに絡み付き、身動きが取れない状態となり、どれだけ暴れてもビクともしなかった。

未来「開眼『破碎の魔眼』!能力粉碎!!」

エンデ「なっ!?!」

未来には見えるマークに向かって殴ると、何かの破片が飛び散つた。つと同時に、剣は消滅した。

エンデ「つて思ったが、拍子抜けか。今度は此方から………あれ?能力が出ない!?!」

未来「君の能力を粉碎させて貰った。もう君には、能力を持たないただのホームクルスだ。」

エンデ「だ、だが!!まだ終わりじゃ——」  
ガルツチ「させるか!闇の再現『闇夜の無限の剣製と幻影の世界』!!」

次に『絶望』。一度は希望の光を射し、太陽を崇めることが出来たが、僕には眩しすぎた。だから決意した。二度と希望の太陽が見られなくて良い。希望の太陽は兄さん、ならば僕は明けない絶望の月となり、希望を守る絶望となった。

どれだけの苦痛を与えても構わない、ただみんなの幸せを守れたら良い。そんな固有結界。

どこからともなく現れた闇の月が、閃光を放ち、エンデにぶつかった。

エンデ「あ……………!ガハッ!」

総刃「星光の絆の鍵よ、力を!!『祝福<sup>オ</sup>されし希望<sup>キ</sup>のお守り<sup>パ</sup>』!!」

総刃が振り下ろしたキーブレードは、かつて兄さんが持っていた『約束のお守り』とよく似たキーブレードだった。振り下ろしたと同時に、眩しい程の光の斬撃が走り、闇の閃光を斬り裂き、ついでにエンデに深傷を負わせた。

ガルツチ「能力を封じられ、致命傷とも言われるほどの傷を負っているとこののに、まだまだ立ち上がるか?最早虫の息だというのに。」

エンデ「……………だ、ま……………れ!!!」

ガルツチ「次で終わらせるぞ。未来、空とフレディを召喚して。」  
未来「分かった。」

『FREDDIE KRUGER! TATSUGAMI SORA! SUMMON!』

未来の隣には、フレディと空が現れ、それぞれの武器を持っていた。フレディはガシヤコンブレイカーのブレードモードとガシヤコンキースラッシャーを、空は神龍殺しと秩序<sup>コ</sup>の庭園<sup>モ</sup>を両手に持っていたのだ。

フレディ「また召喚されたか。しかも今回は、俺の好きな斬撃武器のおまけ付きか。」

空「そういえば、其方は?」



『<DEDEDECAD<!!』

『マイティバンドデイメンションヒーロークリティカルフィニッシュ!!!』

総刃「先ずは俺から!! 『絶望を断ちし希望の斬撃』!!」

総刃は兄さんが持つ祝福されし希望のお守りで振り下ろし、眩しい程の斬撃が飛んだ。

空「次は俺だ、バランスブレイカー 禁手! クロスバスター!!!」

空は総刃が出した斬撃よりも早く走り出し、素早くエンデを斬つた。

フレデイ「さあ、地獄を楽しみな!!」

フレデイはまるで今までの鬱憤を晴らすかのように、滅多斬りしていった。

未来「いつけええええええええええ!!!」

未来は上空へ跳び上がり、エンデに向けてライダーキックをお見舞いしようとした。そこには、デイケイドの模様と、その上に『∞』が描かれたカードが現れた。

そのままエンデの胸部に直撃し、風穴が空いた。最後は、僕だけ。

ガルツチ「真偽、無欠にして盤石!」

先ず僕が投げたのは、黒い翼のキーブレードと白い翼のキーブレード。2本から残光が見え、エンデを斬る。

ガルツチ「力、次元を穿つ!」

お次に、エミヤシロウが使ってる干将・莫耶を投影し、同じように投げつける。

ガルツチ「刃、海を裂く!」

今度はエクスカリバーとダンスレイフを投影し、近付けて斬りつけ、

ガルツチ「絆、時を越えて!!」

瞬時に次々の聖剣と魔剣を投影し、それを用いてどんどん斬っていく。そして、総刃が放った斬撃が来ると同時に離れ、すぐさま生命の樹の剣セフィロトソードと邪悪の樹の剣クリフォトソードを取り出し、英霊達のカードとスペル

カードを挿入していった。

ケテル『全宝具使用可能!』

バチカル『我が主、奴にトドメを!!』

僕はすぐさま飛び上がり、何時でも斬り掛かる準備をした。後ろには、先程出会った『虚の龍神』フェイクの姿と『零の龍神』の龍の姿、そして『全の龍神』のドラゴンの姿がいた。

さあ、全よ! 零よ! 虚よ! 無よ! 絆よ! 僕に力を貸してくれ!!!!

ガルツチ「我ら、共に全てを駆け抜けん!!」  
『全 零 虚 無』  
絆翼八連!!!!  
『ズサッ!』

生命の樹の剣からは白く輝く虹色の斬撃を、邪悪の樹の剣からは黒くどんよりとした虹色の斬撃を交差するかのようには斬り裂き、エンデを殺した。いや、正しくは、偽者のエンデだ。

本物は、おそらく何処かの世界へ行っているはずだから………………。ガルツチ「………………。僕は偽り。然れど、この幸せと思い、そして意志は真なり。」



僕は無意識に、その言葉を出し、そのまま空を見上げた。眩しい程に希望が満ち溢れた太陽と、煌めくように青く光る月。

偽りでもいい、此が夢でも良い、其れが僕にとっての唯一の幸せだ  
というのならば、気にしたりしない。

t o b e c o n t i n u e d  
→

## 第68話 次の世界へ

—ミッドチルダー—

ガルツチ side

全王神「——やって来たのさ〜♪」

ガルツチ「シヤラップ。」ガツンツ!

全王神「アベシツ!」

未来「ガルツチ、肉親にも関わらず殴るって、これ如何に。」

全王神「うー、英竜ちゃんは殴らなかつたのに〜……………」

いや一度何で殴られたのか想像しろよな? いきなりやって来て、

『——やって来たのさ〜♪』なんて来たなら、大体殴るでしょ。

エ? 僕ダケ? チョット何言ツテルカ分カンナイ。

簪「えーつと、此がガルツチの母親の全王神様?」

鈴美「なんだか、幼くない?」

全王神「えへへ〜、気にしちやダメよ〜、ダメダメエ。アデツ!」ゴ

ツンツ

ガルツチ「すみません、うちの母さんが……………」

フラン「なんだか、どっちが親なのか分かんなくなつちやうよね

……………」

こいイリ「うんうん。(・|・)(・|・)」

あ、因みにホムンクルスの件については、既に解決済み。レイ達が全滅させました。街については、復興完了しています。

アラヤ「此が、母さんの……………。うー、もう分かんなくなつてき  
ちやうよく。」

ガルツチ「んで、母さん何でこっちに来たんだ? 観測していたん  
じやないのか?」

全王神「あー、その事ね。ガルツチちゃんに渡す物があつてね。」

ガルツチ「渡す物?」

一体なんだろうと思ひながら待っていると、そこにはどの仮面ライ  
ダーでも見慣れないベルトに、刃が虹色に光っている刀があつた。

ガルツチ「此は?」

全王神「貴方だけのベルトと、『全』『虚』『零』『無』『絆』の力を備わった神刀よ。」

ガルツチ「フア!？」

全王神「いやー、此作るのに結構時間かかっちゃったよ。ベルトはともかくこの神刀、オリハルコンとか、カッチン鋼とか、クリプトン鉱石とか、色々な世界にある最硬鉱石を集めて、其れを扱えるように色々と工夫してたからね。あ、刀は私デザインしてるよ。」

ガルツチ「デザインって……………、ちよつと刃が派手じゃない?しかも鞘は?」

全王神「あー、その……………」

ガルツチ「?」

全王神「ごめんちやい。♪」

『ONE TWO THREE』ガチャツ

ガルツチ「ライダーキック!」

『ガチャツ! RIDER KICK!!』

全王神「暴力反対ツ!」

「全王神お仕置き中、暫くお待ち下さい。」

全く、鞘がないってどう言う了見だ?あれか?僕みたいなやつなんかこれ?

総刃「ガルツチ、肉親の筈なのに何で殴るの?」

全王神「ガルツチちゃんはツンデレだか——」

ガルツチ「シヤラップ!」

全王神「アフン!ガルツチちゃんの愛を感じるよ!」

ガルツチ「というかツンデレじゃねえよ!!」

鳳凰「なんて言うか、ツツコミが追いつかないね。」

リサ「鳳凰ちゃん、私もそう思うよ。」

ガルツチ「まあ良いとして、これ。試し斬りしていいか？」  
全王神「もつちろん！」

さて、扱いやすさはどれくらいか——

『ブオンッ！』

何だ!?このフィット感!?斬る度に桜の花びらが出てくるし、両手で持てば太刀にも変わるとは…………。

ガルツチ「凄い…………、滅茶苦茶扱いやすい！」

全王神「でしょ?これも時間かけて作ったんだよ？」

ガルツチ「だが鞘がないってのは……………」

全王神「あ、そうそうあの質問だけど、本当は鞘は要らないよ。」

全員『え?』

全王神「一度離してみて。」

どういう事なん—— って消えた!?何処いった!?

深雪「ガルツチさん、背中！」

背中?ってあった!?って此、『NieR:Automata』的な奴

!?なんか白い魔法陣的な何かか刀を囲ってるんだだけど!?

全王神「これなら何時でも斬り掛かる事ができるでしょ？」

ガルツチ「そうだね。あ、そうそう、母さん。仮面ライダー1号は

今、何処に？」

全王神「たけちゃんの事?難しい事聞いてきたね。残念だけど、何処に居るのか私でも分からないの。」

母さんですら分からないのか。こりや、闇雲に探す他ないな。せめて、手掛かりさえあれば良いんだが……………」

クロノ「ん?って、貴方は全王神様!？」

総刃「エ!?知ってるの!？」

クロノ「おい、お前達頭を下げる!失礼だろ!？」

ガルツチ「おい待て、先ず母さんを知ってるってどういう事?」

クロノ「何を言う、全王神様といえば——」

全王神「ストツプストツプストツプウオツチング。信仰は要らな

いよ、嬉しいけど。」

なのは「先ず私、知らないけど……………」。

ヴィヴィオ「うん、私も。」

未来「異世界の神様だからねえ……………」。

うん、それにどの神様も、母さんを無かったことにしていたし、ぶつちやけ信仰なんてないに等しいしな。単に魔力タンクの奴だしな。いや魔力タンクじゃないか。

総刃「それより、もう行っちゃうの？もう少しいてもいいんだけど。」

ガルツチ「総刃、それは嬉しいがやめておくよ。次の冒険が待ってるし、何よりゼロノスとの戦いがある。」

総刃「そっか、なら仕方ないな。」

ガルツチ「代わりつてもんじゃないが、この力を受け取れ。」

『TRACE POWER』

僕が分け与えたのは、幻影と不老不死の呪い、そして異世界の英霊達の力を宿した擬似宝具の力だった。彼に触れてみたところ、どうやらゼロという礼装がこの世に繋ぎ止める為の必須アイテムだったようだ。だが、この呪いを使えば、たとえゼロが破壊されても、呪いが発動しこのまま現世に留まることができる。まあ代わりに死ぬことが出来ないってのが、辛いことだが、総刃なら大丈夫だろう。

僕には耐えられなかったが、もしかしたら総刃なら……………」。

ガルツチ「トレース・オフ……………」。これで僕の方が使えるよ。」

総刃「ありがと、でもさつき流れた物の中から、なんだか悲しく切ない感じがしたけど。」

ガルツチ「安心しろ、此で君は『永遠』にこの現世に留まれる。ただ代償として、僕と『永遠』の苦しみを味わう事になる。」

総刃「え?」

ガルツチ「でも、僕は信じてる。お前なら、僕と同じ苦しみを乗り越えることが出来る。絶対に……………」。

総刃「……………」。

全王神「ガルツチちゃん……………」。

ガルツチ「未来、次の世界に行こっか。」  
未来「あ、うん。」

そして僕は総刃達と別れ、次の世界へと旅立った。

sideChange

総刃side

力を受け取ってる最中、俺は何かを感じた。まるで、俺を蝕もうと  
しているかのような呪いが注ぎ込まれてるような気がした。

過去を見た。彼は元々普通の男の子だった。でも、彼は誰も『見て  
くれなかった』。ずっと一人、孤独だった。そんなとき、一人の男が手  
を差し伸べた。そして2人は史上最大の計画を練った。それも、俺達  
ですら恐ろしい計画を……………。

だが結果、彼は命半ばで散ってしまった。そして、今度は神様に転  
生した。でも幼い歳で亡くなり、今度は最も残酷な物が見えた。虐待  
だった。まるで忌みの子扱いを受けるかのように、暴力を振るわれ  
た。そして、場面が変わった。

そこは、アーチャーの固有結界よりも酷いものだった。血に塗れた  
大地に、数々の死体。その武器にも血が着いていて、空は黄昏だった。

その大地に、彼が立っていた。

そして彼は、俺を振り向きこういった。

『ここは僕の呪い。この世の全ての刃となった成れの果て。そして、僕の不老不死の呪いの根源となった世界。君は、僕のようになつて欲しくない。だから、お願い……………』

この呪いを受け取っても、決して僕のような『殺戮者』に、ならないで。』

彼は泣いていた。この苦しみに耐えきれず、ずっと表に出さずに苦しみ続けていたんだ。だったら、俺はこの呪いを受け止め、彼のようにならないと誓った。

約束する、決してお前のようにならないと。

『ありがとう、聖船総刃。』

すると、先ほどの世界は光に覆われ、晴天の空に血に塗れてない草原に変わった。そして彼は泣きながら笑みを溢し、姿を消した。

そして、目を開けると既にガルツチ達はいなくなっていた。が、手元にはクラスカードがあった。それも、ガルツチが描かれたクラスカードが。

『Avenger ラーク・バスター・ガルツチ』

総刃「また会おう、ガルツチ。」

t o b e c o n t i n u e d ⇨

ガルツチの第2の故郷　く消えない思い出く  
第69話　懐かしき世界

— ??? —

ゼロノス side

ゼロノス「むう……………、よもやここまで手こずるとは……………」。  
まさか、殆どのホムンクルスがやられるとは思わなかった……………。  
しかも、最悪な報告の中に、0号と—1号の試作品が裏切るとは  
……………。

ゼロノス「こうなれば、時臣！」

時臣「お呼びで御座いますか？ゼロノス様。」

ゼロノス「任務を与える。此はまだ、命を賭ける必要はない。」

時臣「と、申しますと？」

ゼロノス「今から英竜が居る世界に向かい、星空英竜や衛宮藍、夜  
神小夜、五河士織、空海翔の能力を、このディスクにコピー……………い  
や此はやめよう。」

時臣「何故です？」

ゼロノス「うっかりミスしそうだし、何より機械音痴だからな。」  
危ない危ない、下手してディスクが割れたら大変なことになってた  
な。

ゼロノス「代わりにだ、このコピー宝玉で奴らの能力を手に入れる。  
コピーだから、流石の奴らも気付かれまい。」

時臣「もし、見つかった場合は？」

ゼロノス「このリターンクリスタルで、此方に戻れ。」

時臣「畏まりました。」

ゼロノス「見つかるなよ。」

さて、此ならば流石の彼奴も気付かれまいし、万が一の時でもリ  
ターンクリスタルを99個分の奴を渡しておいた。

此ならばようやく奴を、『アンチスパイラル』のホムンクルスが完成  
できる。俺だけしか操縦できない、最強完全人工生命体で全てを0に



戻し、絶対的な善と絶対的な悪を作り上げ、闘争心しかない世界に変えてやるのだ。何も疑う必要のない、ただ善は悪を、悪は善を殺すだけの存在に仕立て上げるのだ。たった1つだけの次元で、たった一つの星で大勢の者達が戦うのだ。

ゼロノス「必ず完成してみせる！」

闘争こそが、本当の世界だ!!

sideChange

—???

ガルツチside

未来「到着つと。」

本音「つて何これ!?この桜大つきい!!」

次の世界に到着と同時に、空を見上げると、そこには大きな桜が移って……………ん?いや待て、なんか見覚えが……………。

ミスト『……………やつと、帰ってきたね。兄や。』

ガルツチ「……………つて事は、ここつて。」

未来「ガルツチ、知ってるの?」

ガルツチ「この桜は『鎮魂大桜』と言って、数多の魂がここで集い、この大桜に宿す守護者的な存在だ。間違いない、どうやら僕は『帰ってきた』ようだな。」

鈴美「帰ってきたつて……………」

ガルツチ「ここは、僕にとつての第2の故郷の世界。  
イマジナリーユナイテッドワールド『幻想空想和洋世界』。魔法と剣、魔物、妖怪、妖術、霊術などありきたりな物が溢れている世界だ。」

まさか、この世界に帰ってくるなんて思わなかった。この世界の父上と母上は、元気にしているのだろうか。

ミスト『待つてて、すぐ迎えに行くから。お父さんとお母さんをつれてね。』

え？ちよつと待て、説明を……………。

ガルツチ「あーもー、ミストったら……………。」

フラン「どうかしたの？」

ガルツチ「ミストが迎えに来るんだと。」

未来「え!?!ミストつて、生きてるの!?!」

ガルツチ「いや僕に聞かれてもな……………」

ミスト「でもちゃんと生きてるんだよ、兄や。」

ガルツチ「そういえば、どうやってこっちに来るんだろ。」

ミスト「転移霊術で、こっちに来るよ。」

……………え？

ミスト「フウー

ガルツチ「ヒヤアアアアア?!!?!? (裏声)」

ミスト「アハハ、兄やは相変わらず耳が弱いんだね。」

ガルツチ「つてミスト!耳に吹きかけるなど!?!」

イリヤ「つていうかいつの間に来たの!?!」

ミスト「今さつきだよ、イリヤちゃん。」

今さつきつて、それはそれで早すぎなんじゃないのか!?

愛花「……………何だろう、この敗北感。」

ミスト「ん?何が?」

深雪「……………」フルフルフルフル

ガルツチ「そういえば、父上と母上は?」

未来「ガルツチが父上と母上とか言うのと、なんか違和感が……………」

ミスト「あ、そうだった。お父さくん!お母さくん!」

????「はいはい、ホントにケルちゃんはエンドのことが好きなのね。」

????「しかし、知らない内に、ここまで変化するとは……………」

やってきたのは、陰陽師らしい格好の父上と巫女服を着込んだ母上

がいた。まあぶつちやけ、あの親父よりもまともなのは確かだしね。  
ガルツチ「久し振り、父上。母上。」

???「ああ、だがどちらかといえ、あちらの方が今の父じゃないのか？」

ガルツチ「親父か。あんなのがなあ……。確かにそうだが、ここじゃあ貴方が僕の父だし。」

未来「えーっと、貴方は？」

???「あ、そうですね。私は『安倍晴明』の末裔、『言峰九郎』と申します。此方は『間桐華怜』です。」

華怜「息子がお世話になってます。」

未来「あ、いえいえ此方こそ。」

ミスト「それじゃみんな、こつちに来て。私達の町に案内するよ。」  
ガルツチ「慌てなくても良いのに……。つて、おいおいこれ目立つんじゃないの？」

九郎「ハハハ、確かに此を使って迎えに来るのは初めてだから、目立つのも無理はない。」

全くもう、此で敵が来ないことを祈るばかりだよ。そう思いつつ、僕らはその陣の中に入ると、一瞬にして街に到着した。

鈴美「ここが、ガルツチちゃんなの？」

ガルツチ「うん。それにしても、あれだけの年月が経つたのに、余り変わってないとはね。」

ミスト「うん、私も不思議だけど、そう言うものじゃないかな？」  
ガルツチ「そうなのかよ……。まあ良いとして、みんな、ようこそ。『ヒメムラサキ』へ。そして、ただいま。」

九郎「お帰り、エンド。いや、今はガルツチだったね。」

街に入るや否や、みんな僕を見て驚いていた。まあ確かに驚くよな。見た目も有り得ないほど豹変しちゃってるし、特に耳が滅茶苦茶目立つ。羽化しちゃったんだし、此は仕方ないけど、どうやって戻せば良いんだろ？

そう思いながら進んでいくと、どこからともなく石が飛んできて、すかさず手で止めた。そして、投げつけた本人を見つけ、何かを言っ

ていた。

えーつと? 『良くもまあこのうのと帰ってきたな、異端者。お前の帰る場所なんてねえから。さっさと出て行け!!』ねえ。

うわー、子供だ。差別だわ。

ガルツチ「ごめんみんな、ちよつと止まって。さつき石を投げた奴に仕返しするよ。」

華怜「え? 仕返し?」

ガルツチ「昔だったら、我慢していたけど、今じゃ沸点低くなっちゃったからね。」

さて、あそこだな。ん? また何か言ってるな。何々? 『さつきと出て行け! 疫病神! お前なんかそのよそ者と一緒にくたばつちまえば良いんだよ!!』……………此奴、僕を罵倒はともかく、フラン達にも差し向けるとは……………。

仕返しじゃあ物足りない。ああいう奴は、もつと痛めつけてやらないな。

ガルツチ『ザ・ハンド』!! こつちに来い!

空間を削ると同時に、石を投げた人が何が起きたと言わんばかりの顔をしていて、すかさず2発ぐらい顔面に殴りつけた。

ガルツチ「おい、テメエ。次あの子達に悪口言ってみろ、文字通りお前に厄災を振り掛ける呪いを掛けてやる。」

「な、何だと疫病神! お前、強くなったからつていい気に——」

ガルツチ「黙れ雑種、僕にとって疫病神は貴様だ。あの時お前は何をした? 小心者で、何も出来ず、ただ血統だけが高いと自慢し、他の奴らを見下したんじゃないかねえのか?」

それにしても、見ないうちに堕ちたな。いや極限まで堕ちたと言ってもいいだろ。全く、親は甘やかしすぎだつうの。言っただつたんだがなあ、でも人の話聞かない金持ちだつたし。

『その子供は、きつといい人生を選ぶ。それも、名のある傭兵に』つてね。なのに、お前達の親と言つたら、『この子に傭兵なんて向いてません! 出鱈目なこと言わないでください!!』とかいつてさつきと出て行つて、とことん甘やかせたんだよなあ……………。

才能を無駄にしちやつて……、何ともまあ。」

「黙れ!!俺のパパとママを侮辱するな!!」

ガルツチ「そんなんだから成長しない。体は青年でも、中身が子供だとなあ……。いいか、今からでも遅くない。さっさと出家して、傭兵としての人生を歩め。じやなきや、一生分の後悔をするぞ。」

そして、剣を投影し、その男の喉元を突きつけた。

ガルツチ「もう一度言うが、もし僕の大切なものを傷つけてみる。その時は殺す。そしてその両親!!」

「ッ!?パパ!?ママ!？」

「……………」ワナワナ

「アワワワ……………」

ガルツチ「言つたはずだ!甘やかすなど。にもかかわらず、貴様らは忠告を聞かず、此奴の才能を無駄にした。見ろ、すっかり小心者になって、鼻を掛けてしまった。

もうこれ以上甘やかすな!此奴はまだ、やり直しが利くが、次甘やかしてみろ。最悪な展開になると見え!!」

未来「ちよ、ガルツチ。もうやめてあげて。何かやばいオーラが出てるよ!？」

ガルツチ「え？」

未来の言葉を聞くと同時に、先ほどの張り詰めた空気は消え、他の人達は何事もなかったように過ごしていた。

ガルツチ「……………ホントに、進歩無いなあ。何時もこうだよ。ほら、もう行け。お前なら、出来る。俺が保障してやる。」

「は、はい!!!!!!」

滅茶苦茶怯えながら、僕の目の前からさっさと消え去った。ってか速いな。ソニツク並みに速かったぞ。何あの音速。ソニツクと良い勝負になるんじゃないの?あ、あの両親もいつの間にか消えてる。

何だ?あの人ら、実は『ザ・ワールド』使いだっただのか?(違います)

こいし「お兄ちゃん、少なくともあの人達はD I Oみたいな時止め持っていないから。」

ガルツチ「聞こえてたか。」

九郎「なんとというか、旅をさせたらここまで性格が変わるものなのか?」

ガルツチ「安心して父上、少なくとも僕は特質だから。他の人だったらここまでにならない。……………多分。」

まあとりあえず、まずは町長に会いに――

『仮面ライダーカブトOP NEXT LEVEL』

ん? 誰からだろう。

『ピッ』

ガルツチ「はい、もしもし。」

??? 『もしもし!? ガルツチか?』

ガルツチ「え、ええ。つてその声、火ノ兄か!」

火ノ兄『ああ、久し振りと言いたいが、大変なことが起こった!!』

未来「どうした?」

ガルツチ「(未来、ちょっと待って。) 何があったんですか?」

火ノ兄『深海棲艦の事なんだが、一部の奴が反乱を起こし、アフリカ大陸を占拠したと!』

なにい!?! どういうこったな!?

火ノ兄『原因不明なのだが、此を解決できるのは君しか居ないと思っただ。頼む、すぐにこつちに――』

ガルツチ「火ノ兄、すまないがそれはできない。」

火ノ兄『な、何故?!』

ガルツチ「実は今、ゼロノスと呼ばれる『零の龍神』と戦わなきゃならないんだ。その為には、『全の竜神』である本郷猛の捜索をしているんだ。」

火ノ兄『そ、そうか……………。』

ガルツチ「だけど、代わりの人なら頼めるかも知れない。それで頼む。」

火ノ兄『わかった。すまない、邪魔して。』

ガルツチ「構わない、連絡感謝する。」

さて、通信が切れたことだし、早速母さんに聞いてみるか。母さん、ちよつと頼めるか？

全王神『ハイハイイ、ニッコニコ〜！貴方のハートに——』

また殴りたいの？（ニッコリ）

全王神『あ、はい。ごめんちゃい。それはそうとどうかしたの？』  
艦これ世界の火ノ兄龍馬って言う人から、緊急事態が発生したんだ。正直いって、此方から行くにも時間が掛かってしまうし、何より猛の搜索をしなくちゃならないんだ。

全王神『えーつと、それってつまり……………英竜ちゃん達に頼むって事？』

出来ればそうしたいが、一応頼んでくれるか？

全王神『うん、わかった！』

到着場所は以前僕が使ってた不死鳥鎮守府にしてくれ。他の艦娘達にも伝えるから。

全王神『OK!!もう、モテる男は辛いねえガルツチちゃん！♡終わったら一緒に子作りとか——』

却下。それだと近親相姦になるだろ。

全王神『えく、しようよく。』

なんでき。それだと未来にも頼めば——

未来「ちよつと待って、ガルツチ。何僕を売ろうとしてるの!？」

ガルツチ「聞こえてたか。」

全王神『あ！だったらみつくんとガルツチちゃんをまとめてヤッチャえばいいんだ!!』

ちよつと待てええええええええ!!本気!?本気で言ってるの?!

全王神『私は何時でも本気だよ!!って事で、アディオス。♪』  
うわー、とんでもない事になっちゃったよ。如何すれば良いの此？  
深雪「えーつと、ガルツチ？実はうちの龍神王にも……………」  
ガルツチ「お前もか……………」

フラン「お兄ちゃん達、とんでもない神様に当てられちゃったね

.....」

紫「ガルツチざまあ〜。w w w w」

『プツッ』

ガルツチ「.....スキマごと破壊してやるから、そこ動くなよ?」

紫「あ、オワタ〜( ^ o ^ ) /」

ガルツチ「『イマジナリー・ライトニング・ノア』!!」

今回の紫 ガルツチの『虚』の力を宿したスペシウム光線を発動させ、直撃して死亡

全員『うわー、エグい。』

ガルツチ「うん、凄い威力。今後敵が来たら使おうかな。」

全員『敵の人、南無阿弥陀仏。』

ん? 何で皆念仏唱えてるんだろ? まあいいか。

t o b e c o n t i n u e d →



## 第70話 歓迎

—ヒメムラサキ 町長の家—

未来 side

それにしても、ガルツチが住んでた街って、なんだか賑やかだったなあ。でも、ガルツチが出したあの殺気、ホントにびっくりしたよ。そう思いながら、ようやく町長がいると思われる家に着き、中に入っただけだった。

「ようこそ、おいで下さった。そして、よく帰ってきたエンド。いや今はガルツチじゃったな。」

ガルツチ「お久しぶりです、町長。」

「ああ、しかし結構人というのも変わるんじゃないかな。皆、此方に来るが良い。茶を用意しよう。」

ガルツチ「変な物用意しないですよ?」

「酷いなあ、そんなに儂が信用できんのか?」

ガルツチ「大体、貴方の場合って湯呑みにギャグ漫画日和の聖徳太子が浮いていたり、茶の筈なのに何故かトロピカル風だったし、それならまだしも挙げ句の果てには精液的な粘りが——」

「ごめんなさい、それ以上は勘弁して下さい。」

ガルツチ「あれセクハラですよ?男に欲情するって、ホモですか?」  
「わかった、わかったからこれ以上やめて。」

町長の威厳って、ガルツチよりも低いのかな?っていうか町長、後で詳しく——

ガルツチ「未来、お茶に精液は入れないでね? (へー!）」

未来「バレてた……………。(・|・)」

ガルツチ「まあでも……………、気が向いたら……………別がいいけど……………。／／／／／／／／／／／／／／／／」

ガルツチ、それも誘ってるよ。

そんなこんなで、人数分の”普通”のお茶が置かれた。いたって”普通”のお茶の筈なのに、ガルツチは未だに警戒していた。そこまで

のものなのだろうか？

「安心しろ、”今回”は何も怪しいものは入れてない。」

ガルツチ「今回は？」

「あ、えと。ホントに何も無いからーうん。」

結構警戒してるけど、それぐらいヤバかったって事なんだね。しかし、飲んでみたところ何の事は無い普通の緑茶だった。

「さてと、ここまで来る経緯は、ケルピーから聞いた。お主ら、特にガルツチ。どうやら思ってた以上に壮絶な旅をしていたのじゃな。今はゼロノスという者の相手をしておるのか。」

ガルツチ「ええ。」

「ゼロノス……………、彼奴は龍神の中で一番の危険な奴で、一度指名手配もしたと言われてる極悪の奴じゃ。ガルドもそうなんじゃが、奴はただ妹思いで、亡くなつてから彼奴は悪い奴じゃないと、皆が認識し始めたようじゃいな。」

ガルツチ「……………それって、ギルサンダーが？」

「そうじゃな。何でもギルサンダーの妻である『アサナト』が、兄さんの恩を返したいと言う思いで、ギルサンダーに頼み込んだそうだ。勿論、ギルサンダーも快く受け入れたそうだ。だから、ガルド。いや今は、ジャックじゃな。安心しろ。」

多分ジャックさん、今頃安心してらるだろうね。鈴美さんも、少しだけホツとしているらしいね。

「しかし、ガルツチ。お主が神様でありながら、『虚の龍神』だとは。こりゃ儂らも一本とられたわ！」

ガルツチ「自慢できるもんじゃありませんよ、町長。」

「しかも、まだ愛人居るんじやろ？」

全員『え？』

ガルツチ「……………少なくとも、僕の意志じゃないぞ。(…?)」

ガルツチって、数百年間修行のために色々と世界を飛び回ってたのは知ってるけど、まさか愛人を作ってるなんて思わなかった……………。

ガルツチ「まあ例を挙げるなら、『進撃の巨人』のヒストリカだな。ヒストリカは、ある一国の女王様でね。でも、僕でも想像絶する位の酷い扱いをされていたらしくてね。聞いてから少しキレたよ。んで、僕は言っちゃったんだ。」

『巫山戯るな、ヒストリカ。』

『え?』

『彼奴らは君を目の敵をしていた。お前を生まなければだど?あんなのが親だとよく言えたな!!僕だったら、其奴を絶対殺す。そしてこう言っちゃるさ。だったら最初から軽はずみに生むな!傷つける為に産ませたんだったら、さっさとくたばっちゃまえ!ってね。』

『ちよ、ちよつとガルツチ。それは流石に……………。』

『ヒストリカ、あんな奴等見限れよ。あんなのが親なんて、僕は認めない。困ってるなら言ってくれ。あの親のようにはしない。ユミル程じゃないが、君を狙ってくる奴等を、僕が皆殺しにしてやる。王族?巨人?関係ない。ユミルの仇はちゃんと取ってやる。いずれ、どこかいつちやうだろうけど、それでも可能な限り、全力で守ってやる。』

『……………ホントに、私を守ってくれるの?』

『約束してやる。我が刃に誓って。』

未来「ガルツチ、多分それだと思うよ？」

ガルツチ「え？」

フラン「お兄ちゃんの優しきって、どこまでモテさせるんだろう。」  
簪「多分ガルツチって、自分に起こった境遇を目の辺りにした人を見るのが嫌いで、自分のようにならないように、ああ言う行動をしたんじゃないかな？」

深雪「あー、あり得そう。」

未来「……………それで愛人が出来るって、凄いと思うよ？」

ガルツチ「いやまって、僕はそういう奴等を守りたいって言うだけで、別に愛人を増やしたいなんて一言も——って、ヒストリカ!?いきなり念話しないで!?ユミル、お前も!!っておいおい、めだかもかよ!?!って念話なのに何脱ごうとしてるんだよ!?!何?『練り上げたこの肉体を、衆目にさらすことに、一体何をためらう必要がある?』だって?大ありだよ!?!そもそも、念話だから見せるなんて無理だったの!!」

っていうか、めだかさんも愛人関係なんだ。今更だけど、ホントに懐大きいなあ。多分『女祝の相』が原因だけど。そういえば、念話っ

て愛人にも有効なのかな？

イリヤ「むう、私達の知らない内に愛人がいたなんて。狡いよお兄ちゃん！私達にも紹介して!!」

フラこい「「そーよ、そーよー!」」

ガルツチ「いや待て、嫉妬じゃないんか!？」

本音「…………モテすぎってのも、大変だね。」

白夜叉「いや、どちらかといえば、お人好しに優しくするのが仇なんじゃないかな？」

鈴美「私も、そう思う。」

簪「むしろ、めだかさんと知り合いなのが初めてだよ。やっぱり数百年間旅しながら修行してる内に、愛人も作って———ハッ!もしかして———」

ガルツチ「ストップ簪、なんか想像しているが、少なくともそう言うのはないからね?未来で十分だから、な?」

何を想像していたんだろ?

「ハッハッハ!!やっぱ若い奴らはいいのう!!九郎も華怜もそうは思わんか?」

ガルツチ「あのさ、一応言うけど僕はどっちかというところジジイだからね?」

「関係あるまい、見た目は14歳なんじゃから。って、ホレホレ。若いもんが年寄りに暴力振ろうと考えるな。」

ガルツチ「誰のせいだと思ってるんだ?」

そんなこんなで馬鹿騒ぎが終わったのは、太陽が沈んだときだった。僕は町長が用意してくれた貸切の宿屋に入り、暫くは滞在することに決めた。

ガルツチは、一度家に向かったけど、久しぶりに家族団欒でもするのかな?まあ、部屋も空いてるけど数名しかは入れないって言ってたし、ここは平等でみんなでジャンケンしようっと。

(ちなみにガルツチは除外。)

勝ちました。ガルツチの家に入れるのは、僕と簪、フラン、そして

深雪さんだった。それにしても、ガルツチの家って質素なところはあ  
るけど、広いんだね。食事は基本ガルツチが作ってくれたけど、華怜  
さん滅茶苦茶やばいって顔していたっけ。  
しかし、楽しそうだね。ガルツチは。

sideChange

—ヒメムラサキ ガルツチの家—

ガルツチside

はあ、御飯食べたし、久々にここの風呂に入ったし、そろそろ寝よ  
うか——

『コンコンツ』

ん？誰だろう？って、ミストか。

ミスト「兄や、入って良い？」

ガルツチ「うん、いいよ。」

そう言い、ミストは僕の部屋に入ってきた。しかし、ミストの寝間  
着は久しぶりに見たな。そういえばこんな可愛らしい服を着ていた  
んだっけ。

ミスト「兄やって、最近女装とか始めたの？」

ガルツチ「あ、いやその……………。友人がな、まともな服装用意し  
なくて、それに——」

ミスト「でも、似合ってるから気にしないよ。」

因みに、僕が着ていたのは、アストルフオの私服で、以前未来が着  
せてくれた奴だ。

ガルツチ「なあ、ミスト。」

ミスト「なあに？」

ガルツチ「寂しかったか？数百年、いや数千年もの間、君を一人に  
させたのは……………」

ミスト「うーん、寂しくないって言ったら嘘になるけど、泣きたくなるほど、寂しかった。」

ガルツチ「そつか……………。ごめん、自分のことばかり気にして。正直、ここまで壮大な旅になるなんて、思わなかったんだ。ラヴオスを倒してハイ終了って、思ったのに……………」

ミスト「私も。でも、その分楽しかったでしょ？自分が何者なのか、本当の家族は誰なのか、そして、どんな能力を持っていたか。」

まあ確かに、負けてしまったからこそ、こう言う人生を歩めたってのは事実だな。クソ、負けて悔しいと思ってたが、事実そのお陰でフラン達と結婚し、更には未来達と出会えたってのも、実際嬉しかったし。

あーもー、考えるの辞めよう。

ガルツチ「まあ、どちらにせよ寂しい思いをさせたのは、変わりないけどね……………」

ミスト「そうでもないよ。そのリアクターで、色々サポートしながら頑張っていたし、何より兄やと一緒にだったから、そこまでじゃないと思うよ。」

ガルツチ「まあ、今じゃリアクターじゃなく、改造して別のものになったしね。まあまだリアクターの原型もあるし、此誰かに送った方がいいかな？」

ミスト「良いと思うよ。でも、兄や疲れてるでしょ？長旅で。」

そういえば、確かに長旅やら戦いで結構疲れていたし、ちよっと動きも鈍い気がするな。

ガルツチ「確かに、そうだな。」

ミスト「そつか、だったらマツサージしてあげるから、服脱いで。」

ガルツチ「うん。」

まあパジャマ着た意味なかったか。

そう思いながら、僕は服を脱いで、一応下着姿になってうつぶせ寝となった。うーん、なんだろう……………。何故かこの後の展開が見えてくる気がするな。

ミスト「それじゃあまず、ローションを塗ってあげるね。」





る。

東「あ、ホントに悶絶死した。まいつか。」

『ヤッダアアバアアアアア』  
ん？なんかどこぞのスキマ大b b aの声が聞こえた気がするが、気のせいか。

ミスト「ねえ、大丈夫？」

ガルツチ「大丈夫つ、とは言えないかな？凄くムラムラするしつ……………。／／／／／／／／／／」

ミスト「うー、やっぱりあの胡散臭そうなオバサンらしい人に貰ったのは間違いだったのかなあ？」

ん？胡散臭そうなオバサンらしい人？

ガルツチ「ちよい良いかっ？その胡散臭そうなオバサンって、名前言ってたか？／／／／／／／／／／」

ミスト「えーつと、『幻想郷の賢者』とか何とか……………」

ガルツチ「……………彼奴には麻婆豆腐をプレゼントしてやろう。」

やっぱり奴だったか。何にせよ、絶対許さん。って、ちよつと待て？そーいえばミストは、あのローション直に触っていたな。まさか……………」

ミスト「そーいえば、兄や。ずっと思ってたんだけど……………」

ガルツチ「？／／／／／／／／／／」

ミスト「お母さんの占い方、知ってる？」

ガルツチ「いやつ、全くつ。／／／／／／／／／／」

ミスト「実はとうとね、性交行為をしながら……………」

ガルツチ「OKなんか知らないけど想像できた。それ父上の如何なの？」

ミスト「気にしてないって。それで、お願いがあるけど……………」

ガルツチ「あー、皆まで言わなくて良い。それに、さ。／＼／＼／＼／

ミスト「？」

ガルツチ「その、頼まなくったって、久しぶりに……………、したいしさ。／＼／＼／＼」

ミスト「……………なんだ、それなら。」

マッサージも終え、仰向けにさせられ、そのまま乗りかかってきた。

ミスト「今日は私と、一緒に甘い一時を——」

ガルツチ「つとその前に……………」

ミスト「？」

ガルツチ「おーい、未来、簪、フラン。どんだけ覗き見するの？」

ミスト「え？」

扉に声をかけるとすぐ開き、何かとムラムラしまくってる3人がいた。ってか、何してんの？

ガルツチ「いやまあ、確かにマッサージしていたときに喘いでたのは否定しない。聞き耳はともかく、覗き見するか普通？」

未来「そうは言うけど、あんなに喘いでたら気になって覗きたくなるよ。」

簪「それでミストちゃん、ガルツチには一体何をしていたのですか？」

簪、何メモ帳持つて女の子がしちやいけないような顔で質問してるの？いやまあ端から見たら近親相姦のようなもんだけど……………。

ミスト「ただのマッサージだけ？兄やって、結構長旅してるでしょ？だから、マッサージで癒やしてあげようかなあって。」

フラン「ただのマッサージだったら、あんなに喘がないけど、何か特別な事でもしてもらってるの？お兄ちゃん。」

ガルツチ「文句を言うなら、このローションを送りつけた本人に言ってくれ。お陰でムラムラしていて大変なんだから……………」

未来「え？ローションで？」

ガルツチ「ただのローションかと思ったら、此媚薬と精力剤を混合したローションなんだ。しかもメツチャ強力。」

僕はそのローションを投げ、未来がキャッチした。

未来「何でこんなのを？」

ガルツチ「紫からもらったらしい。」

未来「何してるのあの人……………」

フラン「ところで、ムラムラしてるなら今回は——」

ガルツチ「ごめん、今回は妹と戯れたいんだ。期待して悪いけど、次の機会にしてくれ。」

そう言い、フラン達とやりたい衝動を抑えつけ、出て行かせた。そのまま布団に寝転がり、ミストは仰向けになった僕を跨がり、何時でも犯す準備をしていた。

ミスト「よかったの？」

ガルツチ「うん、今日は寂しがってた妹を精一杯可愛がらないといけないからね。」

ミスト「もう、昔と変わんないね。兄や。」

ガルツチ「変わり損ねた成れの果てさ。」

そうして僕は、ミストの唇を重ね、お互い抱きしめ合った。というかミストとセックスって何時ぶりなんだろ？確か、レイスを救助しにいった際に秘密の扉の中に入った瞬間だっけ？あの時以外、ミストとはやってなかったしなあ……………。

ミスト「んふっ、ホントに可愛い顔だね。」

ガルツチ「い、言うなよ恥ずかしい……………。／／／／／／／／／／」

ミスト「それに、今回はちよつとサキユバス？っぽい事してみようかなって、ある霊術を覚えたの。」

ん？なんだろ？種族をサキユバスに変える霊術なんて、あったっけ？

ミスト「淫に現れ、色欲は我に憑依、性に溺れしはこの悦楽。『淫獣憑依・サキユバス』！」

詠唱が終わると同時に、ミストの背中に悪魔の翼が生え、尻尾も生えた。……………つて。

ガルツチ「ゴハッ!？」

ミスト「え?!兄や大丈夫!？」



ミスト「ひゃ!! 凄い濃い精液が、いっぱい私にかかっちゃうううう。♡♡♡」

ミストのおまんこに触れるや否や、比較にならないほどの精液が一気に噴出し、お互いに精液塗れになってしまった。

ガルツチ「くっ………、あ………。/// /// ///  
きつ、気持ち良すぎるっ………! /// /// ///  
だ、入ってないのにな………! /// /// ///

ミスト「はあ、はあ………。/// /// /// 兄やの  
精液が沢山かかっちゃって、そのままイっちゃった………。///  
/// /// /// /// /// /// /// /// ///  
赤ちゃん出来ちゃうそう………。/// /// ///  
ガルツチ「だったら、作る? /// /// /// ミスト

がっ、望むならっ、僕は構わないから………。♡」

ミスト「いいのっ? 私には早いつて、お母さんが——」

ガルツチ「そんなわけっ、ないでしょ! /// ///  
♡♡♡」

まだくっついたままのミストのおまんこを、そのまま一気に挿入させていった。凄く痙攣しているのか、再び射精欲が高まってくるのがわかった。

ガルツチ「それを言うなら、フラン達だつてそうだよっ! まだ早いつて見た目の歳だよ? でも、それが如何したっ? 君が望むならっ、僕が孕ましてあげるよっ。何度でも、何度でもっ!! ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

ミスト「兄や………。」

早いなんてものはない。かと言って遅いなんてものはない。ただ何時行動を起こすのか。それだけだ、それだけが満足感よ。

ミスト「お願いっ、私と兄やの子供っ、作つてっ。/// ///  
/// ///  
ガルツチ「いいよ、子供が出来るまでっ、何度でも孕ましてあげるっ

!」

そうして、何度も何度もミストの子宮に大量の精液を送り込み、萎

え初めてきたらミストが尻尾を使って再び勃起させて、とことんやり  
尽くしていた。

sideChange

未来side

え？ちよつと待って、ガルツチの精液滅茶苦茶出してない？しか  
も、ミストって言う子の姿が、何故かサキユバス？って言うのになっ  
てるし。

やっぱり参加するべきだったあああああああああ！！！！  
フラン「しかも、子作りするって言っちゃってるわね。！お兄ちゃん  
達。」

簪「あれもう、本気で作る気満々だよね……………」

未来「うーん、どうしよう……………。いつそ僕達も参加して、乱交パ  
ティーでも……………」

フラン「未来お兄ちゃん、私もそうしたいけど、お兄ちゃんの妹ちゃ  
んが寂しがっていたようだし、今回は譲ってあげたら？」

未来「フランがそう言うのなら……………」

フラン「代わりに……………」

代わりに？そんな疑問を持つとしたら、いきなり押し倒されてし  
まい凄く艶めかしい目で僕を見ていた。フランって、吸血鬼の筈なの  
に、この時って何故かサキユバスに見えちゃうんだけど、気のせいかな？

フラン「未来お兄ちゃんの精液でも、戴こうかしら。♡」

簪「フランちゃん、私も入れさせて。」

フラン「いいよ。それじゃあ早速……………ッ!」

簪「え、ど……………どういう事!」

いきなり全部脱がされると同時に、何故かフランと簪は驚愕した顔  
をしていた。何かあったのかな？

フラン「……………これ、お兄ちゃんに見せるべき?」

簪「いやまっつて、これ見せた途端混乱しちゃうかも。」

未来「ねえ、2人とも如何したの？」

フラン「えーつとね、未来お兄ちゃん。覚悟して聞いて欲しいんだけど……………」

未来「？」

簪「未来、貴方……………『ふたなり』になってるよ。」

………  
はい？

え？僕が？ちよつと待って、もしかしてフラン達のようなのが？

簪「今手鏡しかないけど、それで見てみて。」

と、手鏡で僕の股間部分に映すと、そこには普通男には無いはずの割れ目があつて、一度開いてみると、本当にふたなりと化していた。

未来「嘘くん。何で？」

両儀式『あー、なるほど。多分俺らがこの肉体に入ったときに、偶然本来の性別を取り戻したのか、そう言う風になったんだろうな。

まあ、此でお前も子供が作れるって事でいいじゃねえか。やったな未来、正式なお母さんになれるぞ！」

未来「……………これ、喜ぶべきか悲しむべきか複雑な気持ちになつてきた。」

『ゴクリッ』

あれ？2人とも、何だか凄い目をし始めたんだけど、ねえちよつと？何だかいやな予感がし始めたんだけど。

簪「フラン、貴方はどっち攻める？」

フラン「そうね、未来お兄ちゃんのおまんこから攻めようかしら。」

簪「いいよ。って事で未来、いっぱい出させてあげるね。♡♡」

フラン「その代わり、私の精液、受け止めて。♡♡」

うー、そんな同時に攻められたら、メスになつちやいそうく……………。

sideChange

—???

ゼロノスside

……………知つてた。信用していなかったとは言え、やっぱり失敗したか。時臣の奴、見つかったら撤退しろと言つたというのに、あのうっかりめ……………。しかもよりにもよつて全部のホムンクルスを連れていくとか、どこまで馬鹿なのだ!?

あーダメだ、少しイライラしてくる。この時は、まずは紅茶を飲んで……………。

『ブフォツ!?!』

なんだ此!?!滅茶苦茶不味い紅茶だな!?!しかもこれ、見習い以前の問題だぞ!?!クソ、しかもよりにもよつてブランド紅茶だし……………。

ゼロノス「おい、この紅茶を入れた奴出て来い!!」



「ゲホッ！ゲホッ！す、すみません……………。ゼロノス……………、さ……………ま……………」

ゼロノス「お前か！って、如何した？風邪か？」

「え、ええ。」

ゼロノス「つていうかお前、アールグレイを頼んだ筈だぞ。しかもこの紅茶、ブランドなんだが？」

「申し訳ございません。ゴホッ！ゴホッ！何しろ、私……………何時如何なる時も、ゼロノス様に満足出来るように……………。ゲホッ！ゲホッ！」

え？此奴、休み無しでずっと紅茶担当してたのか!?だとしたら、俺相当な馬鹿野郎じゃねえか……………。

ゼロノス「わ、悪かった！文句言ったのは謝る。だが先ずは、ちゃんと体調治してからにしろ。というか、治るまで紅茶作るな!!」

「し、しかし……………」

ゼロノス「ええい!!これは絶対命令だ!!治るまで休め!!」

「は、はい!!」

はあ、まさか風邪すら気付かないとは……………。紅茶担当は風邪、そして時臣は敗北し英竜の配下に。しかも全ホムンクルスも同様に……………。一応まだ換えは作れてるが、此だとジリ貧だな。如何したものか……………。

ゼロノス「……………何か良い案は……………」

???「おいゼロノス、まだ出番は来ないのか？」

ゼロノス「ん？レフか。」

レフ「全く、あのお方も出番まだかと言っているぞ。」

ゼロノス「ゲーティアもか……………。仕方あるまい。出撃の許可してやる。魔神柱とホムンクルス、あとアルキメデスも連れていけ。もう英竜の能力をコピーするのは諦めた。抹殺しろ。ついでだから、其奴がいる世界を滅ぼせ。」

レフ「はっ、仰せの通りに。」

正直英竜の能力を手に入れたかったが、やむを得ん。いずれ邪魔にもなるし、戦力を削ぐことが出来れば、奴等にとっても不利になるは



正直ここまで激しすぎるセックスは、多分無かったぞ？アニムだつて、ここまでしなかったし、というかほとんどのサキユバスはそんなに激しく無かったぞ？

うーん、憑依したサキユバスが原因なのか、それともミストの性欲が異常過ぎるのか……………。

まあ数百回以上も射精しまくった僕も異常すぎるが。いやもう考えるのは止そう。だって……………、ミストの寝息が凄く色っぽいし、喘いでるせいで変に意識しちゃうし。

レイン、お前の初恋の人、相当な性欲の持ち主だったよ……………。

そして朝になり、少し眠気を感じながら降りて、シャワーを浴びようとした。

華怜「おはようガルツチ、昨夜は凄くお楽しみだったわね。」

ガルツチ「ホントにな。というか母上、ミストから聞いたが、母上の占い方って、セックスなの？」

華怜「いきなりド直球に聞いたわね。まあそうね、大体が夜限定で受け付けていて、基本男性だけ占ってるの。」

ガルツチ「因みに、何の占い？」

華怜「恋愛運と淫乱運とかかな？」

ガルツチ「……………そんな占い方あるのか普通？」

華怜「私限定だけだね。一応避妊対策はちゃんとしてるよ。」  
母上、ホントはセックスを楽しむためにそんな事してるだけだろ。  
そう思っていた僕だった。

ガルツチ「まあいいけど、あまり無理しないでよ?」  
華怜「はい。」

しかし、ホントに随分と精液のにおいがついたな。早く体全体洗つて、においを落とさないと……………。

ガルツチ「さーて、先ずは——」

未来「あつ、簪いいっ!」

簪「出すよつ、未来っ!私の精子受け取つてええええええ!!!」

『ドボボボポリュボビュボビュウウツ!』

……………ん?気のせいかな?簪が挿入している場所に、違和感を感じるんだけど……………?つて、あら?え?ちよつと待て!?

未来「あつ、ガルツチつ。おはようつ。」

ガルツチ「えーつと、未来? (。D。)」

未来「何っ?」

ガルツチ「あの、如何したの?それ。いつから、ふたなりに?」

未来「気が付いたらこうなった。」

……………なんでき。

簪「ねえ、今度はガルツチもしてみない?未来のおまんこ凄く気持ちいいよ。」

ガルツチ「……………いいよ。」

理性より快樂の勝利。ダメだこりや……………。

そして、滅茶苦茶セックスしまくつた。

t o b e c o n t i n u e d  
⇒

## 第71話 懐かしきお守り

―スピリットレストラン― 月夜ノ刻―

村正 side

どうも、ガルツチさんの愛人でありエンドの恋人の村正です。今ちよつと探し物しています。探し物っていうのは、昔私が作った星型のお守りで、私は桜色、雁夜は緑色、エンドは藍色という、いわばテラ、ヴェントウス、アクアのようなお守りを探しているの。

だけど、転生したせいなのか、どうやら置いてちやつたみたい。

村正「ハア……………」

エンド「如何したの、村正。」

村正「あ、エンド。実はというよね。私が作ったお守り、あつちの世界に追いつちやつたみたいなんだ。」

雁夜「そういえば、そうだな。でも問題は、エンドのお守りだね……………」

エンド「あー、ラヴォスと戦つてたときか。あれ何処に行ったんだろ。」

村正「うーん、一度ガルツチさんに連絡してみる?」

エンド「そうだね。」

side Change

―ヒメムラサキ 外―

ガルツチ side

村正『つて事で、お守り探してくれない?』

ガルツチ「お守りかあ、んじやあ見つかったらそれらを送るね。」

村正『うん。』

さて、今日は久しぶりに外に出回つて近くにある森にみんなで一緒に行こうとしたら、村正から連絡がきた。

しかしお守りかあ、これは手間が掛かりそうだな。

ミスト「誰からだつたの?」

ガルツチ「村正から。お守りを探してきてって言われて。」

未来「お守り?どんなの?」

ガルツチ「キングダムハーツをやってる人ならわかるが、テラ、ヴェントウス、アクアの3人が持つてるお守りと酷似している奴なんだ。中央には桜の花びらで、僕のは藍色、雁夜は緑色、んで村正さんは桜色なんだ。」

ミスト「でも、兄やお守りってラヴオスの時に持って行っちゃったんだよね。」

ガルツチ「うん、仮に2つ見つけたとしても、僕のがなあ……………」  
というか、そのお守り何処にやったのか分かんないしなあ……………。それさえ分かればどうにか—————

鈴美「ねえ、誰か倒れてるよ?」

ガルツチ「ん?あれって……………」

あの姿にあのスライムみたいな色……………、ってあれって!!

ガルツチ「ライム!?おい、大丈夫か!」

フラン「え?知り合い!」

???「う……………あ……………」

ガルツチ「しつかりしろ、ライム!如何したんだ!」

アラヤ「母さん、この子の生命バイタルが低下してるよ。何か、毒を盛られてるようだよ。」

ガルツチ「毒ツ!」

やばい、早く治療しないと。確か、毒消し薬を持っていたはず……………。スライムだし、全身にかければ早くなるかも……………。

こいし「それにしても、この子何で毒なんか……………」

未来「まだ来たばかりで分からないけど、一体何が……………」

???「う……………ん……………あれ?……………ロスト?」

ガルツチ「ライム、何があつたんだ?」

ライム「ロスト!!」ガバツ

ガルツチ「うお!」

毒が治ったと同時に押し倒されてしまうも、今回は服は溶けなかった。

ライム「あー、やっぱりこのにおい……………ロストなんだね。」  
ガルツチ「おい待て、ライム。何があつたんだ？」

ライム「あ、そうだ!!ロスト、大変な事が起こったの!!」  
ガルツチ「大変な事？」

ライム「兎に角、私についてきて。」

元気になったのはいいが、余り無茶しないで欲しいなあ……………。  
本音「えーっと、これどういう状況？」

ガルツチ「今は先ず、ライムに着いていこう。」

ライム「こつちだよ!」

『ライム 17歳 誕生日不明 性別：女

身長：130〜155cm 体重：45kg

CV、種田理沙

種族：スライム娘

スリーサイズ：B98/W76/H99（最大はB110/W80  
/H100）

ロスト・エンドの頃の幼なじみのスライム娘。最初に出会った頃は  
獲物として見ていたのだが、別の魔物に襲われていたときに助けら  
れ、今では好意を抱く。

主食は精液で、日々男性が来ると襲いかかって無くなるまで絞り尽  
くすのだが、ガルツチの精液を味わったのか、もうガルツチ無しじゃ  
生きていけない程、依存している。（因みに、任意的にあげていまし  
た。）」

（風龍「というか、スライム娘が幼なじみってどゆこと？」

士「お前が設定してるだろうが。」

―スライム娘の村跡―

つて、なんじゃあああああああああ!?

未来「酷い、村が……………」

ライム「実は人間達がここに攻めて、村を壊滅まで追い込んだのよ。しかも、私達の村長は、自分を犠牲にして……………」

ガルツチ「じゃあ、ここにはもう、君しかないのか?」

ライム「私はそう思いたくない。誰か生き残ってくれればいいけど……………」

ミスト「兄や、ライムちゃん。安心して。少なくとも生存者は確認できたわ。」

ガルライ「「ホント!?!」」

ミスト「うん、ただ微弱な生命バイタルだから、手分けして探した方が良いかも。」

ガルツチ「よし、だったら見つけたらあの家に運ぼう。」

皆は頷き、それぞれ行動に出た。

sideChange

—ロードの家—

ロードside

ゲートイアか……………。しかも魔神柱やアルキメデス、そしてレフもあの場にいるのか。さてと。

ロード「魔神柱フェニックス、状況は?」

フェニックス『はつ、現在如何裏切るかタイミングを測ってます。』

ロード「一応聞くが、君は不老不死かつ不死身であつてるよね?」

フェニックス『ええ、他の魔神柱には気付いていません。ですが、全魔神柱、どうやら殺されても永遠と復活する傾向があるようです。』

永遠と復活する……………か。だったら……………。

ロード「シーモア、いるか。」

シーモア「お呼びでしょうか、ロード様。」

ロード「確か君は、異体から最終異体の能力と、シンの宝具も持っていたよね?」



シーモア「ええ、持っています。」

ロード「よし、だったら早速任務として、英竜達がいる世界に行き、援護して欲しい。ただし、魔神柱のフェニックスは殺さないように。裏切る準備をしてるから。」

シーモア「畏まりました。ですが、シンの宝具である『グラビドン』系は、相当な影響を及ぼしますが……………」

ロード「恐らく大丈夫だろう。さあ、行け。」

シーモア「では……………」

頼んだぞ、サーヴァントキャスターの『シーモア』よ。  
sideChange

—スライム娘の村跡—

ガルツチside

ライム「此で全部？」

ミスト「うん。」

しかし、スライム娘って色の種類あるんだな。ピンク色もいれば黄色もいるし、更には僕の髪の色と同じスライム娘もいたし……………」

ガルツチ「……………ほとんど毒でやられてるのが多いな。流石に魔法薬では対処しきれないか。つととなると、久しぶりにこの魔法で治すか。解毒『キアリースモーク』。」

僕の手の平から煙が現れ、スライム娘達に纏っていった。やがて、紫色になった霧は、そのまま消え去り、毒に冒されていたスライム娘達の意識が戻った。

「う……………ん？あれ？私、一体……………」

「って人間!？」

「くっ、良くも村と村長をつ！」

ライム「あー、待って待って皆！この人達違うよ!!」

「ライム!?!其奴らから離れろ!殺されるぞ!」

ガルツチ「おい、落ち着け。先ず何が起きたのか言ってくれ。」

「ハッ!誰が人間の命令なんか!」

ガルツチ「良いから言いなさい。」

「は……………、はい。」

本音「威圧で鎮めちゃった。」

少なくとも、僕らは状況も読めないってのに、あんな態度されたらキレそうだよ。何?カルシウム足りてないって?耐久性が低いのはカルシウムが足りてないからだって?

チヨット何言ッテルカ分カンナイ。

液状娘説明中

「んで、此が奴等の旗。」

ん?あれ?この旗何処かで……………でも、あの旗とはなんか違う。僕の知ってるのは、太陽が沈んでおらず、輝いている紋章なのに、沈み掛ける太陽の紋章なんて……………。でも、何故か見覚えがある……………。

ガルツチ「……………情報が足りない、一端ヒメムラサキに戻って、町長に連絡しないと。あ、そうそう。ライム達、ヒメムラサキに来ないか?事情は僕が説明するから。」

ライム「いいの!?!」

ガルツチ「村が壊滅してる今、住むとこないだろ?なら来いよ。」

ライム「うんっ!」

「ちよつとライムちゃん、その人達信用して良いの?」

ライム「大丈夫、ロストなら安心できるし、私達を守ってくれるもん。」

いやライム、少しは疑え。無警戒しすぎじゃ無いの?

未来「ねえ、ライムだっけ?」

ライム「?」

未来「ちよつと無警戒しすぎだよ?気を付けないと、レイプ魔に襲

われちやうかも知れないから。」

ライム「あ……………、うん。気を付ける。」

さてと、皆に如何説明しようかなあ……………。

t o b e c o n t i n u e d  
⇒

## 第72話 不穏なる王国

— ??? —

ゼロノス side

クツクツク、奴ら何も知らずに全滅しようと思死になっているな？  
魔神柱達が死んで行けば行くほど、こちらに英竜達のデータが揃って  
いく。

ようやくだ、ようやくで……………ん？

ゼロノス「何だ？魔神柱フェニックスが届くはずのデータが来ない  
？」

何故だ？一体何があったというのだ？いや、気にしないで置こう。  
ほぼ揃っていれば、後はどうでも良い。

っていうか、此が手っ取り早かった。馬鹿か？俺は？とりあえず資  
料はホムンクルスに渡してっと。

ゼロノス「ハア……………、疲れた。ちよつと気分転換に出掛けるか。  
ストレス解消の為に……………」

あー、疲れた……………。暫く出番無くてもいいや。

(風龍「オイオイオイオイ!?ラスボスが言っちゃいけない台詞だぞ!」

全王神「あー大丈夫、終盤で復活するし。」

風龍「それもそっか。」

士「とかさつきから、俺ツツコミ役にしかやってないんだが  
……………」

sideChange

— ヒメムラサキ 町長の家 —

ガルツチ side

ガルツチ「つというわけです。」

「なるほど、じゃからどういふ訳か、スライム娘達がガルツチ達と共に入ってきたという訳か。」

ミスト「そう言うことですね。」

まあ一応、その村で何が起こったのか、ライムが一から説明してくれた。

「……………!?そ、そうか。やはり……………」

ガルツチ「町長?やはりって?」

「ガルツチ、厄介なことになったぞ。この旗の紋章、変わってるが『サンライト王国』だぞ!」

ガルツチ「ブウウウツ!」

余りの驚きで、口に含んでいたお茶を吹き出してしまった。って、ホントに厄介なことになってるな!!

ガルツチ「嘘だろ!?嫌な予感はしていたが、そんな馬鹿なことがあるのか!」

「何だ?知ってるのか?」

ガルツチ「かつて、あそこに所属していた事があるが、前までは日光らしい日光なんて無かったんだ。最初は全く気にしていなかったんだが、段々不安になり、王に出会ってみたら、相当なぐーたらしてて、殆どが大臣が仕切ってたんだ。王子に関しては、何かを恐怖してるかのように震えてたし。んで、暫くしてファイヤーエンブレムの英雄王とも呼ばれる『マルス』に戦闘技術を叩き込まれ、大臣に反逆した結果、王も目が覚め、王子の正気も戻ってめでたしめでたしって思っていたんだけど……………」

「実はというとな、それからの事なんじゃが、お主がいなくなっから、またとんでもない事が起こったんじゃ。その王と王子が、『暗殺』されたんじゃ。」

な……………なんだと  
!?!?!?

ガルツチ「じゃあテイングはどうなったんだ!?他の奴は!」

未来「ガルツチ、落ち着いて。」



全員「え？」

ガルツチ「……………約束、だよ？／＼／＼／＼／＼」  
未来以外全員『（そこで落ち着くんだ……………。）』

（土「未来の奴、ガルツチの好感度カンストを振り切ったんじゃねえのか？」

風龍「……………」

なんか聞こえる気がするけど、別に――

全王神『ちよつと皆!!!聞いて頂戴!!!』

全員『!?!』

ガルツチ「おい母さん!!何だ急に!!」

全王神『良いから、先ずは此を見て!!』

一体何が……………。

英竜『“僕”の勝ちだな。ゲートティア。』

ゲートティア『……………ふん。好きにするが良い。』

あれ?何でだ?英竜の顔、何処かで……………?

英竜『ん?好きにしちやって良いの?』

ゲートティア『勝者には、敗者を好きにしても良い権利がある。煮ようが焼こうが殺そうが、好きにするが良い。』

英竜『あ、そう。じゃあ……………。クロックGを暫く貴方に預ける。

殺したら但じゃおかないけど、其の子と共に修行してみない?』

……………え?





当に壊すしか無いのかな。』

ゲートイア『……………主には、報告させてもらう。きっと後悔するぞ。』

英竜『そうなくても仕方ないよ。まっ、そうならないよう努力すれば、どんなに絶望的であっても、何度でも立ち直れるんじゃないかな?』

ゲートイア『……………ふん、来い。』

クロック『うあー♡』

そして、そのまま映像は途切れ――

ガルツチ「ガッ!?アアアア!?!」

ミスト「兄や!」

未来「ど、如何したの!」

なんだ此!?頭が、頭が割れるほど、痛い!??!なんだ!?一体何が!?

――???

痛みが引くと、そこにはクロックGとゲートイアが次元の狭間で休んでいるのが見えた。

ゲートイア『……………とは言え、今後は如何するべきか。』

クロック「?」

ゲートイア「早く気付くべきだったかもしれん。フェニックスはいつの間にか裏切り、ロードとか言う男に持って行かれ、そもそも我々魔神柱は、捨て駒に過ぎなかった。今更、主の所に戻る必要があるのか……………?」

クロック「あー、あー。」

ゲートイア「ん?なんだと?」

クロック「うー、あー。おー、おー。」

ゲートイア「主を裏切れと!?!しかし、私は……………。そういえば、あの遠坂凛と衛宮星夜の奴等は……………。」

何故だろ、ゲートイアに笑みがこぼれてた気がする……………。

ゲートイア『……………そこにいるのだろうか?ゼロノス様を仇となる者よ。』

ガルツチ「!？」

ゲーティア「なるほど、あの英竜とは違うベクトルで、相当な力と技術を持つてるようだ。」

ガルツチ「……………なら如何するんだ？」

ゲーティア「待て、私はもうお前達に敵対しない。それに、暫くはお前達の刺客は来ないであろう。」

ガルツチ「何故そう言える。」

ゲーティア「ゼロノス様は、既に英竜達の能力のデータを取得した。奴の最終兵器の完成まで、間近に迫ってきてる。が、配備されるのは、相当掛かる。」

ガルツチ「……………何故教える？」

ゲーティア「何故だろうな。貴様なら、ゼロノス様を止められると思っただからかな。」

クロック「あー、うー。」

おいおい、過大評価しすぎじゃねえか？

ゲーティア「さてと、いずれにせよ居場所を失った今、何処へ行くべきか……………」

ガルツチ「だったら、爺ちゃんのところに行つて。未来達から聞いたけど、スパルタではあるが、鍛えやすいだとか。」

ゲーティア「ふん、スパルタ教育か。ならばそこに向かおうではないか。行くぞ、クロックG。」

クロック「あーい。」

ゲーティアは立ち上がり、もう一度クロックGの手を握り歩き始めていった。

ゲーティア「忠告しておく。英竜に手を出すな。奴は、お前達が思っている以上に厄介な奴だぞ。」

ガルツチ「分かつてる。でも、もしあの人が僕の大切なものを奪おうとしてたら、その時は死ぬ覚悟で復讐する。」

例え未来達が、危険人物だと分かつてても、僕は最後まで守るつもりだ。完膚無きまで折り続けようが、錆びれていこうが、何度でも戦い

続ける。それが、『この世の全ての刃』が許された最後の使命だから。  
ゲートティア「……………そうか。」

そうして、2人は渦の先へ行き、姿を消した。

英竜「大きく出たね、ガルツチ。」

ガルツチ「……………聞いていたのか。」

英竜「ええ、勿論よ。最初から最後まで。」

ガルツチ「そうか。」

英竜「本気？貴方の大切なものを奪ったら、私に復讐するって。」

ガルツチ「ああ、勿論だ。」

英竜「いくら貴方でも、私には勝てないよ？」

ガルツチ「かもな。だが構わない。それならば何度でも立ち上がり、何度でもお前を殺す気で挑むから。」

ついでだから英竜、此方の忠告を聞いておけ。」

英竜「？」

ガルツチ「『この世の全ての刃』を、甘く見るな。鞘がなくなれば、全も、無も、虚も、何もかも斬り裂く『刃』と化す。『この世の全ての悪』より、質が悪いから、覚悟しておけ。」

英竜「……………何もかも斬り裂く『刃』、ね。分かった、その忠告受け取る。」

しかし、どうやってこっちに來たんだろ？いや、いいか。

ガルツチ「そういえば、英竜。」

英竜「なんだ？」

ガルツチ「もし、君の前世を教える気があつたら、誰でも良いから話してね。その辛さ、いつか身を滅ぼすかも知れない……………」

だから、僕みたいに一人で抱え込まないで。」

そうして、視界が真っ白になり、気がつけば、僕は布団に寝かされていた。

—ガルツチの家—

未来「ガルツチ！大丈夫!？」

ガルツチ「あ、ああ。何とかな。」

どうやらさっきの頭痛で気を失い、未来が家に運んでくれたようだ。

未来「もう、いきなり頭痛で倒れるんだから、皆慌ててたよ？ホントに——」

ガルツチ「……………」

でも、確かにあの頭痛は何だったんだろう？気が付いたら変な場所についたし、あれはどう言う意味なんだ？

だけど、何かが……………何かが近付いてる気がする。何なのかは分からないが、この頭痛は何かを意味している。

でも、如何していきなり頭痛なんか——

未来「ガルツチ!!」

ガルツチ「はいっ!？」

未来「ホントに大丈夫？今度はブーツとしていたようだけど……………」

ガルツチ「……………大丈夫。」

未来「何だか心配だよ。この世界に来てから、何だか様子がおかしいよ?？」

ガルツチ「つ……………」

未来「少し休んだら？それか、ここで旅をやめるのも——」  
ガルツチ「それだけはダメツ!!お願いだから、それだけは……………やめて。」

もう未来と離れたくない、また遠距離恋愛は、もう嫌なんだ……………。

未来「……………ごめん、此は禁句だったね。君の場合。」

ガルツチ「いや、怒鳴ってごめん。考え込んでいたとはいえ、心配掛けちゃったしね。」

未来「それで、何が見えたの?？」

ガルツチ「ゲートイアは、こう言ってた。今後は刺客は来ない、つて。それと、英竜と再会したんだけど、何故か既視感があったんだ。何処か見覚えがある気がして……………」

未来「え？それって、僕みたいなの？」

ガルツチ「さあ、未来と同様記憶が曖昧だからね。この記憶は、遠藤宇宙の頃か。ロスト・エンドの頃か。もしかしたら、僕の知らない本当の前世が、持っているのか。」

未来「待って、そこは考えすぎじゃないかな？少なくとも、君の前世は色々あるだろうけど、考え込みすぎるとパンクしちゃうよ？」

確かに、またあの頭痛は勘弁だ。

ガルツチ「って、考え込んだら、ちよっと目眩が……………」

未来「今日はゆつくり休んで、回復したら町長さんが言ってた『サインライト王国』の調査しに行こう？」

ガルツチ「分かった……………」

t o b e c o n t i n u e d  
→

## 第73話 思い出したくない場所

—草原 桜通り—

ガルツチ side

どうも、この世界に戻って以来何故か頭痛やら目眩やらし始めてきたガルツチです。いやもう散々だよ。如何したって言うの一体。今までの世界はこう言うことはなかったのに(大怪我は免れないが)、何でいきなりこんな症状が？

未来「ねえ、やっぱり休んでたほうが……………」

ガルツチ「分かっているが、やっぱり落ち着かないってどうか、どうもねえ……………」

実際、まだ頭痛と目眩が続いていて、今は未来に担がれながら歩いている状態になっていた。ホントに此なんなの？

ガルツチ「ん？」

今さつき、あの桜の木々に何かがいたような……………？

未来「如何したの？」

ガルツチ「あの桜の木々に何か……………」

未来「え……………いないけど？」

ガルツチ「……………遂に幻覚も見え始めてきたのか？死地に近づいて……………」

未来「ちよ、冗談でもそれ言うのはやめてっ!!」

此が冗談だったらどれだけ良いのか……………、幻覚も見え始めるって、もう死ぬのでは？

クリムゾン『おいおい、お前が死んだら物語が成り立たねえだろ?!』  
ラクト『でも、ホントに体調が悪くなってるよ？もし熱でも上がったら……………』

それこそ死地だな。というか頭痛に目眩、幻覚で更に熱が40度以上あつたら、もうこれ死を覚悟した方が……………」

ガイア『ヴァカか!?本気でそれだけはやめい!!!』

あー、何だか彼岸花が見えてきたく、綺麗だなあ……………。

未来「ガルツチ？ちよつと、通つちやダメなところに通ろうとしてない？」

イフ「未来、ガルツチの頭痛の原因が分かったぞ。どうやら、新たなスタンドが発現しようとしているのだ。」

未来「え？『ムーンライト・アウターヘル』とかあるのに？」

イフ「あれは転生神ラヴオスからの特典。オリジナルスタンドとは言え、特典のスタンドだから、実際にはガルツチのスタンドではない。」

ガルツチ「じゃあ、イフ。さっきの木々に何かがいたけど、見えたか？」

イフ「？そう言うのは、全く。」

嘘ん、じゃああれか？僕以外の人には全く見えない人でもいたのか？

ガルツチ「だが、疑問だけどさ。」

未来「ん？」

ガルツチ「僕ってスタンド暴走する理由なんてないよな？なのに、何で頭痛なんかに？目眩もそうだが……。」

未来「確かに、攻撃性とかもこれでもかかってぐらい高いしね。」

イフ「……………：俄には信じがたいが、精神なのでは？」

未来ガル「「え？」」

精神？いや待て、何でそうなる。確かに信じがたいけど、何故？

イフ「ここは仮説なのだが、ガルツチは虐待とか存在亡き者とか何かと不幸な目に遭つてるではないか？そのせいか、彼の精神はその頃に止まったまま。代わりに憎悪と憤怒が上塗りしていて、精神の代わりにとしてやっていたんだ。」

未来「そういえば、ガルツチってそう言うのは結構あるんだよね。それじゃあ、ガルツチの精神って、もしかして……………」

ガルツチ「……………：幼いかもな。確かに、憎悪と憤怒で上塗りしているから、幼くは見えないかも。でもスタンドは、見破ったってわけか。」

イフ「そう言うことだな。だが、ガルツチにしか見えない奴か

……………」

幼い……………、か。僕のスタンドは、見破っていたのかな？未だに虐待され、恐れてばかりの幼い自分を、見破ったって事なのかな？

未来「だとしたら、どうやって精神を強くすれば——」

ガルツチ「あ、さっきの子！」

未来イフ「「え？」」

ガルツチ「あ！待って、ちょっと待ってって!!」

未来イフ「「ガルツチ!？」」

何故だろ、何故か逃げてるあの子に近づくだけで頭痛と目眩が酷くなって……!でも、勘がこう言ってる。あの子が秘密を握ってるって……………」

そうしていく内に、段々薄暗い森に入っていく、更に頭痛が酷くなってきた。そして、その子が止まった場所に着くと、僕にとつて忌々しく、最も思い出したくない場所に着いてしまった。

デイマイズがかつての僕に憑依した場所であり、自分自身でも帰りたくない場所でもあった。

未来「ガルツチ!!ハア……………ハア……………、如何したの一体？」

ガルツチ「……………帰って来ちゃった。」

未来「？」

ガルツチ「ここに……………帰りたくなかった村に……………。『虐待の村』に……………」

—虐待の村—

未来「虐待の村？」

ガルツチ「言葉通りさ。ここには、愛情なんてまるつきり存在してない、ただ生まれたことを後悔させる為に、虐待や暴行、絶食など色々やられた忌まわしき村さ。しかし、ここに来た途端、頭痛が無くなるとは……………。目眩も全くしないし。」

イフ「気を付ける。ここの怨念、凄まじい程多いぞ。」

ガルツチ「知ってる。嫌でも分かるさ。多分動物も、無機物でも拒



否反応は起こるだろうな。」

僕らは覚悟した上で村の中に入り、先程の子を探していた。

未来「酷い……………、子供たちが痩せ細ってる……………。殴られてる子も……………」

ガルツチ「……………死体も平気で、捨ててるしな。」

イフ「お前は、こんなところで転生させられたのか。」

ガルツチ「ああ、正直此は嫌だった。母さん、ホントに覚えてろよ？」

全王神『ごめん、ぶつちやけ此は気が付かなかった。』

だが、先程の子供は全く見つからず、居るのは子を殴る親、自分の子を犯す親、殆どが子を虐待させる光景しか見えなかった。

「何だテメエら、こんな村に何の用だ？」

ガルツチ「子を虐待するような奴に言いたくないね。」

「何だとガキ！」

ガルツチ「黙れ下郎、さっさ退け。殺すぞ。」

未来「が、ガルツチ。それは——」

「……………ほう、気に入らねえ目をしているが、面白えツラしてるな。まるで、この村を知ってるかのようなツラだな。」

ガルツチ「元この村出身者って言えば、分かるか？」

すると、その男が驚愕し、そして声を荒げた。

「おいお前ら!!聞いてみる!!此奴、元この村出身者って言ってるぞ!!!」

「何だって!?!」

「そういえば、彼奴の家に無残な死体に成り果てて……………」

「そのガキが消えたって話を聞いたわ。どうでも良いけど、まさか？」

ガルツチ「チツ、しょうがねえ。未来、巻き込んでごめん。口調変わるけど、気にしないでくれ。」

未来「え?それってどう言う……………」  
すぐに分かるよ。

「へえ、あのガキが帰ってくるなんてね。可愛い顔で帰ってきて。」

ガルツチ「触るな、アマ。鬱陶しい。」

「てつきりくたばってたと思ってたが、何だ？寂しくて帰ってきたのか？」

ガルツチ「テメエらのような豚にも劣るような村に、誰が寂しく帰るか。兎に角さつさと退け。」

「おい、大人の俺達に向かつてどう言う口をしてんだ？オラ。」

ガルツチ「本来貴様らのような下郎共にも、喋らせる口なんて無いんだがな。耳障りだし聞きたくもない。」

しかし、もうこれ以上怒りを抑えるのは難しいな。早くあの子を見つけないきゃ。でも何処に？

「た、助け……………」

「喋るなガキ!!!」

『プツンツ』

ガルツチ「……………未来、俺もう我慢の限界だ。悪いけど、まだ生きてる子をつれてこの村から連れ出してくれないか？」

未来「え？あ、うん。『ザ・ワールド』!!!」

未来は僕以外の時間を止め、直ぐさまこの村にいる子供達を連れて、村から出て行かせた。残ったのは、僕と虐待した大人達だけとなった。

ガルツチ「ジャンヌ・オルタ。復讐の時間だ。力を貸せ。」

ジャンヌ（オルタ）『ハッ、まさか貴方のような人に、私に指図するなんてね。』

ガルツチ「世迷い言はいい。竜の魔女として、此奴らを、この村を焼き尽くしたい。」

ジャンヌ（オルタ）「アハハハ!!!いいねえ、気に入った！私の力で、存分に振るいなさい！」

ガルツチ「ああ、果てるまで扱き使ってやる。」

僕は直ぐさまケースから一枚のカードを引くと、黒い炎が纏わり付いていて、絵柄には邪悪な顔で嘲うジャンヌ・オルタの姿が見えた。

「何だ？」

ガルツチ「死んでいった子供達の怨念を聞かせてやる。そして絶望しろ。『復讐者』、『ジャンヌ・ダルク・オルタナティブ』。

『Connect』

絶望の魔神デイクベア・ガイアEvil God。

『魔夢幻召喚』!!』

黒い炎と闇が僕に纏わり付き、竜の魔女『ジャンヌ・オルタ』の姿へと変貌し、更に両腕は引き裂くような爪と化した。

「こ、此奴!?俺達の村を!？」

「おい!村長呼べ!!村長を!!」

村長?そういえば、ここの村長って見たことなかったな。

「何だ?騒がしい、女とヤル時間がねえのか?」

「そ、村長!!」

……………なあ。

ジャンヌ(オルタ)『何?』

あの村長だけど、どう思う?」

ジャンヌ(オルタ)『言いたいことは分かる。』

うん。

ガルジャン『チェンジを要請する。』

(風龍「そこっ!?!」)

「ほう?テメエがああ親のガキか。なるほど、帰ってくるとは想定外だが、丁度良い。オメエら!!歓迎してやれ!!」

ガルツチ「その前に、俺からの贈り物だ。受け取れ。」

僕は直ぐさま黒い炎を作り出し、周囲に回り始めた。

ガルツチ「全ての邪悪をここに……………、彼らの報復の時は来た!!これは憎悪によって磨かれた我が魂の咆哮……………!!憎悪の炎に焼かれ、絶望の闇に堕ちろ!!『吼え立て、呼び起こせ、我らの憤怒』!!!」

燃えろ、忌まわしき記憶！消えろ、虐待する下郎共！！この村ごと、森  
ごと我が憎悪と共に焼き尽くせ！！！！！！

t o b e c o n t i n u e d  
→

## 第74話 歪んだ精神と清らかな魂

―ヒメムラサキ―

未来side

とりあえず、ガルツチの言われたとおりに子供達を連れだしたけど、凄く怯えていたし、お腹もすかせてるし、そう思った僕は一度ヒメムラサキの方に戻った。

簪「あ、お帰り……………ってその子達は？って何でそんな状態に!？」

未来「簪、この子達は親に虐待されてて。」

簪「……………ガルツチは？」

未来「村に残って、何かしようとしてる。凄く怒っていたし……………。兎に角先ずは、子供達を！」

簪「分かった。皆、怯えないで。私に着いてきて。」

子供達はガクガクと震えていて、怯えているも、すぐに頷き、簪に着いていった。彼女なら、きつと……………。それより、ガルツチが心配だ。本当に憎悪に満ち溢れているし、性格もまるで……………。

ちよつと待って、精神が幼い理由って……………。”虐待に対する復讐心？”

深雪「あ、未来。ガルツチは？」

未来「それが……………。」

僕は直ぐさま説明した。虐待の村という場所のことも、ガルツチが子供達を頼むと言ったこと、知ってるかぎり教えた。

深雪「なんやねんそれ!?!というかうち、嫌な予感しかしない!他の皆にも伝えて!!ほなはやく!!」

未来「……………改めて深雪って、関西出身なんだなあって思うなあ……………」

って言ってる場合じゃない!他の皆にも伝えないと!!!!

sideChange

―虐待の村―

ガルツチside

「なっ、何だこの炎!?俺達に——」

「ウギヤアアアア!!焼かれるウウウ!!!」

「嫌だ………、私、私死にたく——!!!」

そうだ、助けを請え、叫声を上げろ、絶望の闇に溺れるがいい!!それが、貴様らにとって、唯一の救いだ。

「き、貴様!!こ、こんな事をして、何になる!!何も変わらんど!!例え虐待の村を消したところで、何も変わらんど!!」

ガルツチ「構わない。こんな忌まわしく、穢らわしい、人間性を貶すような村が、この世に消え去れば、それでいい。この森と共に、俺の憎悪と絶望の炎に焼かれるがいい!!!」

「分かった、分かった!分かったから、俺達を——」

ガルツチ「助ける?断る。何自分達が助かろうとしてるんだ?子供達もそうやって、誰かを助けを請えてたんだ。それが貴様らの罪だ。言い訳なんて聞きたくない。」

僕は空かさず黒い炎を放ち、村長と思わしき人物を燃やした。森と村は黒い炎で覆われ、僕の好きな桜を燃やさないように気を付けながらも、燃やし続けた。

村の外に逃げようとした奴は、青い炎に焼かれ、僕を殺そうと襲った奴は黒い槍を放ち、殺した。この辺り一帯を焼け野原にするために、この忌まわしき記憶と共に、この歪みきった精神と共に、何もかも消えてしまえば——

『兄や、ストップ!!!!!!』

この声、もしかしてミスト？僕は直ぐさま後ろを振り向くと、ミストだけでなく、未来達も来ていた。

ガルツチ「なっ!?皆!?何で!?」

ミスト「話は未来兄に聞いたよ！兄や、お願いだからこの人達を許してあげて!!」

ガルツチ「な、何言ってるんだよ？此奴らは、子供達を虐待した奴等だぞ?!それを許してあげろって?!」

未来「確かに、虐待は許されるものじゃないのは分かってる。でも、復讐なんて駄目だよ!!」

ガルツチ「そんなの分かりきってる!!けど、それでも復讐しないといけないんだ!!誰かがやらなきゃ、また生まれてくる子供達が………!!」

深雪「かと言って、こんなのあんまりやないか!!何も森ごと燃やす必要はないやろ!?!このままじゃ桜も燃えるやないか!!」

ガルツチ「あ、桜のことは大丈夫。ちゃんと気を付けて森を燃やしてるから。」

深雪「何その器用な復讐の炎。っていうか何処まで桜Loveなんやねん。」

逆に桜嫌いな奴がいたら、宣戦布告だ。桜を全身全霊で守り切ってみせる。って、それは良いか。

全王神『うちの息子が、桜に対して愛が深すぎる件について。』  
キング『相当好きなんだな……。』

まあその話はおいおい聞きますよ。

深雪「ってそれは良いとして、ええ加減炎消してやりや!!」

ガルツチ「だがっ!!此奴らは……。此奴らは……。此奴らはっ……。此奴らはっ!!」

ライム「ロスト、貴方……………何で言わなかったの？」

ガルツチ「らっ、ライム!？」

ライム「貴方が此処まで病んでるなんて聞いてないよ!!」

全員『そこっ!?!』

ガルツチ「いや皆、強ち病んでるのは間違いないだろ。っていうか、シリアス。シリアスが働いてないよ？」

あれか？シリアスが働こうとしてたら全力で止める設定とかあんの？

「い、今の……………内に……………逃げ……………なきや……………。こんな……………奴に……………殺され……………ない……………場所……………。」

ガルツチ「誰が逃げて良いと言った？」

『ザクッ!!』

「ヒィィ!!!」

フラン「お兄ちゃん!!」

ガルツチ「村長、特にお前を許さない。こんな村にしたのも、この歪んだ精神にしたのも、お前だ。この闇も、この炎も全部、全部……………お前が望んだものだ。」

「ま、待て!!俺は、俺は——」

ガルツチ「お前がほしかったのは、金目のものや美女とかじゃないだろ？本当に望んだのは……………。」

「やめろ……………、やめろ……………!」

ガルツチ「子供達の、悲痛の叫びと……………。」

「頼む……………、それは——」

ガルツチ「親に対する復讐……………。」

「殺さないで……………、死にたくない……………。」

ガルツチ「そして……………、村を失い死の間近に迫るときの絶望だろ？今から、それを返してやる。」

「あつ……………ああああ……………!!!」

ガルツチ「無様だな、とても村長とは思えない程の震えだ。まあいいか。」



僕は直ぐさま、黒い炎を纏った剣を抜き、村長を振り下ろそうとした。

ガルツチ「さあ、受け取れ——」

ミスト「兄やストップって言ってるでしょ!!!」

ガルツチ「は、離してミスト!!」

ミスト「離さない!!兄や、お願いだからもうやめて!!」

ガルツチ「何で、何で此奴を庇わなきゃならないんだ!!!」

ミスト「だって………、兄や優しいままがいいの!残虐な復讐者に堕ちる兄やなんかより、優しい復讐者の兄やがいい!!だからお願い、その人を殺さないで!!」

その途端、もう一人の誰かが僕を抱き締めているのを感じ、下を見下ろすと、先程の子が居た。

『だめっ!!優しいままできて!!』

ガルツチ「さっきの………ウツ!!」

また頭痛………いや、違うっ!!何かが、何かが僕を蝕んでいるのか!?

ジャンヌ(オルタ)『ちよつと!?アンタなんなのこれ!?こんな聞いてないわよ!』

え?!何がいるんだ!?

ジャンヌ(オルタ)『何って、人型の化け物よ!!!兎に角どうにかして!!!』

ええええええ?!?!?!いやどうやって——

『お願い、自分に!、歪んだ精神を、あの子を止めについて!!!』

その声を言った途端、意識が薄れてしまい、ぐったりと倒れてしまった。



ガルツチ「自分の始末は、自分で付けなきやな。来い!!! 化け物!!! その不拔けた精神を、たたき直してやる!!!」

sideChange

―虐待の村―

深雪side

ん?あれって…………。

英竜「大丈夫ですか?全王神様の息子さん?」

フラン「英竜お姉ちゃん!」

藍「うわー、また派手にやっちゃったねえ…………。この様子からして、ジャンヌ・オルタの宝具を使ったのかな?」

英竜はんに、藍さん!?!って他の皆も!?

英竜「おーい、大丈夫?」

イフ「どうやら、自分の精神と戦ってるようだ。」

英竜「自分の精神?」

イフ「そう、どうも新たなスタンドが目覚めようとしているようだが、その時に頭痛や目眩も起こしていたようなんだ。」

夜神「ええええええ!!」

ライム「スタンド?」

未来「ガルツチなら苦も無く手に入るはずだけど、どうやら虐待のせいで精神的に幼いまま、代わりに憎悪と絶望が担い手となって生きていたんだ。」

英竜「つまり、彼は自分の憎悪と絶望に蝕まれて、自我を失おうと?」

ガイア『まあそう言うことだな。』

英竜「スタープラチナが喋った!?!」

イフ「ガイア、ガルツチの様子は?」

ガイア『奴は、何故か笑ってた。』

笑ってた?

英竜「笑ってたって?」

ガイア『自分の醜態さを見て、滅茶苦茶笑ってた。だが、奴は戦ってる。憎悪と絶望に取り憑かれた精神を、取り戻すために。そして、”純粹”な憎悪と絶望を取り戻すために…………。』

英竜「純粹?」

ガイア『ようは、彼の憎悪と絶望は、暗殺者<sup>アサシン</sup>のジャック・ザ・リッパーのように、水子的な存在なのだ。

精神が幼かったのは、感情の『憎悪』『絶望』が借り物だったというわけだ。』

夜神「じゃあ、その二つを取り戻せば——」

イフ「スタンドも手に入り、漸く自分の憎悪と絶望を取り戻すことが出来ると言うわけだ。」

英竜「じゃあ、今すぐにでも——」

ガイア『英竜、だったか?それは無理な相談よ。もし不用意にガルツチの中に入って見よ、他人を気にするあまり、敗北の可能性もある。そっとしといてくれ。』

今更なんだが、ガイアっておっさん声なんやな……………。

「い……………今の内に——」  
「ハイ確保。」

なんか聞こえたけど、気のせいやな。  
ともかく、復活頼む!!ガルツチ!!!

t o b e c o n t i n u e d  
⇒

## 第75話 神話スタンド覚醒

—???

ガルツチ side

全く、今まで僕の世界ってどんなものなのか、ずっと知らなかったけど、いざ蓋を開けてみれば……………。なんて事は無い。憎悪と絶望に溺れ果てようとしてる醜く哀れな存在だわとは……………。

フレディ「って何じゃこりやあああああ?!?!」

ガルツチ「フレディ!?!お前、何でこんなところにいるに!?!」

フレディ「知らねえよ!?!寝てたらこんな場所に着いたんだよ!」

ガルツチ「何つうタイミングだ。」

フレディ「っていうか、ありや何だ!?!」

ガルツチ「……………憎悪と絶望に溺れ果てようとしてる僕の世界。まるつきり、化け物だ。」

フレディ「おいおい、キースより厄介じゃねえか。勝てるのか!?!」

ガルツチ「勝てるのかじゃない。勝って、『取り戻す』!!」

僕は直ぐさま2本の剣を取り出すと、今度はホットケーマスクを被ったジェイソンが現れた。

ジェイソン「うー、何で僕がこんなところに?」

フレディ「ジェイソン!?!」

ジェイソン「ってフレディ!?!」

ガルツチ「お二人さん、先に此奴を仕留めるぞ。」

ジェイソン「そうだね。」

【デンジャラスゾーン!】

フレディ「んじゃ、共同作業と行くか!」

【マイティアクションX!】

ガルツチ「おい、二人とも。此奴相手に、それで行けると思うか?」

フレディ「じゃあ如何する?」

ガルツチ「二人とも、此奴を使え。」

僕がフレディに渡したのは、マキシマムマイティUXガシヤットの改良版。他のガシヤットと違って、こちらはカラーは光沢のある赤と

緑。ガシヤット下部にエグゼイドの頭部が象られた『アーマライドス イッチ』があり、これまでのガシヤットとは違った特異な形状。

そしてジェイソンに渡したのはマキシマムゾンビXガシヤット。マキシマムマイティUXガシヤットと同じだが、こちらはオニキス色と白、赤と青の4色を使ったガシヤットとなってる。

ガルツチ「此奴なら対抗できる。」

ジェイソン「えっと、これバグドライバーでもさせるのかな？」

ガルツチ「本来此奴はバグドライバー専用として改造したガシヤットだからな。バグスターウイルスも極限まであるけど、ジェイソン用に見えるようにしてる。因みに、其奴は憎悪と絶望、破滅、殺戮の力を持った混沌のガシヤットだ。」

フレディ「チート……。まあいい！行くぜ、ジェイソン！」

【マキシマムマイティアルティメットX！】

ジェイソン「うん！」

【マキシマムゾンビX！】

フレディ&ジェイソン「マックス大変身!!」

【アルティメットガシヤット!!!】

【マキシマムガシヤット！】

【レベルエクストラ!!究極級の Powerfulボディ！ダリラガン！ダゴズバン！】

【バグルマックス！不死身の最強ボディ！ダリラガン！ダゴズバン！】

【マキシマムアルティメットX！】

【マキシマムパワーX！】

おう、二人ともなんかデスピサロ的な姿になったな。そんじゃ、やると思いますか。

ガルツチ「来い、俺達がお前の正気を取り戻してやる!!」

sideChange

???  
side

やっと、見始めてくれた。それに、彼だからこそ止めることが出来る。正直、関係のない者がいるけど、彼と一緒にだからきつと勝てるはず…………。

全王神『ふーん、ガルちゃんの本当のスタンドって、可愛らしいんだね。』

全王神……………か。まあ気付いているとは言え、この姿は仮だよ。

全王神『だと思った。それにしても、これが本当のガルちゃんだっただなんて。』

ごめんね。思ってたより、ロストエンドの頃の絶望と喪失が大きくて、挫折しちゃって耐えきれなかったんだ。それにしても、転生者で大変だね。自由になっても良いのに、霊長の抑止力のアラヤと星の抑止力のガイアが、そうはさせないと言わんばかりに邪魔してくるし。一層彼らを消滅させて、抑止力なんて消しちゃえばいいんじゃないの？そしたら、全王神がやってくれば結果オーライだと思うんだけど。

全王神『うーん、まあ抑止力はホントにろくな者じゃないのは知ってるけど、流石に私がやるのはちよつとねえ…………。』

えー、僕はその方がいいけどね。

全王神『それで、如何するの？息子じゃないガルちゃん。』

そうだね。いずれにせよ、僕はガルツチとなった彼を守るために、さつきも言ったが僕はスタンドになる。

英竜にも、未来にも、あの完全生命体イフでも、全く刃が立たない最強かつ無敵のスタンド。ううん、あらゆるスタンドを超えたスタンドへと変わる。

でも、その為にはガルツチが自分の憎悪と絶望を取り戻さなければならぬ。じゃないと、真価を發揮できないからね。この力は、多分ゼロノスでも知らない力であり、恐らく英竜でも欲しがるといえる力だ。



しね。

全王神『そうなの？』

うん。それが僕、ラーク・バスター・ガルツチの本当の力。真実ですら変えられない属性、それは……………。

いや、今はいいや。この力は、本気でアラヤもガイアも敵視するよ  
うな力だからね。

全王神『バスター……………この意味ってもしかして……………。そう言  
うこと？』

うん。父さんがこのミドルネームにしたのは、そう言う意味なのか  
もね。全も、零も、虚も、無も、絆ですら、『滅ぼす』力だしね。

子ガル「さあ、ガルツチ。今こそ君の感情を取り戻すときだ。」

sideChange

ガルツチside

BGM Fate／EXTELLA 主題歌『ex：tella』

さっきの声が聞こえた。取り戻すときだと。ならば、取り戻してやらねえとな!!

フレディ「オラア!!」

【HIT!!】

ジェイソン「ハアツ!!」

【HIT!】

ガルツチ「光よ、全てを貫け!! 『オールライト・ノア』!!」

僕は先程母さんにもらった神刀で光を収束し、光の斬撃を繰り出すと、漸くボロボロへと追い込むことが出来た。

と、その時だった。謎の虹色の光線が、僕の精神に直撃し、苦しみだした。

フレディ「ぬお!?なんだありや!？」

ガルツチ「これって、ウルトラマンコスモスの!？」

ジェイソン「そうなんですか!？」

ガルツチ「うん。って事は、簪と英竜が……………」

そして……………」

未来「ガルツチ!!」

フラン「お兄ちゃん!!!」

ガルツチ「未来、フラン!!」

未来「つて、フレディ!?ジェイソン!？」

フレディ「よっ、なんか知らねえがこっちに来てよ。」

ジェイソン「僕も同じです。」

未来「それよりガルツチ。今なら脱出出来る。早く——」

ガルツチ「未来、フラン。聞いて。」

未来フラ「?。」

ガルツチ「確かに脱出できるけど、このままだと何も変わらない。あの精神は、君の言うとおり元は幼かった。だが、憎悪と絶望が担い手になったせいで、精神がおかしくなった。それが、あの成れの果てさ。自分の精神を見たら、なんて事は無い。醜くて、とても哀れすぎる化け物に変わってたよ。だったら、簡単な事だ。

此奴を、正気に戻す。そして本当の憎悪と絶望を『取り返す』!!」

僕は直ぐさま母さんからもらったベルトを付け、本郷猛が変身する  
ようなポーズを取った。

ガルツチ「ライダー……………!! 『変身』!!」

瞬間、僕の姿は全身白いスーツのような物に包まれた。そこに両手  
にエグゼイドのような手袋になり、右眼は赤で左眼は青、青い肩や膝  
や肘の装甲がついた。

フレディ「な、何その姿!?!」

ガルツチ「言うなれば、此奴は……………。『仮面ライダーロスト』！  
虚の力を宿した仮面ライダーだ!!」

『■■■■……………』

ガルツチ「がちり目を覚ましてやるよ。下がってて、二人とも。  
今来ようとしれる奴も、巻き込まれないようにね!フレディ、ジェイ  
ソン!」

フレディ「あいよ!」

『ガツシユーン!ガシャット!キメワザ!マキシマムクリティカルブ  
レイク!!』

ジェイソン「うん!」

『マキシマムクリティカルエンド!!』

2人は飛び上がると同時に、僕はバク宙しながら身体を捻って飛び  
上がり、2人と同じタイミングで跳び蹴りした。

ガルツチ「イマジナリー・ライダーキックウウウ!!!」

その時の皆の感想はと言うと、『3つの彗星が見えた』と。

BGM終了

いや待て、そんなに!?!後で映像見せてくれ。

そのまま僕の精神に直撃、完全に弱り果てたところで  
『破戒すべき全ての符』を投影し、刺した。途端に黒い靄が大きく崩れ  
ていき、眩いほどの光が溢れ出し、気が付くとそこは僕の固有結界、  
アンミリテッド・ディメンション・ワークス  
『次元を超える無限の刃製』の世界にいた。

そして、そこにいたのはぐっすりと眠ってる僕の精神がいた。って  
いうか、幼児姿の僕って、こんなに可愛いものだったのか。



ガルツチ「そっか……。この子はどうなるの?」

子ガル「……暫くすれば、この子は勝手に成長していくよ。ただ、全王神が不老不死の呪いを継続して、25歳までしか成長出来ないけどね。」

ガルツチ「だろうな。」

子ガル「さてと、此で君はスタンドを……。ううん、『神話スタンド』を使う権限を与える。此を使えば、如何なるチートにも勝てるようになるよ。」

『神話スタンド』か。聞いたことはないが、それが僕の物になるのか。子ガル「さあ、目を覚まして皆のところに戻って行って。心配してるし。」

ガルツチ「……。なあ、ガルツチ。」

子ガル「なあに?」

ガルツチ「……。君と出会えて、よかった。」

子ガル「僕もだよ。『ガルツチ』。」

そうして、僕は未来とフランの手を握り、視界が眩しくなる。だが、戻る間近に魂の僕が僕を微笑んでこう言った。

子ガル「安心して、『ガルツチ』。僕も、君のこと何時までも応援し

てるから。」

—虐待の村跡地—

目を覚ますと、そこには何故か鼻血を出しながら幸せそうな顔をした皆がぼったりと倒れていた。

ガルツチ「……………なんですか。」

もうこの言葉しか出てこなかった。いやまあ、分からなくもないよ？でもね、流石に恥ずかしいよ？さて、『神話スタンド』を出すか。名前は、そうだな……………。

ガルツチ『Moon Light Another Fate』  
！」

そのスタンドの名前を呼んだ途端、そこには18枚の翼がついた青年で、虹色のマント、黒色のガントレット、純白の鎧を着込んでいた。そして、右胸部には三日月のタトゥーがついていた。

ガルツチ「此からも、宜しくな。ムーン。」

ムーン「うん、宜しく。」

どうやら喋る事も出来るようだ。

さてと、此どうしよう。どうやったら目覚めることが出来るんだ？

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
⇒

## 第75・5話 動き始める運命

―心の塔― ―月夜ノ刻―

ルツチside

ロヴァス「つと言うわけじゃ。」

ルツチ「そっか、それじゃあ遂に……………」

ヴォルデモート「ゼロノスも行動を起こしてるだろう。」

長かった、こつちも準備も出来たことだし、そろそろ僕達も動くとするかな。

ブレイズ「だが問題は、何処に居るかだな。少なくともこの世界には居なさそうだし。」

アビス「そうですね。どの世界にもいなかったし……………」

ルツチ「ううん、この世界にいるよ。」

レイス「ルツチ、でも何処にも……………」

ルツチ「それは『ゼロノスがいない可能性』の世界って事。」

ノーム「じゃが、その意味……………いや待て？もしかして……………！」

マルフォイ「俺達の世界とは違う『平行世界』!？」

そう、しかも今回は目星を付いている。この世界は、元々平行世界のようなもの。本来ならこういうことは、絶対にあり得ない世界でもあった。

本当なら、僕は『死んで』いた。でも、幾つかの偶然が絡み合ったのか、僕は『生きて』いる。

カレン「でも、私達知らないわよ?『平行世界』っていうけど、様々な可能性が……………」

アルファス「そうそう、でも少なくとも俺は何処でもいそうだけど……………」

ルツチ「ううん、皆勘違いしてるよ?」

7人『え?』

ルツチ「この世界そのものが『平行世界』って事。」

マルフォイ「それじゃあ、この世界の原世界にゼロノスが?」



ルッチ「うん。その世界が、本来在るべき姿なんだ。無の神そのものが消滅し、そしてガルツチは様々な冒険を得て強くなっていき守護神となって世界を守るのだけど……………」

ブレイズ「様々なイレギュラーが介入したことによって、この世界になつたって訳か。」

ロヴァス「そうじゃな。さてルッチ。子供達を。」

ルッチ「分かりました。」

ロヴァス「出発は明日じゃ。『プロトエンド・オブ・ザ・ワールド』に向かうために、悔いの無いように準備を済ませておけ。」

8人『はいっ!』

僕はそこで解散し、自宅に戻った。

ロヴァス「さてと、恐らく僕の予想じゃと、『全の竜神』の本郷猛は、もう既にあの世界に居るじやろうな。」

ダンブルドア「原点にして頂点、全てを司る仮面ライダー……………か。」

ヴォルデモート「後はガルツチ達が合流できれば、きっと……………」

―スピリットレストラン― ―月夜ノ刻―

無月「なるほど、つて事は……………」

ルツチ「うん、原世界で皆で行く。」

エミヤ「そうか。」

レミリア「まあ、此も運命よね。いえ、此は私達に課せられた運命というべきかも。」

さとり「久しぶりに、ガルツチさん達に出会えますしね。」

D I O 「ルツチ、一つ聞く。」

ルツチ「？」

D I O 「恐らくこの戦いは、我々が思っている以上に過酷な戦いが待ち受けている。恐らく犠牲

者なしで帰れると言う可能性は0だ。

その辺は覚悟はしているか？」

ルツチ「……………確かに、犠牲者は免れないね。でも、負けるわけにはいかない。多分家族の中から犠牲者が出ても、その思いを胸に前に突き進む事にするよ。」

D I O 「そうか。ならば心配無用だな。」

承太郎「D I O、絶対生きて帰るぞ。」

D I O 「ああ、俺達は必ず生きて帰る！承太郎も死ぬなよ？」

承太郎「元よりそのつもりだ。」

ルツチ「みんな、準備を怠らないようにね。」

全員『おう！』

sideChange

―ロードの家―

ロードside

「いよいよ動き始めるか。再び、全ての存亡を賭けた戦いが……………」  
ナインズ「ロード様、魔力の方は？」

ロード「完全回復した。全く、ご都合主義とはこの事だな。」  
レイ「それってつまり……………」

ロード「フェニックス。」

フェニックス「ここに。」

魔神柱だったはずのフェニックスは、今や立派な鳥人かつ美少年とも言える姿へと変わった。

ロード「奴等の情報は？」

フェニックス「現在、最終兵器とも言えるものの完成まであと少しだそうです。」

ロード「丁度良い、ナインズ！皆を呼べ。ゼロノスがいる世界に向かうぞ！」

ナインズ「はい！」

さてと、本郷……………久しぶりに共に戦おう。

sideChange

―始原の城―

風龍（作者）side

「みんな集結してるしていつてる。って事は、そう言うことなんだね。」

メアリー「もういい加減、イリアって名前はやめて、ありのままの名前で戦おうかな。」

士「いいののか？」

メアリー「うん、ibとギャリーを守るために、絵達之力、喪失・忘却の力でみんなを守るわ。」

アラン「僕も手伝うよ、メアリー。」

ライフ「お父さん、束姉さん。」

風龍「よし、東。時空の賢者達を集結させて、『プロト・エンド・オブ・ザ・ワールド』に向かおう。」

東「はい!!」

さあ、こつちも本気で行こうかな。作者ではあるけど、そんなのはいい。あらゆる世界を守るための『守護神』として……………。

風龍「デイマイズ、ビギニング。」

デイマイズ「分かってる。」

ビギニング「ですね。」

風龍「さあ、世界を救うために大いなる戦いを起こそう。」

t o b e c o n t i n u e d ↪

## 第76話 決戦の世界へ

―ヒメムラサキ―

ガルツチ side

ガルツチ「あー、酷い目に遭った。英竜、いきなり弟になってって言わないでくれ。」

英竜「可愛いのはジャステイス！」

ガルツチ「やめろ。」

はあ、此はツツコミが疲れそうだ。あ、因みにサンライト王国については、どうにか解決。やはり魔物が支配されていたようだ。んで、倒したら村正が探していた3つのお守りが見つかり、それを送ろうとしたら、どうやら神刀に触れた途端3つのキーホルダーになってしまったようだ。其れを村正に伝えたら、やっぱりあげると言った。なんでさ。

因みに、今見た目は14歳に戻しています。

ガルツチ「そういえば英竜って、性の悦びはないって言ってたけど、無性愛なの？」

英竜「うん。」

ガルツチ「その、大丈夫なの？それとも、最初から？」

英竜「わかんない。」

ガルツチ「なんて言うか、悲しくない？僕はまあ、最初は異性と付き合いたいって思っただけで、フランとこいしと出会ってから考えも変わったし、未来とやったら、いつの間にか両性愛になっちゃったけどね。」

英竜「そうか……………」

それにしても、英竜の前世聞いたことないな。でも、それに関しては聞く気はない。多分思い出したくないのだろう。

ガルツチ「もし、だけどさ。」

英竜「？」

ガルツチ「もし、君の恋人だと名乗る奴がいたら如何する？」

英竜「ブフオツ!？」



ガルツチ「そのランクが∞。Grand Orderの効果なら『自身に毎ターンバスター&アーツ&クイック性能がアップする効果を付与（6ターン付与）&6ターン後戦闘不能』かな。」

英竜「破格すぎ……………、しかも6ターンか……………」

ガルツチ「そう言うこと。まあ、戦闘が終われば、限界が来て聖杯を使わない限り……………僕は今度こそ、死ぬかもな。」

そう、例え不老不死の呪いを持つてたとしても、聖杯を使わない限り、今度こそ死ぬ。言わば、特攻神話礼装と言うべきだろう。

英竜「ガルツチは、死にたいのか？」

ガルツチ「昔だったら、そうかも。自分という存在を嫌い、消えて無くなればそれでいいと思った。けど、今は違うかな。自分嫌いはまだあるけど、あの時の幸せを手放したくない。未来とフラン、こいし、イリヤを置いて死にたくない。」

英竜「そうか……………」

ガルツチ「……………英竜、こっち向いて。」

英竜「?なん——」

僕の顔に向いたところで、僕は直ぐさま英竜の顔に近づいて口付けした。

英竜「……………え?（。ヾ）」

ガルツチ「あまり気負いし過ぎないようにね、英竜お姉ちゃん。」

英竜「え?え?が、ガルツチ。な、何を!」

ガルツチ「景気付けの軽めのキスだよ。少し、恥ずかしいけど、英竜が僕みたいにならないようにね。」

英竜「なっ!?!/!/!/」

ガルツチ「まあ、少なくとも僕のようにはならないだろうけど、やっぱり心配だからね。」

しかし、英竜の弟か……………。それも悪くないけど、けどやっぱり兄さんと姉さんがいるし、流石に英竜お姉ちゃんっていうのは今回だけでも——

英竜「もう、ホントに狡い弟だねええええ!!!/!/!/!/」

ガルツチ「うお!」

英竜「いつそ、私の家族はガルツチだけでいいよ!!」

ガルツチ「待って待って、僕には兄さんと姉さんがいるんですが!?!あと妹のミストもいますし!?!」

英竜「決めた。今日からガルツチは、私の弟兼妹で決定!!」

ガルツチ「ちよつと待てえええええつ!!!」

妹!?!それって女体化したとき限定なの!?!なんでさっ!?!

藍「如何したの?」

英竜「藍、今日からガルツチは、私の弟兼妹にします。」

ガルツチ「勝手に決めて如何するんだ!?!つていうか妹ってどういう事!?!」

英竜「だって少しだけ女の子っぽいところもあるし。」

ガルツチ「解せぬ……………」

全王神「2人ともく、どうかしたの?」

英竜「全王神様、息子を私の弟兼妹にして下さい!!」

ガルツチ「母さん、ちよつと英竜を何とか——」

全王神「いいよ!! (ゝω・) b」

ガルツチ「軽っ!?!」

だが僕は知らない。此が、後にとんでもないところで役立つ事になるなんて、この時知らなかった。

そして、再び英竜と二人つきりになったとき、僕はあることを思い出した。昔、パチュリーに止められたあの儀式を、今こそ使おうと考えた。

ガルツチ「投影開始。<sup>トレス・オン</sup>」

英竜「あれ? 弓と矢を持って、如何したの?」

ガルツチ「何、ちよつとした儀式をするんだ。」

僕は弦を引き、月に向かって狙いをつけて、そのまま離れた。

ガルツチ「誓い『プロミス・エンゲージ』。我、星空英竜の義の弟兼妹となりて、この刃を持って誓わん。

終焉と原初を持って、呪われし運命と共に進まん!!」

途端に月が光り始め、その光は英竜に包まれた。とは言え、この『終焉と原初の誓い』の本当の使い方は、桃園の誓いのような物。



つまり、此を持って僕と英竜は義姉弟になったのだ。例え遠く離れても、この契りは決して破ることはない。絶対に……………。

未来「ガルツチ、英竜。そろそろ出発しよう。」

ガルツチ「わかった。」

英竜「さあ行こうか。決戦の舞台へ。」

そして僕と英竜は、街の中心の広場に到着すると、フラン達や簪達、更にはギルサンダーとメリオダス、ミスト、ライムがいた。

ガルツチ「さてと、皆！そして、この戦いに参加してくれた人！いよいよゼロノスとの戦いが近い!!

ゼロノスは強大だ、そして其れと同じようにホムンクルスも大量に生み出しているはずだ。きつと、大激戦が待ってる。

恐らく、この中から、故郷に帰れず、この世を去る人も居るかもしれない。けど、此だけは忘れるな。

『この戦い……………いや大聖戦に、絶対に勝とう』

全員『おおおおおおお!!!』

!!!!!!!

ガルツチ「では行こう、本来僕らが在るべき世界。『プロト・エンド・オブ・ザ・ワールド』へ!!!時渡り『タイムドミネートディメンション』!!!」

そのスペルカード放った瞬間、僕らはヒメムラサキに別れを告げた。

ガルツチ「さあ、大聖戦を始めよう。ゼロノス。」  
t o b e c o n t i n u e d  
→

『原典回歸終焉世界』 End of The World  
最後の戦い

第77話 かつての戦友の再会

— ??? —

ゼロノス side

あー、久々にリラックス出来た。大阪ホントにいいな、お好み焼きも然り、串カツも然り、大阪城然り、ストレスたまったら彼所に行くのが一番だな。

だが、それも全て終わりか。

「報告します。星空英竜、門矢未来、ラーク・バスター・ガルツチが、此方の世界に来ました。それだけでなく、全王神やシヨツカー軍、様々な者達が、此方の世界に——」

ゼロノス「遂にか………………。例の兵器は？」

「あともう少しで完成です。」

ゼロノス「そうか、ならば怠らないように最終調整とチェックをしておけ。」

「了解しました。」

ゼロノス「さて……………、と。いよいよだぞ。」

「ハア……………ハア……………、英竜たんハアハア……………」

「……………ようやくか。姉をこの手で殺せるのは。」

ゼロノス「全王様、我々に協力して下さり感謝します。」

全王「言うな、元より俺は自分勝手な姉を許さないのでな。姉の相手は、俺がけりをつける。」

しかしまあ、全王様がこちら側に着いてくれたのはありがたい。あと、この英竜を知ってる人物、恐らく関係者かストーリーカーのどつちかな。

まあどうでも良いか。頭にパンツ被ってる事以外は。

ゼロノス「全王様、ホムンクルス共に伝えて下さい。究極獣共も、お

願います。」

全王「ああ。別に、前線に出ても構わんのだろう？」

ゼロノス「ええ、願います。」

さあ戦争の準備だ。我々が、勝つ！何としても!!!

sideChange

—鎮魂歌の湿原—

ガルツチside

ガルツチ「到着つと。」

あー、分かる。この感じ、この風、帰ってきたって感じだが、住んでた世界とは少し違うな。このどんより、いやどちらかという空虚感。

この世界に、ゼロノスが居るのか。いや待て、神々しさも……………？母さん程ではないけど、これって……………!!

ガルツチ「母さん、どうやら叔父もここに居るようです。母さんを殺すために、ゼロノス陣営に居るようです。」

全王神「弟め、そこまで私が邪魔だと言いたいって、よく分かるよ。」

フラン「お兄ちゃん、今は他の人達を探そう？」

ガルツチ「確かに、そうだな。ミスト、他の仲間達は？」



ガルツチ「バルツチ。僕とフランの子で長男なんだ。」

バルツチ「初めまして、未来兄！リサも！つてそうそう親父、大変なんだ!!」

ガルツチ「どした？まさか奇襲か!？」

バルツチ「そうじゃなくて……………、兎に角来て!!皆も!!」

一体如何したというのか。そう思い急いで学校内に入った。途端に瞬時に理解した。何故か苦しむ人達が大勢居たと言う事を……………。

ガルツチ「あー、此アイリの仕業だなあ……………。」

藍「え?」

ガルツチ「あの人、料理がとんでもないほど下手で、いつもダークマター作るんだよね……………。」

英竜「ええええ……………」

未来「だからか、ガルツチが『この世の全ての闇料理』っていうのは……………」

オーフィス「怖いな……………」

ガルツチ「宝具は白いのに、料理は黒いつて、どうなってんの一体……………」

夜神「其れは確かにね……………」

そんなこんなで、僕等は城の中で会議を進めた。

そして……………。

―アストロ平原―

ガルツチ「それで、総大将は誰が―――」

全王神「私で良いかな？」

全員『賛成!!』

ガルツチ「よし、それじゃあ行くか。」

僕は武装の最終確認をした。背中には神刀『天満月』アマミツツキ(名称は僕)、セフィロトソードクリフオートソード生命の樹の剣邪悪の樹の剣、そして常闇月の刀。右腰には魔剣ダークネスムーンと月光・闇夜丸、そしてスペルカードケース。左腰には聖剣スターダストソードと日光・暁丸、そして英霊カードケース。

今回の目の色は『虹色』、つまりここで全身全霊の本気を出すと云うことだ。

未来「ガルツチ、右眼が……………」

ガルツチ「あ、此を見るのが初めてだっけ？これ、義眼でね。」

英竜「義眼って、前何かあったの？」

ガルツチ「うん、サムと出会って早々戦ったときに、運悪く負傷してね。両眼とも青だったけど、義眼のお陰で、好きなように色を変えられるんだ。その代わり、自分の能力も反映するけどね。」

未来「例えば？」

ガルツチ「今僕は虹色にしてるから、効果は全能力を底上げする代わりに命を使うんだけど、不老不死の呪いで普段通り使えるけどね。」

英竜「なるほど、そうだったのか。」

さてと、そろそろ来るかな？

ジンオウガ「我が主よ、報告します。」

ガルツチ「敵本拠地の状況は？」

ジンオウガ「どうやら、本拠地は摩天楼のようで、その中に無の神

のホームンクルス達が9無量大数人位います。その守りに徹するかのように、彼方は1無等人います。その中に、全王がいます。」

全王神「……………」

ガルツチ「ありがとう。モンスター軍に戻って。」

ジンオウガ「承知。」

ルツチ「ガルツチ、この戦い勝てる？」

ガルツチ「勝てるかじゃないよ、兄さん。絶対に勝つ。そして、生きて帰る！ただそれだけだ。」

ブレイズ「ガルツチの言うとおりで、戦って勝ち抜き、全ての次元を守るんだ。」

アルファス「でも、こうやってまた再び戦えるときが来るなんてね。」

確かに、エレメントフェニックスの再結成が来るなんて思わなかった。

風龍「覚悟は良い、ガルツチ。この戦い、全てを決めるのは君なんだから。」

ガルツチ「作者、君も出るの？」

風龍「うん、そりやあ今大学生だけど、生きて帰るためなら、神さまにだってなつてやるさ。この物語は、君が主役だからね。」

ガルツチ「……………そっか。」

んじゃあ、行くか。





## 第78話 英竜の忌まわしき過去

—アストロ平原—

ジンオウガ side

我が主は先に向かわれた。今思えば、彼は俺にとつての好敵手であり、親友でもあった。狩りに行くときも、決まって俺を選んでいた。

最初は、ただの自殺願望者かと思つた。俺はすぐ、戦闘態勢をとり、襲いかかる。だが、結果は返り討ちされた。

その後ちよくちよく俺を選び、やられていった。さすがの俺も業を煮やし、『二つ名』と化し、勝負に挑んだ。流石の俺も勝つたと思つた。だが、結果は惨敗。そして俺は思つた。此奴なら、殺されても構わないと。

だが、気になっていた。何故俺を選ぶのか。理由は単純、『例えモンスターでも、好敵手として、親友として戦い続けたいから。』だった。変やハンターだと思つたが、嘘はなかつた。それだけ俺を好いていたと言うことだった。

ならば、期待にこたへなくてはなるまい。

「さあ、究極獣が来たぞ！此で貴様も——」

ジンオウガ「終わるのは貴様の方だな！『十字雷神斬』!!」  
クロスオメガボルト

俺はすぐさま真帯電形態となり、究極獣と呼ばれるものを討ち滅ぼし、周りに居たホムンクルス共を倒していく。

む？あれは、ゼットン達か？苦戦を強いられているな。ならば手伝つてやろう！

ジンオウガ「下がるがいい!!『集中雷撃』!!!」  
ライトニングボルト

空から数千の雷撃が、苦戦させた究極獣を討ち滅ぼし、前に出た。ゼットン「貴方は……………?」

ジンオウガ「俺はジンオウガ。かつて、ガルツチと戦い続け、いつしか好敵手であり親友となった物だ。苦戦のところにて、助太刀に参つた。」

ヤブール「済まない、ジンオウガ。手を患わせて。」

ジンオウガ「気にするな………………。古龍軍!!超獣娘の援護に廻れ!!飛龍軍!!強襲を駆ける!!!我々モンスター軍の強さを、見せつけてやるのだ!!!」

頼みましたぞ、我が主。『ガルツチ』よ。

sideChange

ガルツチside

全く、どれだけホムンクルスが多いんだよ。楽々と10億人を斬り伏せてるとは言え、此じゃあきりが無い。

フラン「お兄ちゃん、ここは私達が道を作るわ。」

ガルツチ「フラン?」

こいし「私達が道を作ったら、お兄ちゃん達が行って。」

ガルツチ「ええええ!!」

イリヤ「私達のことは平気よ。こんなの、負けるつもりなんて微塵もないから。アラヤ、鳳凰。覚悟は良い?」

アラヤ「うん、最後まで戦うつもりだよ。」

鳳凰「絶対に、生きて帰るんだから!!」

皆……………。

簪「私達も残る。此奴らの相手、数が多いだけで、負けるつもりなんてないよ。」

未来「簪!?!」

本音「大丈夫、みつくん。私から言わせれば、こんなの雑魚同然だもん。」

鈴美「それに、今までのお礼を返せる。ガルツチちゃんに未来ちゃんの恩返しを、ここで返すわ!」

オーフィス「我、未来に感謝。」

レテイシア「安心しろ、必ずそっちに向かうから。」

白夜叉「絶対に生きて帰ろうじゃないか。」

リサ「だから、お母さん。ガルお父さん。それまで待ってて！」

未来「皆……………」

英竜「……………いい恋人を、良い妻を、子を持ったね。ガルツチ。未来。」

ホント、そうだな。

フラン「いづくよ！『災厄へと導く破壊の剣』!!!!」

こいし「『殺戮遊戯』!!!」

イリヤ「『我が魂と絆を繋げる永遠の剣』!!!!」

アラヤ「『死神の抱擁』!!!」

鳳凰「『螺旋を繋ぐ閃光』!!!」

『ズドガガガガガガガガガガ—————ん  
!!!!!!』

5人の宝具を解き放ったお陰で、摩天楼までの道が出来上がった。僕と未来、英竜、深雪、愛花はその先へ進み、フラン達に後を託した。フラン「さあ、私達の相手をしてもらおうよ。」

イリヤ「お兄ちゃん達を追いたかったら、私達を倒してから進みなさい!!!」

簪「行くよ、ホムンクルス達。」

本音「数の方は充分かな？」

……………絶対に、生きて!!

—ゼロノス本拠地 摩天楼—

5人「……………」

ゼロノスの本拠地の中は、嘘かし豪華でやばいのがあろうだろうなあって思ったんだけど……………。

英竜「和装……………、だね。」

ガルツチ「うん。」

クリムゾン「そういえば、ゼロノスの奴。やたら和装の奴集めていたな。洋というのが全くなかった。あ、紅茶は飲んだな。その時はアールグレイがお気に入りだったし。」

ガルツチ「ジャック!?いきなり出て来ないで!？」

クリムゾン「悪い、決戦が近いつて分かると、ウズウズしてねえ。」

愛花「エレベーターは、あっちにあるよ。」

愛花がそう言いついて行こうとしたら、何かを察した英竜が上を向くと、驚愕した顔をした。

英竜「なっ!?そ、そんな……………!!いや、そんなことがっ!？」

ガルツチ「如何したの?」

「アハ、見つけた。英竜ちゃん。よつと。」

降りてきたのは、黒髪で美少年、黒いTシャツにジーンズの人が居た。どうも英竜お姉ちゃんを知ってるようだ。

英竜「何で、いや……………そんなことは!!」

「なあに驚いちゃってるの?『お兄ちゃん』。」

ガルツチ「っ!？」

お兄ちゃん!？」

「お父さんとお母さん、心配してたよ?英竜が出てこないって。」

英竜「違う!!あんな奴ら、私のこと心配してるわけ無い!!」

「そうだよね、憎いもんね。だって、虐待されてたもん。」

英竜「黙って!!!」

ガルツチ「英竜お姉ちゃん、落ち着いて。……………誰だ雑種、そして気安くお姉ちゃんとか言うな。」

「……………君こそ誰なの?僕のお兄ちゃんに、何してるの?退いて、僕はお兄ちゃんに用があるの。」

ガルツチ「訳が分からないな。お兄ちゃんだつて?英竜お姉ちゃん、此奴が言ってる事が分かんないんだけど。」

英竜「……………ガルツチ、彼奴の言ってることはホントよ。」

ガルツチ「え?」

英竜「私は生前、『男』だったの。いいえ、『性同一性障害』を持つ

た『男』だったの。」

「……………はい？（。D。）」

「まあ、お兄ちゃんの事知らなさそうだから、簡単に説明するね。英竜お兄ちゃんはね、元々『性同一性障害』を持った『男の娘』だったの。」

ガルツチ「また男の娘かよ!? ツッコミが追い付かねえよ!」

未来「英竜って、男の娘だったんだ……………。しかも障害者って。」

「その際で、お父さんとお母さんは虐待し、友達と思ってた人からも虐められ、大人になっても其奴らに指差されていたんだ。」

ガルツチ「うわあ、僕より酷くね?」

未来「確かに……………」

「でも心配しないで、お兄ちゃん。ゼロノス様に着けば、そんな奴らが居なくなつて、誰からも指差される事も無いし、虐める奴なんて居なくなるんだ。」

英竜「……………」

巫山戯るな……………」

「あ、どうせなら交渉しようか。僕がゼロノス様に——」

ガルツチ「巫山戯るな!!!」

英竜「ツ!?!」

愛花「ガル兄!?!」

深雪「どないしたの!?!」

ガルツチ「ゼロノス側に着けだど? 英竜お姉ちゃんを苦しませようとするな!! 雑種!!」

「何? 何でそうまでして邪魔するの? お兄ちゃんと関係ないでしょ?」

ガルツチ「関係ない? 違うね、英竜は僕のお姉ちゃんだ! 貴様のよ  
うな雑種に、お姉ちゃんを傷付けるつもりなら、俺が許さない!!」

英竜お姉ちゃんが男? 関係ない。どうでも良い。守るって決めたんだ。フラン達のように、未来達のように。英竜お姉ちゃんを守るって!!!

「うっざったるい奴だね。だったら、殺してあげる。ゼロノス様に楯突いたこと、後悔してあげる!!」

ガルツチ「上等だ! 4人とも、手を出すな。此奴を殺す。『天満月』、『無』を宿せ!」

「僕の方が、英竜お姉ちゃんの弟に相応しい。お前のような女臭い奴に、弟と名乗ってたまるか!!」

『プツッン』

ガルツチ「ほう? 面白い事言うではないか雑種。どうやら先ず、その喉元かつ斬ってやった方が良さそうだな。英竜お姉ちゃんは僕が守る!!!」

未来「あー、出ちゃった……………」

英竜「何が?」

未来「英竜は知らないだろうけど、ガルツチはああみえてヤンデレ気質があるんだって。」

英竜「フア!?!」

深雪「うわあ、ガルツチはん相当やな。愛が重い。」

愛花「フランお姉ちゃんとかいしお姉ちゃん、イリヤお姉ちゃんも、ヤンデレだけどね。」

3人「『『そうなの!』』」

愛花「共通点を上げれば、傷つけた相手を殺す……かな?」

英竜「(。D。)ポカーン」

深雪「うわー、此はどうしよもあらへんな……。……。」

聞こえてるよ、皆。

「死ぬ覚悟は出来てる?」

ガルツチ「寧ろ、貴様は無残な死に方に覚悟は良いか?」

「英竜の弟に相応しいのは、僕だけだ!!!」

この時、未来達はこう思った。

!!!

4人「『『二人とも、ヤンシスじゃん……。……。』』』』」  
だから聞こえてるって。っていうかヤンシスって、酷くね?

t o b e c o n t i n u e d

→



## 第79話 全王神&龍神王VS全王

―アストロ平原―

龍神王 side

おい、やつてるやつてる。♪なんとか間に合ってよかった。さーて、敵軍に向けてっと。

龍神王「『カオスシユート』!!」

その場に居た人造人間ちゃん達は、私のビームで吹っ飛ばされました。つていたいた、全ちゃん見つけた!!

龍神王「全ちゃん!」

全王神「龍ちゃん!来てくれたんだね!!」

龍神王「もつちろん!私達は、無敵のタッグでしょ?」

全王神「勿論!!さあ、暴れちゃうよ!」

士「いや待て、お前総大将だろ!」

海東「やめておけ、士君。ありや人の話を聞かない方だ。」

東「まあ楽しければ、それでいいんじゃない?つて事で、そおれ!」

「ゴホオ!」

士&海東「うわあ、スプラッター……………。女の子がやる事じゃない……………。女の子がやる事じゃない……………。」

つて言ってるけど、実際そう言うことしてる女の子って居るのはいるよ?

???「随分と楽しそうだな、姉貴。龍神王。」

この声、間違いない。全ちゃんもその声に気が付いたのか、まだ微笑んではいたけど、目はもう笑ってはいなかった。すると、ホームクルスは私達を円に囲い、その中から全ちゃんの弟である全王君が現れた。

彼奴、ホントにゼロノス側にいたなんて。

全王神「やあ全王、こんなところで何してるの?こんな戦場のど真ん中で。」

全王「何してるつて?決まってるじゃないか、姉貴。処刑しに来たんだ。」

全王神「処刑？私を？」

全王「そつ、実は界王や界王神、果てには星の抑止力のガイアと霊長の抑止力のアラヤから、勅命を頂いてね。

次元を狂わせた元凶である、『全王神』を抹殺せよつと言われたんだ。勿論、その中に君が転生させた人達も対象してるんだよね。」

全王神「へえ、彼奴らそこまで敵視してるって訳ね。」

オーデイン「全く、あれだけ派手にやったら、抑止力も働くだろ。というよりは、今まで抑止力が居なかったのが不思議なぐらいだ。」

全王「君も苦勞してるね、オーデイン。其奴と一緒に居るだけで、頭が痛いだろ？何でそつちにいるの？」

オーデイン「確かに、頭は痛いな。それは事実だし、此奴と一緒にいても意味は無いかもしれん。」

え、それちよつと酷くない？全ちゃん可哀想だよ？

オーデイン「だがな、此奴の息子にガツンと言われたんだ。『母さんの気持ちを知らないくせに、これ以上追い打ちかける気なら、二度と会わせない』つてな。確かに、此奴の苦しみは、俺も分かるはずはなかった。」

だがな、ロキとかフェンリル、此奴の息子に言われてようやく分かった。そして理解しようと思っただ。神泣かせではあるが、此奴をほつといたら何をしでかすかたまつたもんじゃないからな。だからこそ、俺は俺の意志でここにいる。あんな奴らに従うより、こつちの方が面白味があるからな。」

全王神「いやくん！オーデイちゃんホントに照れ屋さんなんだから

〜！♪♡」

オーデイン「喧しい。」

龍神王「オーデイン、ツンデレだね。」

オーデイン「龍神王も、はあ………全く。まあそう言うことだ、悪いがこの神泣かせを守るために、その抑止力諸共倒してやる。来い、ファントムルイン・グングニル『滅幻・運命の槍』。」

うわあ、相変わらず禍々しい程放ってる槍だなあ………。まっ、私はこつちを使うけどね。魔神刀『死龍剣』。黒き龍の角や鱗で作ら

れたと言われている、禍々しい刀。妖刀の類なんだけど、どうも此、神刀が墮天しちゃったようなものだし、勝手に魔神刀って命名しちゃった。

全王「……………まあいい、どうせ貴様も邪魔だ。姉貴に楯突くなら、殺してやる。」

全王神「……………ねえ、弟よ。知ってる？」

全王「？」

全王神「仮に私に勝てたとしても、私の息子がどれだけ強いかわかる？」

全王「はっ、何を今更。姉貴に劣る奴なんざ——」

全王神「どうかな？息子は、私を超えているよ？貴方が思ってる以上にね。」

全王「世迷い言を、貴様を殺し、ついでに貴様の息子を殺してやる！！」

全王神「そつ、そこまで言うのなら。私も本気でやろうかな。」

全ちゃんの本気がきたわね。このびりびりと電気が流れるような感じ、私と喧嘩をした時とは違う感覚ね。

全王神「オーデイン、龍神王。奴に情けをかけず、殺すわよ！！」

オーデイン「クツクツク、勿論だ。」

龍神王「元よりそのつもりよ、全ちゃん！」

全王「愚かな……………、抑止力と俺に逆らったことを後悔させてやる！！！」

さあ、深雪ちゃんと全ちゃんの転生させた子達を襲ったこと、後悔してあげようじゃないの！！

「やれええええ！！全王様ああああ！！」

葵連「なにこの声援。」

士「俺が聞きたい。つて、ん？」

「全王様ああああああああ！！！！その冷たい目で、私を罵つてええええええ！！踏みつけてええええええ！！」

海東「……………変態だ。」

士「……………あのホームクルス、変態だな。いや待て、ここにい

るホムンクルスって……。」

『全王様Love!』

束「……………ファンだったよね。しかも挙げ句の果てには縛って鞭打って甘い声で罵ってって言うホムンクルスがちらほらと……………」

士「……………なにこのホムンクルス。」

葵連「私が聞きたい。」

t o b e c o n t i n u e d →

## 第80話 歪んだ兄弟愛と守護する姉弟愛

―摩天楼 1F―

ガルツチ side

ガルツチ「妖術百ノ術『窮奇・疾風斬』！」

「奉霊の時来たりて此へ集う、鳩の眷属、幾千が放つ漆黒の炎！『カ  
ラミティブラスト』!!」

ちっ、此奴ただの一般人と思っていたが、何かしらの強化魔術で、強  
くしてるな？だが、此奴は……………。

未来「中途半端だね。」

英竜「え？」

深雪「ほな、見てみ。火力は申し分ないけど、途中から弱まってる  
やん。あれじゃあガルツチに勝とうなんてどだい無理な話やな。」

愛花「もう、関西弁になっちゃってるね……………。」

英竜「それはそうと……………、私……………。」

英竜お姉ちゃん、やっぱり迷いがあるな。無理も無い、あれで動揺  
しない方が、大したものだが……………。

「勝負あったね。」

ガルツチ「？」

「今英竜お兄ちゃんは、迷いを生じてる。もしこちら側に来たら、い  
くら戦力を揃えても絶対に勝てない。」

ガルツチ「そっちこそ、何を言ってるんだ？」

「何？」

ガルツチ「仮に英竜お姉ちゃんが敵に変わっても、無力化させる方  
法なら持つてる。メディアが持つ宝具『破戒すべき全ての符』、それを  
使えば特典も消滅する。」

深雪「敵対したときの対策既にやってたんかい!!!」  
「破戒すべき全ての符」が最強なんじゃ……………。」

「酷いなあ、英竜お兄ちゃんが折角手に入れた力を消すなんて、最低  
な弟だね。やっぱり、僕が弟に相応しい。」

巫山戯やがって、勝ってることにいい気になってる。いや待て？も

し彼奴が出した魔法がフェイクだとすれば、本命は……………。

英竜「私は……………、ぼ……………違う、私は……………!!」

未来「ど、如何したの英竜!」

ガルツチ「……………洗脳か。だから勝ち誇っていたのか。」

「その通り! さあ英竜お兄ちゃん、自分の正直さを教えて! どつちが英竜の弟なのかを!!」

まずい、もし英竜お姉ちゃんが取られたら、ホントに最悪な状態になる……………。

英 竜 「私 は……………、 私 は……………

……………!!!!」  
ガルツチ「英竜お姉ちゃん!!!」

英竜「私は、もう一度ガルツチにキスしてもらいたあああ!!!」

ただその言葉で、全員（。D。）ポカーンとしていた。どちらの弟なのかではなく、ただ僕のキスを要求していただけだった……………。

英竜「ううう……………、恥ずかしい……………。／／／／／／／／／／／



情熱的なの!？」

英竜「その、ね? ガルツチの軽めのキスが、少し……………心に響いてね……………。景気付けの筈なのに……………、暖かくって……………。／／／／／」

ガルツチ「……………。／／／／／／／／／／」

英竜「駄目かな?」

ガルツチ「その、お姉ちゃん? あれあくまで、景気付けのやつだから、そんなホイホイとすることは——」

英竜「(?!?ω???)」

って、滅茶苦茶期待しまくってるし!? 何? そんなによかったの!? ただ景気付けに軽くキスしただけで、そこまで!?

ガルツチ「と、兎に角今は駄目!! ここ戦場だし、油断してやられるかもしれないんだから。」

英竜「そんなあ……………。」

未来「まあ、し、仕方ないよね……………。」

深雪「せ、せやな……………。」

ガルツチ「その代わり……………。」

英竜「?」

ガルツチ「その代わり、終わったら好きなだけいっぱいやってあげるから、それまで我慢して。」

英竜「ホント!!」

ガルツチ「うん、だから今我慢しといて——」

英竜「わーい!!! ガルツチ大好き♡♡♡」

ガルツチ「お、おいおい! もう、しょうがないお姉ちゃんだなあ……………。」

この時未来は何故か悟りを開いたかのような顔をして、『尊い』と言っていたそうな……………。とりあえず、先を急ぐために、エレベーターに乗り込み、最上階まで登った。あ、あの弟と名乗ってた奴は、復活できないように肉片ごと燃やし尽くしました。



未来「ガルツチ……………、このエレベータ。」

ガルツチ「うん、どうやら500階までしかいけないようだね……………」

愛花「あ、そういえばこの摩天楼、9那由多階位——」

英竜「高い!？」

ガルツチ「何その気が遠くなりそうな階数!？」

深雪「アホやろ!?!こんな高い摩天楼作ったら何時崩れるかわからへんやないか!?!」

未来「ゼロノス、絶対に登るとき面倒くさがってるんじゃないのかな?」

クリムゾン「はあ、2人とも。ブルトン使って最上階に行った方が良いんじゃないのか?」

あ、そういえばそうだな。でも……………」

未来「確かにそうだね。」

英竜「いや。お薦めは出来ない。」

クリムゾン「何故だ?」

ガルツチ「ちつ、なるほど……………。既に対策済みって訳か……………」

英竜「ガルツチ、どうだった?」

ガルツチ「どうやら、次元を使って屋上に行かせないように、強力な結界を張っている。しかも、結界を外すには何処かの階にいる結界

師を見つけて倒さないと、ブルトンで屋上に行くことが不可能だ。」

英竜「むう、最低でもどれだけ倒せばいいの？」

ガルツチ「最低でも、10人倒せば結界を維持できなくなる。そこがチャンスだ。」

英竜「分かった。じゃあ、ジャックと神風、愛花とは別行動しよう。」  
クリムゾン「おう、任せておけ。」

500階に着いた途端、僕と未来、英竜は右サイドを、ジャックと深雪、愛花は左サイドで別れ、結界師を探し始めた。

t o b e c o n t i n u e d  
→

## 第81話 ゼロノスの真意

—摩天楼 最上階—

ゼロノス side

……………結界師10人敗北して、更には大勢のホムンクルスが犠牲になったか。やれやれ、ここまで劣勢になったのは驚きだ。

しかし、時間稼ぎのおかげで、ようやく完成までに至った。だが、その前に……………。

ゼロノス「最後かもしれんから、紅茶でも飲むか。」

『ズズツ……………』

ゼロノス「ブウツ!？」

結局ブランドかよ!?!クソ、何故こうなるのか理解が苦しむ……………。ああクソ、いつそブランド消して……………。

『バンツ!』

来たか……………、ってしまった!!紅茶のシミが!?

ガルツチ「待たせた……………ってどした。」

ゼロノス「ちよつと待て、服ぐらい着替えさせろ。紅茶のシミが着いた。」

英竜「何故に!？」

未来「ここに来るまでの間、何してた……………。」

ゼロノス「と、兎に角その紅茶を飲みながら待ってる。すぐ着替える!」

あーくそ、俺のしたことが。そもそも何故ブランドばかりなのだ!?!  
アールグレイだと言っているのに……………。

『数分後』

ゼロノス「すまぬ、待たせた。」

クリムゾン「お前、何してんだよ。というかガルツチの奴、文句が言いたいらしいぞ。」

ゼロノス「?」



た……………。

未来「ねえ、ここに来た目的って確か……………」

英竜「ゼロノスを倒す、だったよね？」

クリムゾン「それは間違いない。んで兄貴、何時まで茶を飲んでるんだ。」

ゼロノス「待て、しかして希望せよ。」

5人『敵が言う台詞かそれ!？』

ふう、とりあえず全部飲みきったことだし、そろそろ真面目に行くか。

ゼロノス「んんっ、さて……………。っってお前、そっち側だろ。」

ガルツチ「そうだった。」

ゼロノス「全く……………。では改めて、よく来たな。しかも、0号……………貴様がそちら側に居たとは驚いたぞ……………」

クリムゾン「兄貴、一体何を考えてる。テメエがやろうとしてるのは、無限ループだぞ。」

ゼロノス「知ってる。だが実際、彼奴らも同じ事してたでは無いか。『聖杯戦争』ってのをな。」

そう、あの機能と似ている。仮に終わったとしても、また次の聖杯戦争がある。そうやって永遠と語り継がれるように聖杯戦争が巻き起こる。

俺がやろうとしてるのは、ただ一つだ……………。

ガルツチ「ゼロノス、貴様の本当の目的は何だ？」

ゼロノス「目的……………、か。決まってる。全次元の、本来在るべき姿に戻すだけだ。」

英竜「それはただ逃げてるだけじゃないのか？根本的な問題を無かったことにして、もう一度作り替えて……………」

ゼロノス「それは違うぞ、小娘。確かに聴き方次第ではそうだろう。だが俺は違う。新時代の者達に、絶対的な善と絶対的な悪を教える。そして歪み始めたら取り壊し、次の者達にこう教える。絶対的な神を信じよ、そして疑わず、ただ崇めよ。そして、ただ愛を育み、そして息絶えるだけの人生を与える。」

知性も与えず、ただただ本能のままに従う世界に変えるのだ。

それが、我が計画『リターン・オブ・ザ・アヴァロン』だ。」

ただそれだけだ、全ての生き物を平等にするために1と言う悪を切り捨て、9という善を作り出す。つまり破滅の原因である進化を止めるのが、俺の目的だ。

ガルツチ「巫山戯た計画だな。だが、分からない訳でもない。」

5人『え!?!』

ゼロノス「ほう?。」

ガルツチ「お前の本当の目的って、全ての生き物達に『進化』という概念を捨てさせる事だろ?」

確かに、『進化』するためには、何かを捨てなくては進化はあり得ない。進化すれば、きつと戦争は起こる。そして、今回のように犠牲者が出る。まるで、お前がやろうとしているのは衛宮切嗣、その体現者だな。」

ゼロノス「奴は恒久平和というのを目指し、善と悪の廃絶を試みるが、俺は違う。先ずは善と悪の戦いを起こし、取り壊した次は、神という者に崇めて、『進化』という概念を捨てさせる。」

生きる者は世界のルールに従って生き、助からぬ者は捨てて行く。そういう世界を作るのだ。」

side change  
ガルツチ side

なるほど、それがゼロノスの目的か。分からなくもないな。たしか、『胎児の夢』の中の歌詞に、こんなのがあったな。

『終わらない悪夢

続いていく悪夢

進化する歩みを止めない限り

血塗られた歴史

呪われた歴史

これからも続いてゆくだろう』

終わることもなく続いていく悪夢、血に塗れ呪われた歴史、『進化』という歩みを止めない限り、此からも続いていく。

切嗣は、その人類の可能性を信じる気を失せ、善と悪を取っ払おうとしていた。だがゼロノスは、『進化』という概念を捨てさせようとする。

そうすると、誰も争うことはなくなり、生きる者は世界のルールに従って生き、助からぬ者は捨てて行く世界へと生まれ変わる。なるほど、全くもって……………。

ガルツチ「つまらないな。」

ゼロノス「何ツ？」

ガルツチ「つまらないと言ったんだ。そんな世界作って、何が楽しいんだ？暇すぎて欠伸が出そうだ。

確かに、風龍さんやエイリアンマンさんが居る世界は大変なことになってるのは事実。『進化』とか『変革』とか色々起こってるからな。まあこんな事言ったら不謹慎だけど、逆に何が起こるか、次にどんな『進化』をするのか、気になるんだよ。それと比べてお前の世界は、ただ平凡な毎日。刺激という物がない。ただ神という存在を崇めるだけ。全くつまらない世界だ。

こんな事なら、まだ遠藤宇宙がやってた計画がまだ良いかもしれない。2人だけの世界の方が……………いや同じか？」

未来「いやそんなこと言われてもねえ……………」

まあその時の記憶があやふやだから、もう知らないけどね。

ガルツチ「兎に角、神様気取りはここまでだ。あらゆる次元を守るために、ゼロノス。貴様を殺す。」

ゼロノス「愚かな奴め、この『零の龍神』の俺に勝てるだけでも？」  
ガルツチ「忘れて貰っちゃ困るな。こう見えて僕は、『虚の龍神』だぞ。」

ゼロノス『『虚の龍神』!?馬鹿な、あの戦争で死んだはず——』  
ガルツチ「だが運がよく、その死体が残って、今では僕の肉体になった。未来、深雪、愛花、ジャック、英竜。準備はいいか？」

僕は直ぐさま、『天満月』と常闇月の刀を抜き、未来は仮面ライダーデイケイドのコンプリートフォームに、深雪は白楼剣と楼観剣を投影し、ジャックはブラッドレイが使ってた2刀の剣を取り出し、そして

英竜はウルトラマンモンスターと呼ぶ姿に変わった。

未来「ついでに、彼らも呼ぼう。」

『FREDDIE KRUGER! TATSUGAMI SORA!  
SEBA SOUBA! SUMMON!』

すると、総刃とフレディ、空が召喚され、それぞれの武器を持っていた。

総刃「つて、ちょっと此スケール大きくなってませんか？」

フレディ「まあまあ、楽しめればそれでいいじゃねえか。」

空「皆さん、行きましょう。」

未来「うん、この戦い………絶対に勝ってみせる!!」

ガルツチ「行くぞ、零の龍神。」

英竜「君の野望は、ここで打ち砕く!!!」

この全次元を、守るために!!

t o b e c o n t i n u e d ⇨



## 第82話 超完全生命体アンチスパイラル

—摩天楼 地下—

一方で、地下奥にある実験室……………。

「最終チェックを確認、システムオールグリーン。」

「なあ、此がゼロノス様が言ってた最終兵器なのか？」

「ええ、元々は反螺旋族と言つて、『天元突破グレンラガン』の世界の最大の敵とも呼ばれてた奴なの。でも、シモンつて男に敗北され、消滅したかに見えたけど、ゼロノス様が運良くその遺体を見つけたらしくて、それを拾つて、何者にも負けない最強かつ無敵の『超完全生命体』にさせたつて事ね。まあ様々な能力とか色々あるから、確かに此が最終兵器つて言うのも納得かもね。」

「ならば、此さえあれば、もう勝つたのも同然ですね!!」

「そうだ——」

【Warning!!! Warning!!! Warning!!!】

「どうした!」

「大変です!!最終兵器である『超完全生命体アンチスパイラル』が—

『パライイイイイイン!!!』

「何だ?!まさか、自我がまだ残つて!?!」

そして、その場に居た研究者と開発者達は、その最終兵器に殺されていき、その最終兵器は瞬間移動して、外に着いた途端ロボットが召喚し、その中に取り込まれていき巨大化し始めた。

—摩天楼 最上階—

ガルツチside





ガルツチ「正気か貴様!! w w w w w w このようなものを見せて、もう勝ったと思ってるのか貴様らは!!!! ハーツハツハツハツハツハツ!!!! 滅茶苦茶笑える!!! w w w w w w」

英竜「ガルツチ、何で笑えるのよ。私達、もうどうすることも――

ガルツチ「戯け者!! まさか英竜、僕の言葉を忘れた訳じゃあないよな? 『絶対に勝とう』って。」

深雪「せ、せやけど……………、あんな巨体にどう対処しろと。」

皆は僕の笑いで気が動転していた。あんなのに勝てる方法があるのか? 誰もがそう思った。

ガルツチ『Moon Light Another Fate』。

ムーン「何でしょうか。」

ガルツチ「確か、君は限界もなく大きくなれるんだよね?」

ムーン「ええ、勿論。融合すれば、あれより強大な力を持てます。」

ガルツチ「十分だ。」

ゼロノス「まさか、たかがそのスタンドで、この最終兵器に対抗出来るだけでも言うのか? 無駄な足掻きよ。」

ガルツチ「ただのスタンドだったらな。」

ゼロノス「何?」

そろそろ、見せつけてやるか。

ガルツチ「未来、英竜、深雪、空、フレディ、ジャック、愛花、フラン、こいし、イリヤ、兄さん、レミリア、さとり、姉さん、クロエ、士郎、エミヤ、クロウ、ギルガメッシュ………………。最後まで、俺の我が儘に付き合って貰うぞ。この身が果てるまでな。」

未来「でも――」

フラン「言うと思った、お兄ちゃんなら。」

未来「フラン!?! って皆!?!」

全王神「もう、ホントにガルちゃんは諦めの悪い子なんだから。」

英竜「全王神様!?!」

ガルツチ「英竜、未来。諦めるのはまだ早い。それに言つたら? ゼロノス用神話礼装があると。だが、それを発動させるには、『神話スタ

ンド』である此奴が必要になる。

此奴が居れば、あとは簡単さ。」

英竜「……………そうだね、まだ、負けてない！」

未来「だったら、足掻こうじゃないか。最後の最後まで!!」

ようやく、重い腰をあげたな。さてと……………。

ゼロノス「下らん、三文芝居はそこまでだ。」

ガルツチ「お前よりはマシだ、ゼロノス。つてな訳で、地上にいる

お前ら!!!!アレをやるぞ!!!!」

全員『アレ?』

ガルツチ「決まってるだろ？」

合体だ!!!!!!

するとこの場にいた未来達と地上にいる味方は光球へと変化していき、僕のスタンドに吸い込まれていく。同時に巨大化していき、いつの間にか超天元突破グレンラガン並みの大きさに変わった。しかも、姿も一変し、50枚ほどの虹色の翼に、虹色のマントを靡かせた

姿へ変貌した。

ガルツチ「母さん、英竜、操縦は任せた。僕はゼロノスと決着を着ける。」

僕はゼロノスの方を見た途端、また何かの気配を感じ、すぐ後ろを向いた。そこには、超天元突破グレンラガンの姿があった。まさか、あれって…………。

シモン「ガルツチいいいいいいいい!!! お前の諦めない心、その意志!!しかと見させて貰った!!!」

カミナ「ああ、それでこそグレン団の中の一人、本当に最高だぜ、ガルツチ!!!」

ガルツチ「シモン!?カミナ!?皆?!」

ヴィラル「あの野郎を倒すんだろ?手伝ってやるよ!!英竜とか言っただか!!」

英竜「何??」

ヴィラル「俺達の手を掴め!例のアレをやるぞ!!!」

ガルツチ「あれって…………、ちよつと待て、『神話スタンド』とそれだ!?!」

シモン「ああ、そうだ!!!!」



本来なら、『死滅願望』のスキルがあつたはずの神話礼装だが、英竜お姉ちゃんのおかげで、問題なく使える。でも、僕のは別にある。『消滅願望』、限界を無視して戦うと言われる『死滅願望』スキルとは違い、此方は己の全ての極限を無視して戦うスキル。

此を使えば、きっと僕は消滅するだろう。皆を置いて……………。

クリムゾン『俺に背負わせろ、そのスキル。』

ジャック!?

クリムゾン『へっ、お前だつてまだ生き足りないんだろ？俺はもう充分満足した。』

だ、だが――

クリムゾン『ガルツチ、俺はお前と出会えたこと、感謝してる。恩返ししきれないほどな。だから頼みがある。』

鈴美を頼むぞ。』

……………分かった、『消滅願望』の代償は、お前にするぞ。

クリムゾン『ああ、頑張れ。お前なら、俺の兄貴を倒せる。』

少し涙ぐむも、我が親友ジャックの別れの覚悟を決め、詠唱を始める。

ガルツチ「全、零、虚、無、絆、滅。6つの龍神と共に、我はすべてを超える。』

我は虚無であり偽りなり。されど、持ちし心と精神、そしてこの意志は黄金なる魂なり！

繋がれた楔を、枷を全て断ち切り、己の極限を超えん!!!」

詠唱が終わると同時に、髪の色は虹色に変色し、羽耳は何故か4枚に増える。20枚の虹色の翼が生え、右腕には植物が、左手には鎖が絡みあつた。服装はギルガメッシュの神話礼装と似ていたが、首元に月のキーホルダーが着いたチョーカーを着けていた。

此がゼロノス用の神話礼装『永劫の超天元神話礼装』。

その姿に、ゼロノスは驚愕を隠しきれなかった。



ゼロノス「貴様……………、一体……………何者なんだ!？」  
ガルツチ「僕か?ならば聞くがいい、何者かをな。僕はラーク・バスター・ガルツチ。全王神の息子にして、『この世の全ての刃』、そして全王神を超える『超全大王神』なり!!!  
さあ、零の龍神よ。最終ラウンドと行こうではないか。」  
ゼロノス「……………いいだろう、その覚悟に敬意を評して此方も全身全霊で相手をしてやろう。」  
ガルツチ「行くぞ、零の龍神。我らの真髄……………」。

恐れずして掛かってこい!!!!!!」  
ゼロノス「来い!!ガルツチイイイイイイイイイイイ  
今ここに、本当の最後の戦いが始まる。  
!!!!!!」

t o b e c o n t i n u e d  
⇨

第83話 超全大王神『ガルツチ』VS零の龍神『ゼロノス』

— ??? —

ガルツチ side

子ガル『漸く踏ん切りが着いたんだね、『ガルツチ』。』

うん、僕は今まで本気を出さなかったのは、喪失という恐怖を抱いていた。友を、家族を、大切なものを失い、正気を保てる自信がなかった。

けど、ジャックの目を見て、僕も覚悟を決めた。だったら、こっちも覚悟を決めなきゃね。

子ガル『やつぱり、君は凄いよ。なら、その思いを無駄にしないために、勝たないとね。』

元より、そのつもりだ!!

ガルツチ『『オールレインボー・ノア・スパーク』!!』

ゼロノス『『アンチネクス・スパーク』!!』

僕は虹色の斬撃を、ゼロノスは黒い斬撃を放ち、ぶつかると同時に、一瞬にして爆発を起こす。

ゼロノス「おのれ、ならばこれならどうだ!!暗黒邪龍『ディアボロス・ザ・ドラゴン』!!」

ゼロノスの後ろには、禍々しさ抜群のドラゴンの姿があり、僕に攻撃してきた。

クリムゾン『ガルツチ!!俺の力を使え!!』

ガルツチ「ああ、使わせて貰うぜ!!」

僕は直ぐさまバックステップで攻撃を避け、ジャックの力を使った。

ガルツチ「混沌を司るドラゴンよ、我らの世界を守るために目覚めよ!!混沌邪龍『カオス・オブ・ザ・ドラゴン』!!!」

呼び出すと、そこにはゼロノスにも負けないほどの禍々しさがあるも、翼は美しい程白く、竜人とも思える姿があった。其れがゼロノス

の邪龍に攻撃を仕掛け、邪龍同士の闘いが始まった。

ゼロノス「くっ、だったら!!」

ガルツチ「おい待て、それって『マスターボール』!?」

ゼロノス「来い!!『ディアルガ』!!『パルキア』!!『ギラティナ』!!  
貴様の思うがままに戦え!!」

ガルツチ「だったら、こつちだって!!『ゼクロム』!『レシラム』!  
『キュレム』!」

6つのボールが投げられると同時に、その中から伝説のポケモン達  
が現れた。ゼロノスからは、時を操る『ディアルガ』、空間を操る『パ  
ルキア』、虚数世界で見守る『ギラティナ』。僕のは理想を追い求める  
黒き竜『ゼクロム』、真実を追い求める白き竜『レシラム』、僕と同じ  
虚無しかない『キュレム』。この6匹が出て来たと同時に、持ち主の敵  
に攻撃をし始めた。

ガルツチ「つていうかお前、ハウエン三龍持つてるつてどういう事  
だ?」

ゼロノス「貴様も言えた義理じゃないだろ!!」

しかしまあ、ここまで高揚感が溢れ出てくるのは、初めてだ。

今まで強敵と戦ってきたが、多分1番の強敵と言えるのは、ゼロノ  
ス……:お前かもしれない。相容れぬもの同士ではあるが、似た部分  
はある。もしかしたら、お前と出会うために、ずっと彷徨っていたの  
かもしれない。正直言って、会えて嬉しかった。

このような全次元を超えた戦いじゃなかったら、好敵手として切磋  
琢磨出来たらどうに……:。

ん?何かこつちに――

『ズッポオオオオオオオオオオ!!』

ゼロノス「グギヤアアアオオオオオオオオ!!」

ガルツチ「ええええええええええ!!」

ゼロノス「お、おのれガルツチ……:、まさか狙ったのか?だが  
この程度では死なんぞ!!」

ガルツチ「いややってないし、つていうかあれで無事つて……:。  
だがまあ、こんなところで負けたら萎えるけどな!!」

ゼロノス「お返しだ!! 『インファイニティ・ビッグバン・ストーム』!!!  
DNAの一つも残らず、消え去れええええええええええ!!!」

ガルツチ「負けるかっての!! 『アナザー・インファイニティ・ビッグ  
バン・ストーム』!!!」

お互いに巨大な閃光を放つと、そこからあらゆる宇宙が誕生し、ぶ  
つかり合っていた。邪龍も、ポケモン達も同じように、お互いの最強  
の技でぶつかり合っていた。

だが、そのぶつかり合いに、ゼロノスの表情が見えた。彼は  
……………泣いていた。何故泣いていたのか分からなかった。でも  
確かに、彼は泣いていた。

あのような野望を持った『零の龍神』が、何故泣くのか、僕には分  
からなかった。

クリムゾン『……………兄貴はな。』  
ん？

クリムゾン『あの野郎、俺やティポタが生まれる前だから分か  
ねえが、彼奴はいつも、泣きそうな顔をした。野望とかは人一倍の  
癖に、いつもあの顔だった。聞こうにも俺達を無視ばかりしてよ。

苦しいなら言ってくれば良いってのに、全然聞かねえんだ。そん  
時は業を煮やし、彼奴から離れたんだ。もう少し傍に居てやれば、お  
そらくこうはならなかったのに……………』

……………なんだ、結局彼奴も、僕と同じだったんだな。野望とは  
裏腹に、本当は気付いて欲しかったんだな。

ジャックに見捨てられてしまったことで、手遅れになるほどであ  
なっちゃったのか。だったら尚更、同情したくなる。でも、それでも  
勝たないといけない!! その苦しみを解放させるために!!!

ガルツチ「うおおおおおおお!!!」

ゼロノス「なっ?! 押されてるだど?! ↓! の俺が!? この、零の龍神であ  
る、この俺がっ!」

ガルツチ「もうっ、終わりにしよう!! ゼロノス!! 全次元のためにも  
……………!! お前のためにも!!」

ゼロノス「っ?! 俺の……………? 貴様に……………、貴様に何が分か

るってんだ!!! 『ゼロウススパーク』!!!」

凄まじい程の閃光を放っていたが、先程の言葉で動揺していた。

ガルツチ「……………分かるよ、お前の気持ち。その苦しみ……………」

だから、受け止めてあげる。花卉よ、我を守りたまえ!!

『熾天覆う無限の円環』!!」

此方は出力全開の大きな花を生み出し、その閃光を受け止めていた。その途端、彼奴からの心の叫びが聞こえた。

『何で誰も分かってくれないんだ……………、俺は生まれぬ方がよかつたのか……………! こんな苦しい思いをして、一体なんになるんだ!!  
こんな苦しい思いをするなら、進化するために犠牲を払うなら……………!!!』

進化なんて、消えてなくなればいいんだ!!!

消してやる、この世から『進化』を!! 『進化』という概念そのもの消し、  
神だけ崇めるだけの世界に変えてやる!!!

此が、ゼロノスの本音……………。でも!! でも……………!!!

ガルツチ『それは違うよ』!!!

ゼロノス「!?」

閃光を弾くと、其れは明後日の方向に向いて飛んでいった。

ガルツチ「ゼロノス、お前の気持ちは分からなくもない。けど、『進化』が無くなればいいなんて、間違ってる!!」

ゼロノス「……………ならば、消えろ!! この技でな!! 『反螺旋ギガドリブレイク』!!!」

ゼロノスは己をドリルと化し、僕に迫ってきていた。実際、あのグランゼボーマも同じように行動していた。

全王神「ガルちゃん、こっちもやろう!!」

ガルツチ「ああ……………!! 6つの龍よ、螺旋となりて、今ここにこの世の全ての希望を織りなそう!!!」

シモン「行くぞお前ら!! 『超究極天元突破』!!!」

カミナ「『アルティメットインフィニティー』!!!」

アギラ「『ギガ』!!!」

英竜「『ドリル』!!!」



だよ!!!」

アンリマユ「だったら、やることは一つ!!」

ガルツチ「この世の全ての刃と……………」

アンリマユ「この世の全ての悪の……………」

ガルアン「最凶合体宝具を見せてやる!!」

アンリマユは赤と黒の残光、僕は青と白の残光が走り、ゼロノスに近づき二つの斬撃を放った。

アンリマユ「これで、俺とガルツチの合体宝具……………」

ガルツチ「『無限に交差する螺旋の斬撃』だ。』」

ゼロノス「グオオオオオオオオオオ!!!」

ゼロノスは呻き声を上げると同時に、ド!<sup>!</sup>ゴンの姿は無くなり、いつもの人型に戻った。そしてハウエン三龍もゼロノスの隣に落ちてきて、グツタリとしていた。

BGM終了

ゼロノス「……………あり得ない、俺が……………、貴様のような……………、小僧に……………」

僕は直ぐさまゼロノスの前に立ち、『天満月』を投げ捨てた。が、すぐ戻り背中に収まった。

BGM ファイナルファンタジーX 『いつか終わる夢』

ガルツチ「……………もう、やめよう?ゼロノス。」

ゼロノス「え?」

その行動に、戦いを終えた英竜達には理解できていなかった。母さんですら、理解できなかった。唯一未来だけは、気が付いていた。

そう、これは未来がやってた光景の、似たようなものだった。

ガルツチ「もう背負う必要なんて無いんだよ、ゼロノス。」

ゼロノス「な、何を言うんだ!!俺は、俺はまだ——」

ガルツチ「ゼロノス……………」

僕は思いつきり、ゼロノスに抱き締めた。前までの僕なら、あり得ない行動だった。精神が憎悪と絶望に囚われて、幼かったからこそ、普通に殺していた。だが、今は違う。

慈愛を持って、その苦しみを和らげさせるために、ゼロノスを抱き

締めただのだ。

ガルツチ「辛かっただろ？苦しかっただろ？お前が、そんな風になつて、素直になれなかっただろ？」

ゼロノス「何で……………、何でそんなことを——」

ガルツチ「もう良いんだ、素直になつても……………。俺だって、お前以上に苦しかったんだ……………。素直になれなかったんだ……………。この苦しみを、一体誰にぶつけなければいいのか、分かんなかったんだ……………!!」

ゼロノス「ガルツチ……………、貴様……………」

ガルツチ「もう、泣けば良い。泣けば良いんだ……………!!苦しみも、辛さも、全部……………全部吐いちゃえ……………!!」

僕は涙を流し、泣いたような声になつて、こう言った。

ガルツチ「僕が、お前を許す……………」

ゼロノス「やめろ……………!!」

ガルツチ「例え万人が、お前を許さなくても……………!!」

ゼロノス「やめろ……………!!」

ガルツチ「存在が、お前を許さなくても……………!!」

ゼロノス「やめろ!!」

ガルツチ「僕は、お前を許す!!だから、泣け。」



ゼロノス「あ……………！」

ガルツチ「本当に……………、苦しい思いをさせて……………、ごめんなさい!!!」

ゼロノス「うっ、ううう……………！」

自分の悲しみに抑えきれず、ゼロノスに強く抱きしめる。同じように、ゼロノスも我慢の限界が来たのか、僕を抱き締め泣き始めた。

ゼロノス「すまなかった……………、ガルド……………！タイプタ……………！！俺は……………！！俺はただ、俺達を見捨てた親父共に、復讐したかったんだ!!!

ただ、それだけだったのに……………、俺は……………、なんて事を……………！」

ガルツチ「同じだ、僕も親父に裏切られ、復讐したかった……………。」

ゼロノス「馬鹿げていたのは分かった！だが、後戻りが出来なくなった。ガルドが、お前が居なくなつて、寄り添ってくれる奴が居なくなつて……………！！だから……………、だから!!」

クリムゾン「……………兄貴。」

ゼロノス「ガルド……………。」

クリムゾン「俺こそ、悪かった……………。俺は、お前を誤解してた。そんな苦しみを持つてたなんて、全く知らなかった……………。」

ゼロノス「……………本当に、すまなかったつ!!!俺を、俺を許してくれ!!!」

ゼロノスはジャックに向かって土下座を始めた。許してくれるまで、何度も何度も土下座をしていた。

クリムゾン「俺は、今でもテメエの事は嫌いだ。兄貴。」

ゼロノス「……………。」

クリムゾン「だが、許すよ。だって、俺達兄弟だろ？」

ゼロノス「ガルド……………！」

クリムゾン「兄貴……………!!」

そして、2人は抱き締め、お互い泣いていた。気がつけば、グレンラガンに乗っていたみんなも、いつの間にか泣いていた。

だが、本当に泣きそうになるのは、ここからだつた。

ゼロノス「ガルド、お前……………!!」

クリムゾン「ああ……………、時間だな。だが、兄貴も同じだろう?」  
『消滅願望』が発動したのだ。それにしても、まさかゼロノスも使っていたとは……………。

ガルツチ「ジャック……………!」

クリムゾン「すまないな、ガルツチ。ここで、さよならだ。」

ガルツチ「お前、本気か! 鈴美さんは如何するんだ!!」

クリムゾン「言ったら? お前に任せるって。」

ガルツチ「でも、でもそれじゃあ!! それじゃあお前が救われないじゃないか!! 散々殺人鬼扱いされたお前が、救われないじゃないか!!」

クリムゾン「っ!!……………参ったな。」

覚悟はしてた。だけど、半身とも呼べるジャックが消えてしまうのは、とてもじゃないけど、耐えられなかった。

クリムゾン「ガルツチ。」

ガルツチ「ッ!」

クリムゾン「もう一度言うが、鈴美を頼む。未来にもそう伝えてくれ。彼奴はああみえて、泣き虫なところがあるからよ。お前なら、きっと俺達みたいなことにはならないな。だから、頼む。」

ガルツチ「……………分かった、ジャック。絶対に、守る。」

この刃に誓って、我が親友に誓って、鈴美さんを守る。だから!!」

クリムゾン「……………ああ、安心した。お前と出会えて、本当に……………よかった……………」

——ああ、じゃあな。魂よ、友よ……………。

そう言い残し、1番かけがえのない親友である、『零の龍神』であり、僕の裏人格である『ジャック・マッドネス・クリムゾン』は、ゼロノスと共に、跡形もなく消え失せた……………。

アンリマユ「……………ガルツチ。」

ガルツチ「……………こつちこそ、本当に……………本当にっ

!!お前と出会えて、よかったよ!ジャック……………!」

止めようのない涙を流しながら、ジャックの名を呼んだあと、僕は今まで我慢していた泣き声を、大きく叫んだ。

勝利を手にした代償として、僕は……………かけがえのない親友であり、半身を失ってしまったのだ。

t o b e c o n t i n u e d  
⇒

## 第84話 超大宴会

—孤独の岬—

ガルツチ side

ガルツチ「ふうつ、この辺りでいいかな。」

僕はあの戦いが終わった後、超大宴会があるらしいのだが、先にやるべき事をやることにした。

そのやるべき事というのが、ジャックとゼロノスのお墓だった。

ガルツチ「まあ、今回のメインはアギラだけど、こっちはサブだからね。まさかグレンラガンを操縦できたなんて思わなかった。」

しかし、彼奴がいなくなつたお陰で、まさかの本当に半身がなくなるなんて思わなかったよ。英竜お姉ちゃんつたら、気付いていないだろうけど、瞬時に再生出来るけどなあ。目以外。

まあいつか。さて、と……………。

ガルツチ「そこにいるんだろ？出て来い。」

後ろを振り向くと、そこには英竜お姉ちゃんとは似ても似つかぬ姿があつた。だが、それが誰なのかは分かった。

霊長の抑止力、『阿頼耶識』だった。

ガルツチ「今更何の用だ。どう足掻いても、ここまで歪んでちゃ、さすがのお前でも対処出来ないだろ？それとも、根本的な原因である母さんを殺すとか？だったら何故態々自分から出て来なかったんだ？」

阿頼耶識「……………確かに、今更遅すぎた。ガイアですら、それも理解している。だが、そんな私でも、意地が出来た。今回歪ませた元凶である、お前を殺しに来た。」

ガルツチ「……………そうか、万人の幸せを優先して、僕達を自ら殺しに来たって訳か。下らない、万人の為に、個人の幸せを奪うなんて、熟々思ってたが、やはりお前は存在してはならないようだな。」

阿頼耶識「何故だ？何故個人の幸せを求める。その為に、一体どれだけの犠牲を払ったんだ？どれだけの人類を殺してきたんだ？」

ガルツチ「お前が、思ってる以上に殺してる。そしてこれからも、僕は殺し続ける。だがそのためには、お前が邪魔だ。お前のせいで、エ

ミヤが苦しむ。お前のせいで、切嗣が苦しむ。だからこそ、阿頼耶識。お前を殺す。」

阿頼耶識「愚かな男め、ならばこの手で、この力でお前という存在を無かったことにしてやる。感謝するがいい、お前の義姉の力で殺してあげるのだ。」

ガルツチ「……………無駄なだけだな。お前には。」

阿頼耶識「何？」

僕は直ぐさま直死の魔眼・絶望を発動させて、『天満月』を抜いてバツサリと斬った。

ガルツチ「式より先に、抑止力という名の、神様を殺しちゃったな。」

阿頼耶識「まさか……………、私が……………。万人の民よ……………、どうやら、お前達の幸せを……………守れないようだ……………」

阿頼耶識はそのまま倒れ、存在諸共消えるのが分かった。絶対に勝利できる数値で来るのなら、それは無駄なことだな、阿頼耶識。

僕はこの世の全ての刃、お前がどれだけの数値で挑んでも、数値そのものを斬る。

さてと、これでやるべき事が出来たな。

僕の幸せを守るために、母さんを、英竜お姉ちゃんを守るために、抑止力を殺す。ついでに、魔術師達の目標である根源も絶つ。

英竜「ここに居たのか、ガルツチ。……………ガルツチ？」

ガルツチ「英竜お姉ちゃん、僕決めたよ。」

英竜「？」

ガルツチ「英竜お姉ちゃんを邪魔しようとする抑止力の根源を、僕が殺す。阿頼耶識もガイアも何もかも、英竜お姉ちゃんを仇となる奴らを殺すから。」

英竜「待て待て待て待て!!!何故ヤンシスに!?!というか何があった!?!」

ガルツチ「阿頼耶識が英竜お姉ちゃんの姿で殺しに来たから、直死の魔眼・絶望で殺してやった。」

英竜「つていうか阿頼耶識今更来たの!?!対応遅いししかも弱すぎ

!？」

ガルツチ「安心して、英竜お姉ちゃん。あの2人を殺したら、後は母さんが仕切れれば万事OKだから。」

英竜「やだ……、私の義弟、愛が——ってそんなんじゃない。ガルツチ、宴の準備終わったよ。」

ガルツチ「あ、もうか。それじゃ行こっか。」

僕は直ぐさま英竜お姉ちゃんと一緒に歩くと、ふとあることを思い出した。

ガルツチ「ところでお姉ちゃん。約束覚えてる？」

英竜「約束？」

ガルツチ「ほら、言ったじゃん。あの弟を倒した後に——」

英竜「あ、えええ!?ほ、本気で言ったのか!？」

ガルツチ「本気も何も言ったじゃん!!」

英竜「まくじか。＼(^o^)／」

えー……、まあ宴会が終わってからでいつか。

そして……。宴会が始まった。まあ正直、合同での宴会が始めるなんて思わなかったからな。

ただまあ、問題が……。カオスな状況なんだけどね……。

ガルツチ「まあでも、こんなカオスな状況も、悪くないかもね。」

全王神「ガルツチちゃん、楽しんでる〜?」

ガルツチ「うん、バツチリと。」

全王神「それにしても、アギラちゃんの歌、ホントに上手いね。」

ガルツチ「そうだな。」

全王神「でも、ガルツチちゃんの半身——」

ガルツチ「安心しろ、ちゃんと戻ってる。どうやらこの超獣、僕の再生力と相性が良すぎたのか、滅茶苦茶馴染むんだ。代わりに、ジャックを失ったのが辛いけどな……………」

正直言つて、ジャックがいないと寂しい。けど、悲しんではいけないのは分かってるさ。彼奴が死んだ分、僕が生き続けないと……………。

その後僕は、英竜、未来、愛花、深雪、藍、夜神、土織の8人で最後の締めくくりをするためにステージに上がり、マイクを手に取った。

歌のことだが、どうやら母さんのリクエストがあつたため、それを歌うことにした。

ガルツチ「皆、準備はいい？」

未来「何時でも良いよ。」

愛花「(ゝω・)b」

深雪「アハハ、ウチも歌う羽目になるなんて……………。まあしやあないか。」

藍「というか、Fateで選ぶなんて、全王神様も変わってるね。」

英竜「まあそんな全王神様と出会えたお陰で、今があるって言うのも事実だけだね。」

夜神「そうだね。」

土織「それじゃ、そろそろ歌おう？皆待ってるし。」

英竜「ガルツチ、準備は？」

ガルツチ「OKだよ、お姉ちゃん。では、聴いてください。『blissom』。」

Fate／Extra cccのエンディング曲で、前にフランが歌ってた曲を、今度は僕らが歌う番になった。

すると、僕らの後ろに、一本の桜が現れ、花びらを散らし始めた。と同時に曲が流れ始め、最初は英竜お姉ちゃんが歌い始めた。

英竜「夢一つ、密かに生まれくてた。♪眼差しが、私射抜くいた、

瞬間に。♪

夜神「暖かい、掌、魔法のように。♪戒めに、閉ざされていた。♪心、開いた。♪」

藍「誰も、名付けない花に。♪」

士織「そっと、話しかけた人。♪」

藍「貴方には見てて欲しい。♪」

士織「夜明けまでの光。♪」

4人「「「「蕾が、解けていく。♪」

こんな小さな、私のかげら。♪触れ合って、溶け合って、満ちていく。♪

桜色した、淡いこの恋。♪いつか、愛に育つまで。♪「」

1番を歌い終わったお姉ちゃん達は、マイクを下ろした。と、同時に、僕はヘアゴムを解き、ポケットの中に入れた。いつの間にか、後ろ髪が長くなったと思いつつながら、僕は初めて、女声で歌い始めた。

ガルツチ「悲しみの、運命が待つのなら。♪世界ごと、未来を変えて、あげるから。♪」

愛花「美しい、詩人の言葉より。♪何気ない、微笑み。それが、私への寄香。♪」

未来「誰も、傷付かないように。♪」

深雪「一人、苦しんでいたの。♪」

未来「君の為に生きたい。♪」

深雪「純白のドレス着て。♪」

4人「「「奏でよう、永久の誓い。♪」

無邪気な時が、過ぎ去って今。♪想うまま、願うまま、身を焦がす。♪

求める事を、止められぬ愛。♪いつか、恋を越えるまで。♪「」





ガルツチ「はあ、英竜。こっち向いて。」

英竜「ちよつと待って、これって——」

この後の未来が分かっていたのか、英竜は赤くなるも、構わず僕は英竜にキスした。

ガルツチ「僕は君のことが好きだ。未来もそうだし、フラン達も、簪達も、夜神達もそうだ。だからこそ——」

英竜「いやいや、あのね!?!物事には順序があつてね!?!」

ガルツチ「順序なんてどうでも良い!!僕は結婚することには構わない!夜神達も、簪達も結婚も構わないって言ってた!」

英竜「って、藍達いつの間に!?!」

藍「えへへ、全王神様の質問の時にねえ。まさかこんな形で結婚だなんて、思わなかった。」

英竜が滅茶苦茶焦ってるな。まあ無理も無いか。無性愛の英竜だったし、仕方ないよね。

ガルツチ「それで、如何なの?英竜。」

英竜「わ、私は……………。」

もう顔が真っ赤になっているも、覚悟を決めたのか大声で言った。

英竜「私だって、ガルツチ達と結婚したい!!!!」

それが滅茶苦茶響き、音楽ですら一時的ではあつたが止まった。そして、僕の答えは勿論。

ガルツチ「だったら、結婚しよ。英竜。」

英竜「ああ、そうしよう。ガルツチ。」

そして、皆は歓声をあげて祝福してくれた。皆はおめでつうという言葉が飛び交い、母さんはうれし涙を見せた。

音色が再び流れると、直ぐさま僕と英竜は歌い始めた。

ガルツチ「誰も名付けない花にく。♪誇る理由、くれた人。♪」

英竜「君には生き続けて欲しい。♪」

ガルツチ「強い風に、♪」

英竜「もしもこの花っ。♪」

ガル英「散ったとくして〜。♪」

そして最後の部分で、皆歌い始めた。

全員『ほんの微かなっ、希望の針が。♪

私<sup>僕</sup>から、貴方<sup>君</sup>へと、伝えてく。♪

不器用な恋も、歪な愛もっ。♪

全て、砂に、還るけど〜……………♪』

英竜「尽きぬ〜未来〜。♪」

ガルツチ「見える〜か〜ら〜ら〜ら……………♪」

歌い終わると、皆は一斉に割れる程の拍手を送り、超大宴会+サプライズ結婚式が終わった。それにしても、母さん。それ僕にも教えて欲しかったなあ……………。

全王神『え〜、教えちゃったらサプライズじゃなくなっちゃおうじゃ〜ん。♪』

はあ、やれやれだぜ。

t o b e c o n t i n u e d  
→

## 第84・5話 英竜との異世界デート

―冬木市（VR世界）―

ガルツチ side

正直に言おう、何故冬木市!? どうか何が一体如何したらこの場所になるんだ!?

英竜「な、なあガルツチ。何故冬木市?」

ガルツチ「こつちが聞きたい。そもそも何でおまけとして制服なんだ!? ホントに分からないんだけど!」

英竜「そもそも、他の皆は目的の場所に着いて、何故私とガルツチがここなのだ?」

そもそもの発端が、ダ・ヴィンチが作ったVR世界の事だ。結婚して一日目の時、どうもVR世界にいける転送装置を作ったそうだ。んで、試しに僕らが適当な場所を選び、皆で乗ったら、どういう訳か、英竜と僕が冬木市、未来達は目的の場所に到着したのだ。

ヴィンチ『ごめんね、何故か知らないけど、2人は別のところへレイシフトしちゃった。』

ガルツチ「ダ・ヴィンチ、貴様、後で覚えてろよ?」

ヴィンチ『え? 何の事かなあ? 私にはわっかんなくい!』

英竜「ガルツチ、ああいうのは起源弾が有効だよ。」

ガルツチ「僕の起源弾が?」

英竜「いや、切嗣が持つてる起源弾。」

ヴィンチ『酷くない!?!』

ガルツチ「なる程、後であの馬鹿親切嗣に頼んでみるか」

ヴィンチ『ちよつと待って、そんなことしたら私が消えちゃうじゃない!!!』

ガルツチ「だったら紫みたいにああなりたいのか? 僕は別に構わ―

―」  
ヴィンチ『ごめんなさいホントにそれだけは勘弁して下さい正直に言いますだからそれだけはホントにマジで勘弁して下さい。』

ってな訳で、如何して英竜と僕だけ違う場所なのか。そしてどう言

う世界なのか聞いてみた。

ヴィンチ『それで、この場所だけど……。ここは『月色溺愛』の冬木市——』

ガルツチ「おい待て、それってつまり……。簪が作ったBL同人誌の世界って事!？」

英竜「え？何それ初耳。っていうかガルツチ持つてるの!？」

ガルツチ「うんまあ、どんなのか見たらさ……。濃厚すぎた。色々。」

ヴィンチ『まあ何故こうなったのかはさっぱりだけどね。とりあえず英竜はともかく、ガルツチは気を付けた方が——』

ガルツチ「20歳にしたけど、こんなんでいいか。」

英竜「……。。(。D。)ポカーン」

ヴィンチ『まっまあ、良いんじや無い？とりあえず……。、Goo d Luck。(ゝω・)b』

因みに身長は160cm位あります。っていうか、英竜が(。D。(。ポカーンってなってるけど、大丈夫なのか？

ガルツチ「おーい、英竜？」

英竜「……。ガルツチ、言って良いかな？」

ガルツチ「何？」

英竜「滅茶苦茶エロい。」

ガルツチ「なんでさ。」

何でエロいなんて言われたんだ？そんなに色っぽいのか？いや絶対無いと思いたいが……。。

英竜「と言うか、エロカワイイ。」

ガルツチ「だからなんでさ。」

まあいいや、VR世界つつたつて、本物とは変わりないしな。とりあえず、どこか行くか。(あの本場の麻婆豆腐は、連れて行かせないで置こう。)

英竜「ところで、何処に行く？」

ガルツチ「そうだね、何処がいいかな……。って、ん？」

『サーヴァントランド カップル限定チケット1000円』

チケツト？つていうかホントにあの世界なんだな……………。

英竜「何これ、サーヴァントランド？」

ガルツチ「設定だと、そこは遊園地のようで、滅茶苦茶人気のある場所なんだつて。」

英竜「へえ、行ってみる価値はあるな。」

ガルツチ「んじやあ、行ってみるか。生で体験できるのは、凄いとだしな。」

そう思い、僕と英竜はサーヴァントランドへと向かった。

—サーヴァントランド—

うんまあ、ここまで忠実だとは思わなかったな。

「ようこそ、『サーヴァントランド』へ。チケツトを。」

ガルツチ「はいっ。」

「カップル限定のチケツト、ですね。ありがとうございます。それでは、ごゆっくりお楽しみ下さい。」

さてと、パンフレットも貰ったし、一体どんなのがあるかな。

英竜「結構多いね。ステイナイトエリアにゼロエリア、エクストラエリア、アポクリファエリア、プロトタイプエリア、ストレンジフェイクエリア、コハエースエリア、グランドオーダーエリア。」

8つのエリアがあるんだね。」

ガルツチ「こんなにあつたのか……………。ステイナイトエリアはこの辺りだな。んで、あれがジェットコースターか。お？あれつて……………」

ここでまさかのこの世界の僕と未来が、ジェットコースターに降りた後だったようだ。

(BL世界) 未来「だ、大丈夫？」

(BL世界) ガルツチ「あ、危うく死にかけた。」

英竜「(。D。)ポカーン」

ガルツチ「英竜、また(。D。)ポカーンってなってるぞ。」

(BL世界) クーフリーン「うつぶ、もう駄目……………」。「ボタンWガルツチ「ランサーが死んだ!?!」」

英竜未来「この人でなし!!」

あ、無意識に言っちゃった。っていうか英竜もノってくれたんだ。そしてクーフリーンはダメツトに運ばれ、医務室に向かっていった。

英竜「んで、如何する?乗る?」

ガルツチ「乗ろつか。」

とまあ乗ったのは良いのだが、問題はその後だった。

——ジェットコースター乗った後

ガルツチ「おーい、英竜?大丈夫か?」

英竜「(。D。)ポカーン」

ガルツチ「……………まさか気を失うとは思わなかった。」

とはいえ如何したものか……………。とりあえず、目が覚めるまでベンチに座らせて、目が覚めるまで待つてるとするか。ん?これって、未来から?

未来『ガルツチ、聞こえる?』

ガルツチ「未来?未来なのか?!」

未来『よかったら、やつと繋がったよ。英竜と一緒に?』

ガルツチ「うんまあ、今はジェットコースターで気絶しちやってるけど。」

藍『気絶!?ジェットコースターで?!』

夜神『だ、大丈夫なの?』

ガルツチ「まあ大丈夫なのは確かだけど、相当怖かったそうだ。」





―サーヴァントランド エクストラエリア―

エクストラエリアに入ると同時に、近未来的な音楽と世界観が移っていた。辺りにはゲームセンターやVRゲームセンター等、様々な近未来的なアトラクションがある場所になっていた。

ガルツチ「凄いな、ホントにエクストラの雰囲気があるよ。」

……………あれ？英竜？何処に行った？まさかはぐれた!?

英竜「何これ楽しい!!」

ガルツチ「つて居たく、そこにいたよ。つていうかどう言うアトラクションなんだ?」

『VR格闘ゲーム』

……………おし、参加しよう。つていうかトーナメント戦?まいつか、やってみよう。

だが、ここでまさか、彼らと出会うことになるなんて、思いもしなかっただろう……………。

―黄昏ノ刻―

「さて、いよいよ決勝戦!!先ずは赤コーナーと行こう。数々の格闘ゲームー達を葬り、見事決勝戦に勝ち抜いてきた!!『ガルツチ』選手です!!」

ぬぁにいいい!?!このゲームに参加してたつてのか!?!ちよつとこれは想定外なんだけど!?!

「青コーナー、此方は正体不明で、優勝候補者であるにもかかわらず、勝ち進んできた選手!『無銘』さんです!!しかし、ホントに何故フードなんかを着てるのでしょうか?」

と、とりあえず無銘かつフード被せてるから、一応大丈夫かな?」

(BL世界)ガルツチ「お互い、全力で行きましょう。」

ガルツチ「……………」コクツ

「おや？準決勝までは喋っていたはずなのに、何故ここで？やはり緊張してるのでしょうか？」

違うから!!同一人物だからああああああああ!!!

「それはともかく、いよいよバトルスタートです。両者、構えて!!」

まあ、加減はするけど、負けるわけにはいかない!

「FIGHT!!」

先手は未来と付き合ってる僕で、素早く攻撃を仕掛けてきた。うーん、何故だろ。あまりにも強すぎたのか、動きが鈍く見える。けど………!

ガルツチ「ハッ!」

(BL世界)ガルツチ「え!?!」

「何と無銘選手、ガルツチ選手の攻撃を受け流して、背負い投げをしたああ!!まさかの柔道技だ!!」

(BL世界)ガルツチ「……………このっ!!」

ガルツチ「ッ!」

ここで関節技か!だが、貰った!!

ガルツチ「オラア!!」

(BL世界)ガルツチ「ッ!!足が!?!」

手元から離れた。ここがチャンス!!

ガルツチ「フウ……………」

「あの構え、ガルツチ選手が使ってたのと同じ!?!」

ガルツチ「ハアッ!!」

(BL世界)ガルツチ「なっ!?!」

ガルツチ「肘撃!!」

見事に直撃したのか、もう一人の僕はそのまま吹っ飛ぶ。が、ここに来て誤算が招じてしまった。

「なっ、何と言うことだ!!此は一体、どういう事なのだ!?!」

ガルツチ「ん?って、しまった!!フードが!!」

(BL世界)ガルツチ「えええ!?!何で僕がもう一人!?!」

「信じられません!!まさかの展開が起こりました!!無銘選手の正体は、何とガルツチ選手と酷使した人物です!!」

(BL世界) 未来「え、ガルツチが2人!？」

ヤベえ、早めに決着を着けたかったつてのに、此は……………。仕方ない。

僕は直ぐさまフード付きの服を脱ぎ捨て、ファイティングポーズをした。

ガルツチ「驚いてる暇はないぞ、もう一人の僕よ。今この一時を、この奇跡を大事にして、戦おうじゃないか。」

(BL世界) ガルツチ「……………説明してくれるよね?」

ガルツチ「可能な限り、教えてあげる。」

そして、手加減していたとは言え、激闘の末に、僕が勝利した。まあ勝った原因は、判定勝ちだけだ。

優勝賞品は、単なる優勝バッジではあったが、不思議と魔力を感じたため、一応持つことにした。その後、観覧車に乗り、僕と英竜は、自分の名前、そして異世界から着た住人だと言った。

(BL世界) 未来「ちよつと待って、異世界? そんなの信じられないよ。」

ガルツチ「でも、此が現実だ。実際、そっちの僕と出会っているし。」

英竜「それに、未来から着たつて訳でもないからね。正真正銘、異世界の住人さ。」

ガルツチ「とは言え、別に信じなくても良いよ。どうせ、忘れろと思うし。」

(BL世界) ガルツチ「忘れるつて、ちよつとそれは……………」

ガルツチ「仕方ないよ、本来なら君達に出会わないようにしてたんだし。デートの邪魔して悪かった。」

(BL世界) 未来「うーん、確かにデート中だったけど、一つ聞いて良いかな?」

ガルツチ「何?」

(BL世界) 未来「そっちの僕も、僕達と同じように付き合ってるの?」

そう着たか。まあ言っても良いか。

ガルツチ「既に結婚してるよ。本来なら新婚旅行で何処か行こうと

したら、どっかの馬鹿が英竜と一緒にこっちに飛ばされたからね。」

(BL世界) ガルツチ 「け……………、結婚……………」

おいこの世界の僕よ。付き合うことになったのは、あんたらだからね？

(BL世界) ガルツチ 「だ、大胆過ぎない!?だ、だって——

／／／／／／／

ガルツチ 「言いたいことは分かるけど、別に同性愛に恥じる理由なんてあるか？」

(BL世界) ガルツチ 「え!?!」

ガルツチ 「最初は恥ずかしいよ？僕だってそうさ。女の子は好きだけど、未来と出会い、やりあった途端、いつの間にか両性愛になった僕だよ？そりや最初は否定するほど恥ずかしいよ。」

でもさ、恥じることは無いよ。だって、君は未来のこと、愛してるんだろ？」

(BL世界) ガルツチ 「そ、それは……………。／／／／／／／

／／／／／／／

ガルツチ 「自分の気持ちに素直になれ。さらけ出しちゃえ。ずっと住みたいって言いたければいいし、この場で犯し……………は無いか。」

英竜 「流石にそれは露出狂だぞ……………、ガルツチ。」

ガルツチ 「分かってる。こんなところで脱いでヤル人は、流石にいないって。」

(BL世界) 未来 「冗談でも、恥ずかしくてやりたくないけどね……………」

そして色々な会話をしていると、もうすぐ閉園の時間になったため4人とも『サーヴァントランド』から出た。

——冬木市——月夜ノ刻——

とは言え、何時までこの世界に留まれば良いんだ？(現在15歳身長は150cm)

流石に永遠ってのは、御免だからね？

ガルツチ「んじゃあ、僕と英竜はこの辺で。」

(BL世界)ガルツチ「宛はあるの?」

ガルツチ「無いけど、それが旅だからね。こうやって旅をし続けていたからさ。ゲームみたいに、次の街に行けるなもんはないし。」

まあ、彼らは多分ラブホテルに行くだろうけど、そこを邪魔するのはどうかと思うしな。

英竜「いいの?」

ガルツチ「この後の事を考えて決めた事だからね。あの2人は、結ばれる関係だし。」

英竜「……………経験者は語る、ね。」

ガルツチ「まあ大きく歪ませない事なのは事実だからね。此ばかりは、歪ませないようにしないと。って時既に遅しかな?」

英竜「うーん、ここはあくまでVR世界だから、一応心配要らないんじゃないかな?」

ガルツチ「あ、ここVR世界だったの忘れてた。」

英竜「忘れるな!」

ガルツチ「アダツ!」

まあ今回は僕が悪いな。とは言え、どの辺りで寝泊まりしようか――

英竜「……………んで、何故私達この場所にいるんだろ?」

ガルツチ「こつちが聞きたい。」

やっぱりお約束が発動したか。何故考えてる最中にラブホテルに着くんだよ!?!おいダ・ヴィンチ、お前最悪処刑するからな!?!

英竜「はあ、仕方ないからここに入りましょうか。」

ガルツチ「……………そうだね。」

まあそこでお約束が発動しますがね。って事で、鳴滝さんの台詞言わせて貰います。

おのれダ・ヴィンチ!!

とまあ、仕方なく入り、お互いシャワー浴びたのはいいけど、問題は、英竜が無性愛って事なんだよな。

多分原因は別にあるだろうけど、やっぱり知った方がいいと思うんだよね。分かってはいるけど、でもやっぱり寂しいと思うよ。

英竜「ん？」

ガルツチ「どうかした？」

英竜「いや、君の半身、二元通りにならないと思ってたのに……。」  
ガルツチ「あー此？言い忘れてたけど、元から再生力が高くてさ。けど、致命的な、特に目とかは再生その物が不可能だし。」

あと、『寄生再生超獣ニョキン』だっけ？なんか居心地がよすぎたのか、一体化しちゃった。」

英竜「なんて言うか、お前の身体便利だな……。」

ガルツチ「超獣作るなら、僕の腕やろうか？条件として、英竜の助手になるってのは？」

英竜「本気か？」

ガルツチ「いずれ、旅を終える日があるかも知れないからね。その時になったら、助手になる。まあ、どうせ『超全大王神』になっちゃった以上、その仕事が山ほどあるし。」

英竜「でも、私は全王神様以外従わないよ？」

ガルツチ「従わせるかっての。頼み事はするけど。」

そう言いながら、僕は英竜に抱き締めた。

英竜「……………ホント、仕方の無い弟だね。無性愛の私なんかじゃ、つまらないわよ?」

ガルツチ「けど、僕は君と結婚した。夜神達も未来達もそうだけど。」

英竜「じゃあ、何で私を?」

ガルツチ「……………少しでもいいから、セックスの悦びを……………知って欲しいんだ。無理なのは、分かっているけど、その……………頑張って気持ち良くしてあげるからさ。」

英竜「物好きだね、君は。」

ガルツチ「自己破綻しまくった末路さ。」

そのまま英竜を押し倒し、そのまま唇を重ね合わせながら、胸を触っていた。さわり心地は、なんかシュークリームみたい。

英竜「んふつ……………、胸触ったって、何もつ……………。／／／／／／／／／／」

ガルツチ「でもなんか、シュークリームみたいに、少し柔らかい。」

英竜「転生したときの当初の私も、そうだったな……………。／／／／／／／／／／」

ガルツチ「とてもじゃないが、ホントに二元男だとは思えないけどね。」

英竜「言ってるな。と言うか、ガルツチ。耳がお留守だぞ。／／／／

／／／／

英竜の胸を触ってる最中に、英竜は僕の羽耳を啜え始めた。いやまじで、此だけは全然なれない。肝試しで滅茶苦茶怖い思いをしてしまっうぐらいなれそうにないよ。

やっぱもう耳は、聴覚器かつ性感帯なんでしょうかね。

英竜「凄い反応だな、ガルツチ。こんなにはピクピクして。ここも連動して小刻みしてるとは……………」

ガルツチ「あつ……………、あのなあ……………。あまり、耳をおおおお

!?!?!  
／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

弄るだけでは飽き足りないのか、英竜は僕の耳の穴の中を舐め始めてきた。

今更だけど、皆よく僕の耳を舐めてくるよね?ホントに不思議でた







ガルツチ「う!?／／／／／／／／／／」

英竜「今までは攻め続けるのを許していたが、性を知ってしまったのはこつちのものさ。♡君が初めてだよ、ガルツチ。♡♡こんなにも気持ちいいものだとは、勿体ないことしたものだ。♡♡」

そりやよかつたけど、ちよつと待つて。此つてもしや？

英竜「よつと。」

ガルツチ「ふえ!？」

英竜「今度は私が攻めに転じる番だ。♡いっぱい出させてあげるから、気をしつかり持てよ?♡♡」

ガルツチ「あ、あまり無茶しないでよ?英竜。／／／／／／／／／／／／／／／／」

そんなこんなで、英竜がマウントポジションを取られ、騎乗位となつてしまい、英竜が動き始めた。

まるで初めてとは思えない程の動きで、出したばかりだということにまたすぐに射精しそうになった。と言うかももう出しまくつてるけど  
.....

しびるふくつと.....。



## 最終話 抑止力の最後

―プロトタイプ世界 心の塔―

ガルツチ side

未来「え!?!ガルツチなんだって?」

ガルツチ「だから、少し用事が出来たから、ここで別行動だつて。」

フラン「何でいきなり!?!私達の相談無しに!?!」

ガルツチ「ごめん、フラン。いきなりこんな話したには理由があるんだ。よく聞いて、皆。」

僕はジャックとゼロノスの墓を作つてるときに抑止力に襲われたことを話した。

アラヤ『阿頼耶識』、つて事は母さん。もしかして其奴を殺しに?」

ガルツチ「うん、皆にも連れて行かせたいけど、多分殺される可能性が高い。」

鳳凰「でもお母さん、それじゃあお母さんも同じじゃないの!!」

ガルツチ「鳳凰、僕なら平気さ。何故なら『この世の全ての刃』、確実に勝てるつて思ってる奴なんか、負けるかつての。」

リサ「で、でもお父さん。相手はその抑止力でしょ?仮に勝ったとしても、その後はどうするの?」

ガルツチ「決まってるじゃん。母さんか英竜に抑止力になって貰う。彼女たちなら、彼奴らよりうまく立ち回ってくれるしな。」

まあ元々、僕は奴らのやり方が気に食わなかった。ガイアは世界の存続のためならば人類の破滅も問題としないが、世界の大部分を支配領域とする人の世を崩壊させるほどの事態は星の破滅も招きかねないため、結果的に人も守るために発動する。

阿頼耶識は人を守るために人を縛り、時には万人を幸せにする行為にさえも立ちはだかつている。

確かに僕や母さんは、ある意味抑止力が働いてもおかしくない事は滅茶苦茶してる。しかし、其奴の幸せを奪ってまで修正するつもりなら、許しがたいものだ。そうなるぐらいなら、人類だろうが星だろうが、僕がその抑止力を殺す。

その後は、母さんか英竜に任せる。抑止力は、母さんか英竜。特に英竜なら、抑止力を上手く使いこなせそうだし、何より今後にも役に立ってくれそうだしね。

未来「僕達、待ってるよ。君が帰ってくるのを。」

ガルツチ「安心しろ。俺を誰だと思ってる？ 例え死んでも、幻影から蘇る不死鳥のガルツチだぞ？」

3人「二お兄ちゃん……………」

ガルツチ「フラン、こいし、イリヤ。そんな哀しい顔しないで。必ず生きて帰るからさ。この幸せを奪おうとする奴らに、僕を敵に回したらどうなるか、思い知らせてやらないと。」

だから、笑って？ その方が、僕も安心して戦えるから。」

簪「絶対、生きて帰ってね。」

鈴美「約束よ、ガルツチちゃん。」

白夜叉「信じて居るぞ。」

ガルツチ「ああ、皆。行ってくる!!」

僕は青いマフラーをつけて、次元を越えようとしてたとき、英竜達が来た。

英竜「行く気か？」

ガルツチ「うん、抑止力はお姉ちゃん達を襲ってくる。多分侵略の邪魔をしてくるに違いないからね。」

英竜「抑止力か……………」

ガルツチ「心配か？」

英竜「いや、そんなことは無い。だが、ちゃんと無事を連絡しろよ？ 私達の子が、悲しまないように。」

英竜のお腹を摩ると、そこには二つの命が宿しているのが分かった。英竜と僕の子供。約束ぐらい、ちゃんと果たさなければな。

ガルツチ「んじゃあ、皆。行ってくる!! 時渡り『タイムドミネート デイメンション』!!」

別れを告げ、虹色のゲートを開いて中に入ろうとし、後ろを振り向くと、親指を立て無事を祈る皆が居た。

さて、皆のためにも、生きて帰らないとね!!

—  
???  
—

そして、着いた場所は宇宙その物の世界。恐らくここが、奴らの本拠地だろうと思った。

阿頼耶識「よもや、本気で挑んでくる愚か者がいるとはな。」

ガイア「ええ、しかもよりにもよって、私たちにとつて危険人物。」  
そこには白い衣を着た美女に、黒い袴を着込んだ美男が立っていた。

(絶望) ガイア『奴らが、抑止力……………。』

ガルツチ「待たせたな、抑止力よ。『この世の全ての刃』の僕が、お前達を滅ぼしにきた。」

ガイア「何故私達を滅ぼすのです？今まで人類を守ってきた私達を、何故？」

阿頼耶識「お前がやろうとしてるのは、人類だけでなく、星の滅亡。それを分かって言ってるのか？」

ガルツチ「ああ、そうだ。霊長の抑止力？世界の抑止力？下らん。こつちの大切なものを奪ってまで万人を幸せにするぐらいなら、いっそお前達を滅ぼした方がマシだ。自分の身は、自分で守った方が通り

だろ？」

阿頼耶識「何とも愚かな……………」

すると、彼らの後ろには様々な強者達が沢山居た。中には、キリツグやシロウもいた。

ガイア「私達に敵に回したらどうなるか、思い知らせてあげないといけませんね。」

ガルツチ「言ってる、雑種共。『UNLIMITED DIMENSIONS WORKS』!!」

僕は瞬時に固有結界を作り出し、『天満月』と常闇月の刀を抜いた。ガルツチ「預言しておこう、お前達は抑止力に解放されると。」

阿頼耶識「行け、お前達！」

ガイア「かの大厄災をこの場で滅ぼしなさい!!」

大量の精鋭部隊達が僕を襲い掛かろうとしていた。が、そんな物は無駄だ。

ガルツチ「ゼクロム、レシラム、キュレム。彼らの苦しみを解放させてあげて。」

イツシュ三龍「「はい。」」

ガルツチ「ガイア、此からも僕のために戦ってくれるか？」

(絶望)ガイア『何を今更、我が友はガルツチ。お前だけだ。お前が幸せを奪おうとする輩がいるのであれば、我は何時でも力を貸す。』

ラクト『ガルツチちゃん、私も戦う。だから、抑止力なんて蹴散らしちゃいませよ!!』

ガルツチ「……………ああ。」

阿頼耶識「お前には後悔する時間も与えん。この世界で、死ぬがいいいいいいいい!!!」

さて、『超全大王神』の最初の仕事を始めるか。

ガルツチ「見くびるなよ、抑止力!!我が大切なものを守るために、この場で息絶えるがいい!!」

T H E   E N D



## 第EX話 2万年後の君へ

—光の国—

ガルツチside

ふう、あれから2万年か。未来の旅も終え、英竜達がやろうとしてるのを手伝ったお陰で、宇宙侵略は完了。

現在は、英竜お姉ちゃんが支配者として宇宙に従わせている。でも、それは僕みたいに力による脅しの支配ではなく、人々の心を奪うという新たな宇宙侵略だった。

勿論、『End of The World』の同盟も永遠と続き、引き続き英竜お姉ちゃん達に技術を教えていた。

兄さんことルツチは、長年の天皇を引退し、その息子が第二の天皇をやっている。隠居はしておらず、代わりに英竜達の技術提供者としてやっているそうだ。

姉さんことラルツチは、どうも英竜お姉ちゃんを目の敵をしていたようで、どちらが姉らしいのか勝負し始めた。実はそれも2万年間も続いていたようで、止めに行ってる僕のみにもなって欲しいぐらい。と言うか仲良くしろよな、姉さんもお姉ちゃんも……。まあ……。『お姉ちゃん達が聞いてくれない……。仕方ない。自殺するしか——』って言ったら喧嘩をやめて止めに行ってるようだからね。まあ此はあくまで最終手段だな。

エレメントフェニックスの皆は、それぞれの仕事に就いた。ブレイズは英竜達が生み出した超獣達の教官。アビスは全知の海神。レイスは宇宙自然環境に関わる仕事。ノームは鉱山の親方。カレンはマルフォイの秘書官。んで肝心のマルフォイは、全宇宙ネットワークの社長となり、日々英竜お姉ちゃん達に今まで起こったことをねつ造無く教えている。アルファスは宇宙監獄の監獄長として、日々犯罪者達を光らせているらしい。

僕の息子や娘も、それぞれ仕事に着いてる。バルツチは、性格に似合うほどの執事長。マルツチは超大魔導師兼冒険家として、あらゆる宇宙で遺跡を探している。ドルツチは引き続き天皇補佐。鳳凰は宇宙一の料理長として名をあげている。アラヤはどうもリサと結婚、仕事はどうやら僕の手伝いのようだ。

未来は旅を終えて土と頂上決戦、結果勝利し、激情コンプリートフォームを手に入れたようだ。が、未来が言うには最終手段として使うようだ。そして、次元管理人として、母さんの仕事を手伝ってる。

簪と本音は、正義の味方となり、藍と同じように困ってる人達を助けて行ってるようだ。勿論、育児も忘れず、連れて周りながらだけど

頑張っているようだ。

鈴美さんは未来と一緒にだが、『零の龍神』として本格的に修行しに行っているため、最近会っていない。連絡はしているようだけど……。

白夜叉とレティシアは久しぶりに里帰りをしたようだ。土産話も、たんまりあるようで、十六夜達も楽しみにしているだろう。

さてと、んで肝心の僕だけ……、つてああああああああ

!!!!

ガルツチ「ヤベツ!! 今日ダークザギが転生する日じゃん!! 急がなきゃ!!!」

仕事終わって今更だけど、ホントにうっかりしてた!! クソ、転生祝にダークザギ専用の刀を作ったってのに!! 畜生!!

— 執務室 —

『ガチャッ!』

ガルツチ「お姉ちゃん! ザギは!?!」

英竜「ガルツチ、入るときはノック。」

ガルツチ「ご、ごめん。慌てると、ホントに……。」

英竜「全く、しょうがないんだから。それよりザギだけど、もう転生し終わったよ。」

ガルツチ「遅かったか……。」

あークソ、此渡しに来たってのに……………。

英竜「その刀、ザギに渡すのか？」

ガルツチ「うん。ようやく完成して、仕事が終わったら渡そうかなって思ってる。」

全王神「ガルちゃんホントにごめんねごめんね〜♪」

ガルツチ「母さん？（ニッコリ）」

全王神「はい反省しております超全大王神様。」

ガルツチ「誰もそこまで言えなんて言ってるだろ。」

まあ要するに、僕は正式に『超全大王神』として、様々な仕事をしている。全王の処遇についても、どうやら僕が決めることになった。勿論その処遇だが、全王としての権限や能力などのものを剥奪、そして宇宙一の脱獄率が低い監獄城にて仮釈放なしの終身の刑に処した。

英竜「しかし、ガルツチも正式な『超全大王神』か。ホント時は早いなあ……………」

ガルツチ「そうだね。そういうえば、抑止力の方は？」

英竜「問題ない。ただ、どうも調子に乗る転生者は後を絶たないようだ。」

ガルツチ「世知辛いもんだなあ……………」

英竜「それには同感だ。それより、どうするんだ？ っていうかこの効果は？」

ガルツチ「あ、言ってなかったな。此奴は村山刀と言って、僕の力を宿した太刀なんだ。此を使えば、抜かなくても手刀すれば、どんな最硬なものでも綺麗に斬ることができるものさ。キーホルダーは青い月だけだね。」

全王神「なるほど、最強の矛ならぬ、最強の刃ね。」

英竜「オン／オフの切り替えは？」

ガルツチ「大丈夫。ちゃんとしてあるさ。戦闘モード以外は生活に支障は無い。」

持ち手にはネイビーと黒色で、刃部分は血に飢えてるかのような色、クリムゾンにしている。勿論此はジャケットを意識して出した色

だ。

鞆付きである。

ガルツチ「とりあえず、宅配として此送るね。名前はザギ限定で分かるように、ロシア語かドイツ語で頼む。」

英竜「名前は『超全大神 ガルツチ』でいいか？」

ガルツチ「まあ、それでいいかな？」

そんなこんなで、僕はその刀を転生装置に置き、ザギに送り届けた。少なくとも、ザギならあの刀を使えそうだしな。

全王神「あ、そういえばつくくんが言ってたけど。」

ガルツチ「？」

全王神「写真撮るから、世界樹の桜の前に集まってっせ。」

英竜「私も？」

全王神「もっちゃん!! 『エターナルフォー・ゼロ』と『エクストリームブレード・オール』も一緒にね!(ゝw・)b」

ガルツチ「風の大陸か。そういえば仕事ばかりで、最近『End of The World』に帰ってなかったな。」

英竜「ちよつと皆に聞いてみるから、先に行っててくれないか？」

ガルツチ「分かった、英竜お姉ちゃん。」

んじやあ僕は、未来達や兄さん達に連絡つと……………。

—風の大陸 世界樹の桜の丘— 昼ノ刻—

懐かしいな、この桜は全く変わってない。2万年も経ってるのに、

何時でも散り続ける。

ギル「よう、我が雑種。久方ぶりだな。」

ガルツチ「ギルガメツシュ、久しぶり。」

ギル「貴様も相当変わったものだな。いつの間にか、私の嫌いな神に成り下がってしまったとは。」

ガルツチ「ごめんね、ギルガメツシュ。」

ギル「気にするな。貴様のような神だったら、きつと我も……………いや、悔やんでも無駄か。」

ガルツチ「新生ウルクの方はどうだ？」

ギル「ああ、問題ないな。英竜とか言ったか？彼奴が援助してくれたお陰で、国を作り出すことに成功したからな。」

ギルガメツシユの服装は、いつの間にかキャスターバージョンになっていて、あの時の金ピカ鎧は着ていないようだ。

ガルツチ「しかし、まさかアーチャーとキャスターのダブルクラスになるとは思わなかったよ。」

ギル「ダブルクラスに慣れずして何が王だ!!いっそ、全クラスにでも——」

ガルツチ「おい待て、無茶するな。っていうかバーサーカーになったら駄目だろ。」

ギル「駄目か？」

ガルツチ「駄目です、英雄王。」

ギル「そうか……………」

ギルガメツシユと話をしていると、未来達や兄さん達が来てくれた。

未来「ガルツチ、もう早く着いてたんだ。」

ガルツチ「そりゃあそうだよ、ここには縁のある場所だからね。」

レイス「ガルツチらしいっちゃらしいよね。主に桜好きってのが。」

ガルツチ「そう言うアンタは、簪と二亜の共同作業でBL同人誌を作ってるじゃないか……………」

レイス&簪「BLはジャステイス!!!」

ガルツチ「駄目だこの腐女子達、混ざらせてしまったのが運の尽きか……………」

ブレイズ「そんなガルツチは、何だかんだ言って読んでいると。」

ガルツチ「アハハ……………」、否定できない自分に恨みたい……………」  
ラルツチ「ガルツチ、白眼になってるよ。」

あ、そうそう。ここ最近この義眼、感情によって色が変わるようになったんだ。普段は蒼眼なんだが、喜びは黄色、怒りは赤、哀しみはそのまま青など、感情が深まれば深まるほど色も濃くなるようになってる。勿論任意的にオン／オフもしてるため、今はオンしている。

英竜「お、皆揃ってるね。」

ラルツチ「おやおや、遅いではないで——」

ガルツチ「姉さん、喧嘩は………?」

ラルツチ「………くっ!」

英竜「あらあら、私の弟の言うこと聞くなんて、相当ほだされて——

ガルツチ「お姉ちゃん………。」

英竜「………。」

ラル英竜「私の弟、マジ天使………。」

簪「おねシヨタ………いやシヨタおね………。」

レイス「どっちもありね。」

ガルツチ「2人とも、なしだ!」

レイス&簪「「え〜。」」

藍「つていうかすっごい大きいね。この桜。」

ラルツチ「何しろここは、世界樹の桜と言って、どんな大桜よりも大きく、永遠と咲き誇つてると言われてる、まさにこの世の全てを統べる桜とも呼ばれているんです。」

ギル「我も手にしたかったのだが、手に入ってしまったえげせつかくの場所が寂しくなるからな。」

ガルツチ「コレクターEXだなあ………。」

夜神「ガルツチ、また遠い目になってる………。」

士織「そう言えば、全王神様は?」

ガルツチ「そう言えば遅いな。」

何してんだ? 言いだしつぺは母さんなのに………。

ミスト「兄や、全王神が来たよ。」

全王神「ヤッホー!! 何時もにこにご貴方の隣に、這い寄る——

ガルツチ「それはニヤル子さんの台詞。つていうか見事なまでに普通の女の子に見えるな。」

白いワンピースに麦わら帽子つて、しかも裸足? 何故こうなるんだよ。仮にも僕の母なんだから、そこは威厳を持って………、いや

母さんには威厳なんて無いか。

全王神「そう言うガルツチちゃんは、ホントに和装が好きだね。」

ガルツチ「此が普段着なんだよ。」

対して僕は、月夜の袴を着ていた。やっぱり僕にはこっちがお似合  
いかな？

風龍「よつと、どうやら間に合ったようだな。」

メアリー「そうね。懐かしい服を着替えたけど、こっちが私らしい  
かな？」

ガルツチ「あ、風龍さん。メアリー。」

ギヤリー「んで、何で私達まで？関係ないんじゃないの？」

イヴ「うん。ただの一般人なのに……………」

メアリー「もう、そう言わないの!!」

まさかの『i b』のキャラクターも出て来るとは思わなかったな  
……………。

メアリー「それより風龍、無茶言っでごめんね？」

風龍「ううん、メアリーが望んだことだし、これぐらいお安いご用  
さ。」

束「おーい、皆々！桜の木に集まってく！写真撮るよく!!」

いよいよか……………。だったら、急がないとね。

士「んじや撮るぞ。」

## 『カシユン』

その1枚の写真には、かつて赤ん坊の時に、母さんに見せた満面の  
笑みをした僕がいた。



『親愛なる○○○○へ』

ようやく、僕だけのアルカディアを見つけました。二万数百年間ではありますが、やっと見つけました。

此方の生活は上手くいっています。其方はどうですか？

まあ、其方が何だろうが、多分大丈夫なんでしょうね。………以前貴方は言いましたよね？自分の幸せを捨てては、他人の幸せを守ることは出来ないって。

確かに貴方の言うとおりです。

とは言え、此は貴方にとって最後の手紙。これで貴方に手紙を送ることは、もう二度とないでしょう。

どうか、気を悔やまぬように、あなたも幸せを見つけて下さい。それか、取り戻して下さい。

それでは、さようなら。『僕』よ。

超全大王神兼この世の全ての刃 ガルツチ』

side out

—  
???  
—

「……………なるほど、幸せそうで安心した。」

それだけ言い、男はガルツチが送った手紙を破り、写真をポケットの中に入れた。

「……………結局僕は、生き残ってしまい、彼女達を置いて行かれてしまった。ずっと後悔していた。こんなことなら、消えて無くなればいいと思った。だが、同じ道を進もうとしている僕を、どうにかしてその道を歩ませないように、旅先で助言していた。

しかし、まさかあの門矢未来とかいう人物が、彼を救うことになるとはな。」

男は常に一人。大切なものを守ることが出来ず、挙げ句の果てには、故郷も失い、永遠と彷徨い続ける亡霊のような存在へと成り果てていた。

「まっ、どつちにしろ僕には関係のないことか。彼奴は僕とは違う人生を歩んだ。今更幸せを見つけてるなんて、無理な話だな。

此が僕の末路。絶望に堕ちきってしまった、成れの果て。自殺も出来ず、かといって生きる目的を失った僕には、最早彷徨うしか選択肢は無いからな……………」

だが、男が持つてる指輪を見て、ふと笑みが零れる。

「…………でも、今思えばあの頃は楽しかった。もう二度と、この感情は蘇らないけど、せめて思い出だけは、焼き付けておこう。さて、次の世界に行くか。」

そして、男は1枚のカードを取り出し、投げつけると青いゲートが開きその中に入る。

「今度こそ、お別れだ。ガルツチ。決して、絶望に落ちた『僕』にならないでくれ。」

それだけを言い残し、男…………。

いや、原世界の住人である『ラーク・バスター・ガルツチ』は、この世界から去った。1枚の写真を持ちながら…………。

Star Dust Space & Moon Light An  
other Fate True Happy End